

仙台市文化財調査報告書第266集

他跡遺東寺分園

發掘調査報告書

平成15年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第266集

他跡遺東寺分国

発掘調査報告書

平成15年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、口頃から多大なるご協力を賜り、まことに感謝にたえません。仙台市内には、現在約800ヶ所の遺跡が確認されております。当教育委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、貴重な文化財を保存し、後世に伝えるように努めているところであります。

本報告書には、開発に先立ち、平成13年度に発掘調査を実施した国分寺東遺跡と、平成14年度に発掘調査をした八木山緑町遺跡、庚中前窯跡、下ノ内遺跡、山田条里遺跡、富沢遺跡、南小泉遺跡、大野田古墳群、高田A遺跡、養種園遺跡の調査成果を収録しております。国分寺東遺跡は、聖和学園高等学校の校舎移転計画によって新に発見された遺跡ですが、調査によって、これまで知られていなかった陸奥国分寺跡周辺の実態を知る上で貴重な資料を得ることが出来ました。

本書に掲載した調査成果が、地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のためお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行まで多くの方々のご指導、ご協力をいただきましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。今後とも文化財保護行政につきましてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

仙台市教育委員会

教育長 阿部 芳吉

例 言

- 1 本書は、仙台市教育委員会による国分寺東遺跡、八木山緑町遺跡、庚申前窯跡、下ノ内遺跡、山田条里遺跡第7次、富沢遺跡第122・123・124・125次、南小泉遺跡第37・38・39次、大野田古墳群、高田A遺跡、養種園遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査報告書のうち、富沢遺跡第123次・南小泉遺跡第39次・大野田古墳群・高田A遺跡・養種園遺跡の調査は個人住宅建設に伴う事前調査として実施したものであり、他は民間の開発事業に伴って行なわれた発掘調査である。
- 3 民間の開発事業に伴い実施された発掘調査及びその報告書の刊行にあたっては、地権者である学校法人聖和学園・学校法人仙台こひつじ学園・庄子末吉氏・御ヨークベニマル・㈲アピテール船田・菅井幸子氏・㈲住友不動産・㈲ヤマニの各位に絶大なご理解とご協力をいただいた。また、個人住宅建設に伴う調査にあっても、建築主の多大なる理解をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。
- 4 本書の作成は、仙台市教育委員会文化財課調査係が行い、次のとおり分担した。

国分寺東遺跡	豊村幸宏	富沢遺跡第122次	工藤哲司	南小泉遺跡第38次	工藤哲司
八木山緑町遺跡（第3次）	佐藤 淳	富沢遺跡第123次	豊村幸宏	南小泉遺跡第39次	豊村幸宏
庚申前窯跡	工藤哲司	富沢遺跡第124次	加藤徳明	大野田古墳群	工藤哲司
下ノ内遺跡	加藤徳明	富沢遺跡第125次	豊村幸宏	高田A遺跡	豊村幸宏
山田条里遺跡第7次	大倉秀之	南小泉遺跡第37次	波部弘美	養種園遺跡	豊村幸宏
- 5 本調査にかかわる資料の全ては、仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

- 調査地点は地図中に★または■の印で示した。
- 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1976)に準拠している。
- 本書に係わる遺構の実測は、平面座標系Xを基準点としたものと、任意の点を基準点としたものがある。任意の基準点からの測量では、周辺の境界杭等を計測することにより調査区の位置を定めた。
- 平面座標系の座標値の単位はkmである。
- 標高値は、海拔高度を示している。
- 遺構名の略号として、次の略号を使用した。
SA：柱列・堀跡 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SE：井戸跡
SI：竪穴住居跡及び竪穴遺構 SK：土坑跡 P：ピット SX：その他の遺構
- 報告書中の全体図および遺構平面図においては、攪乱と新しい重複遺構は、省略または簡略化している。
- 竪穴住居跡床面の濃いスクリーントーン(網)は焼け面を示している。
- 柱穴内のスクリーントーン(網)は柱痕跡の位置を示している。
- 遺物の登録には、以下の分類と略号を使用した。
A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器(非ロクロ) D：土師器(ロクロ)
E：須恵器 F：丸瓦 G：平瓦 I：陶器・土師質土器
J：磁器 K：石器・石製品 L：木製品類 N：金属製品
P：土製品
- 土師器実測区内面のスクリーントーン(網)は黒色処理されていることを示している。
- 礎石器実測区の細かなスクリーントーン(網)は唇面を示している。
- 遺物観察表の()内の分量は、残存値を示している。
- 本文中の「灰白色火山灰」(庄子・山田：1980)は、「十和田a (To-a)」と考えられ、十和田aの降下年代は、現在西暦915年初夏とされている。(町田：1981・1996)
- 「擬似畦畔B」という用語は、水田の畦畔直下の自然堆積層において認められる畦畔状の高まりをさす(斎野ほか1987：「富沢-富沢遺跡第15次発掘調査報告書一」仙台市文化財調査報告書第98集)が、本書では自然堆積層の高まりだけでなく、畦畔直下における下層の水田耕作土層に認められる畦畔状の高まりについてもこの用語を用いた。

本文目次

序	文
例	言
凡	例
目	次

I 国分寺東遺跡発掘調査報告書

1	調査要項	1
2	遺跡の位置と環境	1
1)	地理的環境	1
2)	歴史的環境	1
3	調査に至る経緯と調査方法	4
4	基本層序	4
1)	I区の基本層序	4
2)	II区の基本層序	6
5	I区の発見遺構と出土遺物	7
1)	柱列	7
2)	掘立柱建物跡	7
3)	溝跡	8
4)	井戸跡	8
5)	土坑	10
6)	ピット	17
6	II区の発見遺構と出土遺物	17
1)	竪穴住居跡	17
2)	溝跡	28
3)	土坑	28
4)	ピット	31
5)	その他の出土遺物	31
7	まとめと考察	33
1)	SI1・2 竪穴住居跡出土土器群について	33
2)	遺構の年代について	34
3)	まとめ	35

II 八木山緑町遺跡（第3次）発掘調査報告書

1	調査要項	47
2	遺跡の位置と環境	47
3	調査に至る経緯と調査方法	48
4	基本層序	49
5	発見遺構と出土遺物	50
1)	竪穴住居跡	50
2)	土坑	54
3)	ピット	55
4)	基本層ほかの出土遺物	56
5)	ト屑調査	62
6	まとめ	63

Ⅲ 庚中前窯跡発掘調査報告書

1 調査要項	71
2 遺跡の位置と環境	71
3 調査に至る経過と調査方法	72
4 基本層序	72
5 発見遺構と出土遺物	72
1) 1トレンチ	72
2) 2トレンチ	75
3) 3・4トレンチ	75
6 まとめ	75

Ⅳ 下ノ内遺跡発掘調査報告書

1 調査要項	79
2 遺跡の位置と環境	79
3 調査に至る経過と調査方法	80
4 基本層序	81
5 a 層発見遺構と出土遺物	84
1) 掘立柱建物跡	84
2) 溝跡	84
3) ビット	86
6 5 b 層発見遺構と出土遺物	86
1) 掘立柱建物跡	86
2) 溝跡	88
3) 上坑	90
4) 小溝状遺構群	91
5) ビット	93
7 深掘り区	93
8 基本層中の出土遺物	93
9 まとめ	93

Ⅴ 山田条里遺跡（第7次）発掘調査報告書

1 調査要項	107
2 遺跡の位置と環境	107
3 調査に至る経過と調査方法	107
4 基本層序	109
1) 1区の基本層序	109
2) 2区の基本層序	110
5 1区の発見遺構と出土遺物	111
1) 3層の調査	111
2) 4層水田跡	111
3) 土坑	113
6 2区の発見遺構と出土遺物	113
1) 3～5層の調査	113
2) 6・7層水田跡	113
3) 土坑	113
7 まとめ	118

VI 富沢遺跡（第122次）発掘調査報告書

1 調査要項	129
2 遺跡の位置と環境	129
3 調査に至る経過と調査方法	129
4 基本層序	129
5 発見遺構と出土遺物	131
6 まとめ	132
7 富沢遺跡第122次調査におけるプラント・オパール分析（株式会社 古環境研究所）	137
1) はじめに	137
2) 試料	137
3) 分析法	137
4) 結果	137
5) 富沢遺跡第122次調査における稲作跡	139

VII 富沢遺跡（第123次）発掘調査報告書

1 調査要項	141
2 遺跡の位置と環境	141
3 調査に至る経過と調査方法	141
4 基本層序	142
5 まとめ	143
1) 水田耕作土	143
2) まとめ	143

VIII 富沢遺跡（第124次）発掘調査報告書

1 調査要項	145
2 遺跡の位置と環境	145
3 調査に至る経過と調査方法	145
4 基本層序	145
5 まとめ	147

IX 富沢遺跡（第125次）発掘調査報告書

1 調査要項	149
2 遺跡の位置と環境	149
3 調査に至る経過と調査方法	149
4 基本層序	150
5 発見遺構と出土遺物	150
水田跡	150
6 まとめ	151
1) 水田耕作土	151
2) まとめ	152

X 南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書

1	調査要項	157
2	遺跡の位置と環境	157
3	調査方法	157
4	発見遺構と出土遺物	157
1)	上坑	159
2)	溝跡	160
3)	円形周溝遺構	160
4)	竪穴住居跡	162
5)	柱穴・ピット	168
6)	出土遺物について	168
5	まとめ	168

XI 南小泉遺跡（第38次）発掘調査報告書

1	調査要項	173
2	遺跡の位置と環境	173
3	調査に至る経過と調査方法	174
4	基本層序	175
5	発見遺構と出土遺物	176
1)	各区の概要	176
2)	溝跡	176
3)	竪穴住居跡	176
4)	その他の遺構	186
6	まとめ	187

XII 南小泉遺跡（第39次）発掘調査報告書

1	調査要項	197
2	遺跡の位置と環境	197
3	調査に至る経過と調査方法	197
4	基本層序	197
5	発見遺構と出土遺物	198
1)	溝跡	198
2)	井戸跡	198
3)	上坑	199
6	まとめ	200

XIII 大野田古墳群発掘調査報告書

1	調査要項	203
2	遺跡の位置と環境	203
3	基本層序	204
4	調査に至る経過と調査方法	205
5	発見遺構と出土遺物	205
1)	掘立柱建物跡	205
2)	溝跡	205
3)	土坑	206
4)	その他の遺構	207
5)	下層遺構の状況	207
6	まとめ	207

XIV 高田 A 遺跡発掘調査報告書

1	調査要項	213
2	遺跡の位置と環境	213
3	調査に至る経過と調査方法	213
4	基本層序	214
5	発見遺構と出土遺物	214
1)	溝跡	214
2)	土坑	215
3)	ピット	216
4)	その他の出土遺物	216
6	まとめ	216

XV 養種園遺跡発掘調査報告書

1	調査要項	219
2	遺跡の位置と環境	219
3	調査に至る経過と調査方法	219
4	基本層序	220
5	発見遺構と出土遺物	220
1)	竪穴住居跡	220
2)	溝跡	222
6	まとめ	223

目 次

I 国分寺東遺跡発掘調査報告書

第1図	国分寺東遺跡と周辺の遺跡	3
第2図	調査地点位置図	5
第3図	調査区位置図	5
第4図	基本層序	6
第5図	I区SA1柱列	7
第6図	I区遺構配置図	8
第7図	I区SB1掘立柱建物跡	9
第8図	I区SB2掘立柱建物跡	9
第9図	I区SD1溝跡	10
第10図	I区SE1井戸跡	10
第11図	I区SE1井戸跡出土遺物	11
第12図	I区土坑(1)	13
第13図	I区土坑(2)	15
第14図	I区土坑・ビット出土遺物	16
第15図	II区遺構配置図	18

第16図	II区SI1竪穴住居跡(1)	19
第17図	II区SI1竪穴住居跡(2)	20
第18図	II区SI1竪穴住居跡カマド	21
第19図	II区SI1竪穴住居跡出土遺物(1)	22
第20図	II区SI1竪穴住居跡出土遺物(2)	23
第21図	II区SI1竪穴住居跡出土遺物(3)	24
第22図	II区SI1竪穴住居跡出土遺物(4)	25
第23図	II区SI2竪穴住居跡	26
第24図	II区SI2竪穴住居跡出土遺物	27
第25図	II区SD1溝跡	28
第26図	II区土坑(1)	30
第27図	II区土坑(2)	31
第28図	II区土坑・ビット出土遺物	32
第29図	その他の出土遺物	33

II 八木山緑町遺跡発掘調査報告書

第30図	周辺の遺跡	47
第31図	遺跡の位置	48
第32図	調査区の位置	49
第33図	基本層序	50
第34図	遺構の配置	51
第35図	1号竪穴住居跡	52
第36図	1号竪穴住居跡出土遺物	53
第37図	土坑	54

第38図	ビット出土遺物	56
第39図	基本層ほかの出土遺物(1)	57
第40図	基本層ほかの出土遺物(2)	58
第41図	基本層ほかの出土遺物(3)	59
第42図	基本層ほかの出土遺物(4)	60
第43図	基本層ほかの出土遺物(5)	61
第44図	基本層ほかの出土遺物(6)	62

III 庚中前窯跡発掘調査報告書

第45図	庚中前遺跡と周辺の遺跡	71
第46図	開発区域と調査区配置	72
第47図	遺構配置図	72

第48図	遺構実測図	73
第49図	出土遺物実測図	74

IV 下ノ内遺跡発掘調査報告書

第50図	調査地点の位置と周辺の遺跡	79
第51図	調査区配置図	80
第52図	5a層検出遺構	81
第53図	調査区土層断面図	82

第54図	基本層出土遺物	83
第55図	5a層検出SB-1掘立柱建物跡	85
第56図	5a層検出溝跡断面図	86
第57図	遺構出土遺物	87

第58図	5 b層検出遺構	88	第62図	5 b層検出小溝状遺構断面図	91
第59図	5 b層検出SB-2・3掘立柱建物跡	89	第63図	小溝状遺構群方向別分布図	92
第60図	5 b層検出溝跡断面図	90	第64図	深堀区平面図	94
第61図	5 b層検出土坑実測図	91	第65図	深堀区西壁土層断面図	94
V 山田条里遺跡（第7次発掘）調査報告書					
第66図	山田条里遺跡の位置と周辺の遺跡	108	第72図	2区北壁上層断面図	114
第67図	調査区位置図	109	第73図	6層水田跡畦畔断面図	115
第68図	調査区配置図	110	第74図	2区6層・7層水田跡	115
第69図	1区東壁土層断面図	112	第75図	7層水田跡畦畔断面図	116
第70図	1区4層水田跡	113	第76図	SK-1・2土坑実測図	117
第71図	SK-3土坑実測図	113	第77図	出土遺物実測図	118
VI 富沢遺跡（第122次）発掘調査報告書					
第78図	富沢遺跡の調査地点と周辺の遺跡	130	第80図	第122調査区実測図	131
第79図	第122調査区配置図	130	第81図	第122調査区東壁断面図	132
VII 高次遺跡（第123次）発掘調査報告書					
第82図	調査区配置図	141	第83図	調査区北壁断面図	142
VIII 富沢遺跡（第124次）発掘調査報告書					
第84図	調査区配置図	145	第85図	調査区南壁・西壁断面図	146
IX 富沢遺跡（第125次）発掘調査報告書					
第86図	調査区配置図	149	第89図	9 a層疑似畦畔	151
第87図	調査区北壁・西壁断面図	150	第90図	9 a層出土遺物	152
第88図	6層水田跡	151			
X 南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書					
第91図	調査地点と調査区配置	157	第98図	SI1住居跡	163
第92図	検出遺構全体図	158	第99図	SI1住居跡出土遺物1	164
第93図	土坑	159	第100図	SI1住居跡出土遺物2	165
第94図	SK2土坑出土遺物	160	第101図	SI2住居跡	166
第95図	溝跡断面図	160	第102図	SI2住居跡出土遺物	167
第96図	溝跡・円形周溝遺構平面図	161	第103図	SA1①掘立柱	168
第97図	円形周溝遺構断面図	162			

XI 南小泉遺跡（第38次）発掘調査報告書

第104図	第38次調査区の位置	173
第105図	第38次調査区の配置と周辺の調査区	174
第106図	遺構配置図	174
第107図	溝跡実測図	175
第108図	溝跡出土遺物	176
第109図	SI-1 竪穴住居跡実測図	177
第110図	SI-1 竪穴住居跡出土遺物	177
第111図	SI-2 竪穴住居跡実測図	178

第112図	SI-2 竪穴住居跡出土遺物	179
第113図	SI-3 竪穴住居跡実測図	180
第114図	SI-3 竪穴住居跡出土遺物1	181
第115図	SI-3 竪穴住居跡出土遺物2	182
第116図	SI-3 竪穴住居跡出土遺物3	183
第117図	SI-4 竪穴住居跡・SX-1 遺構実測図	185
第118図	SI-4 竪穴住居跡・SX-1 遺構出土遺物	186

XII 南小泉遺跡（第39次）発掘調査報告書

第119図	調査地点と周辺の地形	197
第120図	調査区配置図	198
第121図	遺構配置図	199

第122図	調査区北壁・遺構断面図	199
第123図	出土遺物	200

XIII 大野田古墳群発掘調査報告書

第124図	大野田古墳群と周辺の遺跡	203
第125図	遺構配置図	201
第126図	孤立柱建物跡実測図	204

第127図	基本層断面及び遺構実測図	206
第128図	Ⅲ層出土遺物	207

XIV 高田A遺跡発掘調査報告書

第129図	調査地点と周辺の地形	213
第130図	調査区配置図	214
第131図	遺構配置図	214

第132図	調査区西壁・北壁・遺構断面図	215
第133図	出土遺物	215

XV 釜種岡遺跡発掘調査報告書

第134図	調査地点と周辺の地形	219
第135図	調査区配置図	220

第136図	SI1 竪穴住居跡・SD1 溝跡実測図	221
第137図	出土遺物	222

写真目次

I 国分寺東遺跡発掘調査報告書

図版1	国分寺東遺跡周辺の航空写真	36
図版2	I区調査状況・柱列・井戸跡・土坑	37
図版3	I区調査状況・土坑	38
図版4	I区調査状況・II区調査状況・竪穴住居跡	39
図版5	II区調査状況・竪穴住居跡・土坑	40

図版6	II区調査状況・土坑	41
図版7	出土遺物1	42
図版8	出土遺物2	43
図版9	出土遺物3	44
図版10	出土遺物4	45

II 八木山緑町遺跡発掘調査報告書

図版11	調査区・1号住居跡	64
図版12	1号住居跡・土坑	65
図版13	土坑・下層調査	66
図版14	縄文土器	67

図版15	縄文土器・弥生土器・土製品・剥片石器	68
図版16	剥片石器	69
図版17	礫石器・石製品	70

III 庚申前窯跡発掘調査報告書

図版18	1・2トレンチの状況と溝跡	76
図版19	2トレンチの遺構	77

図版20	2・3・4トレンチと出土遺物	78
------	----------------	----

IV 下ノ内遺跡調査報告書

図版21	5a層全景	96
図版22	5a層検出遺構	97
図版23	5a層SD-3と5b層検出遺構	98
図版24	5b層検出の溝跡と土坑	99
図版25	小溝状遺構群の検出と調査状況	100

図版26	小溝状遺構群の状況	101
図版27	調査区の土層断面1	102
図版28	調査区の土層断面2	103
図版29	深掘り調査区の状況	104
図版30	出土遺物	105

V 山田条甲遺跡(第7次)発掘調査報告書

図版31	1区4層水田跡	120
図版32	1区調査状況	121
図版33	1区土坑断面・土層断面	122
図版34	2区の状況と土坑断面	123

図版35	2区6層・7a層調査状況	124
図版36	2区7b層調査状況	125
図版37	2区7b層～9層調査状況	126
図版38	2区土層断面・出土遺物	127

VI 富沢遺跡(第122次)発掘調査報告書

図版39	調査区全景と4～6層調査状況	134
図版40	6～9層調査状況	135

図版41	10～12層調査状況	136
------	------------	-----

VII 富沢遺跡(第123次)発掘調査報告書

図版42	調査状況・土層断面	144
------	-----------	-----

Ⅷ 富沢遺跡（第124次）発掘調査報告書

図版43 調査状況・土層断面……………148

Ⅸ 富沢遺跡（第125次）発掘調査報告書

図版44 調査状況・土層断面……………154

図版45 土層断面・出土遺物……………155

X 南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書

図版46 検出遺構1……………169

図版48 出土遺物1……………171

図版47 検出遺構2……………170

図版49 出土遺物2……………172

XI 南小泉遺跡（第38次）発掘調査報告書

図版50 2区遠景・SI1 竪穴住居跡……………188

図版54 出土遺物1……………192

図版51 SI2 竪穴住居跡……………189

図版55 出土遺物2……………193

図版52 SI3 竪穴住居跡……………190

図版56 出土遺物3……………194

図版53 SI4 竪穴住居跡・SX1 遺構……………191

図版57 出土遺物4……………195

XII 南小泉遺跡（第39次）発掘調査報告書

図版58 調査状況・溝跡・井戸跡……………201

図版59 土坑・出土遺物……………202

XIII 大野田古墳群発掘調査報告書

図版60 大野田古墳群の状況と土層断面……………209

図版62 土坑・その他の遺構と出土遺物……………211

図版61 掘立柱建物跡・溝跡・土坑……………210

XIV 高田A遺跡発掘調査報告書

図版63 調査状況……………217

図版64 溝跡・出土遺物……………218

XV 養種園遺跡発掘調査報告書

図版65 調査状況・竪穴住居跡……………224

図版66 溝跡・出土遺物……………225

I 国分寺東遺跡発掘調査報告書

1 調査要項

遺 跡 名	国分寺東遺跡（宮城県遺跡番号01557）		
調 査 地 点	仙台市若林区木ノ下三丁目2-15他		
調 査 期 間	（試掘調査）平成13年9月10日～9月13日 （本調査）平成13年12月3日～平成14年1月18日		
調査対象面積	7,965㎡		
調 査 面 積	I区 209㎡ II区 150㎡		
調 査 原 因	学校校舎建設		
調 査 主 体	仙台市教育委員会（文化財課）		
担 当 職 員	（試掘調査）調査係長 結城慎一 主査 吉岡恭平 教諭 豊村幸宏 文化財教諭 吉田和正 （本調査）主査 吉岡恭平 教諭 豊村幸宏 文化財教諭 吉田和正・村上秀樹		
調 査 協 力	鹿島建設株式会社東北支店		

2 遺跡の位置と環境

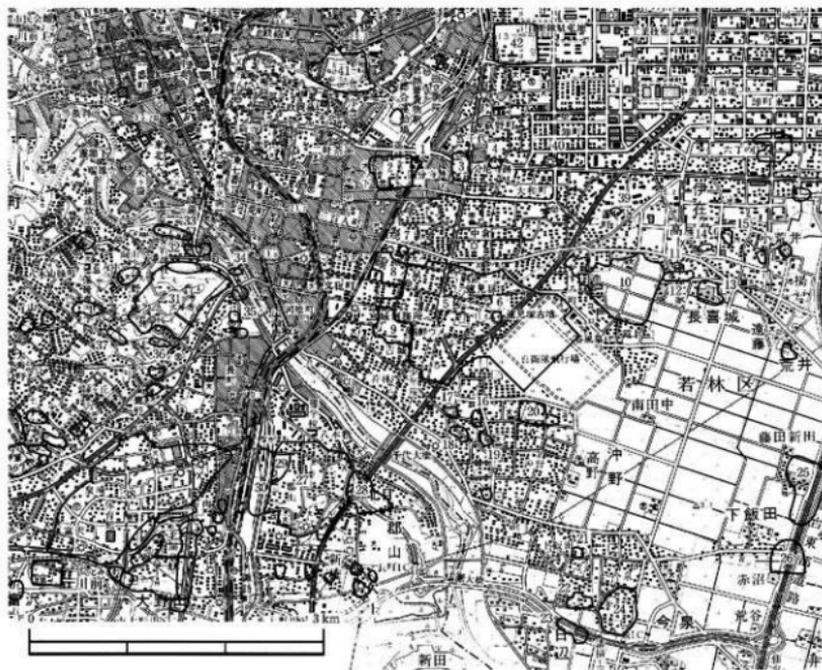
1) 地理的環境

国分寺東遺跡は、JR仙台駅の東南東約2km付近の仙台市若林区木ノ下三丁目目に所在する遺跡である。仙台市の地形は西半部と東半部とに大きく二分される。西半部は奥羽山脈から派生する七北田丘陵・青葉山丘陵・高館丘陵と、名取川の支流広瀬川がその中流域に形成した段丘地形からなる。この段丘は古期から青葉山段丘・台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と命名され、伊達政宗の仙台開府以来、現在に至るまでの仙台の中心市街地はこれらの段丘地帯に形成されている。これに対し東半部には、幅約10kmに及ぶ「宮城野海岸平野」が、北は宮城郡七ヶ浜町から南は亶理郡山元町まで40kmに渡って三日月形に広がっている。この沖積平野は、奥羽山脈に水源を発する七北田川・名取川・阿武隈川の運搬物によって形成され、流域には扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道など沖積地特有の地形を形成している。また沿岸部には幅2kmに渡って4列の浜堤が形成されている。本遺跡は、仙台市街地の東半部、「宮城野海岸平野」の標高15mの自然堤防上に立地している。遺跡の西方には台地（段丘）と低地（沖積地）の地形境界がみられ、この境界は「長町一利存線」と呼ばれる断層で、その主断層は沖積層下に伏在しているといわれている。平野はこのラインの東側に展開する。また、第四紀の地質層序は深沼層・荒浜層・霞ノ目層・福田町層・岩切層となっており、本遺跡は平野最奥部の最上位を占める霞ノ目層にのっている。この層は泥炭層の堆積物で、際混じり粗粒砂層・ローム層からなっており、遺跡のいわゆる「地山層」である。現在では遺跡の北側には景道荒浜・原町線（通称産業道路）が東西に延び、東側にはJR東北本線貨物線が南北に走っている。周辺地域一帯はかつては閑静な文教地区であったが、現在は開発の進展に伴って住宅・商業地区へと変貌を遂げている。

2) 歴史的環境

本遺跡の所在する広瀬川左岸には数多くの遺跡が存在する。時代別に概観すると、旧石器時代の遺跡はないが、続く縄文時代には今泉遺跡から後期前葉の土器が出土している。また南小泉遺跡でも、中期末～後期初葉、晩期の

土器が発見された。高田B遺跡では後・晩期の土器が出土し、後期の住居跡が1軒発見されている。弥生時代には南小泉遺跡、今泉遺跡、藤田新田遺跡、中在家南遺跡、高田B遺跡の各遺跡が知られ、南小泉遺跡では昭和14年から16年にかけての震ノ目飛行場拡張工事の際に、15基以上の合門土器棺をはじめとして多量の土器・石器が見つかった。また、中在家南遺跡では、この時代の墓塚や多数の木製品が発見され注目されている。高田B遺跡からは、遺物包含層が確認されたほか、河川跡から多量の土器・石器・木製品が出土している。古墳時代に入ると、南小泉遺跡、藤田新田遺跡、下飯田遺跡の各遺跡で集落跡が見つかった。中在家南遺跡では、前時代に引き続いてこの時代の木製品も多数出土している。その他、砂押I遺跡、砂押II遺跡、今泉遺跡も集落跡の可能性がある。広瀬川左岸には幾つかの古墳が知られているが、このうち最古・最大のものは、国指定史跡の遠見塚古墳である。二段築成で主軸長110mの規模を持ち、主体部は2基の粘土郭から成る。前期末頃の年代が考えられており、被葬者は初代人と政権と関係をもったこの地域の有力首長と見なされている。中期には埴輪を有する若林城内古墳、後期には市内最大の横穴式石室を持つ法領塚古墳が見られ、これ以外にも鶴塚古墳、蛇塚古墳、梅塚古墳、曾利松明神古墳、下飯田薬師堂古墳などが散見される。飛鳥時代になるとこの地も律令政府の直接的支配を受けるようになる。広瀬川対岸の郡山低地には多賀城跡以前の陸奥国府と考えられる郡山遺跡が造営される。7世紀後半頃から末頃までのI期官衙と7世紀末頃から8世紀初頭にかけてのII期官衙からなり、II期官衙には寺院が付属する。南小泉遺跡や下飯田遺跡では該期の関東系土器が一定量出土していることから当地で関東からの移民による集落が営まれていた可能性が示唆されている。奈良時代には本遺跡の西側100mに奈良時代中葉頃に創建された陸奥国分寺跡が位置している。陸奥国分寺跡は、大正11年(1922)に国の史跡指定を受け、昭和30年から34年にかけて行われた学術調査で伽藍の概要が明らかとなっている。それによると規模は、東西800尺(242m)、南北800尺以上の築地塀及び掘立柱列で囲まれた大規模な寺院である。伽藍配置は、中軸線上に南大門、中門、金堂、講堂、僧房が並び、中門と金堂は回廊で結ばれている。金堂と講堂の間には、東に鐘楼、西に経楼があり、金堂の東には回廊の廻る七重塔を配し、東辺築地塀には東門が取り付いている。伽藍を構成する建物は全て礎石建物である。創建期の瓦は、重弁蓮華文軒丸瓦と偏行草文軒平瓦で、多賀城跡のII期段階や天平高金遺跡出土の瓦と同じ特徴を有している。本遺跡の東方400mには国指定史跡陸奥国分尼寺跡が位置している。推定400尺(121m)四方と思われる区画溝の巡らされた寺域の中に推定金堂、尼房等の伽藍が配されている。推定金堂跡については、昭和39年の発掘調査により5間×4間の茶壇建物跡であることが確認され、尼房については、平成13年度実施の第10次調査の結果、東西45mに及ぶ長大な掘立柱建物であることが確認された。さらに本遺跡の東方800mにある志波遺跡からも古瓦が出土しており興味深い。神樹遺跡では円面鏡、鉄滓、へら書きのある須恵器が出土しており、郡・郷等の地方末端行政に関連した施設と考えられる掘立柱建物跡が検出されている。なお本遺跡の東南方には、仙台東郊桑里跡が広がっているが、これは律令期に整備された表層の桑里地割である。町名変更前には「二ノ坪」・「三ノ坪」・「尻理」などの地名も残っていた。この時代の集落跡としては、南小泉遺跡、養徳園遺跡、保春院前遺跡で調査がなされている。平安時代には、南小泉遺跡で、ほぼ9世紀代を中心とする集落跡が出現する。周辺には、神樹遺跡、中横西遺跡、砂押I遺跡、砂押II遺跡、中在家遺跡、押II遺跡などが散在する。鎌倉時代以後は、南小泉遺跡、今泉遺跡、神野城跡、長喜城跡、荒井館跡、谷地館跡、南目城跡、若林城跡など沖積地の館邸、段丘上の国分館跡、丘陵上の茂々館城跡が点在する。これ以外にも本遺跡の南方1.1kmには戦国期の遺構群と江戸時代の伊達家別荘跡で知られる養徳園遺跡がある。また、江戸時代初頭に若林城が築城されると、南小泉遺跡の西半部は、同城の城下町としての性格を帯びようになる。ただし、寛永16年に若林城が廃城となると城下町も廃止されたものと見られている。これ以後明治に至るまでは、伊達家別荘地や藩の御菜園などが造営されたほか鑄造に関わる鍛冶職人の居住がなされていたものと考えられている。



No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	国分寺東遺跡	集落跡	自然堤防	古代・中世・近世	22	高田A遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
2	陸奥国分寺跡	寺院跡	自然堤防	古代・中世	23	高田B遺跡	河跡・水田跡	後背溜地	縄文~近世
3	陸奥国分寺跡	寺院跡	自然堤防	古代	24	今倉遺跡	集落跡・堤防	自然堤防	縄文~近世
4	志波遺跡	散布地	自然堤防	古代	25	藤田新田遺跡	集落跡・水田跡	河堤	弥生・古墳・古代
5	唐小倉遺跡	集落跡	自然堤防	縄文~近世	26	下飯田遺跡	集落跡・野原跡	河堤	古墳~中世
6	流見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	27	野山遺跡	宮跡・寺院跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
7	流見塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	28	北目城跡	城跡	自然堤防	縄文~近世
8	養護塚遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・中世・近世	29	西台塚遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
9	若林城跡	円墳・城跡	自然堤防	古墳~近世	30	長町沢水遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
10	徳川家康公陣跡	条陣跡	後背溜地	古代	31	茂ノ坪城跡	城跡	丘陵	中世
11	中在家遺跡	包合地	自然堤防	古代	32	太早山古墳穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳~古代
12	中在家西遺跡	河跡・水田跡	後背溜地	弥生~近世	33	愛宕山横穴墓群	横穴墓	段丘・丘陵	古墳~古代
13	長喜城跡	城跡	自然堤防	中世	34	宗神寺横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳~古代
14	高野城跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	35	聖塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
15	新口遺跡	河跡・水田跡	後背溜地	弥生~近世	36	茂ノ坪横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳~古代
16	神橋遺跡	官衙跡?	自然堤防	古代	37	二ツ沢横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳~古代
17	柳井1遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	38	宮沢遺跡	水田跡地	河跡・水田跡	段丘部~近世
18	柳井2遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	39	養利谷明神古墳	円墳	自然堤防	古墳
19	中園西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代	40	谷地船跡	城跡	自然堤防	中世
20	河野遺跡	城跡	自然堤防	中世	41	園分堀船跡	城跡	段丘	中世
21	上原城遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	42	南目跡	城跡	自然堤防	中世

第1図 国分寺東遺跡と周辺の遺跡

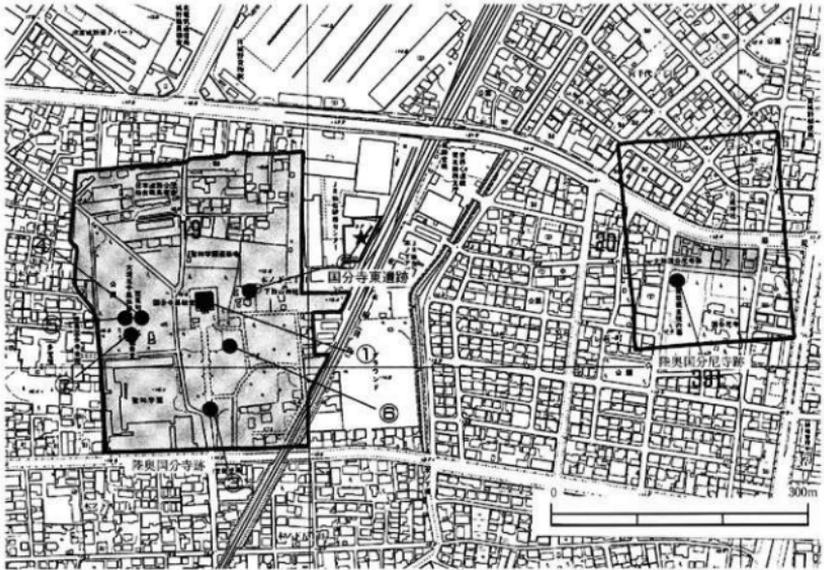
3 調査に至る経過と調査方法

平成13年5月25日付けで学校法人聖和学園理事長松田紹典氏より仙台市若林区木ノ下三丁目2地内の陸奥国分寺跡隣接地に係わる学校校舎建設工事の協議書が提出された。当該地は、陸奥国分寺跡の東辺北半部から東に100mの地点に位置し、従来遺跡登録はなされていなかった場所である。ただし、陸奥国分寺跡の隣接地域については国分寺の周辺の様相を確認し得ると共に国分寺に付随する諸施設や関連する遺構の存在が予想される場所でもあることから事前協議の一環として、平成13年9月10日～13日試掘調査を実施した。調査対象地一帯は、かつてJR東日本仙台研修センター（旧国鉄造園園）の敷地内であったため、遺構の遺存状況は良くないものと思われた。そこで研修センター建物配置図と建設予定校舎の配置図に基づき、試掘トレンチを5箇所設定し、それぞれの調査トレンチで遺構の分布状況を見極めることとした。第1、第5トレンチでは掘削のため遺構面はほぼ全域で削平されており、第4トレンチでも、倒木痕と思われる不整形の落ち込みの他、若干のピットや小柱穴、焼け面の検出にとどまった。しかしながら、第2、第3トレンチで、堅穴住居跡、堅穴遺構、焼上遺構、溝跡、土坑、柱穴、ピット等の遺構が多数検出され、土師器、須恵器、赤焼土器、軒丸瓦、鉄製品、石製品等の遺物が比較的多量に出土した。以上の試掘調査結果から陸奥国分寺跡の東側隣接地における新たな遺跡の存在が確認されたため、陸奥国分寺跡との地理的な位置関係から「国分寺東遺跡」と命名し遺跡登録を行った（宮城県遺跡番号01557）。併せて、関係者と再度協議を重ね、計画建物の建設工事によって遺構の損なわれる部分については、記録保存の為に事前調査を実施することとし、発掘届の提出を受けた（教生文13-191号で回答）。調査箇所は、南北2箇所に分けて調査区を設定し南側をⅠ区、北側をⅡ区とした。調査は、平成13年12月3日より開始した。重機により、研修センター解体造成時の山砂盛土と旧表土Ⅰ層、旧耕作土Ⅱ層を排除し、基盤層であるⅢ層上面で遺構検出作業を行った。Ⅰ区では、柱列1列、掘立柱建物跡2棟、溝跡1条、井戸跡1基、土坑23基、ピット267基、Ⅱ区では、堅穴住居跡2軒、溝跡1条、土坑16基、ピット67基を検出した。また、Ⅱ区では堅穴住居跡の検出された部分で調査区を一部北側に拡張した。なおⅠ区では、調査区北壁で一部下層調査を実施した。遺構の測量については、任意の基準杭A、Bを設置し、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、正確な位置を把握している。（杭A：X=-194.376m Y=6.558m 杭B：X=-194.332m Y=6.552m）遺構の平面図は基準杭を利用して簡易測り方を組み1/20あるいは1/10で作成した。断面図も1/20あるいは1/10で作成した。写真は35mmモノクロ・リバーサルフィルムで撮影した。野外調査が終了したのは平成14年1月18日である。

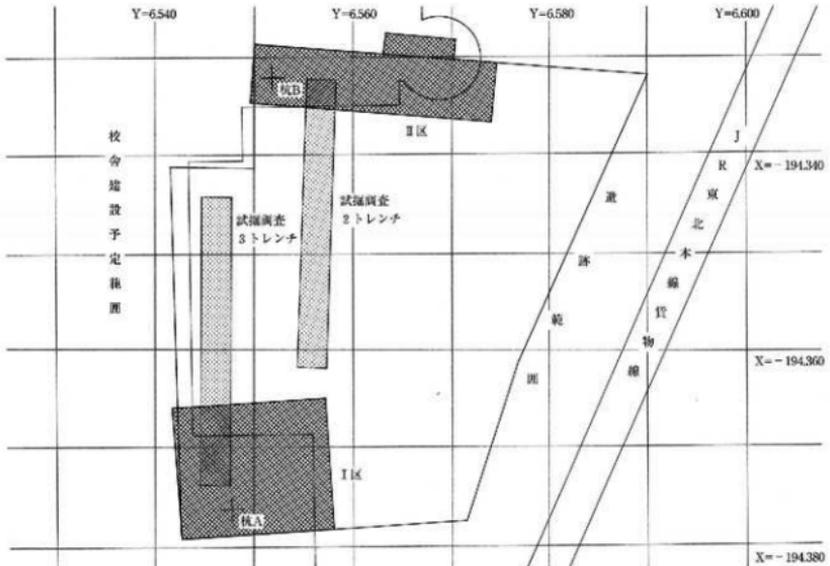
4 基本層序

1) Ⅰ区の基本層序

Ⅰ区で確認された基本層序は、山砂整地層下の大別6層である。各層の傾斜は南北方向ではほぼ水平であるが、東西方向では東から西にむかって緩やかに傾斜している。Ⅰ層は、褐灰色シルト層で、層厚は10～20cmあり整地前の旧表土と考えられる。Ⅱ層は、黒褐色シルト層で、層厚は10～30cmあり一部の遺構はこの層の上面から掘り込まれている。下面は起伏が著しい。層中に土師器片、須恵器片、瓦片などを含む。Ⅲ層は、黄褐色シルト層で、層厚は20～40cm、下面には緩やかな起伏がある。この層の上面で遺構検出作業を行った。Ⅲ層以下は、北壁沿いに下層調査を実施して確認した。Ⅳ層は、にぶい黄褐色砂で小礫をごく少量含む。層厚は10～20cmである。Ⅴ層は、Ⅲ層よりも明るい黄褐色シルト層で、層厚は10～15cmである。Ⅵ層は、にぶい黄褐色細砂で層厚は10cm程度あり、この層より下層からは礫層に漸移する。Ⅲ層からⅥ層については、この地域の基盤となる自然堆積層と考えられる。



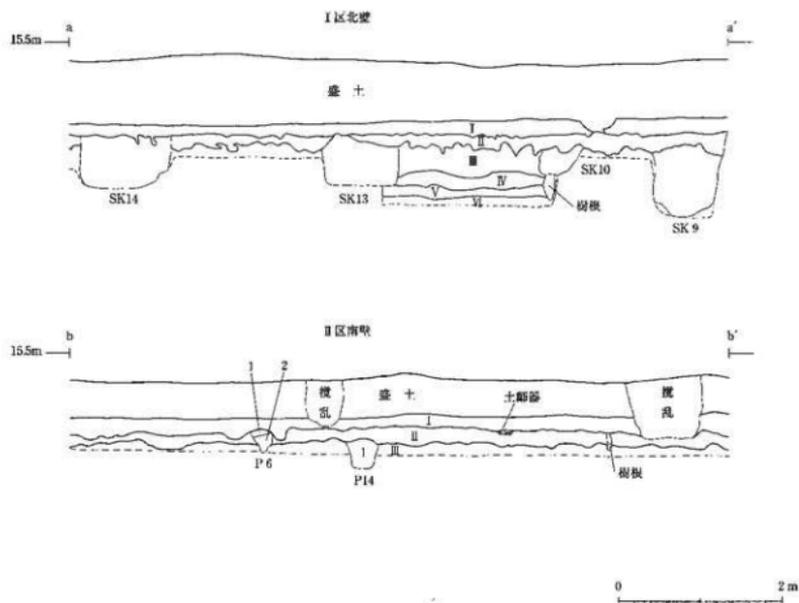
第2図 調査地点位置図



第3図 調査区位置図 (1/500)

2) II区の基本層序

II区では、山砂整地層下で大別3層の基本層を検出した。各層の傾斜は、I区と同様に南北方向では水平に、東西方向では東から西にむかって緩やかに傾斜している。I層は、黒褐色シルト層で全体に木炭粒、焼土粒を少量含む。層厚は8~30cmあり整地前の旧衣土と考えられる。下面はほぼ平坦である。II層は、黒褐色粘土質シルト層で全体に黄褐色粘土ブロック、木炭粒、焼土粒を少量含む。層厚は5~30cmである。一部の遺構はこの層の上面から掘り込まれている。下面は北壁側で起伏が著しい。層中に土師器片、須恵器片、瓦片などを含む。III層は、にぶい黄褐色粘土質シルト層で層厚は30cm以上である。この層の上面が遺構検出面となっている。



層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
I K	10YR6/4	黒褐色	シルト	I	10YR2/2	黒褐色	シルト
II	10YR2/2	黒褐色	シルト	II	10YR2/3	黒褐色	シルト
III	10YR6/4	黄褐色	シルト	III	10YR5/4	黄褐色	シルト
IV	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	IV	10YR2/2	黒褐色	シルト
V	10YR6/4	にぶい黄褐色	シルト	V	10YR2/2	黒褐色	シルト
VI	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘砂	VI	10YR2/2	黒褐色	シルト

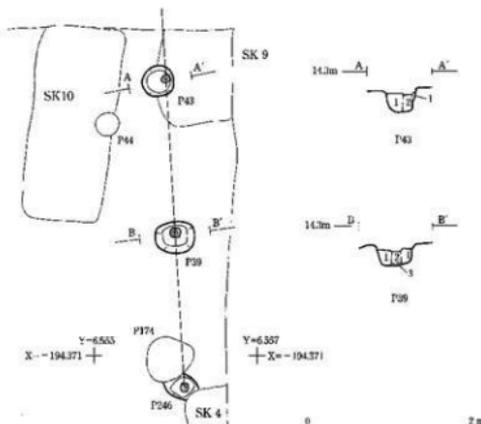
第4図 基本層序

5 I区の発見遺構と出土遺物

国分寺東遺跡では、I区で、柱列1列、掘立柱建物跡2棟、溝跡1条、井戸跡1基、土坑23基、ピット267基、II区で、竪穴住居跡2軒、溝跡1条、土坑16基、ピット67基が検出された。以下、これらの順にそれぞれの遺構の事実記載を行う。また、これらの遺構から出土した図示対象の遺物については、各遺構のところで全て一括して図示および記載を行った。その他、遺構検出作業中に基本層及び検出面から出土した遺物並びに平成13年9月に実施した試掘調査の際に2トレンチ、3トレンチから出土した遺物については後に一括して図示し、記載を行っている。

1) 柱列

SA1 柱列 【位置】調査区の北西コーナー部で検出された。【重複】SK 4、SK 9、P174と重複し、SK 4、P174より古く、SK 9より新しい。【規模・方向】長さ2間以上で総長は3.8m以上、柱間寸法は1.9mの等間である。方向は $N-4.5^{\circ}-W$ である。掘立柱建物跡の南西隅部分になる可能性も考えられる。【柱穴・柱痕跡】柱穴の掘り方は、P43、P246が円形、P39が隅丸方形を呈する。規模は径38~48cmで、深さは22~31cmである。柱痕跡は径10~12cmの円形、隅丸方形である。【出土遺物】掘り方から土師器片、赤焼土器片、土師質土器片、平瓦片が出土した。



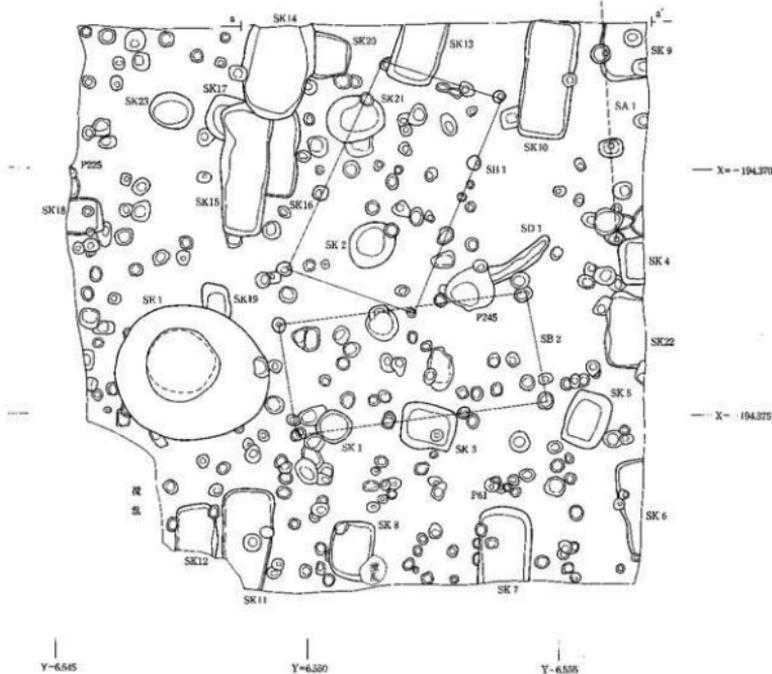
2) 掘立柱建物跡

SB1 掘立柱建物跡 【位置】調査区の中央部から北半部で検出された。【重複】SK 13、SK 21、P127と重複し、これらより古い。なおSB 2、SK 2、その他のピット群とも重複関係にあるが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。【規模・方向】桁行3間、梁行1間の南北棟の建物跡と考えられる。桁行は、東側柱列では総長4.74m、柱間寸法は北から1.50m、1.63m、1.61mである。西側柱列では総長4.68m、計測できる柱間寸法は1.64mである。梁行は、北側柱列で2.46m、南側柱列で2.73mである。建物の方向は、東側柱列で $N-21.5^{\circ}-E$ である。【柱穴・柱痕跡】柱穴の掘り方は、径20~37cmの円形、長円形を呈し、深さは9~25cmである。柱痕跡は7~14cmの円形である。【出土遺物】P83より赤焼土器片、須恵器片が、P202より土師器片が出土した。

遺構	層位	土色	土境	備考
SA1 P39	1	MYR2/2 黒褐色	シルト	10YR5/4シルトブロック。東上壁。木炭粒を含む。
	2	MYR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトの灰層を含む。(柱痕跡)
	3	2SYG/3 濃い褐色	シルト	10YR5/4シルトの灰層を含む。
P43	1	MYR2/2 黒褐色	シルト	10YR5/4シルトブロックを多数含む。
	2	MYR2/1 黒色	シルト	焼土粒、木炭粒を含む。(柱痕跡)
P246 掘り方	1	MYR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを含む。
	柱痕跡	MYR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを多数含む。

第5図 I区SA1柱列

SB2 掘立柱建物跡 【位置】調査区の中央部やや南よりで検出された。【重複】P33、P71、P179、P243と重複し、P33、P71、P243より古く、P179より新しい。なおSB 1、SK 1、SK 3、その他のピット群とも重複関係にあるが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。【規模・方向】桁行3間、梁行1間の東西棟の建物跡と考えられる。桁行は、北側柱列では総長4.90m、柱間寸法は東から1.68m、1.30m、1.92mである。南側柱列では総長5.04m、柱間寸法は東から1.68m、1.45m、1.92mである。梁行は、東側柱列で2.20m、西側柱列で2.26mである。建物の方向は、北側柱列で $E-7.5^{\circ}-N$ である。【柱穴・柱痕跡】柱穴の掘り方は、いずれも径24~36cmの円形、長円形を呈し、深さは17~27cmである。柱痕跡は、径9~13cmの円形、隅丸方形である。【出土遺物】P32より須



第6図 I区遺構配置図(1/100)

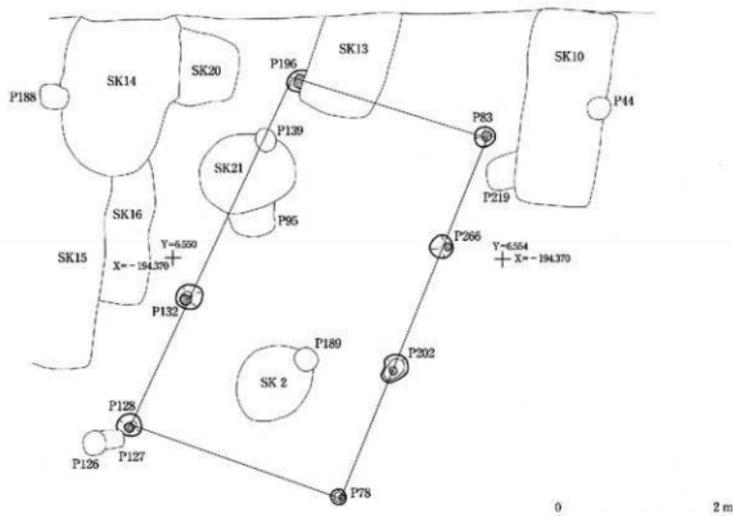
恵器片が、P80より土師器片が出土した。

3) 溝跡

SD1 溝跡 【位置】調査区の東側で検出された。【重複】P33、P181、P245と重複し、これらすべてより古い。【方向・規模】緩やかに湾曲しながら北東から西に延びている。方向は $N-42^{\circ}-E$ である。確認された長さは1.4mで、上幅は30cm、下幅は13cm、深さは17cmである。【断面形・壁・底面】断面形は半円形で、壁は底面から丸みをおびて外傾して立ち上がる。底面は、凹凸が著しく、西半部では径8~12cmのビット状のくぼみが4箇所みられる。【堆積上】2層確認された。いずれも自然堆積層である。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

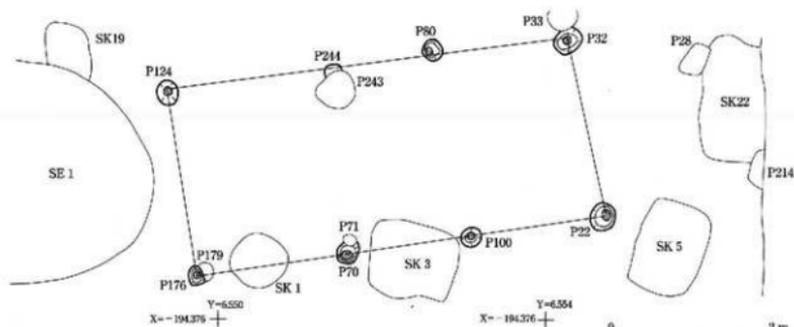
4) 井戸跡

SE1 井戸跡 【位置】調査区西半部で検出された。【重複】SK19、P220、P221、P228、P247、P260、P263と重複し、これらすべてより新しい。【平面形・規模】素掘りの井戸である。平面形は東西にやや長い円形で、規模は長さが東西3.06m、南北2.73m、深さが2.5m以上である。【断面形・壁・底面】上半部は外に向かって大きく開いている。下半部は方形を呈しており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。安全面を考慮して底面の検出は行わなかった。【堆積上】7層まで確認された。1・2層は礫を含む人為堆積層である。3・4・6層は壁の崩落土を混入した自然堆積層、5層は



遺構	方位	土色	土性	備考	遺構	方位	土色	土性	備考
SB1 P78	廻り方	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土	10YR2/1シルトブロックを少量含む。	P132	柱基礎	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。
	柱基礎	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。	P196	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
P83	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。	P202	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
	柱基礎	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。	P266	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。
P128	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。	P278	柱基礎	10YR5/4 黄褐色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
	柱基礎	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。					
P126	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。					

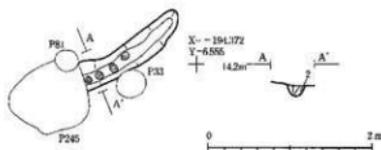
第7図 I区SB1 掘立柱建物跡



遺構	方位	土色	土性	備考	遺構	方位	土色	土性	備考
SB2 P22	廻り方	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土	10YR2/1シルトブロックを少量含む。	P100	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを縦壁に含む。
	柱基礎	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを縦壁に含む。	P121	廻り方	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土	10YR2/1シルトブロックを少量含む。
P32	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。		柱基礎	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを縦壁に含む。
	柱基礎	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。	P176	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
P30	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。		柱基礎	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを縦壁に含む。
	柱基礎	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。	P244	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを縦壁に含む。
P76	廻り方	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。					
	柱基礎	10YR2/1 黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。					

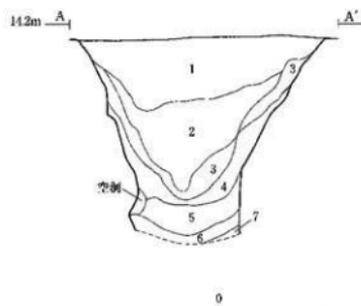
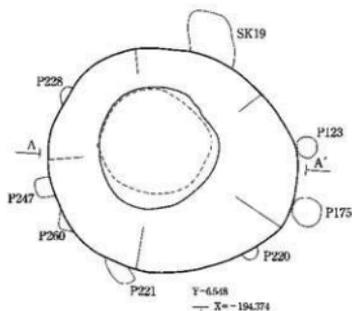
第8図 I区SB2 掘立柱建物跡

粘土を藁状に含む自然堆積層である。【出土遺物】堆積土中から土師器片、赤焼土器片、土師質土器片、須恵器片、重弁蓮華文軒丸瓦、丸瓦片、平瓦片、中世陶器甕口縁部片(I-1、I-2)指鉢片、碗片、石臼(K-2)、板碑(K-3)、鉄製品が出土した。このうちI-1は、口縁が外反して受口状を示し、口縁帯が丸みを持つ。白土窯系と考えられ、13世紀後半から14世紀前半に位置付けられる。I-2は、胎土に白色砂粒を多く含み口縁帯が平坦で肩部が鋭い。常滑産と考えられ、13世紀中葉のものと思われる。K-2は



層位	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR3/3シルト層、水浸れを含む。
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR5/4シルトブロックを含む。

第9図 1区SD1溝跡



層位	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	小礫、塊上粒、水浸れを含む。
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	約10-20cmの塊を多量に含む。
3	10YR2/2 黒褐色	粘土	10YR5/4シルトブロックを含む。
4	10YR5/6 赤黄褐色	粘土	10YR3/2粘土を塊状に含む。

層位	土色	土性	備考
5	10YR2/4 暗褐色	粘土	10YR2/2粘土を塊状に含む。10YR5/4粘土ブロックを含む。
6	10YR5/6 赤褐色	粘板岩	粘板岩を含む。
7	10YR2/3 黒褐色	粘土	10YR5/4粘土を含む。

第10図 1区SE1井戸跡

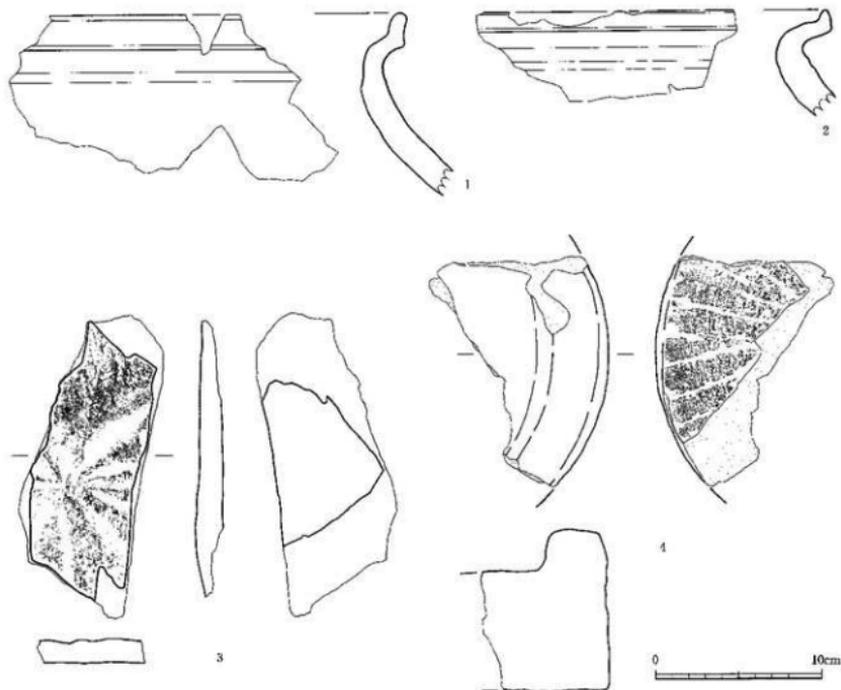
石臼の上白で底面に放射状の刻み目が入る。K-3は、蓮座部分の板碑片であるが、粘板岩製のごく薄い作りのものである。

5) 土坑

SK1土坑 【位置】調査区の中央部やや南側で検出された。【重複】P178、P180と重複し、P178より新しく、P180より古い。【平面形・規模】平面形は東西にやや長い円形を呈する。規模は長さが長軸73cm、短軸66cmで、深さは15cmである。方向は長軸方向でE-13°-Nである。【断面形・壁・底面】断面形は皿状で、壁は底面から丸みをおびて外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。【堆積上】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK2土坑 【位置】調査区のほぼ中央部で検出された。【重複】P189と重複し、これより古い。【平面形・規模】やや東西に長い円形を呈する。規模は長軸1.0m、短軸87cmで、深さは36cmである。方向は長軸方向でN-44°-Eである。【断面形・壁・底面】断面形は指鉢形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。【堆積上】2層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片が出土した。

SK3土坑 【位置】調査区の中央部よりやや南側で検出された。【重複】P195と重複し、これより古い。【平面形・規模】東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.08m、短軸95cmで、深さは30cmである。方向は長軸方向



発掘区	発掘番号	種類・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取付高さ	器高・長	口径・幅	器径・厚	重量	特徴	写真図版
1	I-1	中世陶器 甕	1区		SK1 1層		(11.2)				内外面ヨコナデ 白石窯系	7-1
2	I-2	中世陶器 甕	1区		SK1 2層		(6.6)				内外面ヨコナデ 雲母黒	7-2
3	K-3	磁器	1区		SK1 2層		(18.8)	(7.1)	(1.7)	257.3	底面部分 新緑石製	7-5
4	K-2	石製品 石臼	1区		SK1 2層		(15.0)	(10.0)	(10.0)		上片	7-4

第11図 I区SE1井戸跡出土遺物

でE-16°-Sである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形を呈し、壁は底面より丸みをおびてほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦である。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】赤焼土器片、丸瓦片が出土した。

SK4土坑 【位置】調査区東壁沿いで検出された。【重複】SA1、PI92と重複し、これより新しい。【平面形・規模】平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は南北96cm、東西49cm以上で、深さは71cmである。方向はN-6°-Wである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形で、壁は底面との境が明瞭で、やや直立気味に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。【堆積土】2層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】堆積土中及び底面直上から白石窯系の中世陶器甕（I-3）が出土したほか、堆積土中より重弧文軒平瓦（G-6）、土師器片、赤焼土器片、土師質土器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。

SK5土坑 【位置】調査区東半部で検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】平面形は長方形を呈する。規模は長軸1.15m、短軸84cmで、深さは28cmである。方向は長軸方向でN-17°-Eである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面より外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】2層

確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、丸瓦片が出土した。

SK6土坑 【位置】調査区南東コーナー部で検出された。【重複】P2、P3、P258と重複し、P258よりも新しく、P2、P3より古い。【平面形・規模】遺構の西半部分を一部検出したのみで全体の形状は不明である。規模は南北2m以上、東西50cm以上、深さ12cmである。【断面形・壁・底面】断面形は皿状で、壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦であるが南半部で一段低くなっている。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK7土坑 【位置】調査区南壁沿いで検出された。【重複】P216、P217、P218、P250と重複し、P217、P218より新しく、P216、P250より古い。【平面形・規模】南北に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は、南北1.52m以上、東西1.05m、深さ17cmである。方向は長軸方向で $N-3^{\circ}-E$ である。【断面形・壁・底面】断面形は舟底形で、壁は底面より緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片が出土した。

SK8土坑 【位置】調査区南壁沿いで検出された。【重複】P251、P252と重複し、P251より新しく、P252より古い。【平面形・規模】平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸1.18m、短軸86cm、深さ26cmである。方向は長軸方向で $N-7^{\circ}-E$ である。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は、南壁と西壁ではやや直立して、それ以外は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、半瓦片が出土した。

SK9土坑 【位置】調査区の北東コーナー部で検出された。【重複】SA1、P41、P42、P268と重複しこれらより古い。【平面形・規模】遺構の北半部と東半部が調査区外に延びているため全体の規模や形状は不明であるが、平面形は方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、南北1.2m以上、東西93cm以上、深さ92cmである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形を呈する。壁は底面から垂直に立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】3層確認された。いずれも人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、陶器片が出土した。

SK10土坑 【位置】調査区の北東部で検出された。【重複】P44、P219と重複し、P219より新しく、P44より古い。【平面形・規模】平面形は、南北に長い長方形を呈する。規模は南北2.41m、東西1.03m、深さ24cmである。方向は長軸方向で $N-7^{\circ}-E$ である。【断面形・壁・底面】断面形は皿状で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】3層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、半瓦片が出土した。

SK11土坑 【位置】調査区の南西コーナー部で検出された。【重複】P185、P255と重複し、これらより古い。【平面形・規模】平面形は、遺構の南端部が調査区外へ延びているが、南北に長い長方形を呈するものと思われる。規模は南北2.03m以上、東西97cm、深さ21cmである。方向は長軸方向で $N-8^{\circ}-E$ である。【断面形・壁・底面】断面形は長方形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、陶器片が出土した。

SK12土坑 【位置】調査区の南西コーナー部で検出された。【重複】P233、P256と重複し、P233より新しく、P256より古い。【平面形・規模】平面形は、遺構の南半部が調査区外へ延びているが、南北に長い長方形を呈するものと思われる。規模は南北1m以上、東西84cm、深さ23cmである。方向は長軸方向で $N-0^{\circ}-W$ である。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、丸瓦片が出土した。

SK13土坑 【位置】調査区の北壁沿いで検出された。【重複】SB1と重複し、これより新しい。【平面形・規模】平面形は、遺構の北半部が調査区外へ延びているが、南北に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は長軸1.34m以上、短軸93cm、深さ28cmである。方向は長軸方向で $N-16^{\circ}-E$ である。【断面形・壁・底面】断面形は逆

台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】3層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】ロクロ調整され内面に油煙状の付着物のある土師質土器小皿（I-4）が出土したほか、土師器片、須恵器片、丸瓦片が出土した。

SK14土坑 【位置】調査区の北壁沿いで検出された。【重複】SK15、SK16、SK17、SK20、P188、P199と重複している。P188より古く、これ以外の総ての遺構より新しい。【平面形・規模】遺構の北半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明であるが、南北に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は南北1.94m以上、東西1.4m、深さ49cmである。方向は長軸方向でN-9°-Eである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から直立気味に外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】4層確認された。いずれも人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、丸瓦片、石製品が出土した。

SK15土坑 【位置】調査区の北西部で検出された。【重複】SK14、SK16、SK17、P259と重複している。SK16、SK17、P259より新しく、SK14より古い。【平面形・規模】平面形は、南北に長いやや不整な隅丸長方形を呈する。規模は南北2.75m、東西1.04m、深さ31cmである。方向は長軸方向でN-4°-Eである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈する。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦であるが南半部で一段低くなっている。【堆積土】4層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片が出土した。

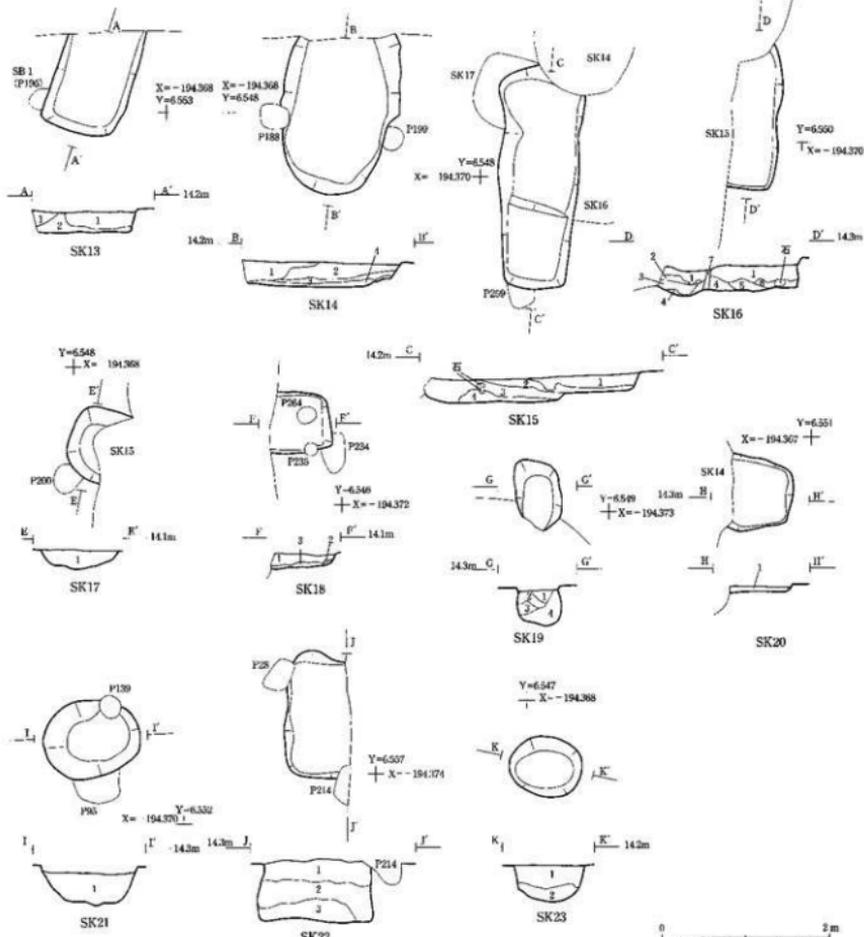
SK16土坑 【位置】調査区の北西部で検出された。【重複】SK14、SK15、と重複し、これより古い。【平面形・規模】SK14、SK15に切られているため全体の形状は不明であるが、方形を呈するものと思われる。規模は南北1.8m、東西55cm以上、深さ41cmである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形を呈し、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや起伏がある。【堆積土】7層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。

SK17土坑 【位置】調査区の北西部で検出された。【重複】SK14、SK15、P200と重複し、SK14、SK15より古く、P200より新しい。【平面形・規模】SK14、SK15に切られているため全体の形状は不明であるが、隅丸方形もしくは不整な円形を呈するものと思われる。規模は南北88cm、東西60cm以上、深さ24cmである。【断面形・壁・底面】断面形は腕形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は丸みをおびる。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片、陶器片、平瓦片、鉄製品が出土した。

SK18土坑 【位置】調査区の西壁沿いで検出された。【重複】P224、P234、P235、P264と重複しP224、P234より新しく、P235、P264より古い。【平面形・規模】平面形は、遺構の西半部が調査区外へ延びているため、全体の形状は不明であるが、方形もしくは東西に長い長方形を呈するものと思われる。規模は南北75cm、東西75cm以上、深さ20cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】3層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片が出土した。

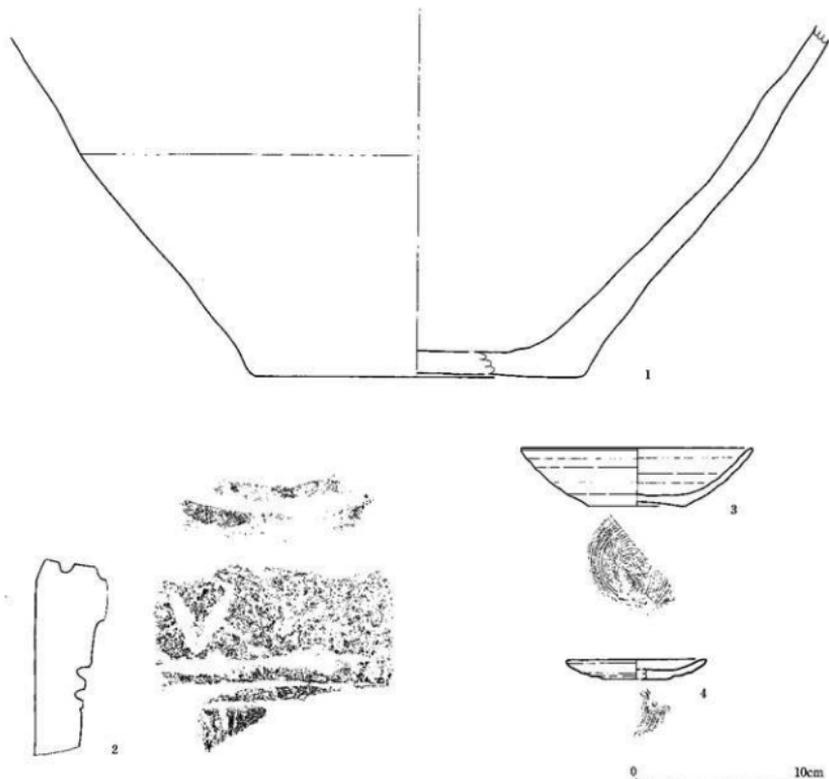
SK19土坑 【位置】調査区の西半部で検出された。【重複】SE1と重複しこれより古い。【平面形・規模】SE1に遺構の南半部を切られているため全体の形状は不明であるが、不整な方形を呈するものと思われる。規模は南北86cm以上、東西54cm、深さ48cmである。【断面形・壁・底面】断面形は袋状を呈し壁は底面から丸みをおびてほぼ垂直に立ち上がる。底面は半球状である。【堆積土】4層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】石製品が出土した。

SK20土坑 【位置】調査区の北壁沿いで検出された。【重複】SK14、P198と重複し、P198より新しく、SK14より古い。【平面形・規模】SK14に遺構の東半部を切られているため、全体の形状は不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。規模は、南北94cm、東西72cm以上、深さ10cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられ



遺構	層位	土色	土質	備考	遺構	層位	土色	土質	備考		
SK13	1	10YR2/1	黒色	シルト	10YR5/4粘上ブロックを多く含む。	SK16	7	10YR2/1	黒色	焼土粒、木炭粒を少量含む。	
	2	10YR5/3	にんじや黄褐色	シルト	10YR5/4粘上ブロックを多く含む。	SK17	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR6/4、10YR3/3シルトブロックを含む。
SK14	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR6/6粘上土粒、焼土粒、木炭粒を含む。	SK18	1	10YR2/2	黒褐色	丸土粒を含む。	
	2	10YR2/1	黒色	シルト	10YR5/4粘上土粒、10YR2/2シルトを含む。	2	10YR2/1	黒色	シルト	丸土粒を含む。	
	3	10YR2/1	黒色	粘土質	10YR2/2シルト、10YR2/2シルトを含む。	3	10YR5/4	にんじや黄褐色	粘土質	10YR3/3、10YR2/2粘上シルトブロックを含む。	
SK15	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR2/2、10YR2/2粘上シルトブロックを含む。	SK19	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR3/4、10YR2/2シルトブロックを含む。
	2	10YR2/4	紅褐色	シルト	10YR5/4、10YR2/2シルトブロックを含む。		2	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR6/4、10YR3/3シルトブロックを含む。
	3	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR2/2シルトブロックを含む。		3	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR6/4、10YR3/3シルトブロックを含む。
	4	10YR3/3	暗褐色	シルト	10YR2/2シルトブロックを含む。		4	10YR3/3	暗褐色	シルト	10YR2/2シルトブロックを含む。
SK16	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR6/4、10YR3/3シルト、焼土粒、木炭粒を含む。	SK20	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR5/6、10YR2/1シルトブロックを含む。
	2	10YR6/4	にんじや黄褐色	シルト	10YR6/4、10YR3/3シルト、焼土粒、木炭粒を含む。		2	10YR2/1	黒色	シルト	焼土粒、木炭粒を多く含む。
	3	10YR6/4	にんじや黄褐色	シルト	10YR5/4シルトブロック、木炭粒を含む。		SK22	1	10YR3/2	黒褐色	シルト
SK17	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR2/2シルト小ブロックを含む。	SK23	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR5/4、10YR4/6、10YR2/1シルト、木炭粒を含む。
	2	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR6/4シルト、焼土粒、木炭粒を含む。		2	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR5/6、10YR4/6シルトブロックを含む。
	3	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR2/2シルト小ブロックを含む。						
	4	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR2/2シルト小ブロックを含む。						
	5	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR6/4シルトブロック (d.3~5cm) を含む。						

第13図 I 区土坑 (2)



調査区	発掘番号	種類・器種	出土層位	出土遺物・層	出土番号	長さ	口径	高さ	厚	重量	特徴	写真図版
1	I-3	中世陶器 壺	I区	SK 4 1・2層		12.65		10.6			内外面に割台によるナデ 左右両面	7-3
2	G-6	軒平瓦	I区	SK 4 1層		11.2	11.00	4.4			本瓦 裏面に 御影瓦並文 内面 瓦口 凸縁瓦尾端部ナデ	7-6
3	E-25	短形砂 坏	I区	P215		4.6	13.9	5.8			内外面にクワナデ 底面に鉄赤色付	7-8
4	I-4	十層瓦+土 小皿	I区	SK13		1.2	3.1	4.0			内外面にクワナデ 底面に鉄赤色付 行明屋	

第14図 I区土坑・ピット出土遺物

る。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK21土坑 【位置】調査区の北側で検出された。【重複】P95、P139と重複し、P95より新しく、P139より古い。【平面形・規模】東西に長い円形を呈する。規模は長軸1.14m、短軸95cm、深さ49cmである。方向は長軸方向でE-28°-Nである。【断面形・壁・底面】断面形は丸みをおびた逆台形を呈し、壁は、底面から丸みをおびて外傾しながら立ち上がる。底面には凹凸がある。【堆積上】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片、丸瓦片、鉄滓が出土した。

SK22土坑 【位置】調査区の東壁沿いで検出された。【重複】P28、P214と重複し、これらより古い。【平面形・規模】遺構の東半部が調査区外へ延びているため、全体の形状は不明であるが隅丸方形を呈するものと思われる。規模は南北1.54m、東西82cm以上、深さ76cmである。方向はN-3°-Eである。【断面形・壁・底面】断面形は

長方形を呈し、壁は底面からはほぼ直立して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】3層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、平瓦片が出土した。

SK23土坑 【位置】調査区の北西部で検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】平面形は東西に長い楕円形を呈する。規模は長軸88cm、短軸74cm、深さ45cmである。方向はE-7°-Sである。【断面形・壁・底面】断面形は半円形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は丸みをおびている。【堆積土】2層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片が出土した。

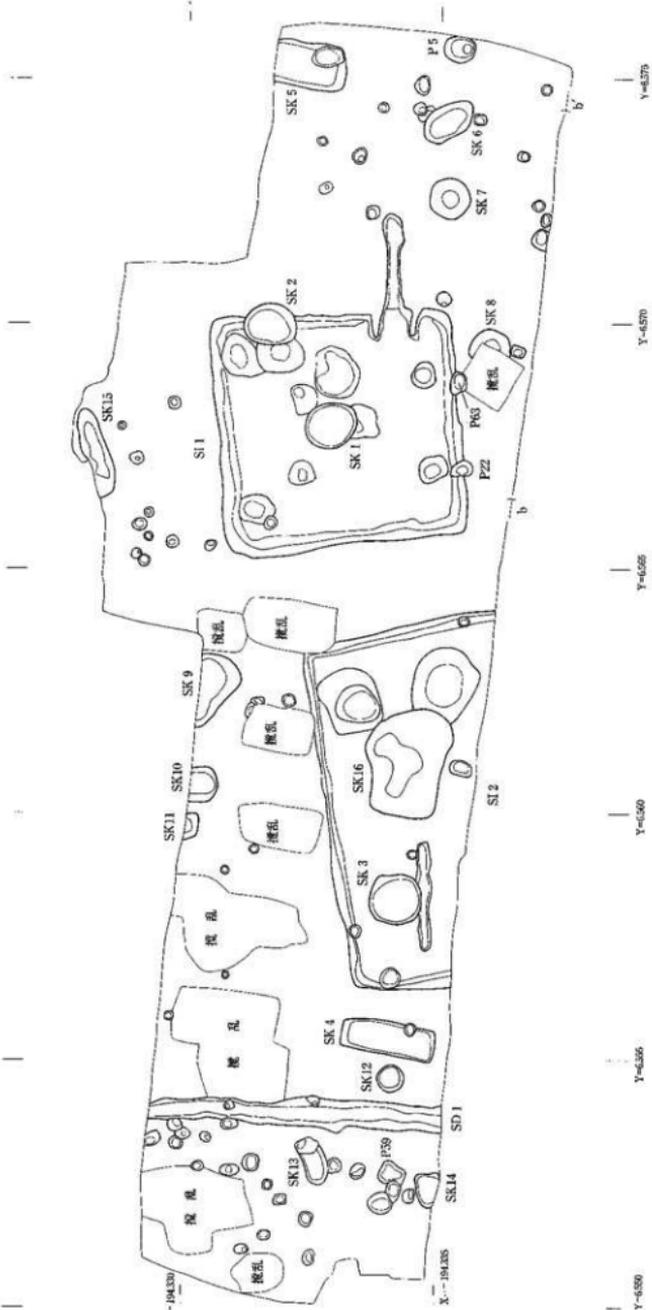
6) ビット

I区では、267基のビットが検出された。このうち柱列、掘立柱建物跡を構成するものを除くと249基となる。大半のものは、径20～30cmの円形を呈する。柱痕跡を持つものもほぼ半数近く存在している。堆積土は黒褐色ないしにぶい黄褐色シルトである。調査区の南半に集中し、何箇所かに重複する傾向を示していることから、この場所で建物の建て替えが行われていた可能性が考えられる。間尺の不揃いな比較的小規模の建物になるものと思われ、野外調査中及び修理事業でも建物跡の想定はできなかった。出土遺物は、P245から回転糸切り無調整の須恵器坏(E-25)が出土している。また、P61、P225からは龍泉窯系の青磁碗片が出土したが、いずれも細片であるため図示し得なかった。その他のビットからは、ロクロ土師器片、赤焼土器片、土師質土器片、須恵器片、占瀬戸片、陶磁器片、瓦片、鉄滓などが出土している。

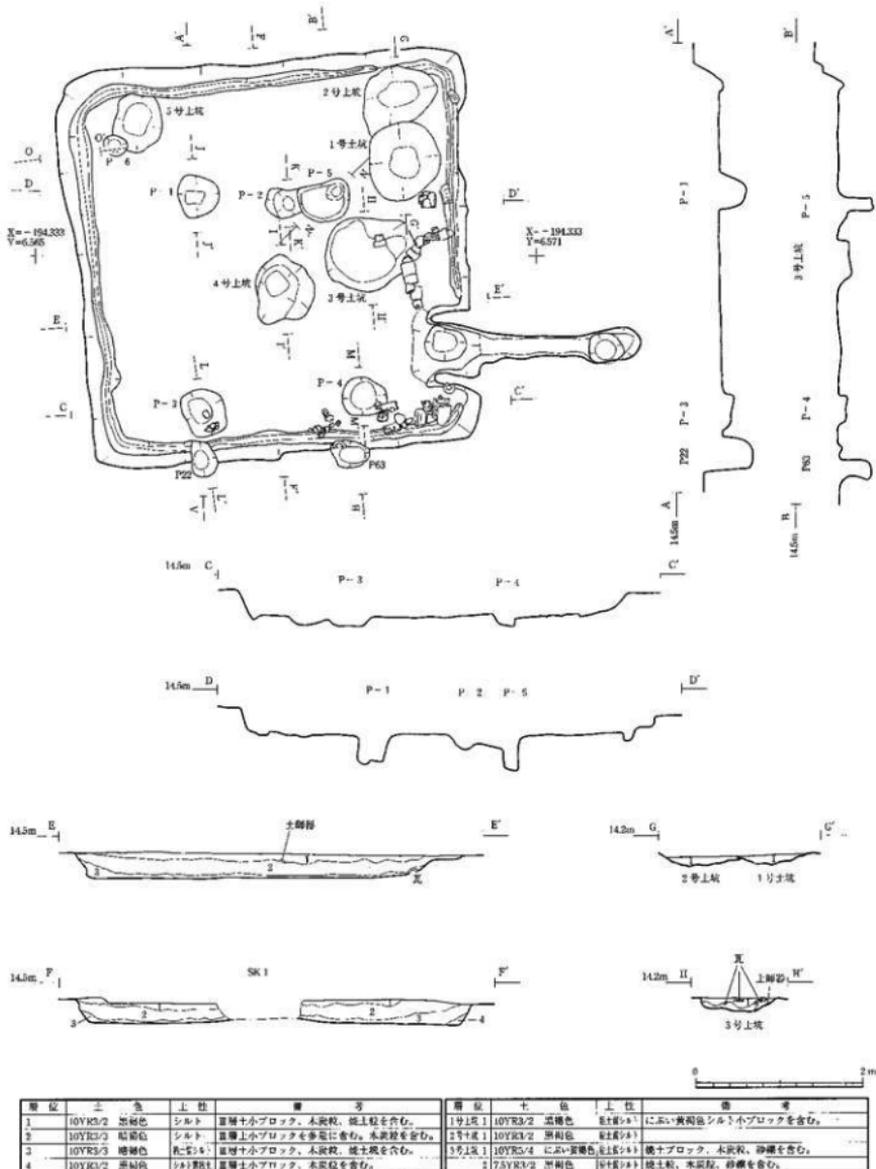
6 II区の発見遺構と出土遺物

1) 竪穴住居跡

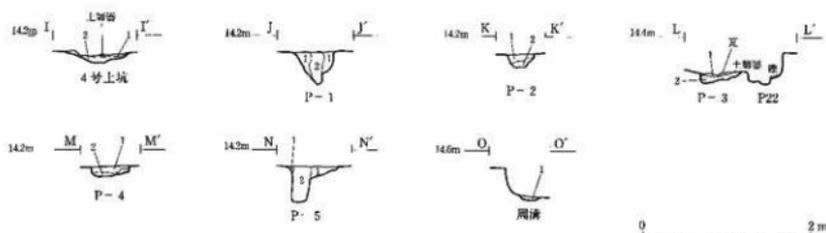
SI1竪穴住居跡 【位置】調査区中央部や東側で検出された。【遺存状況】南壁部分が一部擾乱により切られている以外遺存状況は比較的良好である。【重複】SK1、SK2、P64と重複し、これらより古い。【平面形・方向】平面形は方形を基調とする。方向は、西辺を基準としてN-6°-Wである。【規模】規模は南北19m、東西4.93mである。床面積は24.2m²である。【堆積土】4層認められた。いずれもⅢ層ブロックを含むことから人為堆積層と考えられる。カマド・煙道部の堆積土は9層に分かれその中の3～7・9層には焼土・炭化物が多量に含まれている。【壁の状況】Ⅲ層を壁としており、周溝底面から直立気味に立ち上がっている。残存壁高は31cmである。【床面の状況】床面はほぼ平坦でしまっている。住居中央部はⅢ層を、その周辺部は掘方埋土を床面としている。床面上に土坑を5基検出した。平面形は円形もしくは不整な円形を呈する。規模は径70～110cm、深さ12～17cmである。このうち4号土坑については、壁面が被熱により赤色硬化していること、堆積土に多量の焼土塊、木炭粒を含むことから炉の可能性がある。また、1号土坑と2号土坑には重複があることから、時間差があったものと思われる。【カマド】東辺部南より検出された。燃焼部は犬井部が失われ、袖部が残存しており、規模は幅が1m、奥行きは底面の窪みの状況から64cmとみられる。袖部はⅢ層のシルトブロックを多量に含む暗褐色及び黒褐色シルトを積み上げて構築されている。煙道部は長さ1.92m、幅27cmで先端には径42cmの煙出しビットが掘り込まれている。カマド左袖先端よりカマド側壁と住居東壁を囲むようにL字状に丸瓦、平瓦が並べられている。その中に木炭粒、焼土ブロックを多量に含む埋土が見られることから、カマドの灰、消し炭、木炭を廃棄するための区画の可能性が考えられる。【柱穴】住居の床面から6基のビットが検出された。その中で位置や規模などからP-1、P-3、P-4、P-5が主柱穴と考えられる。これらのビットはいずれも円形を基調とし、規模は径50～60cm、深さ12～47cmである。このうちP-1とP-5には径15～20cmの柱痕跡が認められる。また東壁で2基のビット(P22、P63)が検出された。配置関係や規模から住居南側出入口の施設に伴う柱穴と考えられる。【周溝】カマド部分を除く大部分において、壁際直下で検出された。断面形はほぼU字形もしくは扁平な逆台形を呈し、規模は幅6～27cm、深さ4～7cmである。【出土遺物】堆積土、床面、カマド、煙道、土坑、ビット、周溝からロクロ土師器坏(D-1-6、8)、



第15图 II区遺構配置図(1/100)



第16図 II区S11竅穴住居跡(1)

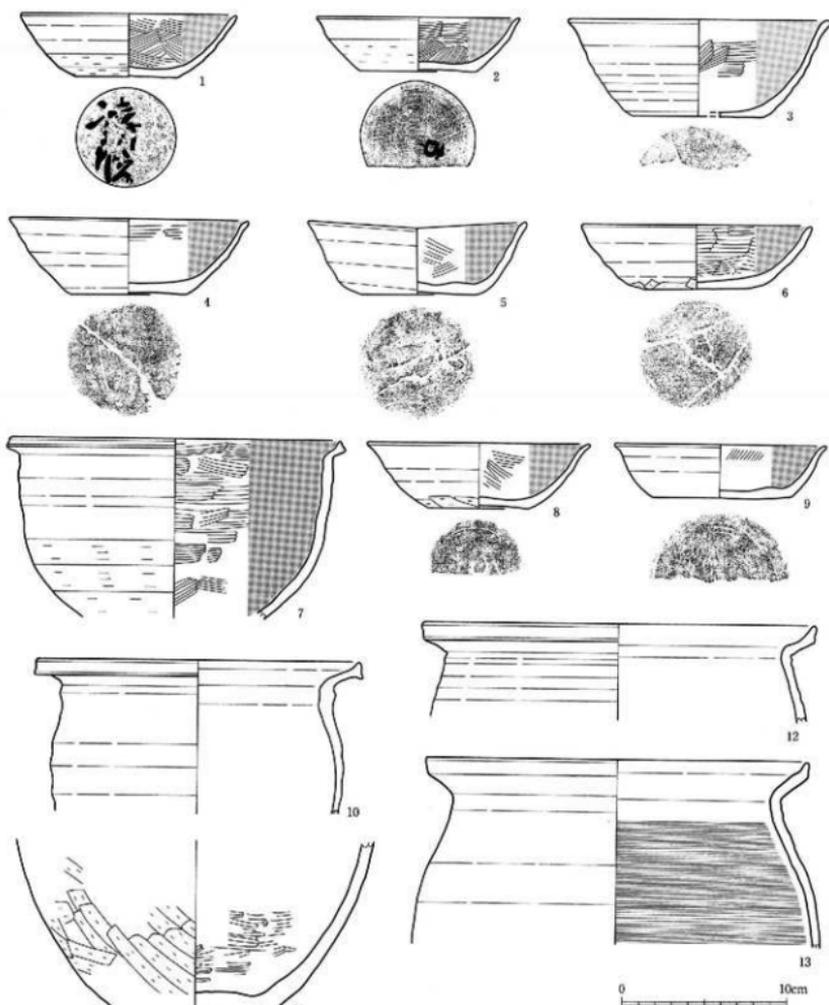


層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
4) 2 土 1	10YR3/4	にぶい黄褐色 粘-重砂状	焼土塊、木炭粒を含む。	P-3 2	10YR2/2	黒褐色	紅影+4) 1) にぶい黄褐色シルトブロックを多数含む。
2	5YR2/3	暗紅赤褐色 粘重砂状	焼土粒、木炭粒を含む。	P-4 1	5YR2/2	黒褐色	紅影+4) 1) 4) 50mmの焼土ブロック、木炭粒を含む。
P-1 1	10YR5/4	にぶい黄褐色 シルト	φ5~50mmの小塊、黒褐色シルトブロックを含む。	2	5YR3/2	暗紅赤褐色	紅影+4) 1) にぶい黄褐色シルトブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
2	10YR2/2	黒褐色	紅影+4) 1) にぶい黄褐色シルト粒、木炭粒を含む。(粘厚部)	P-5 1	10YR3/4	にぶい黄褐色 シルト	暗褐色シルトブロックを含む。
P-2 1	10YR3/2	黒褐色	シルト	2	10YR3/2	黒褐色	紅影+4) 1) にぶい黄褐色シルト粒、木炭粒を含む。(粘厚部)
2	10YR3/4	にぶい黄褐色 粘-重砂状		溝溝 1	10YR2/2	黒褐色	紅影+4) 1) にぶい黄褐色シルト粒、木炭粒を含む。
P-3 1	10YR3/2	黒褐色	粘-重砂状				

第17図 II区S11 竪穴住居跡(2)

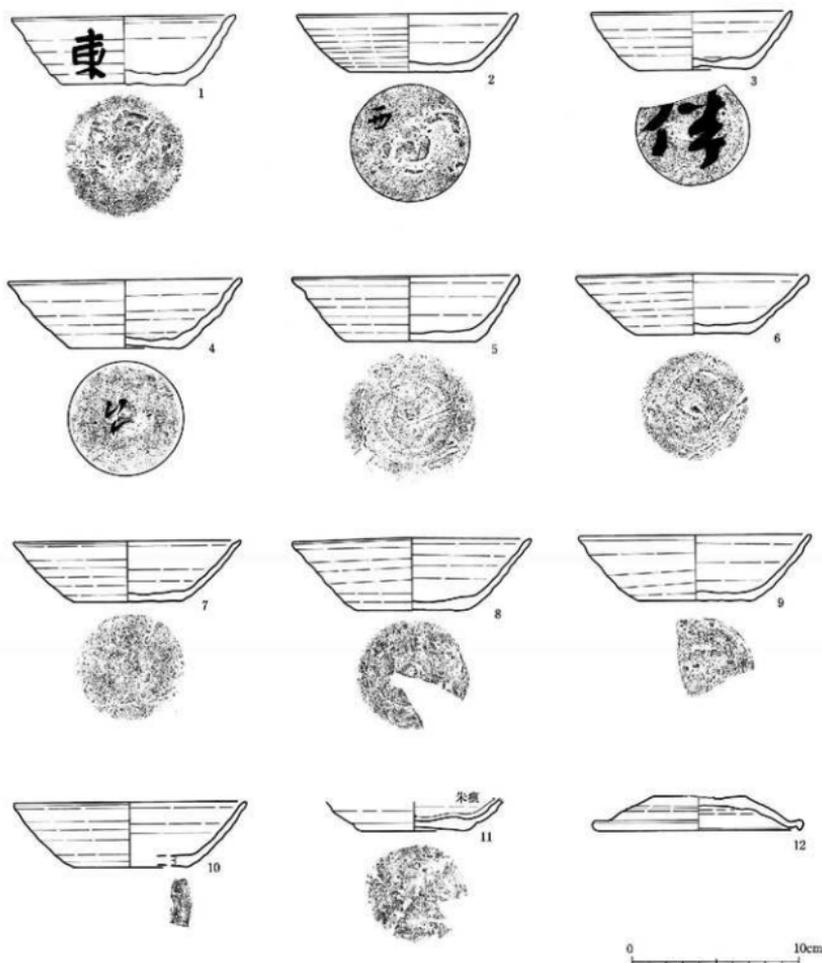
竈(D-7)、甕(D-10、11、14、15)、須恵器坏(E-1、3~6、8、11、12、17、18、26)、蓋(E-13)、重弁蓮華文軒丸瓦(F-1、2)、細弁蓮華文軒丸瓦(F-3)、丸瓦(F-4~8)、平瓦(G-1~5)が出土したほか、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。このうち、土師器坏の内面は、ヘラミガキ、黒色処理されている。底部は回転ヘラ切りによる切り離し後ヘラケズリされるものと切り離し後無調整のものがある。D-11には底面に「講院」カ、D-4には「東」カの墨書がある。甕はロクロ調整された後、内面をヘラナダ、ヘラミガキされている。須恵器坏は、いずれも底部の切り離しが回転ヘラ切りである。底面に「西」(E-1)、「佛」(E-3)、体部外面に「東」(E-4)の墨書のあるものと内面に朱痕のあるもの(E-26)とが見られる。また、E-5にも底面に判読不能の墨書が認められ、内面に墨痕がある。

S12 竪穴住居跡 【位置】調査区の中央部から西側にかけて検出された。【遺存状況】遺構の南半部が調査区外へ延びているため、北半部のみを検出となっている。【重複】SK3、SK16と重複し、これらより古い。【平面形・方向】方形もしくは長方形を呈するものと思われる。方向は、北辺を基準としてE-S°-Nである。【規模】規模は東西6.88m、南北3.93m以上である。確認された床面積は27.04㎡である。【堆積土】1層確認された。層中にⅢ層小ブロックを含むことから人為堆積層と考えられる。【壁の状況】Ⅲ層を壁としており、床面からやや開き気味に立ち上がっている。残存壁高は平均すると20cmである。【床面の状況】ほぼ平坦でⅢ層を床面としている。床面上に上坑2基、溝状遺構1条を検出した。1号土坑は不整な円形を呈し、規模は長軸1.34m、短軸1.04m、深さ22cmである。西端をSK16に切られている。2号土坑は不整形を呈し、規模は、南北1.3m、東西1.4m、深さ36cmである。溝状遺構は住居の北西コーナー部で東西方向に検出された。規模は長さ2.2m、幅17~27cm、深さ4~7cmである。【柱穴】住居の床面から5基のピットが検出された。その中でP-1、P-2、P-5は壁沿いに周溝を切って検出されていることから壁柱穴と考えられる。【周溝】壁際を全周して確認された。断面形はV字形で、規模は幅7~16cm、深さ6~21cmである。【出土遺物】堆積土、床面、土坑、ピット、周溝からロクロ土師器坏(D-20)、須恵器坏(E-7、9、10、14、15、21、22、27)、甕(E-23)が出土したほか、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。土師器坏は、内面をヘラミガキ、黒色処理されており、底部は回転ヘラ切り、無調整である。須恵器坏は、底部の切り離し技法が回転ヘラ切りによるもの(E-14、21、27)と回転切りによるもの(E-7、9、10、15)に分かれる。このうちE-27は、切り離し後底面と底部周縁をヘラケズリしている。底面に「乙」カ



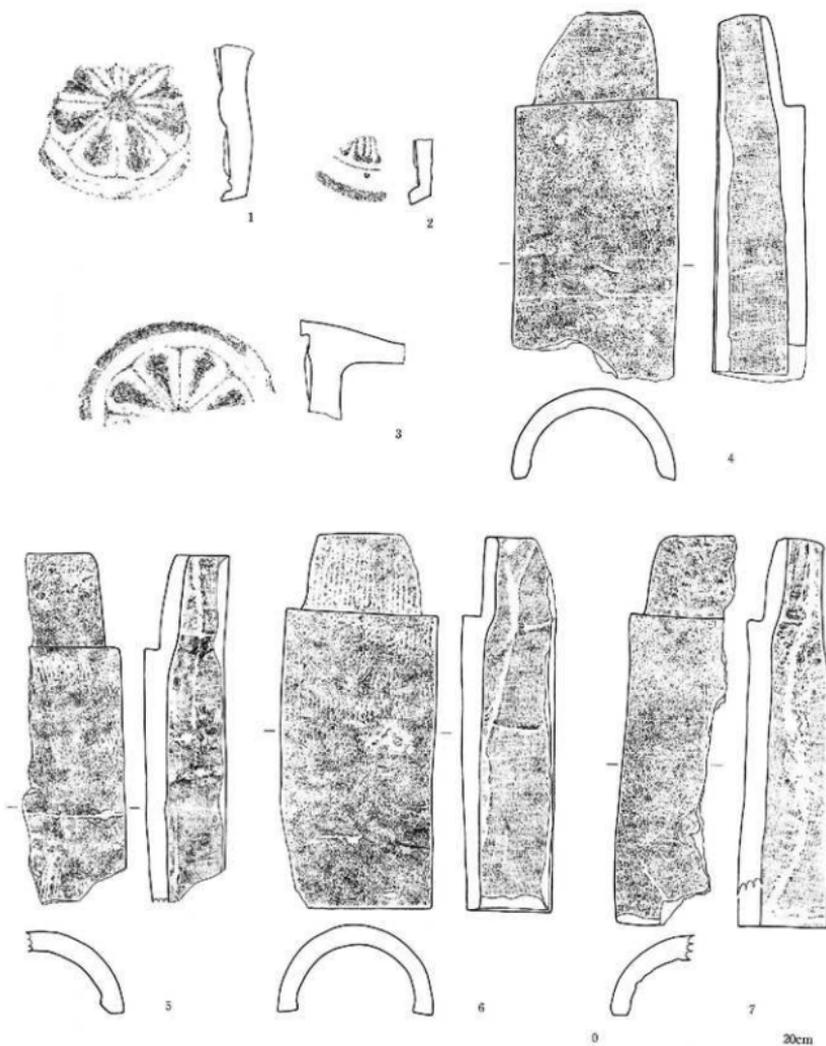
図号	図名	種類	出土層	出土位置	高さ	口径	底径	容量	特徴	備考
1	D-1	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 カマド	3.9	13.1	6.3		外面ロタロナデ 内面ヘラミギギ色地 裏面ロタロナデ	Ⅱ-1
2	D-4	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 3層	3.3	12.3	7.0		外面ロタロナデ 内面ヘラミギギ色地 裏面ロタロナデ	Ⅱ-5
3	D-2	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 漆黒直上	5.9	15.0	8.0		外面ロタロナデ 内面ヘラミギギ色地 裏面ロタロナデ	Ⅱ-2
4	D-3	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 漆黒直上	4.7	14.6	7.1		外面ロタロナデ 内面ヘラミギギ色地 裏面ロタロナデ	Ⅱ-3
5	D-5	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 カマド	4.5	13.4	7.5		外面ロタロナデ 内面ヘラミギギ色地 裏面ロタロナデ	Ⅱ-4
6	D-8	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 3層	4.1	14.0	6.5		外面ロタロナデ、ヘラミギギ 内面ヘラミギギ色地 裏面ロタロナデ	Ⅱ-6
7	D-7	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 P-3	11.0	20.6			外面ロタロナデ、内面ヘラミギギ 内面ヘラミギギ色地	Ⅱ-7
8	D-6	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 陶器	4.0	13.6	6.0		外面ロタロナデ 内面ヘラミギギ色地 裏面ロタロナデ	Ⅱ-8
9	D-21	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 3層	3.3	12.5	5.4		外面ロタロナデ 内面ヘラミギギ色地 裏面ロタロナデ	Ⅱ-9
10	D-10	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 カマド	30.5	20.6			外面ロタロナデ、内面ロタロナデ、ヘラミギギ	Ⅱ-10
11	D-14	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 3層十段	36.4		9.9		外面ロタロナデ、ヘラミギギ 内面ロタロナデ、ヘラミギギ	Ⅱ-11
12	D-11	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 カマド	35.0	24.0			外面ロタロナデ、内面ロタロナデ	Ⅱ-12
13	D-15	ロタロ土師器	Ⅱ区	SI 1 漆黒直上	11.4	23.2			外面ロタロナデ、内面ロタロナデ、内面ヘラミギギ	Ⅱ-13

第19図 II区SI1 竪穴住居跡出土遺物(1)



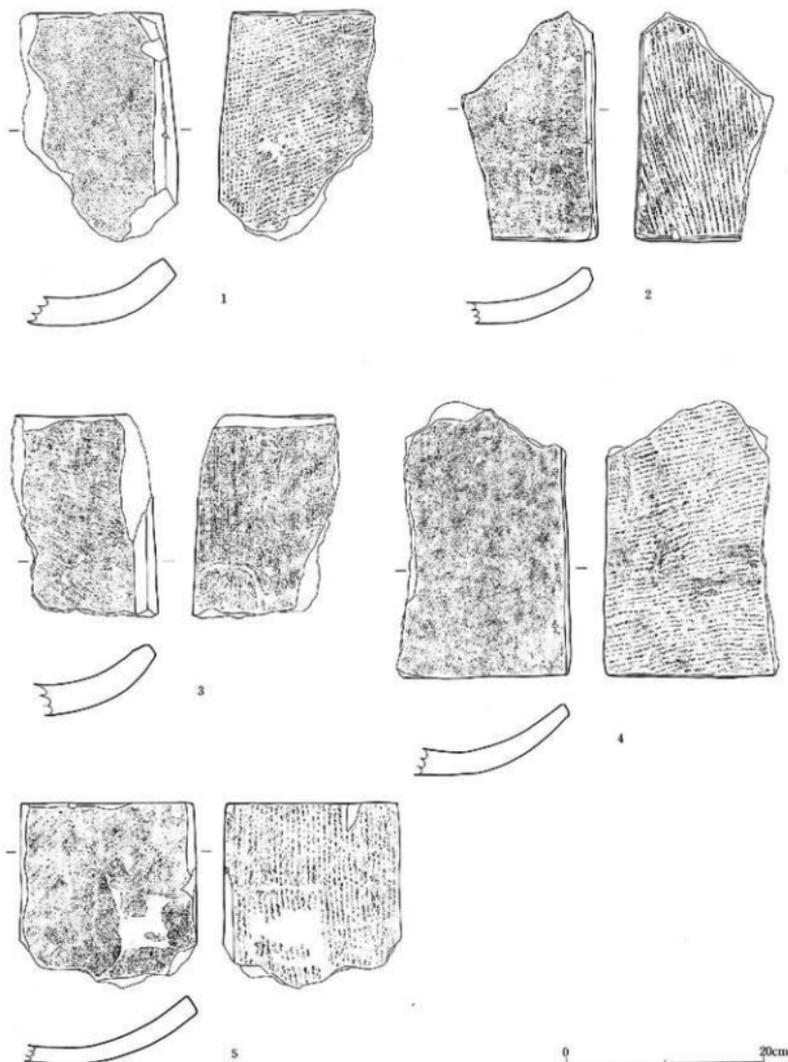
品名	品類・形状	出土層	基本単位	出土遺構・層	出土位置	高さ・長	口径・幅	底径・厚	説明	写真枚数
1	甕 - 4	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 北面直上	4.2	13.3	7.6	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り 縁部回転ヘラ切り	8-13
2	甕 - 1	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 北面直上	3.6	13.3	7.4	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り、ナデ 縁部「傷」	8-11
3	甕 - 3	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 3層	3.6	12.0	6.8	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り 縁部「傷」	8-12
4	甕 - 5	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 P63	4.3	14.0	7.0	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り、ナデ 縁部「傷」	8-17
5	甕 - 6	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 北面直上	4.1	13.7	8.1	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り	8-14
6	甕 - 8	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 2層	3.8	13.9	6.7	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り	9-1
7	甕 - 11	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 5マド	3.8	13.7	6.6	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り	8-16
8	甕 - 12	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 3マド	4.5	14.4	6.9	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り	9-2
9	甕 - 18	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 2層	4.0	14.0	6.8	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り、ナデ	8-15
10	甕 - 17	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 2層	4.0	14.1	6.8	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り	
11	甕 - 26	須恵器 坏	Ⅱ区		SI 1 3号土坑	(1.5)		6.5	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底面回転ヘラ切り、ナデ「傷」 内面に赤	
12	甕 - 13	須恵器 壺	Ⅱ区		SI 1 P63	(2.1)	12.6	5.7	外面ロクロナデ、底面回転ヘラ切り 内面ロクロナデ	8-18

第20図 Ⅱ区SI1 竪穴住居跡出土遺物(2)



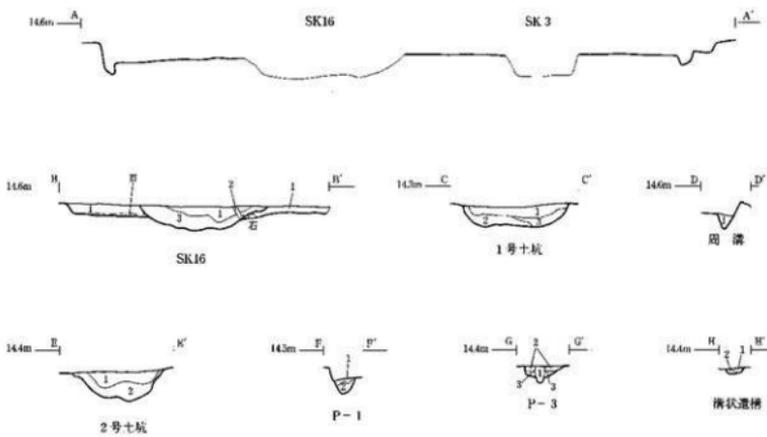
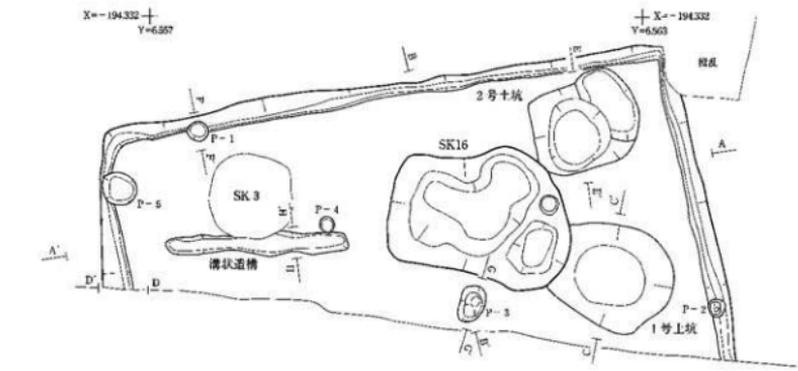
附録	登録番号	種類・図種	出土状況	発掘状況	出土遺構・層	出土層	遺体・土	出土・計	遺体・計	物	備考	
1	F-1	刺丸瓦	Ⅱ区	SI 1 2層	(10B)	15.0	(2.8)	瓦当	8	8	8	8
2	F-3	刺丸瓦	Ⅱ区	SI 1 扉前部上		15.0	(1.8)	瓦当	20	20	20	20
3	F-2	刺丸瓦	Ⅱ区	SI 1 扉前部上		30.0	(3.4)	瓦当	8	8	8	8
4	F-6	瓦	Ⅱ区	SI 1 ホツナ	(25A)	16.4	2.1	凸面瓦	1	1	1	1
5	F-4	瓦	Ⅱ区	SI 1 ホツナ	(25A)	0.6	2.0	凸面瓦	1	1	1	1
6	F-7	瓦	Ⅱ区	SI 1 ホツナ		28.2	15.6	30	30	30	30	30
7	F-8	瓦	Ⅱ区	SI 1 3号一列		39.9	(8.2)	23	23	23	23	23

第21図 II区SI1 竪穴住居跡出土遺物(3)



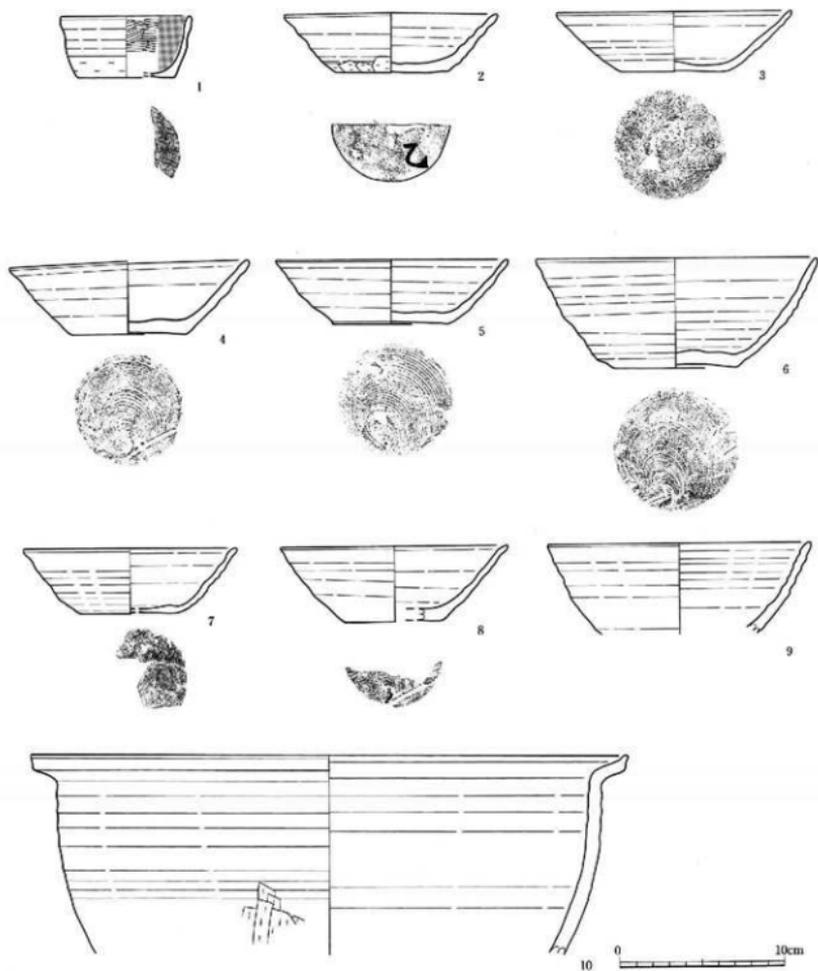
図例	発掘番号	植物・器種	出土層位	発掘部位	出土遺物・面	高さ・長	口径・幅	底径・厚	特 徴	写真図版
1	G-1	平瓦	Ⅱ区	SI 1 床面直上	(23.0)	(15.0)	2.8	凸面段位縁部より一段段高厚き 凹面斜目、多切り板 横面ヘラケズリ	10-8	
2	G-2	平瓦	Ⅱ区	SI 1 床面直上	(23.5)	(13.5)	2.2	凸面段位平角明き 凹面斜目、多切り板 横面ヘラケズリ	10-9	
3	G-3	平瓦	Ⅱ区	SI 1 床面直上	(26.5)	(14.0)	3.2	凸面段位縁部より、スリナシ 凹面斜目、多切り板 横面ヘラケズリ	10-11	
4	G-3	平瓦	Ⅱ区	SI 1 床面直上	(28.2)	(17.0)	2.7	凸面段位縁部より 凹面斜目、スリナシ 横面ヘラケズリ	10-10	
5	G-4	平瓦	Ⅱ区	SI 1 床面直上	(19.0)	(17.5)	2.1	凸面段位縁部より 凹面斜目、多切り板 横面ヘラケズリ		

第22図 II区SI1 壁穴住居跡出土遺物(4)



層位	土色	土塊	備考	層位	土色	土塊	備考
5a 2	10YR3/2 黒褐色	シルト	20YR3/4シルト質ブロック、褐色鉄屑、赤土粒を含む。	溝状遺構 1	10YR2/2 黒褐色	粘り質	5a層の2: 10YR3/4粘り質ブロック、粘り質、赤土粒を含む。
SK16 1	10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR3/4シルト粒、マンガン粒、木炭粒を含む。	2	10YR5/4 にごり黄褐色	粘り質	5a層の2: 10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。
2	10YR5/4 にごり黄褐色	粘り質	5a層の2: 10YR3/4粘り質シルトブロック、マンガン粒、木炭粒を含む。	P-1 1	10YR2/2 黒褐色	粘り質	10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。
3	10YR4/2 灰青褐色	粘り質	5a層の2: 10YR3/4粘り質シルトブロック、マンガン粒、木炭粒を含む。	2	10YR5/4 にごり黄褐色	粘り質	10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。
1号土坑 1	10YR3/2 黒褐色	粘り質	5a層の2: 10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。	P-3 1	10YR2/2 黒褐色	粘り質	5a層の2: 10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。
2	10YR5/4 にごり黄褐色	粘り質	10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。	2	10YR3/2 黒褐色	粘り質	5a層の2: 10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。
3	10YR3/2 黒褐色	粘り質	10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。	3	10YR3/2 黒褐色	粘り質	5a層の2: 10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。
1号土坑 1	10YR3/1 黒褐色	粘り質	10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。	溝状遺構 1	10YR3/2 黒褐色	粘り質	5a層の2: 10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。
2	10YR4/1 暗灰色	粘り質	10YR3/4粘り質シルトブロックを含む。				

第23図 II区SI2 竪穴住居跡



図録号	図録番号	種類・器種	出土地	出土層位	出土遺構・層	数量	高・径	厚・底	底径・寸	特徴	写真図版
1	13-20	コタテ土器 鉢	Ⅱ区	SI 2	2号土坑	38	8.0	0.9		外周コタテナデ、底面ヘラミダリ、内面ヘラミダリ、灰色地、底面刻線ヘラミダリ	9-10
2	13-22	須恵器 鉢	Ⅱ区	SI 2	本館直上	37	13.0	7.0		外周コタテナデ、ヘラミダリ、内面コタテナデ、底面刻線ヘラミダリ、ヘラミダリ、墨書「瓦」	9-5
3	13-14	須恵器 鉢	Ⅱ区	SI 2	1層	37	14.4	6.6		外周コタテナデ、内面コタテナデ、底面刻線ヘラミダリ、ナデ	9-8
4	13-10	須恵器 鉢	Ⅱ区	SI 2	本館直上	45	14.6	7.0		外周コタテナデ、内面コタテナデ、底面刻線赤銅り	9-4
5	13-7	須恵器 鉢	Ⅱ区	SI 2	本館直上	40	14.2	7.1		外周コタテナデ、内面コタテナデ、底面刻線赤銅り	9-7
6	13-15	須恵器 鉢	Ⅱ区	SI 2	本館直上	68	17.2	7.5		外周コタテナデ、内面コタテナデ、底面刻線赤銅り	9-3
7	13-21	須恵器 鉢	Ⅱ区	SI 2	1層	49	13.0	6.0		外周コタテナデ、内面コタテナデ、底面刻線ヘラミダリ	9-8
8	13-9	須恵器 鉢	Ⅱ区	SI 2	本館直上	42	12.8	6.0		外周コタテナデ、内面コタテナデ、底面刻線赤銅り	9-6
9	13-22	須恵器 鉢	Ⅱ区	SI 2	本館直上	(55)	16.0			外周コタテナデ、内面コタテナデ	9-11
10	13-23	須恵器 蓋	Ⅱ区	SI 2	本館直上	(122)	32.6			外周コタテナデ、ヘラミダリ、内面コタテナデ	9-12

第24図 Ⅱ区SI2 竪穴住居跡出土遺物

の墨書がある。なおE-27は、色調が淡い橙色を呈し内外面に黒斑が見られるなど一般的な須恵器とは異なった特徴を有している。

2) 溝跡

SD 1 溝跡 【位置】調査区の西半部で検出された。【重複】P37、P39、P40、P41と重複し、これより古い。【方向・規模】ほぼ直線的に南北に延びている。方向は $N-3^{\circ}-E$ である。検出した長さは5.8m、上幅30~66cm、下幅18~33cm、深さ43cmである。【断面形・壁・底面】断面形はJ字形を呈し、壁は底面から丸みをおびて直立して立ち上がる。底面は凹凸がある。【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、丸瓦片、平瓦片、鉄製品が出土した。

3) 土坑

SK 1 土坑 【位置】調査区の中央部東側で検出された。【重複】SI1と重複し、これより新しい。【平面形・規模】南北にやや長い円形を呈する。規模は南北93cm、東西1.07m、深さ16cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、平瓦片が出土した。

SK 2 土坑 【位置】調査区の東半部で検出された。

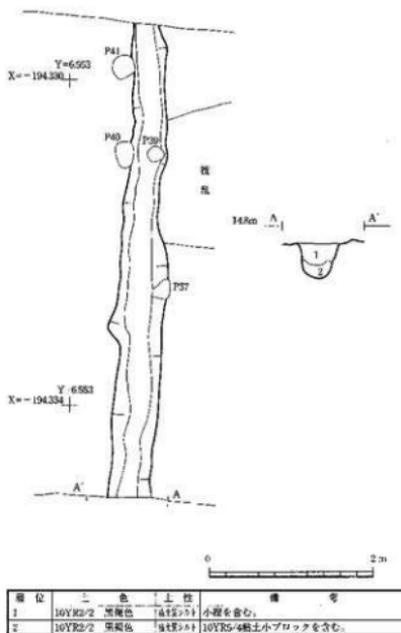
【重複】SI1と重複し、これより新しい。【平面形・規模】南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は南北1.03m、東西87cm、深さ22cmである。方向は $N-0^{\circ}-E$ である。

【断面形・壁・底面】断面形は長方形を呈し、壁は西壁ではほぼ垂直に、東壁では底面から丸みをおびて立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】3層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。

SK 3 土坑 【位置】調査区の西半部で検出された。【重複】SI2と重複し、これより新しい。【平面形・規模】ほぼ正円形を呈する。規模は南北1.07m、東西1.03m、深さ45cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】2層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】須恵器長頸甕(E-16)のほか、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。

SK 4 土坑 【位置】調査区の西半部で検出された。【重複】P62と重複し、これより古い。【平面形・規模】南北に長い長方形を呈する。規模は長軸1.88m、短軸69cm、深さ38cmである。方向は $N-10^{\circ}-E$ である。【断面形・壁・底面】断面形は長方形を呈し、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。【堆積土】8層確認された。黄褐色粘土、黒褐色シルトブロックを多量に含む。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片、鉄製品が出土した。

SK 5 土坑 【位置】調査区の北東コーナーで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】



第25図 II区SD1 溝跡

遺構の一部が調査区外に延びているため全体の形状は不明であるが、南北に長い長方形を呈するものと思われる。規模は長軸1.45m以上、短軸93cm、深さ24cmである。方向はN-11°-Eである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦であるが、南東コーナー部に径60cm、深さ10cm程の窪みが見られる。【堆積土】2層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片、平瓦片が出土した。

SK6土坑 【位置】調査区の東半部で検出された。【重複】P8と重複し、これより新しい。【平面形・規模】南北に長い不整な楕円形を呈する。規模は長径1.15m、短径63cm、深さ23cmである。方向は長軸方向でN-32°-Wである。【断面形・壁・底面】断面形は舟底状を呈し、壁は底面から丸みをおびて緩やかに立ち上がる。底面は起伏がある。【堆積土】2層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK7土坑 【位置】調査区の東半部で検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】円形を呈する。規模は、径83cm、深さ32cmである。【断面形・壁・底面】断面形は半円形を呈し、壁は底面から丸みをおびて緩やかに立ち上がる。底面は半球状である。【堆積土】2層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】ロクロ土師器片(D-22)のほか、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、平瓦片が出土した。

SK8土坑 【位置】調査区の中央部東側南壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】遺構の西半部が攪乱により切られているが、円形を呈するものと考えられる。規模は径82cm、深さ20cmである。【断面形・壁・底面】断面形は碗形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は丸みをおびる。【堆積土】2層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

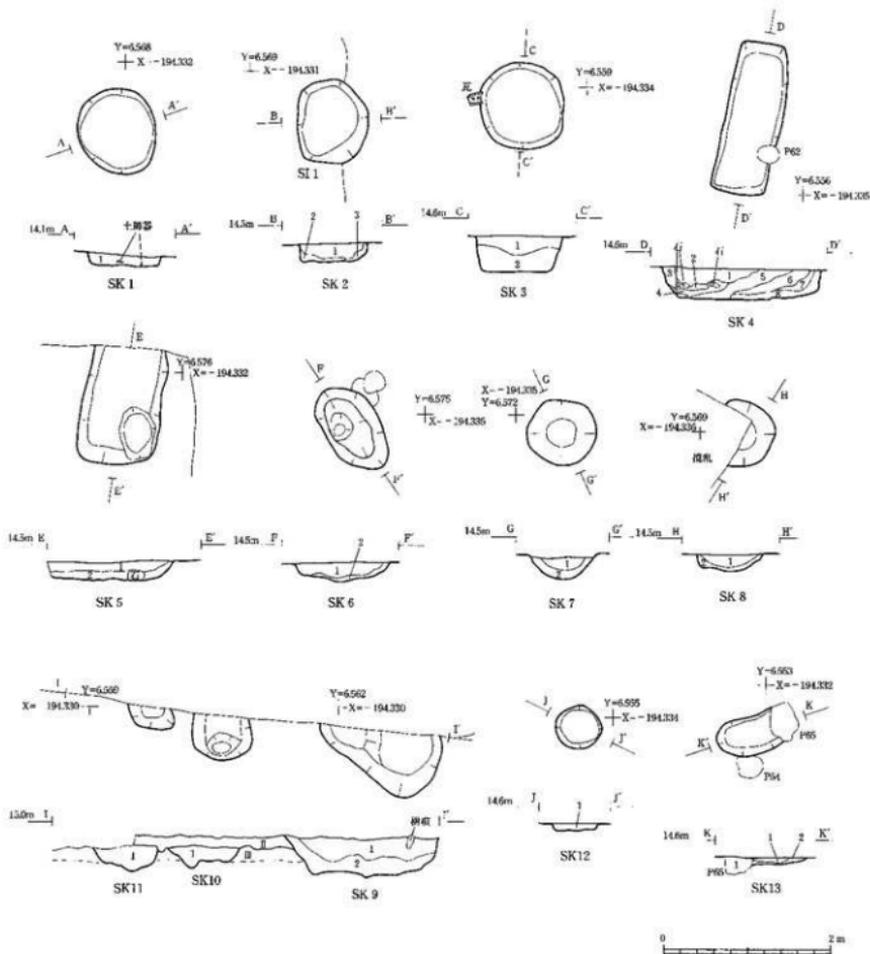
SK9土坑 【位置】調査区中央部北壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】遺構の北半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明である。規模は東西1.47m以上、南北78cm以上、深さ46cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はやや起伏がある。【堆積土】2層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、平瓦片が出土した。

SK10土坑 【位置】調査区中央部北壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】遺構の北半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明であるが、不整な方形を呈するものと思われる。規模は東西73cm、南北55cm以上、深さ27cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は起伏がある。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK11土坑 【位置】調査区中央部北壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】遺構の北半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明であるが、方形もしくは南北に長い長方形を呈するものと思われる。規模は東西53cm、南北26cm以上、深さ31cmである。【断面形・壁・底面】断面形は碗形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みをおびる。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK12土坑 【位置】調査区の西半部で検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】円形を呈し、規模は径55cm、深さ8cmである。【断面形・壁・底面】断面形は扁平な逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】赤焼土器片、須恵器片、平瓦片が出土した。

SK13土坑 【位置】調査区西半部で検出された。【重複】P65と重複し、これより古い。【平面形・規模】遺構の東端をピットに切られているが、東西に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は長径67cm以上、短径46cm、深さ9cmである。【断面形・壁・底面】断面形は舟底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みをおびる。



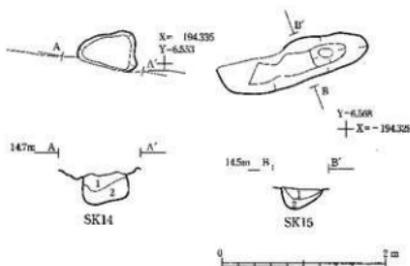
遺構/層位	土色	土質	備考	遺構/層位	土色	土質	備考
SK 1	1 10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土粒、木炭粒、10YR5/4シルト層を含む。	SK 5	2 10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR5/4粘土小ブロック、木炭粒を含む。
SK 1	1 10YR4/2 濃い黄褐色	粘土(粘)	10YR2/2シルトブロックを含む。	SK 6	1 10YR2/2 黒褐色	粘土	10YR5/4シルトブロック、木炭粒を含む。
	2 10YR4/2 灰青褐色	粘土(粘)		2 10YR5/4 濃い黄褐色	粘土	10YR2/1シルトブロックを含む。	
	3 10YR4/4 褐色	シルト		SK 7	1 10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR5/4シルトブロック、木炭粒を含む。
SK 2	1 10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR4/4シルトブロック、焼土粒、木炭粒を含む。	2 10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR5/4シルトブロック、木炭粒を含む。	
SK 2	2 10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4シルトブロックを多量に含む。	SK 8	1 10YR3/3 暗褐色	シルト	10YR5/4シルト層、焼土粒、灰を含む。
SK 4	1 10YR2/2 黒褐色	粘土(粘)	10YR5/4粘土小ブロックを多量に含む。	2 10YR3/2 暗褐色	粘土	10YR5/4シルトブロックを多量に含む。	
2 10YR5/4 濃い黄褐色	粘土	10YR3/2粘土質シルトブロックを含む。		SK 9	1 10YR2/2 黒褐色	粘土(粘)	10YR5/4粘土小ブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
3 10YR5/4 濃い黄褐色	粘土	10YR3/2粘土質シルトブロック、小礫を含む。		2 10YR2/2 黒褐色	粘土	10YR5/4粘土小ブロック、木炭粒を含む。	
4 10YR2/1 黒褐色	シルト	木炭粒を含む。		SK 10	1 10YR3/2 暗褐色	粘土(粘)	10YR5/4粘土小ブロック、木炭粒を含む。
5 10YR5/4 濃い黄褐色	粘土	φ4mmの10YR5/4シルトブロック、木炭粒を含む。		SK 11	1 10YR2/2 黒褐色	粘土	10YR5/4粘土小ブロック、木炭粒を含む。
6 10YR5/4 濃い黄褐色	粘土	10YR3/2シルトブロックを多量に含む。		SK 12	1 10YR3/2 暗褐色	粘土(粘)	10YR5/4粘土小ブロック、木炭粒を含む。
7 10YR4/2 灰青褐色	粘土	10YR5/4粘土小ブロックを含む。		SK 13	1 10YR3/2 暗褐色	粘土(粘)	10YR5/4粘土小ブロックを含む。
8 10YR5/4 濃い黄褐色	シルト	10YR3/2粘土質シルトブロック、小礫を含む。		2 10YR4/2 灰青褐色	粘土(粘)	10YR5/4粘土小ブロック、木炭粒を含む。	
SK 3	1 10YR3/2 暗褐色	シルト	10YR5/4粘土小ブロック、焼土粒、木炭粒を含む。	P65	1 10YR5/4 濃い黄褐色	粘土	10YR2/2粘土質シルト小ブロックを含む。

第26図 II区土坑(1)

【堆積土】2層確認された。自然堆積層と考えられる。

【出土遺物】磨石(K-1)が出土した。

SK14土坑 【位置】調査区西半部南壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】調査区の南半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明である。規模は東西68cm、南北50cm以上、深さ38cmである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形で、壁は底面から直立して立ち上がる。底面は東側に傾斜している。【堆積土】2層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片が出土した。



遺構	層位	土色	土質	備考
SK14	1	10YR5/2 黒褐色	塊土質(赤)	10YR5/4粘土小ブロックを含む。
	2	10YR2/2 黒褐色	塊土質(赤)	10YR5/4粘土小ブロック、φ30mmの棒を含む。
SK15	1	10YR5/2 黒褐色	塊土質(赤)	
	2	10YR5/4 濃い赤褐色	塊土質(赤)	10YR5/2粘土質シレット小ブロックを含む。

第27図 II区土坑(2)

SK15土坑 【位置】調査区中央部北壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】遺構の西半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明である。規模は東西1.84m、南北50cmである。

【断面形・壁・底面】断面形はV字形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は壁との境が明瞭ではない。【堆積土】2層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

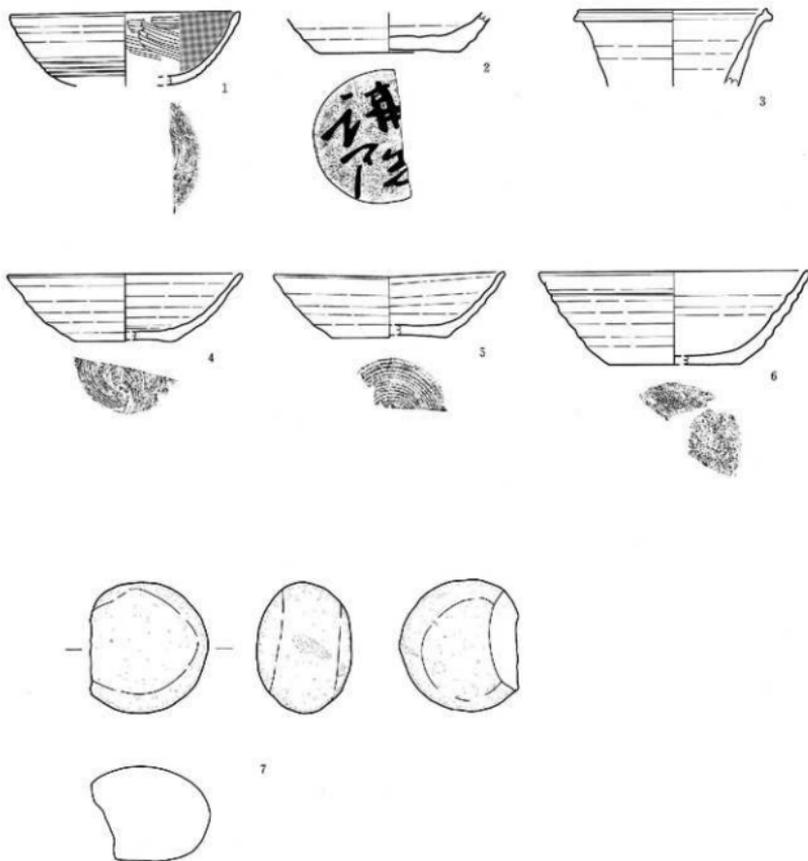
SK16土坑 【位置】調査区西半部南壁沿いで検出された。【重複】SI 2と重複し、これより新しい。【平面形・規模】不整形を呈する。規模は東西2.23m、南北1.73m、深さ30cmである。【断面形・壁・底面】断面形は楕形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は起伏がある。【堆積土】3層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】須恵器片(E-19、20、28)が出土したほか、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、陶器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。E-19、20は回転糸切り無調整で、E-28は回転ヘラ切り後に底面を手持ちヘラケズリされている。

4) ビット

II区で検出されたビットは67基である。P22とP63はSI 1の壁柱穴となるものである。I区と比較するとビットの分布はやや疎らとなっており、西半に集中するが調査区内で建物として組めるものは見つからなかった。大半のビットは直径20cm前後の円形を呈し柱痕跡を持つものは僅かである。調査区東壁際で検出されたP5は、径60cm、深さ52cmの円形の掘り方に径20cmの柱痕跡を伴う柱穴であるが、同規模のビットは調査区内には存在しないことから、調査区外へ延びる建物の隅柱となる可能性も考えられる。出土遺物は、P59から底面に「講院」の墨書のある須恵器杯底部片が出土している。その他のビットからは、ロクロ土師器片、赤焼土器片、須恵器片、瓦片などが出土した。

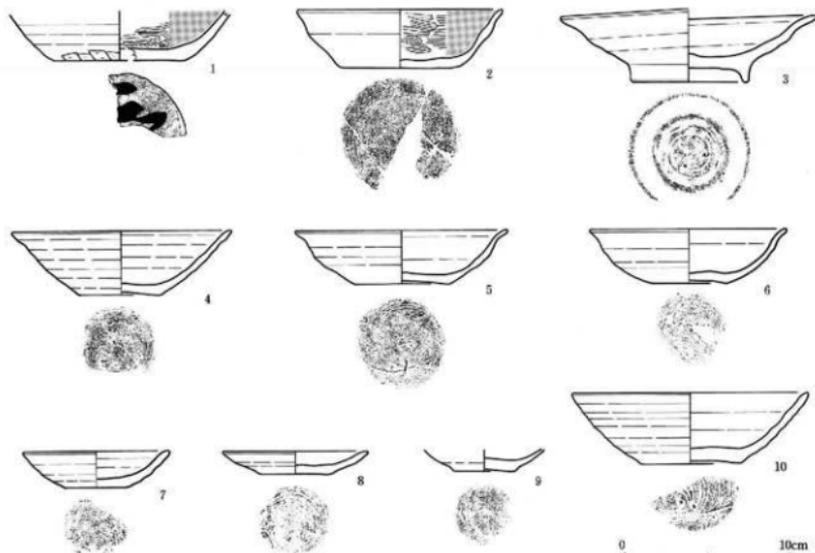
5) その他の出土遺物

I区、II区の遺構検出作業と試掘調査の2トレンチ、3トレンチから、ロクロ土師器、赤焼土器、土師質土器、須恵器、陶磁器、瓦、石製品などが出土している。土師器のうち調整技法が分かるもの大部分は内面をヘラミガキ黒色処理されたものである。図示した遺物は、ロクロ土師器杯(D-19、24)、赤焼土器杯(D-16、17、18)、高台付杯(D-12)、小皿(D-13、25、26)、須恵器杯(E-24)である。D-19は、回転ヘラ切り後底面を入念にヘラケズリされている。底面に判読不能の墨書がある。赤焼土器については、多賀城跡出土土器群中のE、F群に該当し、年代として凡そ10世紀代に収まるものと考えられる。



番号	登録番号	類別・器種	出土層位	発見層位	出土遺構・面	取・透字	高さ・長	口径・幅	容量・容	底 径	特 徴	写真掲載
1	D-20	ロクロ土器類 杯	Ⅱ区		SK 7		14.5 14.0	15.5			外面ロクロナデ、内面滑。内縁へツギミ有。褐色斑。底縁部へツギミ。	9-13
2	E-2	灰土器 杯	Ⅱ区		P 90		(2.4)	8.7			外面ロクロナデ 内縁ロクロナデ 及び縁部切リ、ヘラナデナリ 褐色 編成	9-18
3	E-15	灰土器 具柄碗	Ⅱ区		SK 3		(4.7) 12.0				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	9-17
4	E-19	灰土器 杯	Ⅱ区		SK 16		4.1 14.4	6.2			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底縁部縁部切リ	9-16
5	E-20	灰土器 杯	Ⅱ区		SK 16		4.0 14.1	7.0			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ 底縁部縁部切リ	9-14
6	E-28	灰土器 杯	Ⅱ区		SK 16		5.7 16.5	8.0			外面ロクロナデ、平均直徑 内面ロクロナデ 底縁部へツギミ、ヘラナデナリ	9-15
7	K-1	埴石類 餅石	Ⅱ区		SK 13		8.1 (7.2)	5.8 (6.0)				9-19

第28図 II区土坑・ピット出土遺物



図号	登録番号	形状・器種	材質	発祥地	出土遺構・層	出土番号	高さ・径	口径・厚	重量・容	特徴	写真図録
1	D-19	コケロ土師器 杯	灰黒凝灰土	Ⅱ区	Ⅲトレンチ		12.0	7.8		内面ヘラミガキ、ヘラケズリ、内面へらミガキ、黒色処理、底面へらミガキ、ヘラケズリ	7-14
2	D-24	コケロ土師器 杯	灰黒凝灰土	Ⅱ区	Ⅲトレンチ		3.6	2.0	7.4	外縁コケロナデ 内面へらミガキ、黒色処理	7-15
3	D-12	赤城土器 瓦合器 Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅲ区			4.1	15.0	7.2	内外縁コケロナデ 底面回転車安り 有高台	7-12
4	D-17	赤城土器 杯 Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅲ区			4.0	13.4	5.0	内外縁コケロナデ 底面回転車安り	7-10
5	D-18	赤城土器 杯 Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅲ区			3.3	13.0	5.6	内外縁コケロナデ 底面回転車安り	7-7
6	D-16	赤城土器 杯 Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅲ区			3.3	12.0	4.4	内外縁コケロナデ 底面回転車安り	7-9
7	D-13	赤城土器 小皿 Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅲ区			2.2	8.9	3.9	内外縁コケロナデ 底面回転車安り	7-11
8	D-25	赤城土器 小皿 灰黒凝灰土	Ⅲトレンチ				1.4	8.8	4.3	内外縁コケロナデ 底面回転車安り	7-16
9	D-26	赤城土器 小皿 灰黒凝灰土	Ⅲトレンチ				(1.9)		3.8	内外縁コケロナデ 底面回転車安り	7-17
10	E-24	須恵器 杯 Ⅱ区	Ⅱ区	Ⅲ区			4.4	14.4	6.2	内外縁コケロナデ 底面回転車安り	7-13

第29図 その他の出土遺物

7 まとめと考察

1) SI1・2 竪穴住居跡出土土器群について

今回の調査により図示した登録遺物のうち、半数以上がⅡ区のSI1・2 竪穴住居跡（以下、SI1・2と略す）出土のものである。ここでは遺構の全容が明らかとなっているSI1出土土器群の年代の検討を中心に若干の考察を加えていきたい。SI1出土土器群は、ロクロ土師器杯（D-1～6、8、9）、椀（D-7）、甕（D-10、11、14、15）、須恵器杯（E-1、3～6、8、11～13、17、18、26）、蓋（E-13）より構成されている。土師器の杯は、切り離し技法の明らかなものは総て回転ヘラ切りされ、D-5以外は、底部周縁を手持ちヘラケズリされるか回転ヘラケズリによる再調整を受けている。内面のヘラミガキは横方向から斜め方向で放射状のものには含まれない。器形は内湾して立ち上がり口縁が外反するものと直線的に立ち上がるものがある。口径は12.3～16.0cm、底口比（口径に対する底径の比率）は0.46～0.57で平均すると0.52となる。椀は底部を欠損している。口径20.6cmで体部下半を回転ヘラケズリされ、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。須恵器杯は、回転ヘラ切りによる切り離し後無調整のものや軽くナデるものがある。器形は直線的に外傾して立ち上がり、ロクロ目が顕著なものやそうでない

ものが含まれる。口径は12.0~14.1cm、底口比は0.48~0.59で平均すると0.52となる。蓋はつまみ部を欠損している。頂部をヘラケズリされており口径12.6cmでカエリはない。内面が平滑で摩滅していることから転用甕と思われる。SI 1から出土した土師器は、東北地方南部の土師器編年型式の表杉ノ入式に該当するものである。表杉ノ入式の土師器環については、須恵器、赤焼土器との共存関係、底口比、切り離し技法と再調整の有無によりその変遷が論じられている。その成果を総合したのが下の第1表である。これによって坏全体の中に占める須恵器、赤焼土器の比率の増減、底口比の減少化、再調整の簡略化などが指摘できる。SI 1から出土した坏類の特徴を挙げると次のようになる。第1に赤焼土器を含まず、土師器、須恵器から構成されていること。第2に須恵器の比率が57%を占めること。第3に底口比が0.46~0.59の範囲に分布し0.52前後に集中すること。第4に回転ヘラ切り後、底部周縁を手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリにより再調整しているものが含まれることである。以上の特徴を第1表の変遷に当てはめると、底口比と須恵器含有率から台ノ山遺跡SI 8の傾向に近いことが窺える。このことからSI 1出土土器群の年代については9世紀前半を中心とした年代が与えられる。更にSI 1からは多賀城跡Ⅲ期の重弁蓮華文軒丸瓦と同様の特徴を持った重弁蓮華文軒丸瓦(F-2)が出土している。この瓦については上限が780年、下限が869年と捉えられており上述の年代観とは矛盾しない。SI 2出土土器群については、遺構の一部を調査したに留まり組成の点から有効な資料とは言えない。出土したものにはロクロ土師器環(D-20)、須恵器環(E-7、9、10、14、15、21、22、27) 甕(E-23)がある。土師器環は切り離しが回転ヘラ切り、外面体部下半が回転ヘラケズリ、内面では横方向にヘラミガキ、黒色処理されている。この環は底口比が0.74と底径が大きく一般的な坏とは異なった器形を呈している。須恵器環は切り離し技法に回転ヘラ切りと回転糸切りの両方を含む。底口比は0.44~0.54の範囲に分布し、平均すると0.48でSI 1のものに比べ底口比が小さくなる傾向を示す。須恵器環の中には内穹気味に立ち上がり口径17.2cmのやや大型のもの(E-15)が見られる。SI 2出土土器群の年代については概ね9世紀代と捉えておきたい。なお、SI 1出土土器群中、坏類に比較的多くの墨書が見つかっている(19点中6点)。これらは一般の集落跡で見つかっている墨書と異なり、「講院」カ、「佛」、「東」、「西」など本来は西側に隣接する国分寺内のある部所で使われていたことを窺わせる文字が記されており、この住居の住人が、国分寺と何らかの係わりを持っていて、黒書土器を手にすることが出来る立場にいた可能性を想定し得る。

遺跡名	空堀	青木	台ノ山	東山	安内	宮	安久	山	鹿	鹿	鹿
遺構名	SI20N A跡	SI21	SI8	土器環	SI2	SI4N 跡	SI5	SI9 P跡	SK1・SK4	SK1・SK4	SD1・SD2
赤焼土器出土率	0%	0%	0%	0%	0%	0%	45%	52%	63%	60%	0%
須恵器出土率	20%	18%	23%	31%	0%	0%	11%	6%	0%	0%	0%
底口比	0.6	0.52	0.52	0.46	0.44	0.43	0.38	0.38	0.30	0.30	0.4
切離し技法	ロクロナデ 回転ケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 土器もケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 手持ちケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 手持ちケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 手持ちケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 手持ちケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
切離し技法	ヘラ切り	ヘラ切り 糸切り	ヘラ切り 糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り
年代	8C末~9C初			9C中葉			9C中葉		10C中葉		

第1表 表杉ノ入式期における土師器環の変遷

2) 遺構の年代について

今回の調査で検出された遺構は、古代から近世までのものと考えられるが、個々の遺構の年代について若干の補足をしておきたい。Ⅱ区で検出されたSI 1については、出土土器群の検討から9世紀の前半に、SI 2についても同様に9世紀代に位置付けられる。前後関係については明らかにし得なかったが、両者の位置関係から時期差があったものと考えられる。Ⅱ区のP5についても古代の柱穴の可能性はある。Ⅰ区のSE1井戸跡は、伴出した常滑産、白石窯系の甕や板碑などから中世段階に所属するものと思われ、上限は13世紀の後半とされる。Ⅰ区のSK 4土坑も白石窯系の甕を伴っていることから13世紀後半~14世紀前半頃のものと思われる。Ⅰ区のピット群の中で堆積上に13世紀代の龍泉窯系の青磁片や占瀬戸片を含むものがあることから、この時期の獨立柱建物跡が存在していた可

能性も認められる。SA 1 柱列やSB 1、2 掘立柱建物跡については遺物から正確な年代を言及しがたい。他の遺構との重複関係から、SA 1 は中世、SB 1、2 は中世から近世までのものと捉えておきたい。I 区のSK 13土坑からは近世の土師質土器小皿が出土している。内面に煤が付着していることから灯明皿と考えられるものである。同様の遺構は、昭和55年の陸奥国分寺東門跡調査の際にも検出されており、近世の墓塚と報告されている。I 区のSK 7、10、11、12土坑やⅡ区のSK 4、5土坑のように類似した長方形の土坑が南北に長軸方向を合わせて見つかったことから、これらについては近世段階の墓塚の可能性がある。藩政時代の仙台北城下絵図（正保2、3年、寛文8、9年、元禄4、5年、延宝6年、安政3～6年製作）によると、この場所に寺屋敷、学頭隠居屋敷といった記載がなされており、古代から近世に至るまで周辺一帯が人々の宗教的な活動の拠点として意識され続けていたものと推察される。

3) まとめ

- ① 国分寺東遺跡は仙台市若林区木ノ下三丁目、陸奥国分寺跡の東側に隣接して所在し、広瀬川によって形成された標高約15mの自然堤防上に立地している。遺跡は、平成13年の試掘調査によって発見され新規に登録されたものである。
- ② 発見された遺構は平安時代の竪穴住居跡、中世の井戸跡、土坑、中世から近世にかけての柱列、掘立柱建物跡、近世の上坑のほか、溝跡、柱穴、ピットである。
- ③ 出土した遺物には、ロクロ土師器環、碗、甕、須恵器環、蓋、長頸甕、甕、赤土器土器高台付坏、坏、小皿、土師質土器小皿、中世陶器碗、重弁蓮華文軒丸瓦、細弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦、石臼、磨石、板碑のほか陶磁器片、鉄製品、鉄滓、石製品がある。
- ④ 土師器環、須恵器環の中には「講院」か、「佛」、「東」、「西」などの墨書がなされているものが含まれている。これらについては、本来隣接する国分寺で使用されていたものが運ばれてきたものと考えられる。
- ⑤ 今回の発掘調査により陸奥国分寺跡の東側において、同寺院の機能していた時期及びそれ以降の時期の遺構・遺物が検出されたことから国分寺跡周辺に於ける集落の存在といった諸様相を知る手がかりを得ることができた。

引用・参考文献

- 氏家和典（1957）：「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 岡田茂弘・桑原滋郎（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』
- 菊地逸夫（1996）：「一本杉家跡群」宮城県文化財調査報告書第172集
- 木村浩二（1996）：「陸奥国分寺・尼寺と周辺桑里」『論集しのお考古一日黒古明先生頌寿記念一』論集しのお考古刊行会
- 下藤信一郎（2000）：「陸奥国分寺跡（第9次調査）」『五木松家跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第247集
- 工藤哲司（1981）：「史跡陸奥国分寺跡 昭和55年度環境整備予備調査概報 東門跡」仙台市文化財調査報告書第27集
- 斎野裕彦（1994）：「南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第192集
- 佐藤洋（1990）：「南小泉遺跡第16～18次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第140集
- 佐藤洋（1997）：「寒沢岡遺跡発掘調査報告書-伊達家別荘跡の調査-」仙台市文化財調査報告書第214集
- 土浜光朗（1999）：「陸奥国分寺跡（第8次調査）」『陸奥国分寺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第238集
- 白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅱ』
- 長島榮一・豊村幸安（1996）：「寒沢遺跡-第9次調査-」『仙台平野の遺跡群XV』仙台市文化財調査報告書第211集
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所（1980）：「多賀城跡-政庁跡 国版編」
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所（1982）：「多賀城跡-政庁跡 本文編」
- 陸奥国分寺跡発掘調査委員会（1961）：「陸奥国分寺跡」
- 結城慎一・佐藤洋（1985）：「仙台北城三ノ丸跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第76集



図版1 国分寺東遺跡周辺の航空写真（1961年）



1 調査区遠景 (北東より)



2 I区遺構検出状況 (西より)



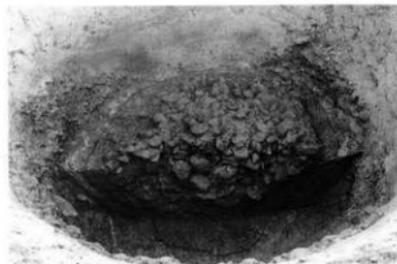
3 I区SA1柱列P39断面 (南より)



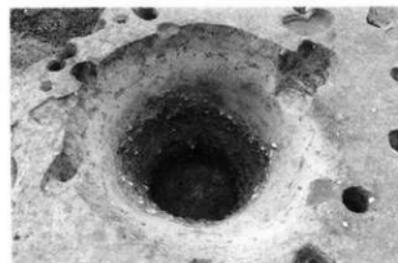
4 I区SA1柱列P43断面 (南より)



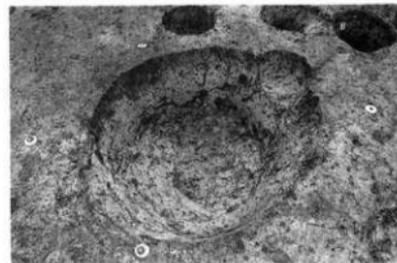
5 I区SE1井戸跡断面 (南より)



6 I区SE1井戸跡(下部)断面 (南より)

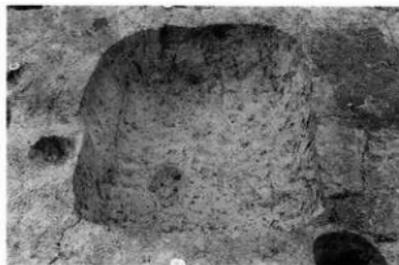


7 I区SE1井戸跡全景 (南より)



8 I区SK2土坑完掘全景 (南より)

図版2 I区調査状況・柱列・井戸跡・土坑



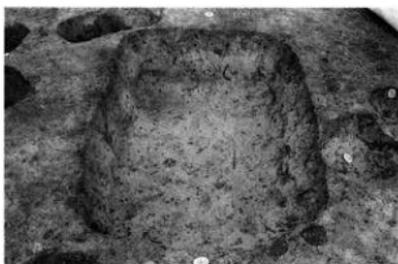
1 I区SK3土坑完掘全景（東より）



2 I区SK4土坑中世陶器出土状況（西より）



3 I区SK4土坑完掘全景（西より）



4 I区SK5土坑完掘全景（南より）



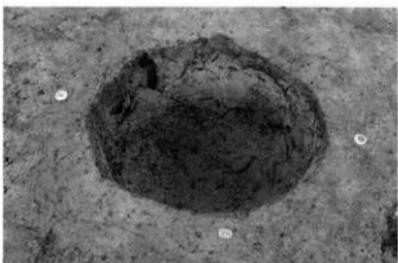
5 I区SK9土坑完掘全景（南西より）



6 I区SK15・16・17土坑完掘全景（南より）



7 I区SK20土坑完掘全景（南より）



8 I区SK23土坑完掘全景（南より）

図版3 I区調査状況・土坑



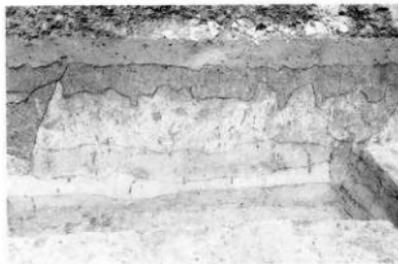
1 I区完掘全景(東より)



2 I区完掘全景(西より)



3 I区調査風景(南西より)



4 I区北壁断面(南より)



5 II区遺構検出状況(南西より)



6 II区SI1竪穴住居跡床面検出状況(西より)



7 II区SI1竪穴住居跡床面遺物出土状況(北より)



8 II区SI1竪穴住居跡カマド左袖遺物出土状況(西より)

図版4 I区調査状況・II区調査状況・竪穴住居跡



1 II区SI1 竪穴住居跡カマド全景 (西より)



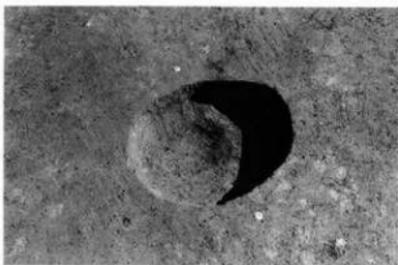
2 II区SI1 竪穴住居跡完掘全景 (西より)



3 II区SI2 竪穴住居跡完掘全景 (西より)



4 II区SI1、SI2 竪穴住居跡完掘全景 (西より)



5 II区SK1 土坑完掘全景 (西より)



6 II区SK2 土坑完掘全景 (西より)



7 II区SK4 土坑完掘全景 (西より)

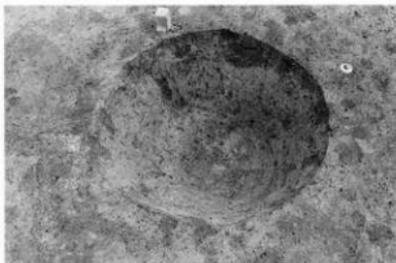


8 II区SK5 土坑完掘全景 (東より)

図版5 II区調査状況・竪穴住居跡・土坑



1 II区SK6土坑完掘全景(南西より)



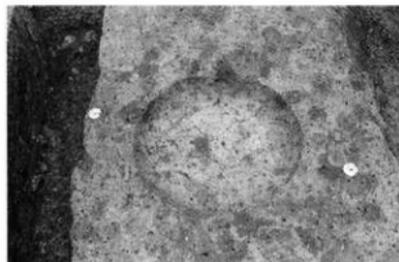
2 II区SK7土坑完掘全景(西より)



3 II区SK9土坑完掘全景(北より)



4 II区SK10・11土坑完掘全景(北より)



5 II区SK12土坑完掘全景(北より)



6 II区完掘全景(北西より)

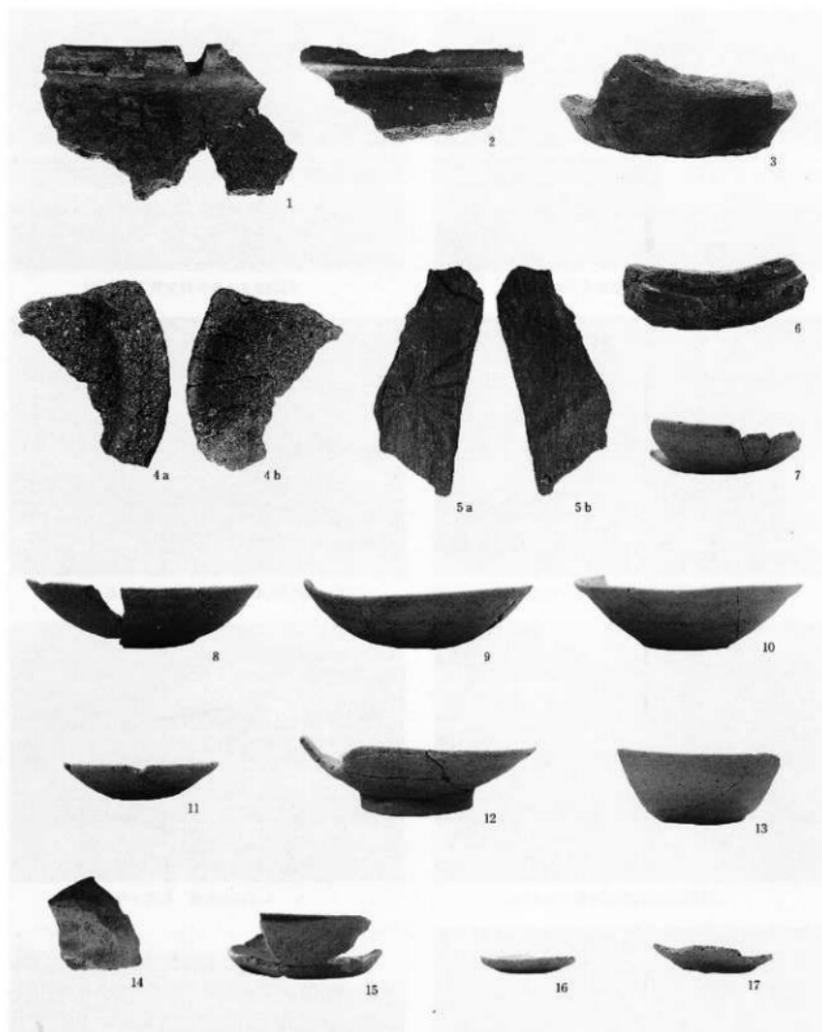


7 II区完掘全景(西より)



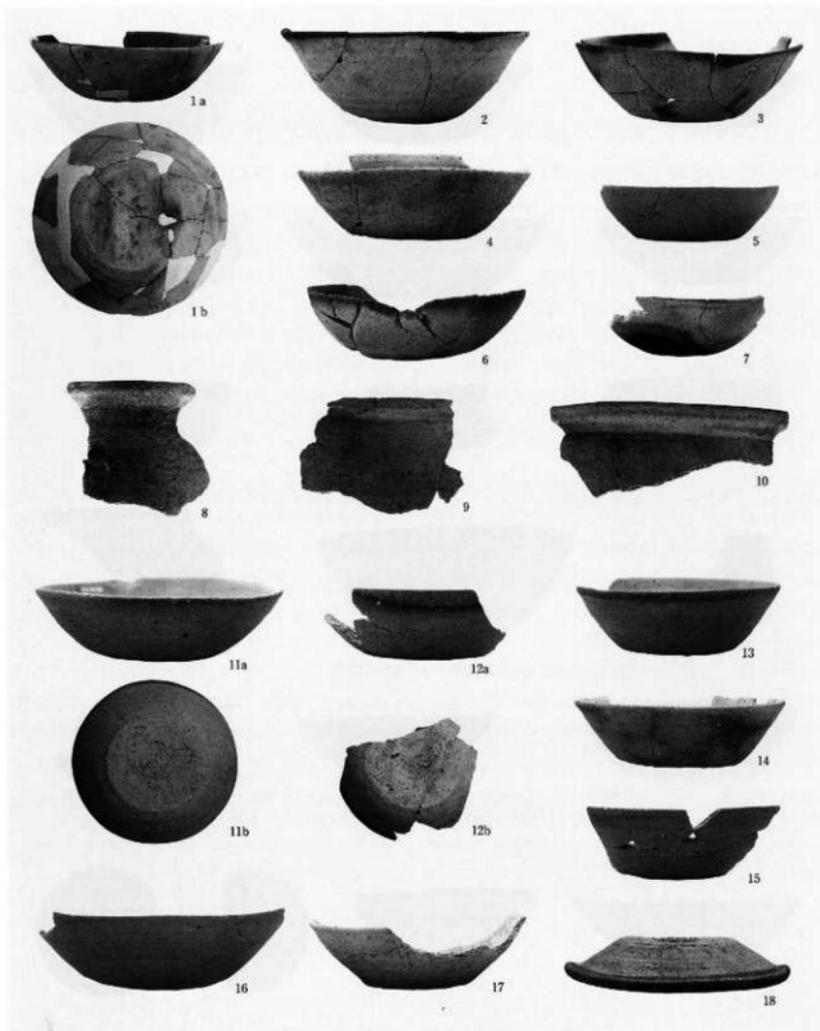
8 II区南壁断面(北より)

図版6 II区調査状況・土坑



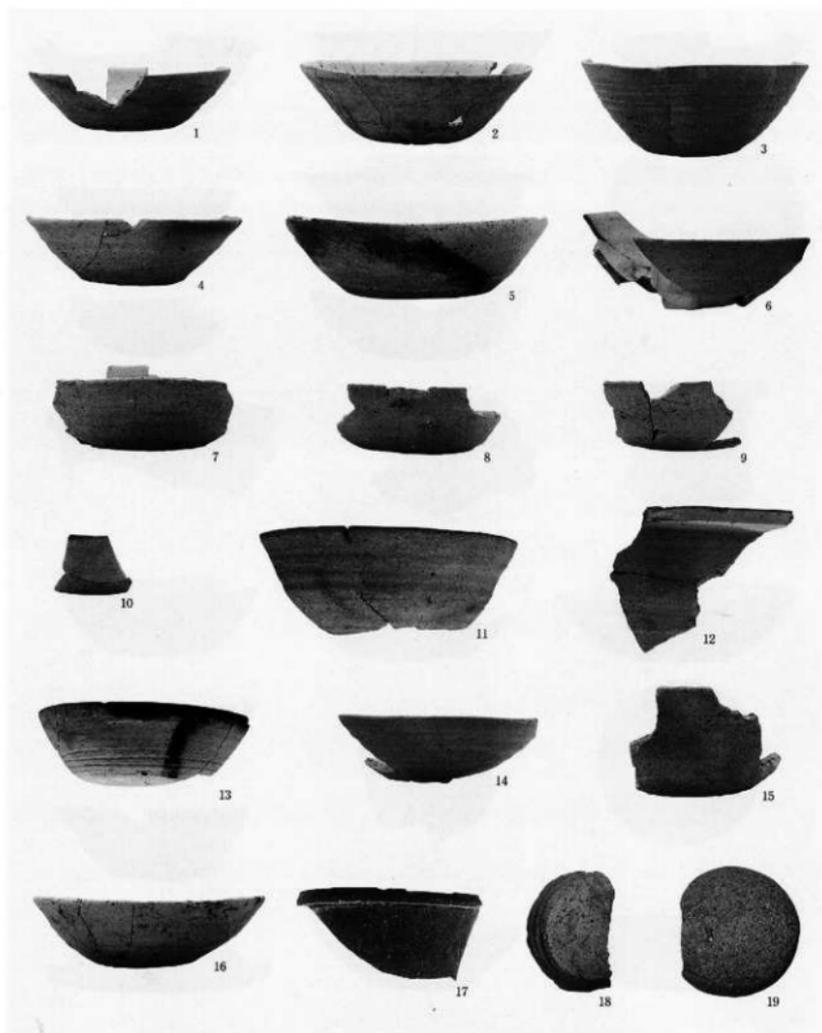
- | | | | | | |
|-----------|---------------------|------------|---------------------|-------------|---------------------|
| 1 中世陶器類 | I-1 (SE1第11図1) | 2 中世陶器類 | I-2 (SE1第11図2) | 3 中世陶器類 | I-3 (SK4第14図1) |
| 4 石臼 | K-2 (SE1第11図4) | 5 板神 | K-3 (SE1第11図3) | 6 素灰文軒平瓦 | G-6 (SK4第14図2) |
| 7 赤焼土器環 | D-18 (I区II層第29図5) | 8 須恵器環 | E-25 (I区P245第140図3) | 9 赤焼土器環 | D-16 (I区II層第29図6) |
| 10 赤焼土器環 | D-17 (I区II層第29図4) | 11 赤焼土器小皿 | D-13 (II区II層第29図7) | 12 赤焼土器高台付環 | D-12 (II区II層第29図3) |
| 13 須恵器環 | E-24 (I区I層第29図10) | 14 ロクロ土加飾環 | D-19 (試掘2トレンチ第29図1) | 15 ロクロ土加飾環 | D-24 (試掘2トレンチ第29図1) |
| 16 赤焼土器小皿 | D-25 (試掘3トレンチ第29図8) | 17 赤焼土器小皿 | D-26 (試掘3トレンチ第29図9) | | |

図版7 出土遺物1



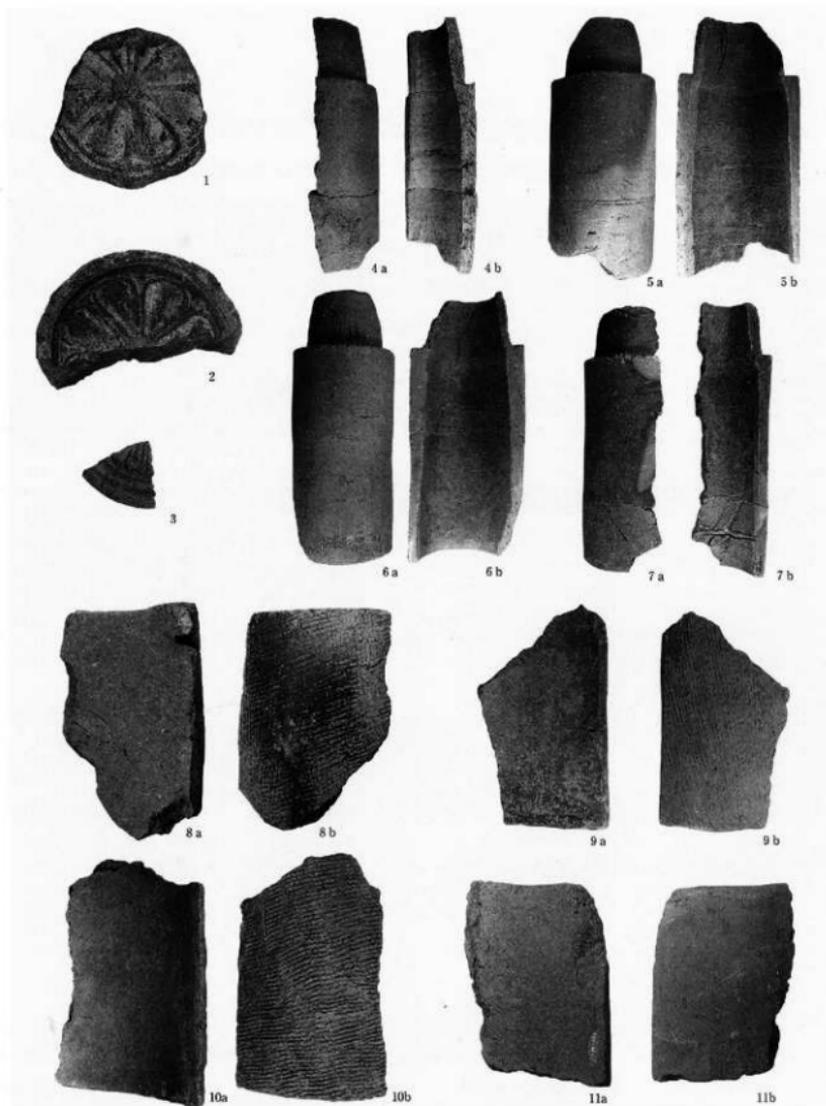
- | | | | | | | | | |
|----|----------|-------------------|----|----------|-------------------|----|----------|-------------------|
| 1 | ロクロ土師器 碗 | D-1 (SI1 第19回1) | 2 | ロクロ土師器 碗 | D-2 (SI1 第19回3) | 3 | ロクロ土師器 碗 | D-3 (SI1 第19回4) |
| 4 | ロクロ土師器 碗 | D-5 (SI1 第19回5) | 5 | ロクロ土師器 碗 | D-4 (SI1 第19回2) | 6 | ロクロ土師器 碗 | D-8 (SI1 第19回6) |
| 7 | ロクロ土師器 碗 | D-6 (SI1 第19回8) | 8 | ロクロ土師器 片 | D-15 (SI1 第19回13) | 9 | ロクロ土師器 片 | D-10 (SI1 第19回10) |
| 10 | ロクロ土師器 蓋 | D-11 (SI1 第19回12) | 11 | 須恵器 碗 | E-1 (SI1 第20回2) | 12 | 須恵器 碗 | E-3 (SI1 第20回3) |
| 13 | 須恵器 碗 | E-4 (SI1 第20回1) | 14 | 須恵器 碗 | E-6 (SI1 第20回5) | 15 | 須恵器 碗 | E-18 (SI1 第20回9) |
| 16 | 須恵器 碗 | E-11 (SI1 第20回7) | 17 | 須恵器 碗 | E-5 (SI1 第20回4) | 18 | 須恵器 蓋 | E-13 (SI1 第20回12) |

図版8 出土遺物2



- | | | | | | |
|------------|--------------------|-----------|--------------------|---------|--------------------|
| 1 須恵器環 | E-8 (SI 1第20図6) | 2 須恵器環 | E-12 (SI 1第20図8) | 3 須恵器環 | E-15 (SI 2第24図6) |
| 4 須恵器環 | E-10 (SI 2第24図5) | 5 須恵器環 | E-27 (SI 2第24図7) | 6 須恵器環 | E-9 (SI 2第24図8) |
| 7 須恵器環 | E-7 (SI 2第24図3) | 8 須恵器環 | E-14 (SI 2第24図4) | 9 須恵器環 | E-21 (SI 2第24図2) |
| 10 ロクロ土師器環 | D-20 (SI 2第24図1) | 11 須恵器環 | E-22 (SI 2第24図9) | 12 須恵器甕 | E-23 (SI 2第24図10) |
| 13 ロクロ土師器環 | D-22 (Ⅱ区SK16第28図1) | 14 須恵器環 | E-20 (Ⅱ区SK16第28図5) | 15 須恵器環 | E-28 (Ⅱ区SK16第28図6) |
| 16 須恵器環 | E-19 (Ⅱ区SK16第28図4) | 17 須恵器長頸壺 | E-16 (Ⅱ区SK16第28図3) | 18 須恵器環 | E-2 (Ⅱ区P59第28図2) |
| 19 磨石 | K-1 (Ⅱ区SK13第28図7) | | | | |

図版9 出土遺物3



1 重弁蓮華文軒丸瓦 F-1 (SI1第21図1) 2 重弁蓮華文軒丸瓦 F-2 (SI1第21図3) 3 細弁蓮華文軒丸瓦 F-3 (SI1第21図2)
 4 丸瓦 F-4 (SI1第21図5) 5 丸瓦 F-6 (SI1第21図4) 6 丸瓦 F-7 (SI1第21図6)
 7 丸瓦 F-8 (SI1第21図7) 8 平瓦 G-1 (SI1第22図1) 9 平瓦 G-2 (SI1第22図2)
 10 平瓦 G-3 (SI1第22図4) 11 平瓦 G-5 (SI1第22図3)

図版10 出土遺物 4

Ⅱ 八木山緑町遺跡（第3次）発掘調査報告書

1 調査要項

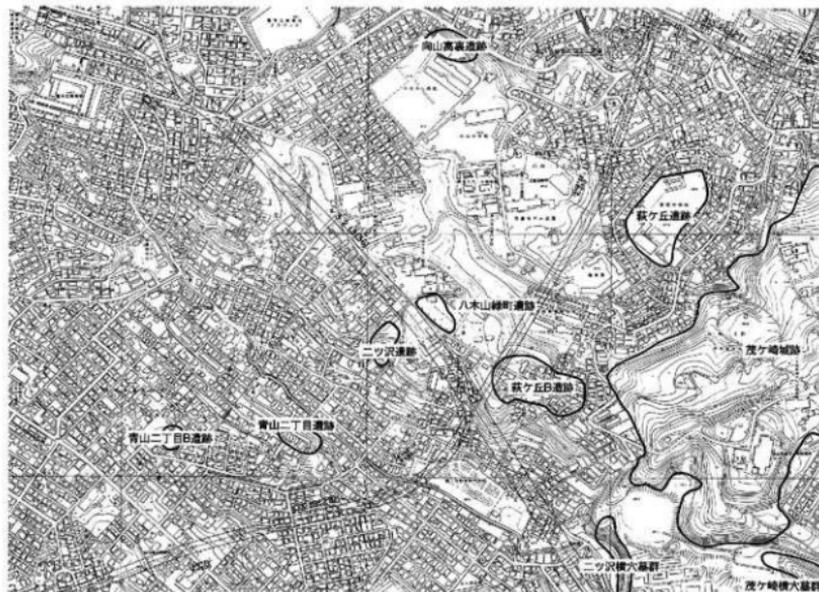
遺跡名	八木山緑町遺跡（宮城県遺跡番号01317）		
調査地	仙台市太白区八木山緑町21-3		
調査理由	老人福祉施設建設		
原因者	学校法人仙台こひつじ学園	向山幼稚園	理事長 木村 徹
調査主体	仙台市教育委員会		
調査担当	仙台市教育委員会（文化財課）		
担当職員	主事 佐藤 淳	文化財教諭 宮内 周	
調査面積	350㎡（調査対象面積：2,300㎡）		
調査期間	平成14年4月10日～5月13日		

2 遺跡の位置と環境



No.	遺跡名	種別	立地	系代	No.	遺跡名	種別	立地	系代
1	八木山緑町遺跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・古代	11	原遺跡	集落跡・古墳	丘陵	弥生・古墳・古代
2	鷹ヶ崎遺跡	城跡	丘陵	中世	12	丸森遺跡	集落跡	丘陵	古墳・古代
3	太平山麓穴墓群	竊穴墓	丘陵	古墳	13	松ヶ丘遺跡	散布遺	丘陵	縄文
4	宮内町穴墓群	竊穴墓	丘陵	古墳	14	宮内遺跡	水田跡	田舎・田舎	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世
5	豊原古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	15	長町沢渡遺跡	包含池・集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
6	土手内遺跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・古墳・古代	16	西台遺跡	包含池・集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
7	土手内遺跡	竊穴墓	丘陵	古墳	17	郡山遺跡	包含池・水田跡	田舎・田舎	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代
8	西ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・古代	18	長瀬園遺跡	河原・集落跡	沖積地	弥生・古墳・中世・近世
9	三神集落跡	集落跡	丘陵	縄文・古代	19	新小泉遺跡	水田跡	沖積地	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世
10	富沢遺跡	穴墓	丘陵	古墳・古代	20	若林遺跡	古墳・城跡	自然堤防	古墳・古代・中世・近世

第30図 周辺の遺跡（1/35,000）



第31図 遺跡の位置 (1/10,000)

八木山緑町遺跡はJR仙台駅の南西3.2kmの仙台市太白区八木山緑町に所在する。遺跡は広瀬川と名取川に挟まれた市南部にある八木山丘陵の東部、南側はニツ沢へと下る細尾根上に位置する。遺跡周辺の標高は85mである。

周辺の著名な遺跡としては、同丘陵上の西部に位置する縄文時代の集落跡である山田ノ台遺跡、三神峯遺跡があり、南部の沖積地では大野田遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡群が数多く所在するほか、弥生時代以降、現代までの水田遺構が発見された富沢遺跡が立地している。また古墳時代には丘陵裾部から低地部にかけて多くの群集墳や横穴墓群が造られ、さらに古代では東部低地部にかつての陸奥国府と考えられる郡山遺跡が営まれている。

近隣の遺跡では同尾根上に縄文時代の遺跡であるニツ沢遺跡や萩ヶ丘B遺跡が所在するほか、南東部丘陵裾部にはニツ沢・茂ヶ崎の両横穴墓群、南西個別尾根上に青山二丁目・二丁目Bの縄文遺跡が所在しているが、このうち茂ヶ崎横穴墓群以外については調査例に乏しく、したがって本地区の歴史を紐解くにあたっては本遺跡の調査が重要となっている。

3 調査に至る経緯と調査方法

本遺跡はかつて平成7年と平成11年に2度の調査を実施している。平成7年の第1次調査は宅地造成のための事前調査として約700㎡にわたり調査を実施したところ、縄文前期末葉から中期初頭の堅穴住居跡5軒、弥生後期の堅穴住居跡2軒のほか、土坑120基や多くのピットが発見され、市内でも数少ない時期の縄文住居跡や弥生住居跡が複数発見されるという大きな成果を上げた。第2次調査は第1次調査時に計画された開発地の変更関連部分約150㎡を対象に調査し、第1次調査地を挟む2地区から弥生時代の土坑墓とみられるものを数基確認している。

今回の調査(第3次調査)は先の第1・2次調査で提示された宅地及び共同住宅建設計画の全面撤回の末、新た

に計画された老人福祉施設建設計画内容を受けた事前調査である。計画では建物の大部分が遺跡北東側の削平部分にあたり、遺跡範囲内においてはその約半分程度の面積が先の調査区と重複することから、調査は建物範囲内での未調査部分に限定して実施することとなった。

調査では北辺と西辺を建物ラインに合わせ、南辺を第2次調査西区との境界、東辺を削平地の落ち際と定めた。次に現況で畑地や荒地である表土を重機により除去した後、遺構の検出・掘り込み作業を行った。また遺構調査終了後には調査区中央に旧石器時代遺物の発見を目的とした下層調査区を設定し、掘り込みを行った。

測量の基準は調査区西辺外の2か所にAとBの任意の座標杭を設け、北側の杭Aを $X = 0$ 、 $Y = 0$ の原点とし、それぞれ南及び東に向かい数値が増す平面座標を設定した。平面測図、遺物取上げはこの座標を基に設定した5m方眼ごとに行った。またAとBには仙台市設置の3級基準点から求めた平面直角座標第X系による座標数値を与えると同時に、調査地内に水準測量により新規の水準点を設置した。各々の数値は下記の通りである。

新規基準点座標数値 A ($X = 0$, $Y = 0$) : $X = -195.643.028$ $Y = 3.144.003$

B ($X = 30$, $Y = 0$) : $X = -195.622.035$ $Y = 3.167.208$

新規水準点水準値 H = 85.400m



第32図 調査区の位置

1/800

4 基本層序

調査地での基本層位は遺構検出層上層のIV層までに大別5層、細別6層を確認し、下層調査においてはV層からX層まで大別6層、細別7層を確認した。自然堆積層とみられるV層以下層については全層とも北東側の沢部に向かい緩やかに傾斜している。

I層：I a層は現在の畑耕作土で、I b層は以前の畑耕作土である。

II層：I層の畑を造成するための近年の盛土層とみられる。

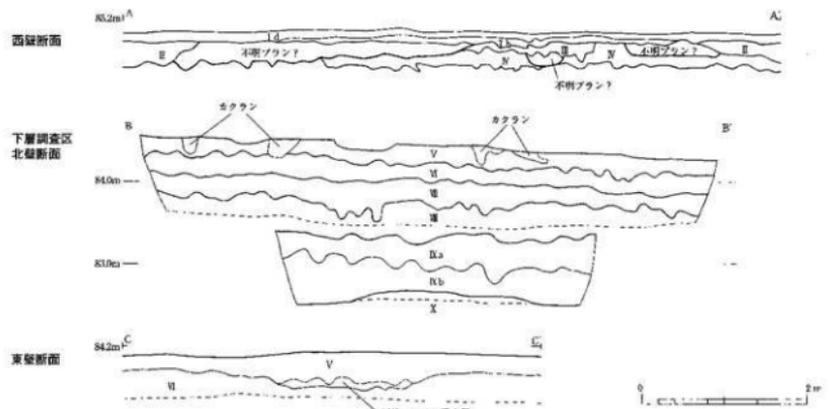
III層：黒褐色シルト質土で、下面の乱れが著しく、層厚は5～25cmである。極一部のみの確認である。

IV層：ぶい黄褐色シルト質土で、径1cm内の小礫を含み、III層同様に下面の乱れが著しい。層厚は厚いところ

で30cmある。漸移的にV層へと変化し、層理面は不明瞭である。

V層：褐色粘土質シルト土で、粘性が強く、径1cm内の小礫を含んでいる。遺構検出面である。層厚は20～30cmで、VI層との層理面近くにくぼみ部分に川崎スコリア層が断続的にブロックで混入している。

VI～X層：（第33図表参照）



層位	土色	土質	備考	調査	土色	土質	備考
Ia	10YR2/2 淡褐色	シルト	(緩い耕作土)	VI	10YR4/6 褐色	乱シロ	径1cm内の礫を少量含む
Ib	10YR2/3 暗褐色	シルト	(緩い耕作土)	VII	10YR4/4 褐色	乱シロ	砂質が強く、南下平中心に径1cm以下の礫を少量含む
II	10YR2/2 黒褐色	シルト	(緩い土)	VIII	10YR2/6 黄褐色	シルト	径2cm内の礫を多量含む、南下平がやや砂質強い
III	10YR2/2 黒褐色	シルト	20cm以内の礫を少量含む、下層の礫が多い	IXa	10YR4/6 褐色	砂質シルト	径2cm内の礫を多量含む
IV	10YR4/3 赤褐色	シルト	径1cm内の礫を少量含む、下層の礫が多い	IXb	10YR4/6 褐色	砂質シルト	径1cm内の礫を多量含む、部分に礫が少なく量を多量含む
V	7.5YR4/4 褐色	乱シロ	下層部に部分的に火山灰ブロックを含む	X	10YR5/6 黄褐色	粗砂質シルト	層上部に径5～20cm程度のマンゴンの炭屑層あり

第33図 基本層序

5 発見遺構と出土遺物

第1・2次の2度の調査では尾根頂部に近いこともあってか、複数の住居跡を含め、遺構密度の高さが際立ったが、今回の調査地は現況が沢部へと緩やかに下る畑地で、加えて後世の削平により遺構の残存状況が悪いことが予想された。今回発見した遺構としては竪穴住居跡1軒の他、土坑7基、ピット数も72と散在する状況であり、隣接する先の調査の状況とは著しく異なる結果となった。また出土遺物のほとんどは、現耕作上及び遺構検出面より上層からのものが多く、遺構自体の残存や遺構数も少ない為か、遺構内出土遺物は僅かであった。

1) 竪穴住居跡

SI1 竪穴住居跡

【位置・重複】中央部の西壁に半分かかる形で検出した。北壁側をSK1に切られている。

【形態・規模】東半部のみ検出で、残存が極めて悪い状況であるが、形態は円形で、径は5m程度とみられる。

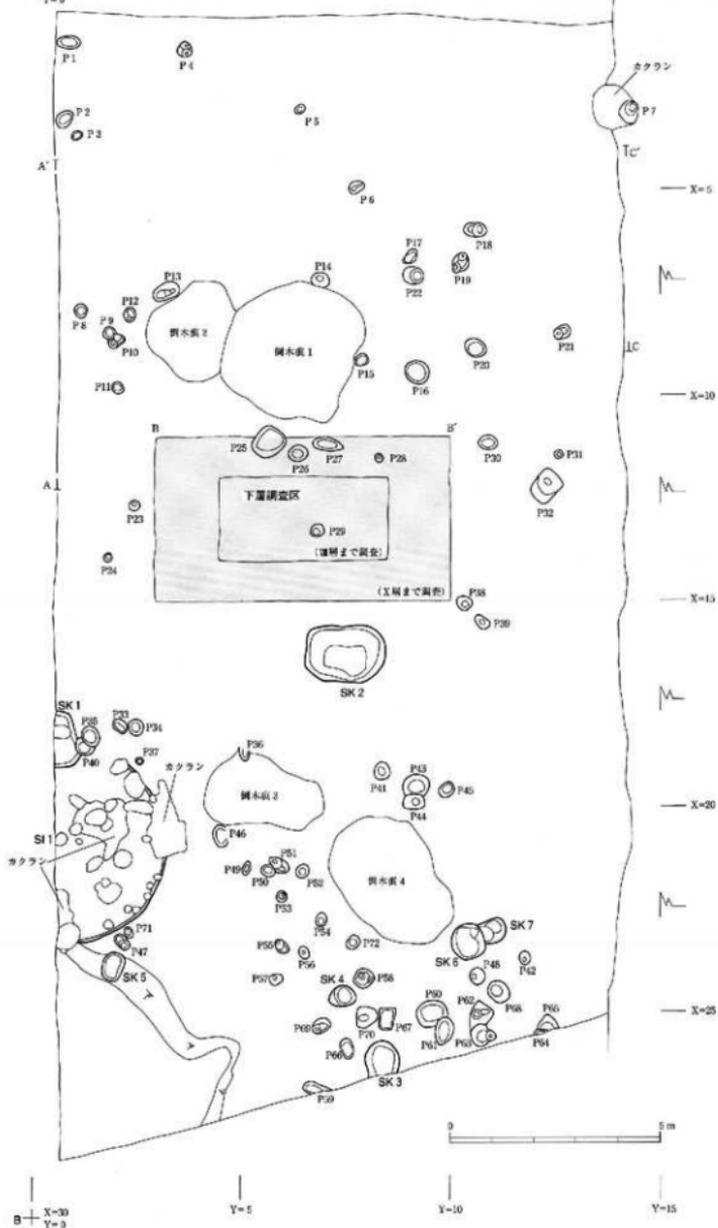
【堆積土】中央の東西ベルト及び西壁断面により3層確認した。1層は住居内全体にみられる暗褐色シルト土で、炭化物粒、焼上粒を少量含んでいる。2層は主に周辺部にみられる褐色粘土質シルト土である。また3層は住居中央のみに確認した暗褐色シルト土で、焼土ブロックやV層をブロック状に少量含んでいる。1・2層については自然流入土と考えられる。

【床面】床面は基本層V層で、II層や木根の影響もあってか、概ね平坦であるが小起伏が著しい。

【壁面】北部を除き壁面を確認したが、2～3cm程の極僅かな立ち上がりで、詳細は不明である。

A—X=0
Y=0

Ⅱ 八木山緑町遺跡(第3次)発掘調査報告書



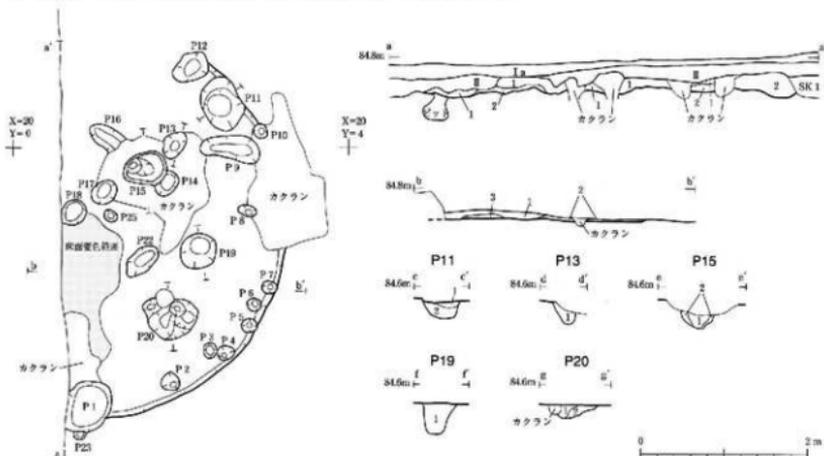
第34図 遺構の配置

【炉 跡】住居跡中央やや南寄りのV層床面がやや赤褐色気味に変色し、少量ではあるが炭化物粒や焼土粒を確認したことから、この西側調査区外に炉跡が存在するものと考えられる。

【床面施設】床面及び壁面中に大小25基のピットを確認した。これらの中にはP1のようにやや大きく住居外に張り出すものや、住居跡との重複関係が不明瞭なものもあり、全てが住居跡に伴うものとはいえない。P15・20は不整形で、P20については深さも15cmと浅いが、両者はその位置的なことから住居跡東側の支柱穴の可能性が高い。また南東側壁面際を中心に径が15～20cm、深さ5～20cmの小ピットが幾つか確認されたが、これらは第1次調査の円形住居跡でもみられた壁柱穴の可能性もある。床面上にはピット以外に土坑や周溝などの施設は確認できなかった。

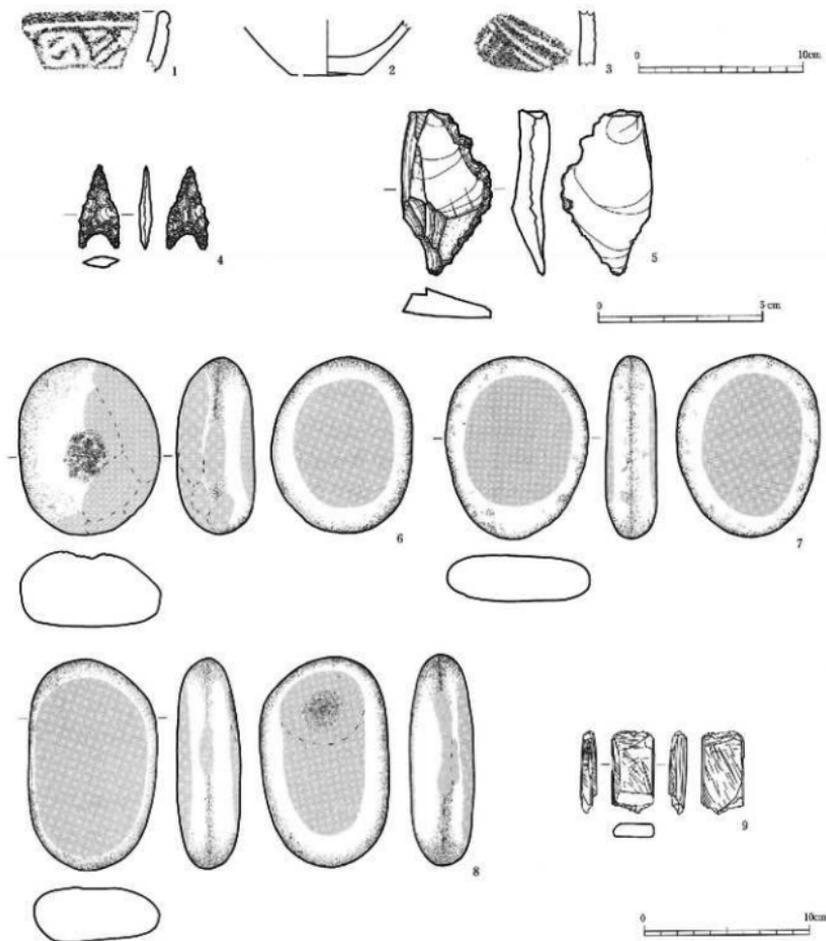
【出土遺物】床面、ピット、堆積上から縄文土器、剥片石器、礫石器、石製品が出土した。剥片石器では石鏃1点、不定形石器2点、石核1点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片3点、剥片17点があり、礫石器では磨凹石2点、磨石1点、石製品は石剣か石刀から転用の可能性があるもの1点がある。

A1(36図1)は口縁部で口縁直下に太い沈線がみられる。Ka11(36図4)は無茶の石鏃で、基部側から先端部にかけて急に細くなっている。Ka16(36図5)は不定形石器で、右側上半が背面からの鋸歯状の刃部、下半が急角度の刃部となっている。Kc2・1(36図6・8)は磨凹石でいずれも両面に磨面と片面に1箇所のかほみがある。Kc3(36図7)は磨石である。Kd1(36図9)は両面の一部と側面を面取りした粘板岩製の板状の石製品で、石剣或いは石刀の切先部を何かしらに転用したものと考えられる。



編號	土色	土層	備考	編號	土色	土層	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒、V層ブロックを少量含む	P13	10YR4/4 褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒、V層ブロックを少量含む
2	10YR/4 褐色	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む	P14	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒・V層ブロックを少量含む
3	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒、V層ブロックを少量含む、焼土ブロックを含む	P15	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒を微量含む
P1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物粒を微量、径1cm内の焼土ブロックを少量含む	2	10YR3/4 褐色	シルト	炭化物粒・V層ブロックを少量含む
P2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土粒を微量含む	P16	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土ブロックを少量含む
P3	10YR3/3 暗褐色	シルト	上半にV層ブロックを少量含む	P17	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	シルト
P4	10YR3/3 暗褐色	シルト	上半に焼褐色シルト、下半にV層ブロックを少量含む	P18	10YR4/6 褐色	シルト	シルト
P5	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物粒を少量含む	P19	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物粒・径1cm内の焼土ブロックを少量含む
P6	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物粒を微量含む	P20	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒を微量含む
P7	10YR3/4 暗褐色	シルト	V層ブロック、炭化物粒を微量含む	2	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	粘土質シルト
P8	10YR2/3 暗褐色	シルト	下半にV層ブロックを少量含む	P21	10YR3/3 暗褐色	シルト	シルト
P9	7.5YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒を微量含む	P22	10YR3/4 暗褐色	シルト	径1cm内の焼土ブロックを少量含む
P10	10YR3/3 暗褐色	シルト	下半にV層ブロックを少量含む	P23	10YR3/2 暗褐色	シルト	炭化物粒を少量含む
P11	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒を微量含む	P24	10YR2/3 暗褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒を微量含む
2	10YR4/4 褐色	シルト	径2cm内のV層ブロックを含む	P25	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	粘土質シルト
P12	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土粒を微量含む				

第35図 1号竪穴住居跡



採取番号	発掘番号	出土地区	出土層位	種別	素材	部位	外周形状・文様	内面形状	備考	図録番号	
36-1	A 1	SI 1	1	縄文土器	磁器	口縁部	化輪			14-8	
36-2	A 2	SI 1	1	縄文土器	磁器	底面	2字弁		2字弁	15-6	
36-3	A 3	SI P 4		縄文土器	磁器	底面	多角化輪		ナブ	15-3	
図録番号	発掘番号	出土地区	出土層位	種別	素材	部位	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	行程	備考	図録番号
56-4	Ka 11	SI 1		磁器	磁器	石鏃	25.5 × 12.5 × 3.8	0.9	踏貫貫刺	底面に比べ先端部が幅広い	15-13
56-5	Ka 10	SI 1		磁器	銅片石器	石鏃	90.5 × 28.0 × 8.9	11.9	踏貫貫刺	石鏃上半は刺先部の刃部	16-4
56-6	Kc 2	SI 1		磁器	燧石部	燧石	105 × 85 × 42	585	安山岩	磨：両面・右彫削 刺：裏面(1)	17-2
56-7	Kc 3	SI 1 P20		磁器	燧石部	燧石	112 × 87 × 31	380	安山岩	磨：両面・上彫削 刺：裏面(1)	17-7
56-8	Kc 1	SI 1		磁器	燧石部	燧石	130 × 79 × 39	665	安山岩	磨：両面・両彫削 刺：裏面(1)	17-1
56-9	Kd 1	SI 1		石製基	不明	不明	50 × 25 × 9	0.02	鉄板刺	石製か石片からの利用品の可能性あり	17-10

第36図 1号竪穴住居跡出土遺物

2) 土坑

十坑は7基確認した。中にはピットと比較し小型のものも含まれるが、ピットとの違いは規模、形状のみならず、堆積上の相違を考慮し認定した。

SK 1 土坑

南部の西壁にかかる形で検出した。1号住居跡を切り、またP40に切られる。東南部のみの確認であることから、形状は不明で、西壁部での長さは155cm、深さは25cmである。壁面はやや緩やかに立ち上がり、底面は一部にくぼみがみられるもののほぼ平坦である。堆積土は2層で、いずれも自然堆積の暗褐色シルト上である。出土遺物は縄文土器、卵石1点がある。

SK 2 土坑

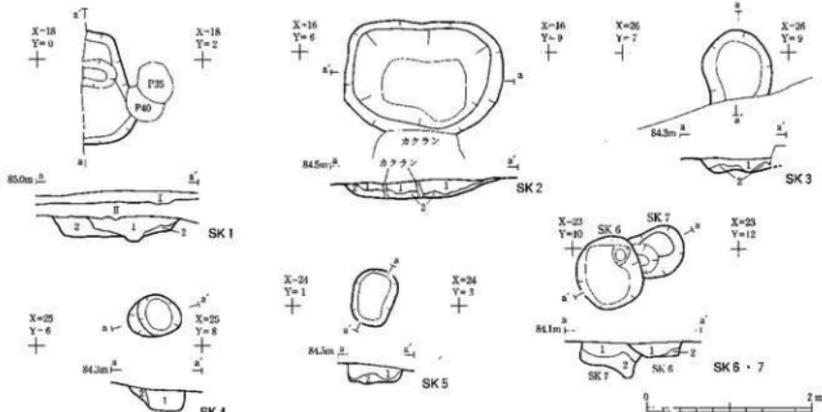
中央部で検出し、重複は無い。形態は東西の長軸190cm、南北の短軸140cm程度で、深さは最も深い箇所まで22cmである。壁面は特に東側でかなり緩やかに立ち上がり、底面は中央部がやや平坦である。堆積土は2層で、いずれも自然堆積とみられ、1層下面の起伏が著しい。他の十坑と比較すると形状の整った十坑といえる。出土遺物は縄文土器がある。

SK 3 土坑

南端部の南壁にかかる形で検出した。重複は無い。北半部のみの検出であることから形状は不明であるが、幅は70~85cmの楕円形状の土坑とみられる。深さは12~18cmである。壁面はわりと緩やかに立ち上がり、底面はさほど平坦ではない。堆積土は2層で自然堆積とみられる。出土遺物は剥片1点がある。

SK 4 土坑

南部中央で確認した。重複は無い。形態は西側にやや張り出す円形で、長軸65cm、短軸42cmと小型で、深さは25cmである。壁面は東側で直立気味である反面、西側はやや緩やかとなる。堆積土は2層で、いずれもV層ブロックを少量含むが自然堆積層とみられる。出土遺物は縄文土器、二次加工のある剥片1点、剥片4点がある。



遺構・層位	土色	土層	備考	遺構・層位	土色	土層	備考
SK 1 1	10YR3/3 暗褐色	シルト	1層1cm中の塊状ブロック、炭化物を少量含む	SK 4 2	10YR4/6 暗褐色	シルト	V層土を小ブロック状に含む
SK 1 2	10YR3/4 暗褐色	シルト	V層土をブロック状に含む	SK 5 1	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物・焼土層を少量含む
SK 2 1	10YR2/7 暗褐色	シルト	焼土層を少量含む。下面に乱れあり	SK 5 2	10YR3/4 暗褐色	シルト	V層土を小ブロック状に含む
SK 2 2	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土層を少量含む	SK 6 1	10YR2/4 暗褐色	シルト	炭化物を少量含む
SK 3 1	10YR2/4 暗褐色	シルト	焼土層を少量含む	SK 6 2	10YR4/4 暗褐色	シルト	V層土を小ブロック状に含む
SK 3 2	10YR4/4 暗褐色	シルト	焼土層を少量含む	SK 7 1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物・焼土層を少量含む
SK 4 1	10YR2/2 暗褐色	シルト	炭化物・焼土層を少量含む。下に1層16cmのブロック状の層あり	SK 7 2	10YR3/3 暗褐色	シルト	径3cm中のV層土を小ブロック状に少量含む

第37図 土坑

SK5 土坑

南部の住居跡南側で確認した。重複は無い。形態は楕円形で、南北の長軸70cm、東西の短軸53cmで、深さは22cmである。壁面は全周して直立気味に立ち上がり、底面は狭いが平坦である。堆積土は2層で、いずれも自然堆積土とみられる。出土遺物は縄文土器がある。

SK6 土坑

南部のやや東寄り確認した。SK7を切っている。形態は楕円形とみられ、東西の長軸65cm、南北の短軸60cm、深さは17cmである。壁面は東側が直立気味なのに対し、西側は緩やかとなる。底面には若干の段差があり平坦ではない。堆積土は自然堆積とみられる2層で、大部分を占めるのは暗褐色シルトの1層である。出土遺物は無い。

SK7 土坑

南部のやや東寄り確認した。SK6に切られている。形態は円形に近い楕円形で、南北の長軸85cm、東西の短軸80cm、深さは北側で30cm程度であるものが南側では部分的に40cm以上に深くなっている。壁面は全体に直立し、一部オーバーハングする箇所もある。堆積土は2層で、2層は径3cmものV層をブロック状に多量含むもので、人為的に埋められた可能性もある。出土遺物は二次加工のある剥片2点がある。

3) ビット

調査区全域にわたり計72基のビットを確認した。ビットは北・中部では散在するのに対し、南部ではわりと密度が高い分布状況といえる。調査では明らかに後世の擾乱や木根によるものと判断したもの以外で、形状が整い、一定の深さを有するものをビットとして取り上げ、何かしら人為的な遺構に関係する可能性のあるものとしたが、これ

No.	層位	土色	土性	備考	No.	層位	土色	土性	備考	
1	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	褐色土層をばらち	35	1	10YR2/3 暗褐色	粘土質	縦長粒状・V層ブロックを少量含む	
	2	7.5YR4/4 褐色	シルト	V層ブロックを含む	36	1	10YR4/4 褐色	シルト	径1cm程度のV層ブロックを少量含む	
2	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	V層ブロックを含む	41	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径1-2cm程度のV層ブロックを含む	
3	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	径2cm程度のV層ブロックを含む	42	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	下部にV層ブロックを少量含む	
4	1	10YR4/4 褐色	シルト	下部にV層ブロックを含む	43	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	下部にV層ブロックを含む	
5	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	下部にV層ブロックを含む	44	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	径1cm程度のV層ブロックを含む	
6	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	下部に10YR2/3暗褐色土を含む	45	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	塊土を少量含む	
7	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径1cm程度の褐色土ブロックを少量含む	2	7.5YR4/4 褐色	シルト	炭化物を少量含む		
	2	7.5YR4/4 褐色	シルト	径2cm程度の褐色土ブロックを少量含む	86	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	V層ブロックを含む	
	3	7.5YR3/4 暗褐色	シルト		47	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	塊土・炭化物を少量含む	
8	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		48	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	下部に炭化物ブロックがみられる	
9	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		49	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	V層ブロックを含む	
10	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		50	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を少量含む	
11	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	V層ブロックを含む	51	1	7.5YR2/2 写色	シルト	塊土・炭化物を少量含む	
12	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	下部にV層ブロックを含む	52	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	V層ブロックを含む 遠方に心礎がみられる	
13	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	下部に径2cm程度のV層ブロックを含む	53	1	10YR4/4 褐色	シルト	下部にV層ブロックを少量含む	
14	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		54	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	中部に径2cm程度のV層ブロックを少量含む	
15	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	下部にV層ブロックを含む	55	1	7.5YR2/2 写色	シルト	径2cm程度のV層ブロックを含む	
16	1	7.5YR4/4 褐色	シルト		56	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	塊土・炭化物を少量含む	
17	1	10YR2/4 暗褐色	シルト	下部にV層ブロックを少量含む	57	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	下部にV層ブロックを少量含む	
18	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	下部に径2cm程度のV層ブロックを含む	58	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を少量含む 遠方に心礎がみられる	
19	1	10YR4/4 褐色	シルト		59	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	遠方に径2cm程度のV層ブロックを少量含む	
20	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		60	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	塊土・炭化物を少量含む	
21	1	10YR4/4 褐色	シルト		1	2	7.5YR4/4 褐色	シルト		
22	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	部分的にV層小ブロックを少量含む	61	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径1-2cm程度の褐色土ブロックを含む	
23	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		2	7.5YR4/4 褐色	シルト			
24	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		62	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を少量含む	
25	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	V層ブロックを少量含む	63	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	径2cm程度のV層ブロック、塊土を少量含む	
26	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	径1cm程度のV層ブロックを含む	64	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	径1cm程度のV層ブロックを少量含む 炭化物を少量含む	
27	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	V層ブロックを含む	65	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	下部に10YR2/3暗褐色土ブロックを含む	
28	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	径2cm程度のV層ブロック、塊土・炭化物を少量含む	1	66	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	(16号坑内)
29	1	10YR2/3 暗褐色	シルト		66	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を多く含む	
30	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	遠方に塊土を少量含む	2	7.5YR4/4 褐色	シルト	塊土・炭化物を少量含む		
31	1	10YR2/4 暗褐色	シルト	下部に炭化物を少量含む	67	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		
32	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	下部に炭化物を少量含む	2	7.5YR2/2 写色	シルト			
33	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	下部に径2cm程度のV層ブロックを少量含む	68	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物・塊土を多く含む	
34	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	下部に径2cm程度のV層ブロックを含む (16号坑内)	69	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を少量含む	
35	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	塊土を少量含む	2	10YR4/4 褐色	シルト	上部をV層ブロック状に含む		
36	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	均質	70	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物・塊土を少量含む	
37	1	10YR3/4 暗褐色	シルト		71	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径2cm程度のV層ブロックを少量含む	
38	1	7.5YR4/4 褐色	シルト		72	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	10YR3/4暗褐色土ブロックを少量含む	
					2	10YR3/4 暗褐色	シルト			

ビット土層目録表

らの中でもなお自然のものか否かを判別するのは難しい。今回の調査においてはピットの組み合わせ等により建物などを復元するには至らなかった。各ピットの堆積土の注記は表の通りである。

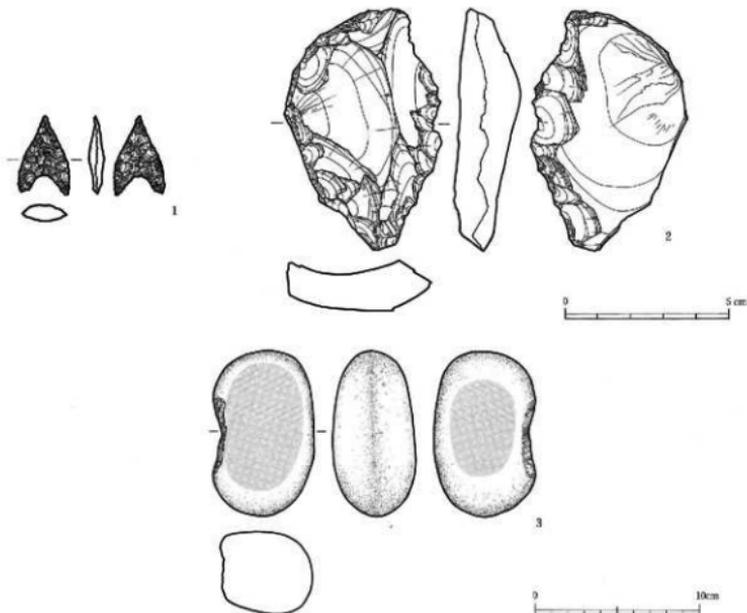
出土遺物は堆積土中より縄文土器が少量、石鏃1点、不定形石器1点、二次加工のある剥片2点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片1点、磨凹石1点、磨石1点、蔽石の可能性のあるもの1点がある。

Ka42 (38図1) は無茎の石鏃で、基部の挟りがU字形で、先端部がかなり細くなっている。Ka38 (38図2) は石鏃全体に両面からの交互剥離による鋸歯状の刃部となる不定形石器である。Kc8 (38図3) は両面に磨面のある磨石である。

4) 基本層ほかの出土遺物

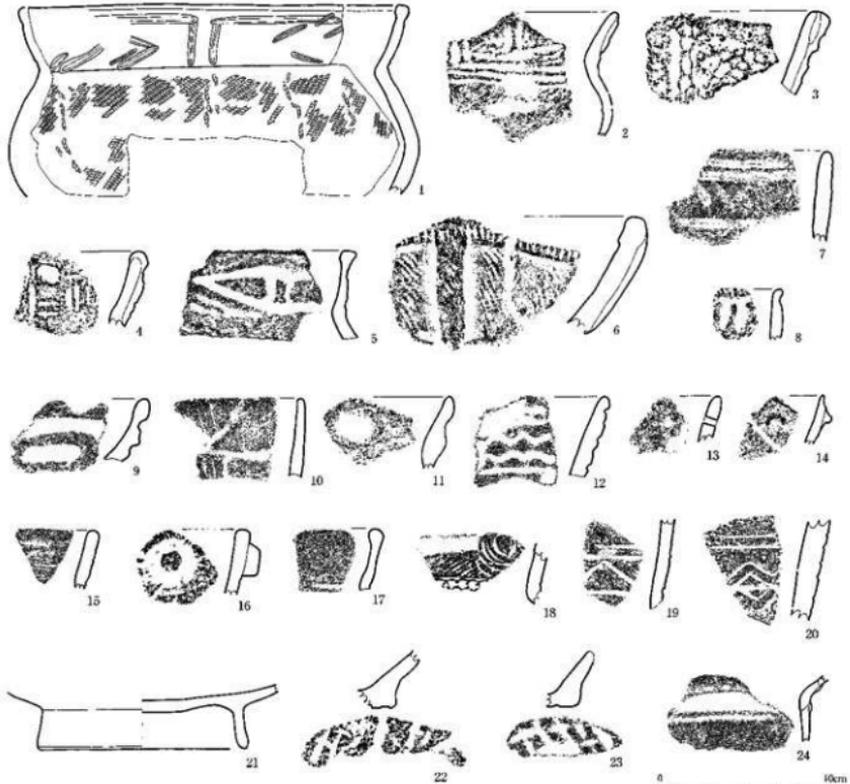
遺構外での出土遺物は、基本層ならびに倒木痕、攪乱等からのもので、縄文土器、弥生土器、剥片石器、礫石器、石製品、土製品がある。出土数としては上器のほとんどが縄文土器である他、弥生土器が僅かに1点、石匙5点、尖頭器2点、不定形石器23点、石核2点、二次加工のある剥片27点、微細剥離痕のある剥片14点、剥片47点、磨凹石6点、磨石7点、凹石1点、石皿1点、板状皿1点、磨製石斧1点、円盤状土製品1点である。

第39図1~24は縄文土器である。ほとんどが小破片で、全体を復元することは出来ないが、その多くは深鉢とみられる。口縁部形状は突起の取り付くものや、一部がやや高まる波状口縁のほか平口縁がある。また突起直下には縦位の幅のある隆帯のあるもの、円形の貼付のあるもの、穿孔のあるもの、指頭丘痕のあるものなどがある。



図録番号/発掘番号	出土地区	出土層位	材質	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考	写真図録番号
38-1	Ka42	P72	埋土	剥片石器	30.4 × 15.3 × 4.8	6.9	碧玉		15-14
38-2	Ka38	P58	埋土	剥片石器	74.0 × 43.0 × 14.5	32.9	凝灰岩	右側全体が大きな交互剥離による刃部	16-9
38-3	Kc8	P71	埋土	礫石器	102 × 62 × 51	51.6	安山岩	磨:両面	17-8

第38図 ビット出土遺物



図録番号	発掘番号	出土地区	出土層位	種類	器種	器形	外装文様・文様	内面文様	備考	図録番号
39-1	A 20	個人蔵 I	I	縄文土器	深鉢	口縁部-深鉢	沈線 斜線乱文文	ミガキ		14-1
39-2	A 9	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部-深鉢	沈線 平行・口縁沈線	ナデ		14-2
39-3	A 21	I	II	縄文土器	深鉢	口縁部	口縁部点し状垂書 腹帯下に斜線区画	ミガキ		14-3
39-4	A 18	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	腹帯上に刻み 知沈線			14-4
39-5	A 6	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	沈線			14-6
39-6	A 11	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	口縁部刻み 小突起下に沈線 山溝文	ミガキ		14-5
39-7	A 4	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	浅い平行沈線・斜沈線	ミガキ		14-7
39-8	A 17	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	沈線・斜沈線	ナデ		14-9
39-9	A 5	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	沈線			14-10
39-10	A 15	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	平行沈線			14-11
39-11	A 12	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	短周部に凹面片状	ナデ		14-12
39-12	A 19	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	平行沈線・平行斜形沈線	ナデ		14-13
39-13	A 8	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	斜形部に凸出			14-14
39-14	A 14	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	小突起下に半円形貼付			14-15
39-15	A 28	個人蔵 2	I	縄文土器	深鉢	口縁部	多色縦沈線			14-16
39-16	A 13	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	小突起下にボタン状貼付			14-17
39-17	A 20	個人蔵 2	I	縄文土器	深鉢	口縁部		ナデ		14-18
39-18	A 7	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	湾心円状沈線 斜突 山溝文	ナデ		15-1
39-19	A 10	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	沈線	ナデ		15-2
39-20	A 16	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部	平行沈線・平行斜形沈線			15-4
39-21	A 27	個人蔵 2	I	縄文土器	台付浅鉢	底部				15-7
39-22	A 20	個人蔵 2	I	縄文土器	深鉢	底部				15-8
39-23	A 22	個人蔵 2	I	縄文土器	深鉢	底部				15-9
39-24	A 25	個人蔵 1	I	縄文土器	深鉢	腹帯-縁部 平行沈線				15-5

第39図 基本層ほかの出土遺物 (1)



図録番号	発掘番号	出土層位	出土位置	種別	形状	長さ	外周図解・文様	内面図解	備考	写真番号
40-1	11	1	外周上部	体部	平行沈線	ミガキ				15-11
40-2	12	2	深土層	体部	山形沈線					15-10
40-3	13	1	外周	体部	波状沈線					15-12

第40図 基本層ほかの出土遺物(2)

A23 (1) は最も大きい破片資料で、平口縁の深鉢である。頸部は「く」の字形に屈曲し、体部は上方に最大径をもち球胴状に膨らむ。下半部は残存しないが、円筒状になるものとみられる。口縁部は肥厚している。口縁直下に横位の沈線と、頸部との間には縦位の2本の平行沈線や横向きの山形沈線が連続している。体部は球胴全体に縦位の結節縄文が施される。A9 (2) は先の尖った突起下に縦位の隆線のほか、突起部以外に2本1対の細い隆線があり、頸部には平行沈線や山形の沈線がみられる。A21 (3) はわずかに高い波状口縁の頂部下に指頭圧痕を連続した縦位の隆帯があり、口縁部全体が外側に折り返すような形状で厚くなっている。A18 (4) は幅のある縦位の隆帯上に横位の刻目があり、頸部の横位隆帯と接続している。A11 (6) は突起下に長めで幅のある隆帯を配し、口縁部から頸部にかけて縄文が施され口縁部外側に連続する刻目がある。また内面の口縁下には段がみられる。A13 (16) は突起直下に厚みのあるボタン状の貼付があり、その周囲に燃り糸圧痕がみられる。A14 (14) は突起部に小さな半円形の貼付がみられ、器厚はかなり薄いものである。A12 (11) は肥厚した波状口縁部に指頭圧痕状のくぼみがみられる。A8 (13) は突起部に小さな穿孔が見られる。A5 (9) は口縁部の小突起が3個1対となる可能性があるもので、口縁直下に横位の太い沈線がみられる。

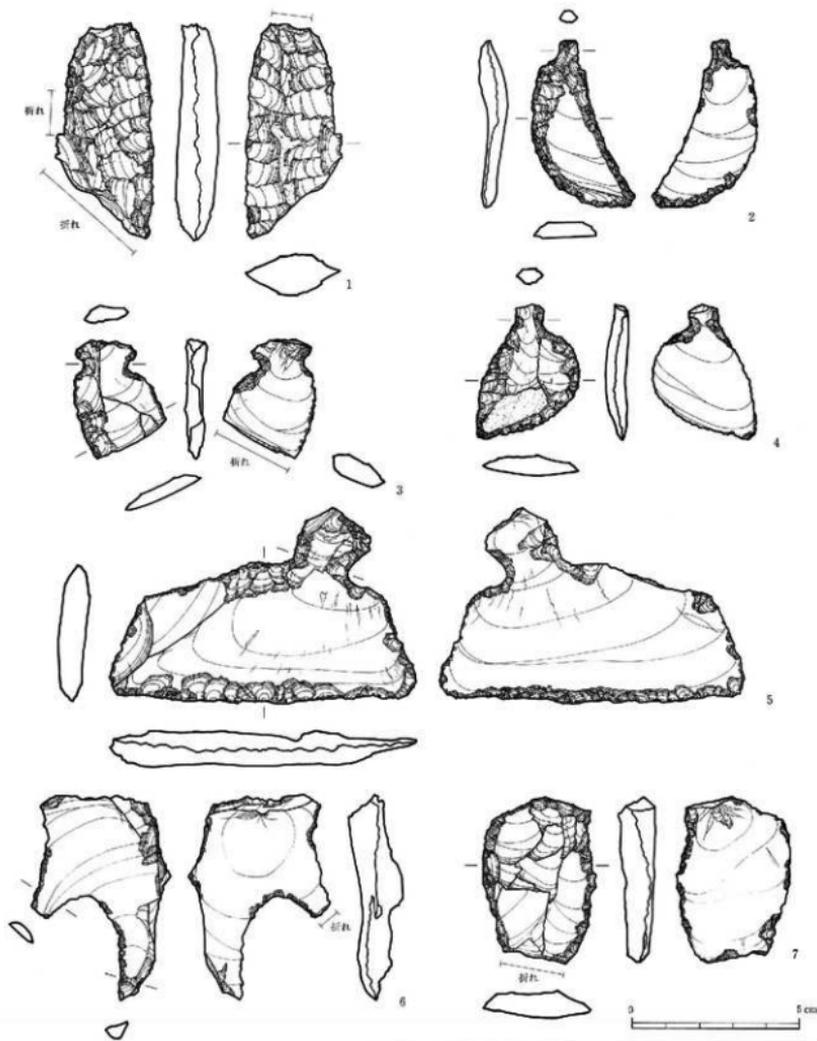
また上記以外には平口縁とみられる破片がいくつかある。A6 (5) は口縁端部が平坦で、頸部に太い沈線がみられる。A4 (7) は太く浅い横位の平行沈線と斜位の短沈線が連続している。A17 (8) は小破片であるが薄手の口縁部直下に横位の沈線のほか、爪形状の縦位の短沈線が並んでいる。A15 (10) は直立気味の薄手の頸部に細い平行沈線がみられる。A19 (12) は口縁部直下の平行沈線と頸部上の横位の沈線間にやはり横位の2本の平行波状沈線がみられる。A28・26 (15・17) はいずれも口縁部が肥厚するもので、A28 (15) は外面に横位の細い多条沈線がみられる。

体部破片としては、A7 (18) は口縁部から頸部にかけて同心円状の沈線がみられるほか、頸部には棒状の円形刺突具による連続刺突文が施される。またA10 (19) は平行沈線間に山形沈線、A16 (20) は半截竹管による横位の沈線、波状沈線がみられる。A25 (24) は薄手の小型深鉢とみられ、頸部を挟み横位2本の隆線がみられるが、形状、文様とも他の1器とは異なった感を受けるものである。

A27・20・22 (39図21・22・23) は底部資料である。A20・22の底部には網状痕がみられる。A27は台付浅鉢とみられ、薄く高めの台が取り付き、底部は球状でかなり薄いものである。

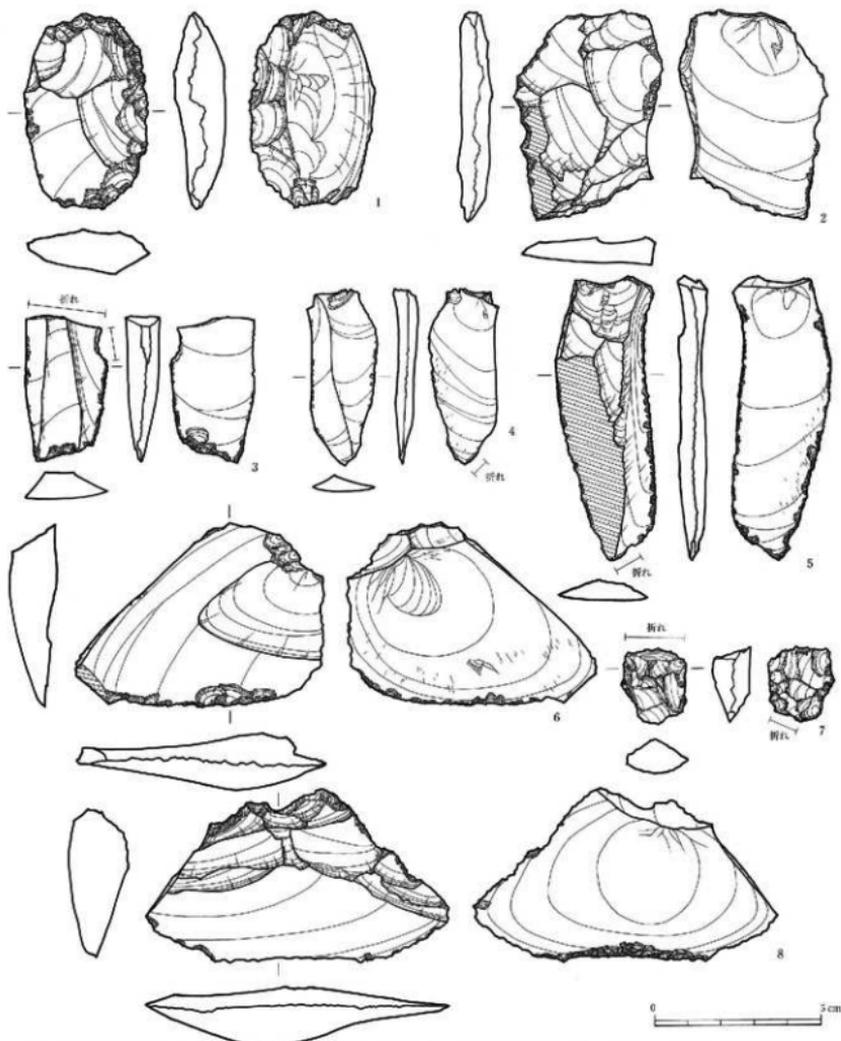
B1・2 (11図1・2) は弥生土器で、B1は器種は不明であるが3条の平行沈線と内外面にミガキが施された薄手の破片である。B2は口縁部が欠損した小型の蓋で、上面つまみはもたず裾部が急に広がっている。また全体が著しく被熱し焼けはじている。

第12・13図は剥片石器である。Ka128 (41図1) は先端部、基部側が欠損した尖頭器で、全面に平坦剥離、階段状剥離が施され、また全体に被熱している。Ka66 (41図2) は三日月形の縦型石匙で、背面に全周して急角度の刃部がみられる。Ka111 (41図3) は下部が欠損した縦型の石匙で、全体に薄手に平坦剥離や小剥離による刃部がみられる。Ka67 (41図4) はつまみ部が斜めに取り付く縦横中間型で、刃部は背面加工のみで一部で急角度とな



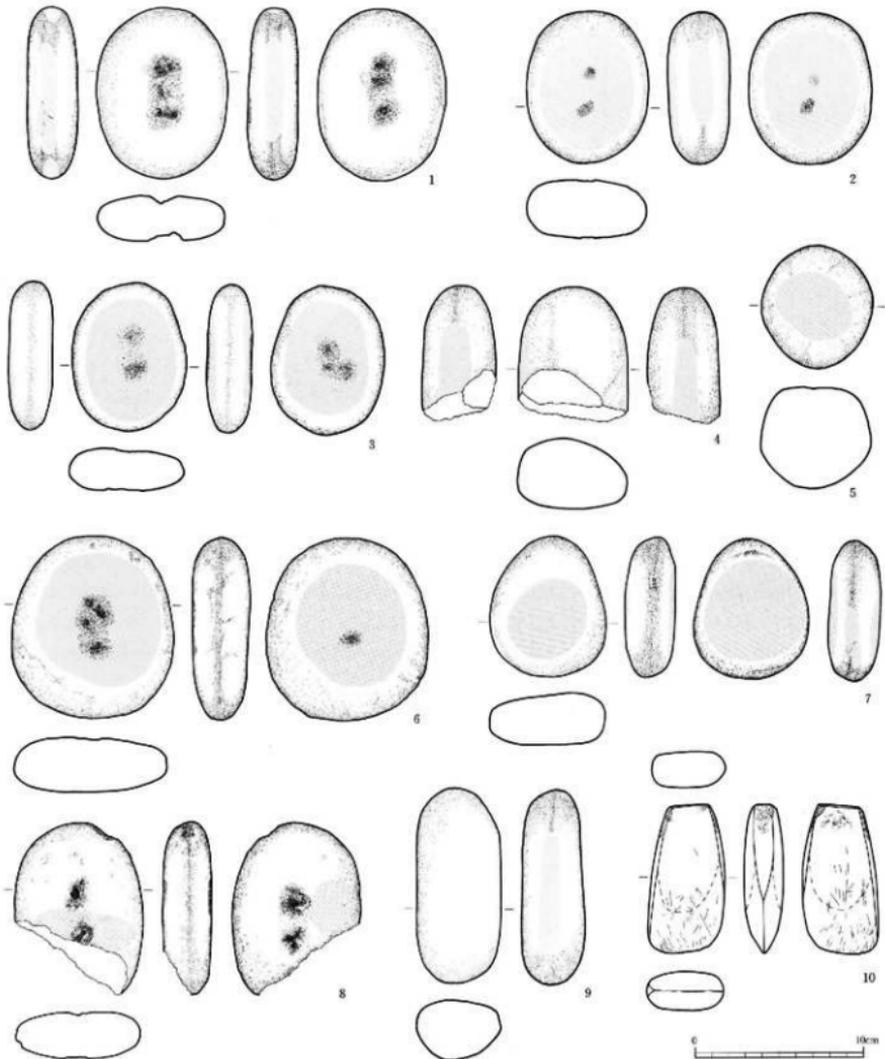
図録番号	図録番号	出土地区	出土層位	種別	器物	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	石材	特徴	考	図録番号
41-1	Ka 128		Ⅰ	葉心形	割片石部	66.0 × 29.0 × 12.5	19.0	変化緑閃石	先端・基部欠損	全周に平削加工	15-15
41-2	Ka 66		Ⅰ	割片石部	石部	51.0 × 31.0 × 6.2	7.1	緑閃石		三日月形 主に背面の全面加工。刃部は全体に急角状	15-16
41-3	Ka 111		Ⅰ	割片石部	石部	36.0 × 27.5 × 5.5	5.0	緑閃石		三日月形 背面左側に一様平削加工あり	15-18
41-4	Ka 67		Ⅰ	割片石部	石部	41.5 × 31.0 × 6.2	7.6	緑閃石		背面と腹壁の中間部 刃端以上に背面加工により一様急角状	15-17
41-5	Ka 37		Ⅰ	割片石部	石部	60.0 × 42.5 × 10.5	49.2	緑閃石		縁部 上部基部欠損 刃端に急角 下部刃部は突角状による	16-1
41-6	Ka 83		Ⅰ	割片石部	不安定石部	63.0 × 42.0 × 12.5	21.9	緑閃石		二つの突出部間に二尖加工あり	16-6
41-7	Ka 88		Ⅰ	割片石部	不安定石部	51.0 × 31.5 × 6.5	19.4	緑閃石		下部欠損 左側背面は急角状の刃部	16-3

第41図 基本層ほかの出土遺物（3）



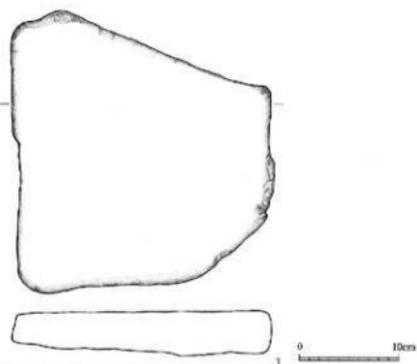
図版番号/発掘番号	出土地区	出土層位	種類	器種	長さ×幅×高さ (mm)	重量 (g)	石材	備考	図版番号
42-1 Ka 106	1	割片石器	不定形石器	60.0 × 37.5 × 14.5	32.9	流紋岩	上・下・右側に両面からの交互刃痕による刃部あり	16-2	
42-2 Ka 95	1	割片石器	不定形石器	64.0 × 45.0 × 8.5	30.1	結晶質岩	右側欠損 部分的に小副刃による二次加工あり	16-3	
42-3 Ka 99	1	割片石器	不定形石器	43.0 × 25.0 × 9.7	10.7	結晶質岩	主に右側刃部と下部両面に二次加工あり 上部欠損	16-8	
42-4 Ka 98	1	割片石器	側面磨削の石器	34.0 × 21.0 × 6.4	5.3	結晶質岩	両側に部分的な側面刃痕あり	16-11	
42-5 Ka 115	層中層	割片石器	不定形石器	87.0 × 30.0 × 7.0	19.6	地質質岩	両側・両面に小副刃による刃部が連続している	16-7	
42-6 Ka 96	1	割片石器	不定形石器	65.0 × 70.0 × 10.0	49.2	結晶質岩	主に下部に両面からの二次加工あり	16-11	
42-7 Ka 90	1	割片石器	不定形石器	23.0 × 19.3 × 11.0	24.7	結晶質岩	上部欠損 腹面にやや平面的部あり	16-19	
42-8 Ka 101	1	割片石器	不定形石器	81.0 × 54.0 × 18.3	63.0	結晶質岩	下部側面中央部に急角度の刃部あり	16-12	

第42図 基本層ほかの出土遺物(4)



探検番号	登録番号	出土部位	出土層位	種類	部 類	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	石 質	組	考	写真番号
43-1	Ke 15		I	磨石器	磨石	103 × 78 × 29	365	安山岩	磨:全横面 凹:両面 (3×3)		17-4
43-2	Ke 12		I	磨石器	磨石	83 × 74 × 37	375	安山岩	磨:両面・両横面 凹:両面 (2×2)		17-3
43-3	Ke 15		自然石	磨石器	磨石	91 × 60 × 27	252	安山岩	磨:両面 凹:両面 (2×2)		17-5
43-4	Ke 16		自然石	磨石器	磨石	83 × 66 × 43	382	安山岩	磨:両面 欠損		17-10
43-5	Ke 11		I	磨石器	磨石	75 × 66 × 43	430	安山岩	磨:上面 全体表面で一部剥落		17-9
43-6	Ke 22	奥木塚4		磨石器	磨石	112 × 87 × 34	400	安山岩	磨:両面 凹:両面 (2×1)		17-6
43-7	Ke 24	浅丸		磨石器	磨石	86 × 60 × 31	300	安山岩	磨:両面・左横面		17-11
43-8	Ke 25	浅丸		磨石器	凹石	105 × 78 × 29	309	安山岩	凹:両面 (2×2)	一部剥落 欠損	17-13
43-9	Ke 9		I	磨石器	磨石	120 × 81 × 38	395	安山岩	磨:右横面		17-12
43-10	Ke 2		I	石製品	磨石片	91 × 45 × 23	166	緑泥石片質 赤褐色・緑行葉状石			17-15

第43図 基本層ほかの出土遺物 (5)



国庫番号	学館番号	出土地区	出土層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備 考	写真撮影番号
44-1	Kc 26		1	礫石器	灰刃片	290×263×65	5,930	安山岩	器：表面 製法の一部に砥打痕あり	17-14

第44図 基本層ほかの出土遺物 (6)

る。Ka57 (41図5) は大型の横型石器で、ほぼ全周して刃部が形成されるが、下部については全体が両面交互剥離による大きな刃部加工がみられる。Ka83 (41図6) は右側が欠損している不定形石器で、2つの突出部縁辺に小剥離による刃部がつくられている。Ka88 (41図7) は一部欠損している不定形石器で、全周して刃部を施していたものとみられる。Ka106 (42図1) は楕円形状の不定形石器で、主に右側に両面からの大きな交互剥離によるジグザグな刃部がつくられている。Ka95 (42図2) は部分的に背面小剥離による刃部がみられる不定形石器である。Ka49 (42図3) は上部が欠損した縦長剥片素材の不定形石器で、右側背面と下部両面に二次加工が施されている。Ka48 (42図4) は縦長の剥片で、二次加工痕はみられないが両側に微細な剥離痕のみが部分的にみられる。Ka115 (42図5) は縦長の剥片を用いた不定形石器で、両側両面にかなり小さな剥離による刃部が施されている。Ka98 (42図6) は主に下部に両面からの小さな交互剥離を施したジグザグな刃部をもつ不定形石器である。Ka93 (42図7) は上部欠損している不定形石器で、腹面の一部に平坦剥離による刃部がみられる。Ka101 (42図8) は下部腹面に急角度な刃部をもつ不定形石器である。

第43図は礫石器である。Kc13・12・15 (2・1・3) は磨凹石で、くぼみが両面に複数みられるものである。Kc11 (5) は上面のみに磨面のある磨石で、全体に被熱している。Kc25 (8) は凹石で、一部被熱している。Kc26 (44図1) は素材が安山岩質の板状の石皿で、片面のみに平滑な磨面があり、側面の一部に整形のためとみられる敲打痕がみられる。

Kd 2 (43図10) は全面研磨の磨製石斧で、柄装着部には敲打痕が残存する。稜線は不明瞭で、破壊後の研ぎ直しによるとみられる片べりの刃部である。

P 1 (40図3) は縄文土器片を利用した円盤状土製品で、方向の異なる縄文がみられる。側面に研磨痕はみられない。

5) 下層調査

遺構関係の調査終了後、旧石器時代の痕跡の有無を確認するため、V層以下の層を掘り下げる下層調査区を設定し、調査を行った。調査はほぼ中央部で遺構や倒木痕を避けた地点に東西7m、南北4mの調査区を設定し、人力により掘り下げていった。調査は深さ約1mのⅡ層中まで下げた後、範囲を4×2mに縮小し、最終的にはさらに1m程度下のX層上面まで掘り下げた。しかしながら先の調査同様、V層以下での遺物の出土は無かった。

6 まとめ

遺構

- ① 今回の3次調査では先の2度の調査隣接地を調査した結果、竪穴住居跡1軒、土坑7基のほか、多くのピットを発見した。調査地が尾根頂部から沢部への移行する傾斜地に位置することもあり、遺構密度は少ないものであった。遺構は西側の尾根頂部付近に集中するものと考えられる。
- ② 竪穴住居跡は残存状況が極めて悪く、また出土遺物も縄文土器や礫石器が少量出土したにすぎなかった。その時期については出土遺物からみて縄文時代の可能性も否定できないが、1次調査においては縄文時代の住居形状は方形基調、弥生時代は円形基調であった点を考慮すると、この住居跡の時期は弥生時代の可能性がある。
- ③ 土坑やピットについては小規模のものが多く、出土遺物もほとんど無いことから、時期及び性格については不明な点が多い。

遺物

- ① 出土遺物のほとんどは縄文土器、剥片石器、礫石器など縄文時代のものである。遺物は竪穴住居跡、4基の土坑、14のピットの堆積土中ほか、基本層中からのものであり、その中でも1層中出土のものが多く。
- ② 出土遺物の多くを占める縄文石器については、球胴形と円筒形の体部形状の深鉢や、口縁部を分割する突起や隆線、貼付文とそれらによる区画内の沈線文がみられる点、また体部に縦方向の結節縄文が施されるなどの点において、本遺跡2次調査や北前遺跡土坑群、長根貝塚出土資料や山田ノ台遺跡第Ⅶ群土器に類似することから、その時期は大木6式および大木7a式期の前期末葉から中期初頭のものと考えられ、これ以外の時期のものは含まれないものとみられる。
- ③ 石器は剥片類を含み161点の出土があった。内訳は石鏃2点、石匙5点、尖頭器2点、不定形石器26点、石核3点、二次加工のある剥片35点、微細剥離痕のある剥片18点、剥片70点で、不定形石器と石器の可能性のある二次加工のある剥片の占める割合が高い。これらはいずれも上器同様の時期のものと考えられ、種別ごとの出土割合がこの時期の出土傾向を示しているかは出土数が少ないことから判断しかねる。
礫石器は23点出土しており、内訳は磨凹石9点、磨石10点、凹石1点、敲石1点、石皿2点である。
- ④ 弥生土器の出土は2点のみで、時期については中期或いは後期と考えられる。

参考文献

- 宮城県教育委員会（1969）：『長根貝塚 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第19集
- 仙台市教育委員会（1982）：『北前遺跡』仙台市文化財調査報告書第36集
- 宮城県教育委員会（1986）：『小梁川遺跡』七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第117集
- 仙台市教育委員会（1987）：『山田上ノ台遺跡』仙台市文化財調査報告書第100集
- 仙台市教育委員会（2001）：『八木山緑町遺跡1・2次』『八木山緑町遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第253集



1 調査地



2 調査前状況

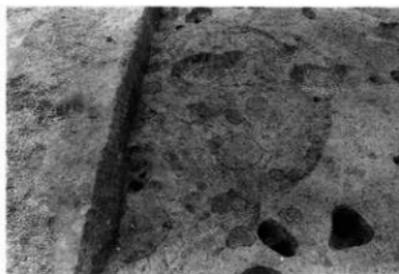


3 調査区全景 (南より)

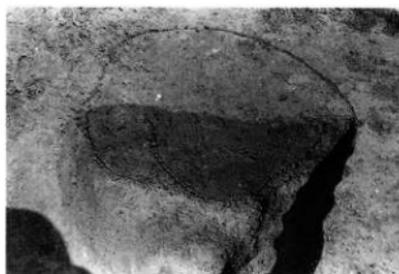


4 1号住居跡実掘全景
(東より)

図版11 調査区・1号住居跡



1 1号住居跡床面検出状況（南より）



2 1号住居跡P15断面状況（西より）



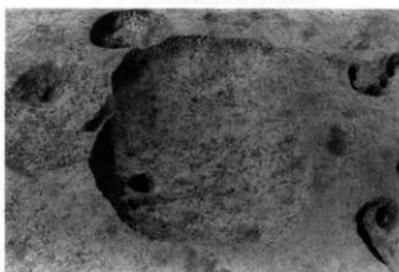
3 1号住居跡P3~7断面状況（南西より）



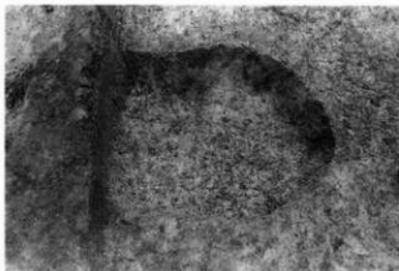
4 1号住居跡断面状況（東より）



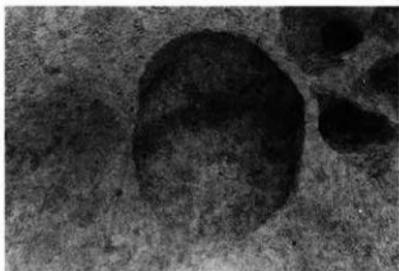
5 1号土坑掘込み状況（南東より）



6 2号土坑掘込み状況（東より）



7 3号土坑掘込み状況（東より）



8 4号土坑掘込み状況（東より）

図版12 1号住居跡・土坑



1 5号土坑完掘状況 (南より)



2 6号土坑完掘状況 (南東より)



3 7号土坑完掘状況 (南東より)



4 調査風景 (遠構掘込み)



5 調査区西壁断面状況 (南東より)



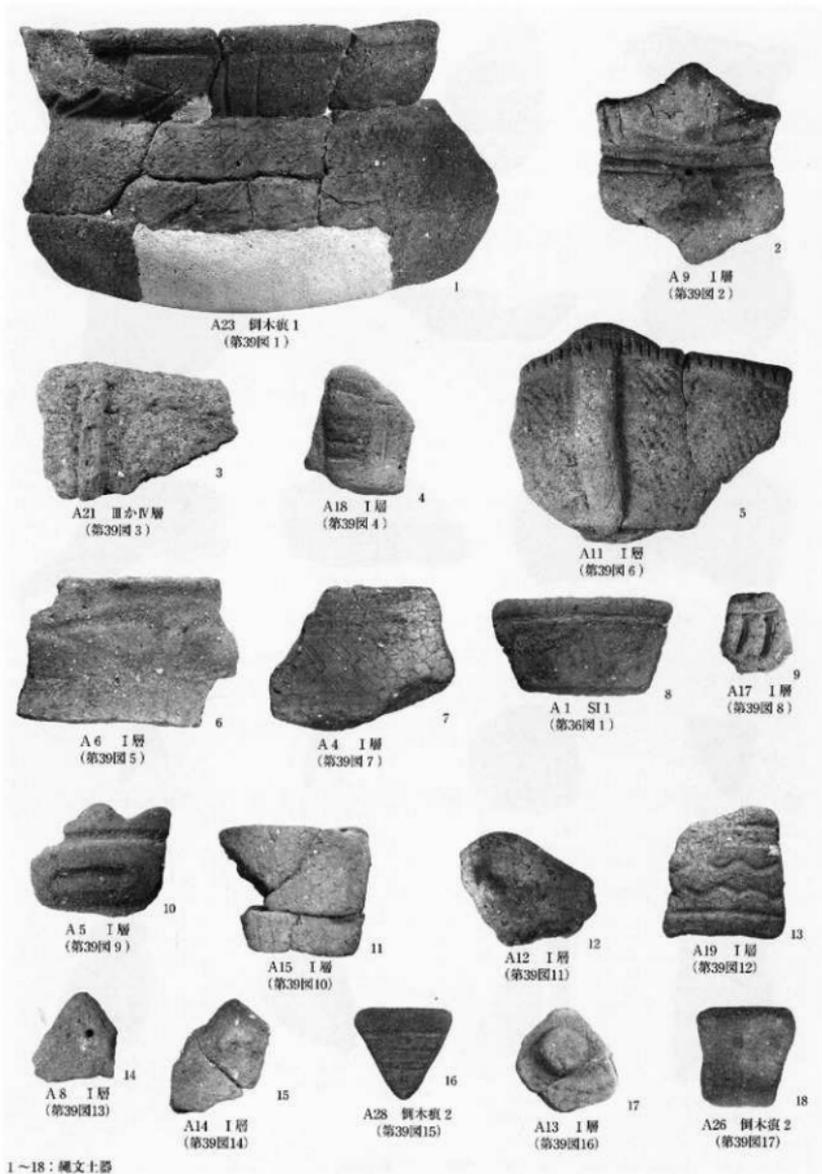
6 東側下層断面状況 (南東より)



7 下層調査区全景 (東より)



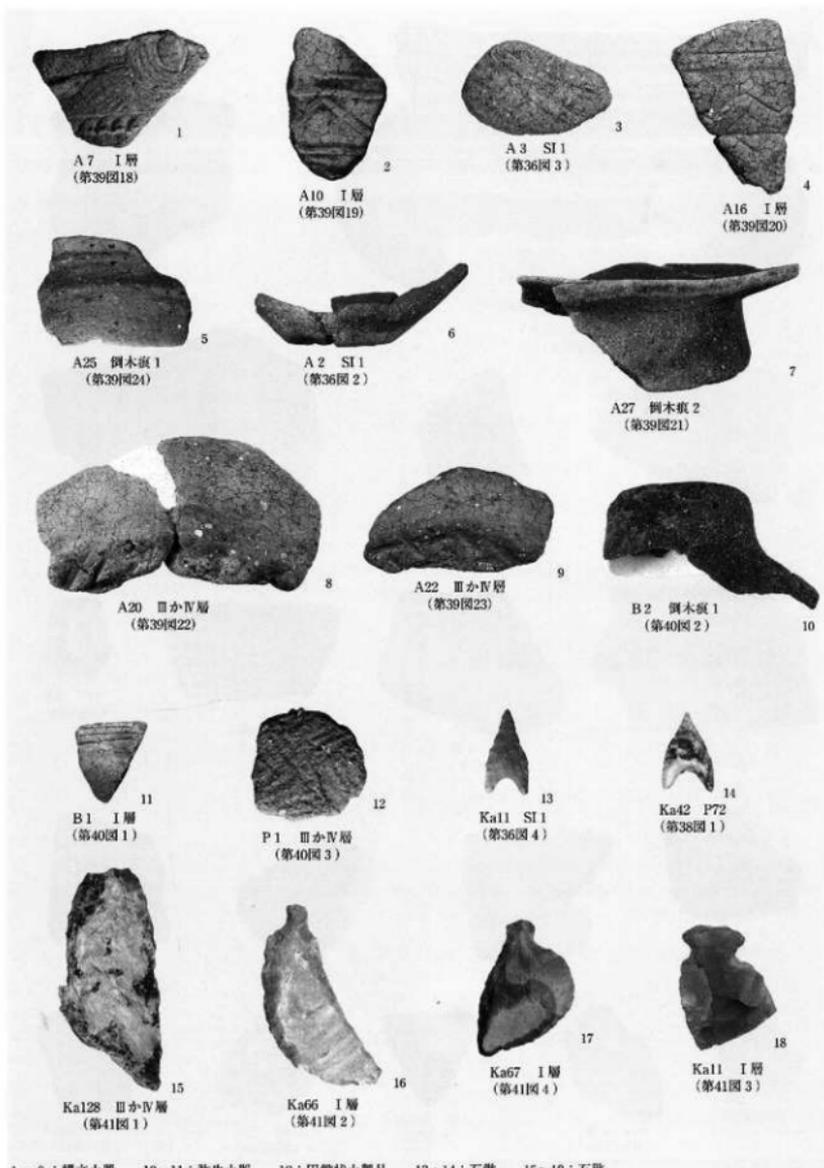
8 調査説明会



1～18：縄文土器

図版14 縄文土器

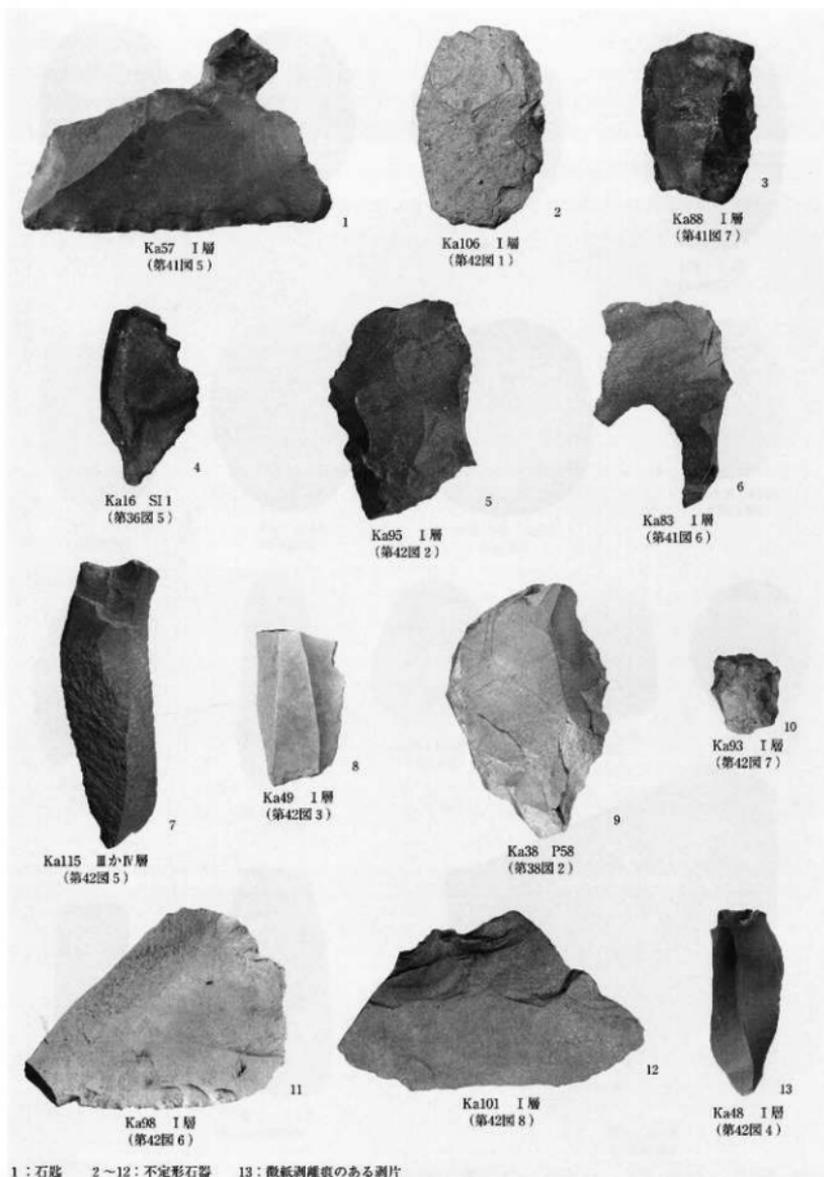
S=約1/2



1~9: 縄文土器 10~11: 弥生土器 12: 円盤状土製品 13・14: 石鏃 15~18: 石匙

図版15 縄文土器・弥生土器・土製品・剥片石器

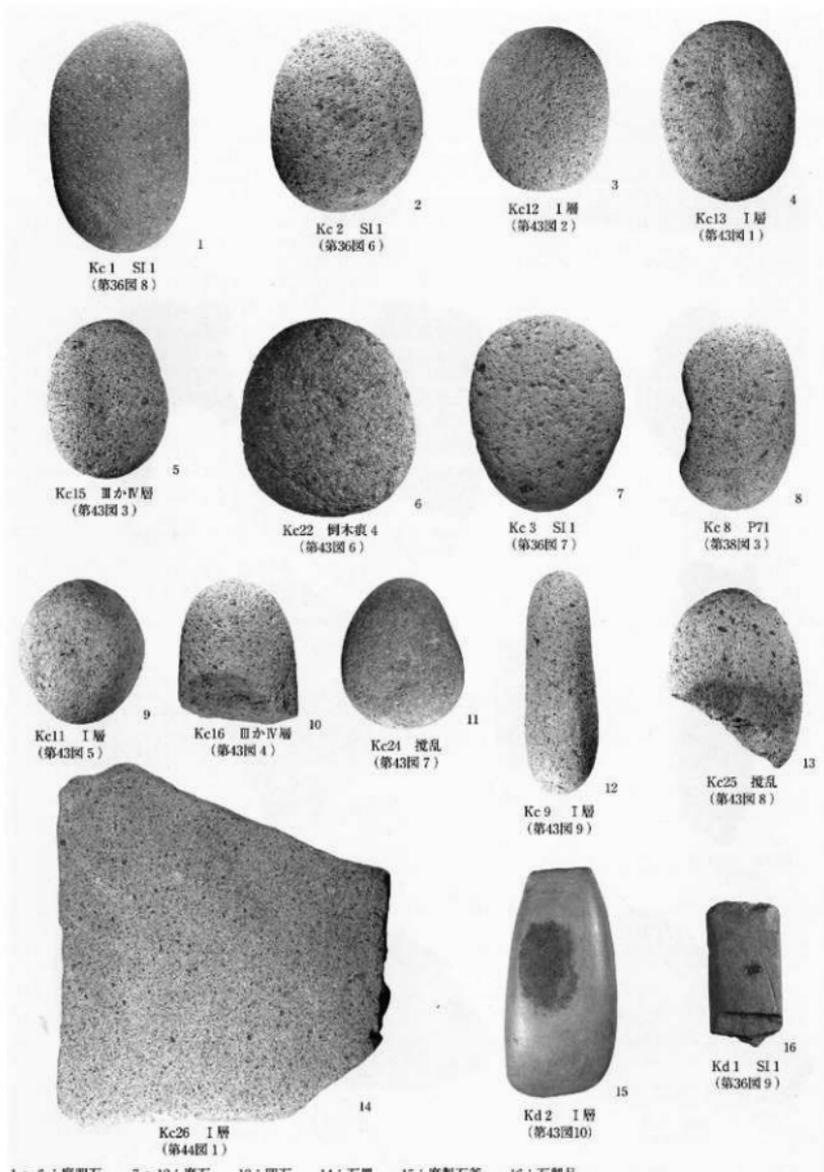
S = 約1/2 (土器・土製品)、
約2/3 (石器)



1：石匙 2～12：不定形石器 13：微紙剥離痕のある剥片

図版16 剥片石器

S = 約2/3



1~6:磨凹石 7~12:磨石 13:凹石 14:石皿 15:磨製石斧 16:石製品

圖版17 礫石器・石製品

S = 約1/3 (礫石器)、約1/4 (石皿)、約1/2 (石製品)

Ⅲ 庚申前窯跡発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	庚申前窯跡（宮城県遺跡番号01131）		
調査地点	仙台市宮城野区二の森131他		
調査期間	平成14年5月8日～5月9日		
調査対象面積	2,712㎡		
調査面積	87㎡		
調査原因	宅地造成工事		
調査主体	仙台市教育委員会		
調査担当	仙台市教育委員会（文化財課）		
担当職員	主任 渡部 紀	文化財教諭 加藤徳明	臨時職員 福寿規人

2 遺跡の位置と環境

庚申前窯跡は、仙台市北東部の標高100～50mの「台原・小田原丘陵」に所在する。台原・小田原丘陵は東北地方の南北に脊梁をなす奥羽山脈から、太平洋側に派生した七北田丘陵の東端部に位置している。台原・小田原丘陵一帯では、現在湮滅したものを含め約30ヶ所の窯跡群が発見され、これらの窯跡群は総称として「台原・小田原窯跡群」と呼ばれている。台原・小田原窯跡群は5世紀段階に大連寺窯跡で須恵器生産が行われ、その後6・7世紀代の生産は不明であるが、7世紀末頃からは、郡山遺跡・多賀城跡・陸奥国分二寺・燕沢遺跡等の官衙・寺院遺跡と関連した須恵器・瓦生産遺跡として操業と廃絶が繰り返されている。

同窯跡は、台原・小田原窯跡群の中央の丘陵南側斜面に位置する。標高は40m前後である。付近には与兵衛沼澤跡・二の森窯跡・横江遺跡・神明社窯跡などがあり、宅地化された地域にも多くの窯跡が存在した可能性がある。



第45図 庚申前窯跡と周辺の遺跡

庚申前窯跡の調査は、昭和44年に宅地造成工事の掘削斜面で窯跡が発見された際に、東北学院大学等によって行われている。5基の窯跡が検出され、5基のうち4基は地下式無階無段の登窯である。主に須臾器が生産されており、坏における製作技法の特徴などから8世紀前半から中葉頃の窯跡群と位置付けられている。

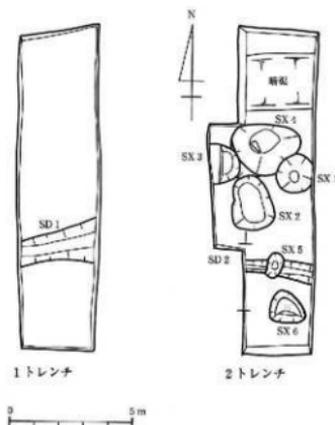
3 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成14年1月31日付けで、渡辺幸子氏より宅地造成計画の協議書が提出されたことにより実施した。開発区域は、遺跡登録範囲の北東部とその隣接地にあたる。記録保存の対象となる掘削は、現道から宅地分譲地への私道敷設工事と、分譲地の区画のための擁壁工事が実施されるため、道路部分に2本のトレンチ（1・2トレンチ）と、擁壁工事部分に2カ所のトレンチ（3・4トレンチ）を設定して調査を実施した。

測量は、任意の基準点で行った後、この基準点から周辺地区の地形を測量して調査区の位置を求めた。



第46図 開発区域と調査区配置



第47図 遺構配置図

4 基本層序

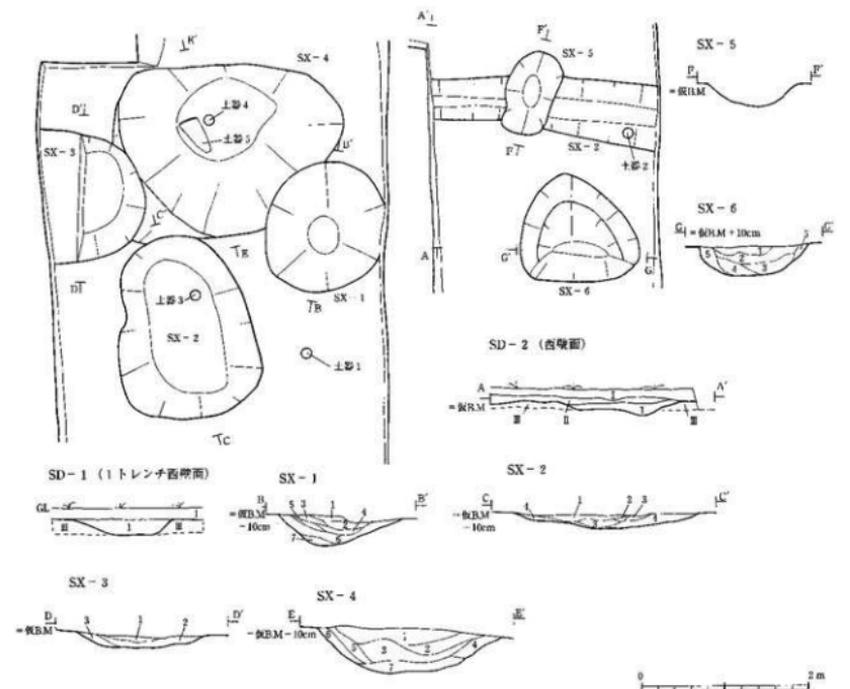
調査地点は、現況は比較的平坦な畑地となっている。基本層序は、Ⅰ層（表土）が黒褐色シルトの畑耕作土層、Ⅱ層がにぶい黄褐色のシルト層で、直径1cm以下の礫が多量に含まれている。旧表土層と観察される。Ⅲ層は明黄褐色の粘土質シルト層で直径5mm程度の礫を多量に含む。地山を形成し、Ⅲ層上面で遺構が検出されている。

5 検出遺構と出土遺物

1) 1トレンチ

溝跡が1条検出されている。

SD-1 溝跡 東西方向にのびる溝で、上面幅は1.1~1.8mである。断面形は浅い逆台形を基調とするが不整形で、底面には細かな起伏がある。堆積土は褐灰色のシルト1層である。出土遺物はない。



土層No.	土色	土質	備考
I	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	現在の掘削上。
SD-1	10YR4/1 黄灰色	シルト	径5cm以下の礎及び基本層直下のブロックを含む。
II	10YR2/6 暗黄褐色	粘り強いシルト	径5mm程度の礎を含む。

土層No.	土色	土質	備考
1	灰白色	シルト	灰白色火山灰
2	10YR6/2 灰黄褐色	シルト	基本層直下のブロックを少含む。
3	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	基本層直下のブロックを少含む。

土層No.	土色	土質	備考
I	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
II	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	径1cm以下の礎を含む。掘削土。
SD-2	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	径1cm以下の礎を多く含む。基本層直下のブロックを含む。

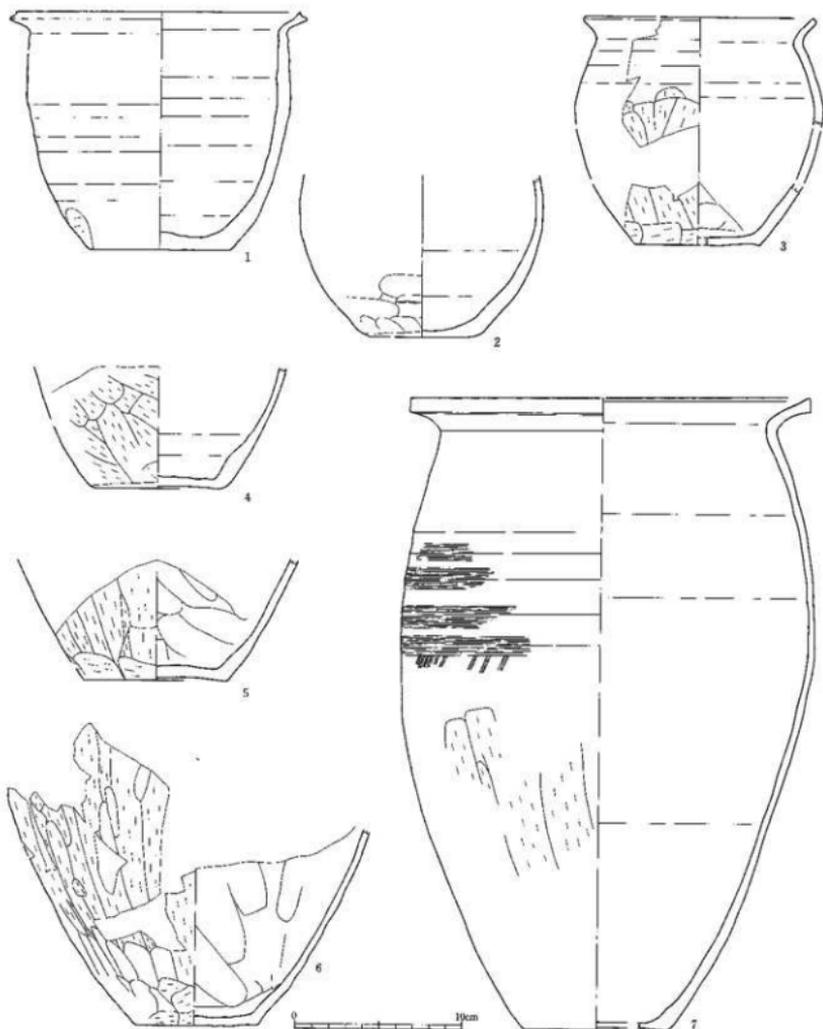
土層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	基本層直下のブロックを土下とする。
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	基本層直下のブロック(φ5cm以下)を多く含む。
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	基本層直下のブロックを含む。
4	10YR2/2 灰黄褐色	シルト	灰化物片を含む。
5	10YR1/2 灰白色	シルト	シマリあり。
6	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	シマリあり。
7	10YR7/8 黄褐色	粘土	灰白色の粘土を含む。

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	径3cm以下の黄褐色シルトのブロックを含む。
2	灰白色	シルト	1灰白色火山灰。基本層直下のブロックを含む。
3	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	
4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	
5	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	3層よりやや細かい。
6	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	
7	10YR4/4 褐色	シルト	

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR7/2 に近い黄褐色	砂質シルト	シマリは無い。
2	10YR4/1 黄褐色	シルト	にに近い黄褐色シルトのブロックを少含む。
3	10YR6/4 に近い黄褐色	シルト	シマリあり。
4	10YR6/4 に近い黄褐色	シルト	基本層直下のブロックを含む。シマリあり。
5	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	シマリあり。

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	基本層直下のブロックを少含む。
2	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	1灰白色火山灰。1のブロックを含む。
3	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	シマリあり。
4	10YR6/4 に近い黄褐色	シルト	土層No.2粘土

第48図 遺構実測図



図中 番号	受胎番号	出土区	出土層	遺物名	遺物種	取上No.	器名	器 種	径長・高 [口径・幅]	器底・厚 [底径・厚]	器型・装 飾 [器底・重量・素材・刷目・水取・取蓋・輪脚]	年代別	
1	D-7	2トレンチ	遺跡1	SD 2	埋土	No. 2	円口鉢	鉢	14.6	17.3	8.5	内外両口クロ染装 外周体部下位ヘラケズリ	20-1
2	D-1	2トレンチ		SX 1	埋土		円口鉢	鉢	(5.0)		6.4	内面口クロ 外周体部下位ナナデ	
3	D-2	2トレンチ		SX 2			円口鉢	鉢	14.0		7.6	内面口クロ・ナデ 外周口クロ・ヘラケズリ	
4	D-3	2トレンチ		SX 2	灰面	No. 3	円口鉢	鉢	(7.5)		7.6	内面口クロ 外周ヘラケズリ	
5	D-5	2トレンチ		SX 4		No. 5	円口鉢	鉢	(7.3)		8.7	内面ナデ 外周ヘラケズリ	
6	D-4	2トレンチ		SX 4		No. 4	円口鉢	鉢	(18.1)		7.3	内面ナデ 外周ヘラケズリ	20-2
7	D-6	2トレンチ		SX 4		No. 5	円口鉢	鉢	30.0	24.1	8.7	内面口クロ 外周上子口クロトキヘラケズリ	20-3

第49図 出土遺物実測図

2) 2トレンチ

溝跡1条と土坑状の遺構6基が検出されている。トレンチ北側には、暗渠排水のための溝状の掘り込みがある。

SD-2溝跡 東西方向にのびる溝跡で、上面幅は50~80cmである。断面形は不整形で北側がわずかに低くなっている。堆積土にはぶい黄褐色のシルト1層である。溝の南側壁面からは、Ⅲ層に入り込む状態で土師器の甕が出土している。(D-7:第49図1) SD-2溝跡に伴う遺物か他遺構の遺物が判然としないう。

SX-1遺構 直径150cm前後の円形の落ち込みである。検出面からの深さは36cmで、断面形は舟底状を呈する。堆積土は7層に分けられ、このうち2層には「灰白色火山灰」が塊状に堆積している。堆積土中から体部上半を欠損するロクロを使用したと観察される土師器の甕が出土している。(D-1:第49図2)

SX-2遺構 長軸224cm・短軸167cmの略楕円形を呈する。深さは17cmで断面形は浅い舟底状を呈する。堆積土は4層に分けられるが、いずれも自然堆積と観察される。ロクロ使用の土師器の甕が2点出土している。(D-2・3:第49図3・4)

SX-3遺構 平面形は楕円形を呈すると推定される遺構で、西側は調査区外にのびる。検出部の東西長軸116cm・南北短軸160cmを測る。深さは14cmで断面形は浅い舟底状を呈する。堆積土は3層に分けられ、1層中には多量の「灰白色火山灰」が含まれる。出土遺物はない。いずれも自然堆積と観察される。

SX-4遺構 平面形は隅丸の逆三角形を呈し、東西軸長273cm・南北軸長210cmを測る。SX-1遺構に切られる。深さは56cmで、断面形は舟底状を呈する。堆積土は7層に分けられ、このうち1~4層については、人為的に埋められた可能性がある。堆積土中から体部上半を欠損するロクロ土師器の甕2点(D-4・5:第49図5・6)が出土したほか、底面中央付近からはほぼ完形のロクロ土師器の甕が1点潰れた状態で出土している。(D-6:第49図7)

SX-5遺構 平面形は楕円形を呈する。SD-2溝跡と重複関係にあり、溝跡調査後に検出されたが、新旧は明らかでない。南北長軸104cm・東西短軸60cmを測る。深さは約25cmで断面形は浅い舟底状を呈する。遺物は土師器片が2点出土している。

SX-6遺構 平面形は隅丸の三角形を呈する。東西軸長144cm・南北軸長131cmを測る。深さは35cmで断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は5層に分けられ、1層中には「灰白色火山灰」が堆積する。遺物は土師器片が2点出土している。

3) 3・4トレンチ

遺構・遺物は発見されなかった。

6 まとめ

- ① 今回の調査地点では、窯跡は発見されなかった。窯跡は調査地点より南側の丘陵斜面に分布すると推定される。
- ② 道路部分の調査で、溝跡2条と土坑状の遺構6基が発見された。
- ③ 溝跡についてはいずれも時期は不明である。
- ④ 土師器の出土したSX-1・2・4遺構については、ロクロを使用した土師器であることから、平安時代の遺構の可能性が考えられる。
- ⑤ 堆積層に灰白色火山灰が検出されたSX-2・3・6遺構については、10世紀前半以降に埋ったと考えられる。

参考文献

- 渡辺泰伸他(1973):「窯跡調査報告書 2庚申前窯跡概観」【陸奥国宮窯跡群】古窯跡研究会
 渡辺泰伸他(1976):「第二章仙台台の原・小田原窯跡群の研究」【陸奥国宮窯跡群Ⅱ】古窯跡研究会



1 調査前景 (西から)



2 1トレンチ遺構検出状況



3 SD1 溝跡断面 (東から)



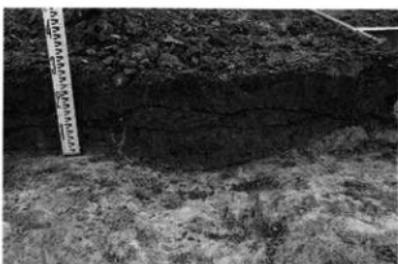
4 1トレンチ完掘状況 (南より)



5 2トレンチ遺構検出状況 (南から)



6 2トレンチ完掘状況 (南から)



7 SD2 溝跡断面 (東より)



8 SD2 溝跡全景 (西より)

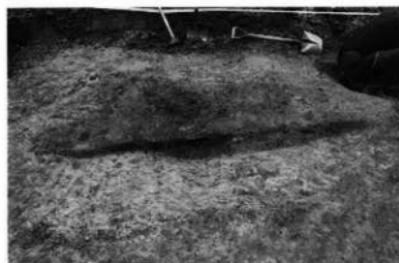
図版18 1・2トレンチの状況と溝跡



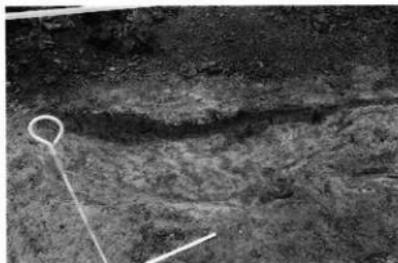
1 SD 2溝跡壁面出土土器No.2 (北より)



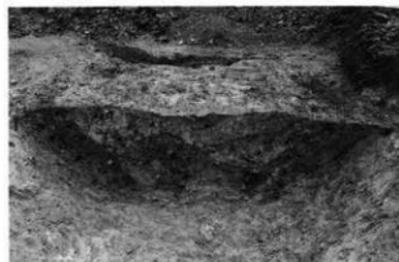
2 SX1遺構 (東より)



3 SX2遺構 (東より)



4 SX3遺構 (東より)



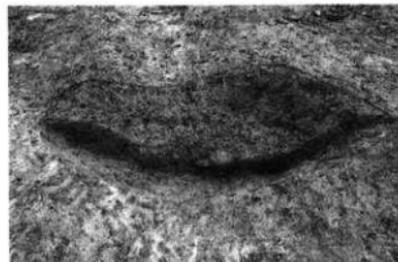
5 SX4遺構断面 (東より)



6 SX4遺構全景 (東より)



7 SX4遺構出土土器No.5

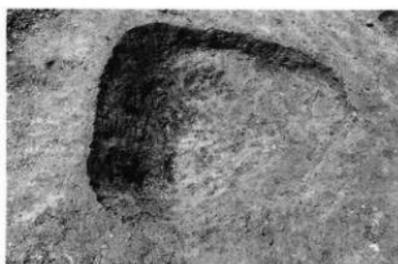


8 SX5遺構 (東より)

図版19 2トレンチの遺構



1 SX6 遺構断面 (北より)



2 SX6 遺構全景 (東より)



3 3 トレンチ全景 (北西より)



4 4 トレンチ全景 (北西より)



1



2



3

1 土師器 甕 D-7 (SD-2 第49図1) 3 土師器 甕 D-6 (SX-4 第49図7)
2 土師器 甕 D-4 (SX-4 第49図6)

5 出土遺物

図版20 2・3・4 トレンチと出土遺物

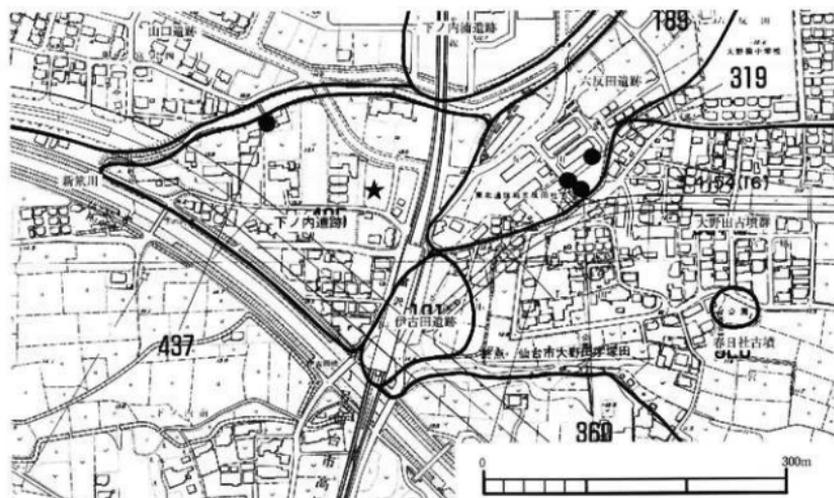
Ⅳ 下ノ内遺跡発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	下ノ内遺跡(宮城県遺跡番号01425)
調査地点	仙台市太白区富沢四丁目12-2、12-5、18-2、19-1、21-1の各一部 他
調査期間	平成14年8月19日～平成14年10月4日
調査対象面積	812㎡
調査面積	300㎡
調査原因	店舗・駐車場付共同住宅建設
調査主体	仙台市教育委員会(文化財課)
担当職員	文化財教諭 加藤徳明 臨時職員 福寿規人

2 遺跡の位置と環境

下ノ内遺跡は仙台市の南部・仙台市太白区富沢4丁目に所在し、高速鉄道南北線の富沢駅付近に位置している。名取川及び芥川によって形成された自然堤防上に立地し、芥川の南岸にあたる。標高は約12mである。下ノ内遺跡を含めた富沢周辺の地域は、かつて畑地や水田が広がる平坦な田園地帯であったが、近年の急速な宅地化に伴い、著しい変貌をとげている。また、この地域は仙台市でも遺跡の分布する密度が高い地域で、旧石器時代から中世・近世までの各時代の遺構が層位的に検出される重層構造の遺跡群として知られている。

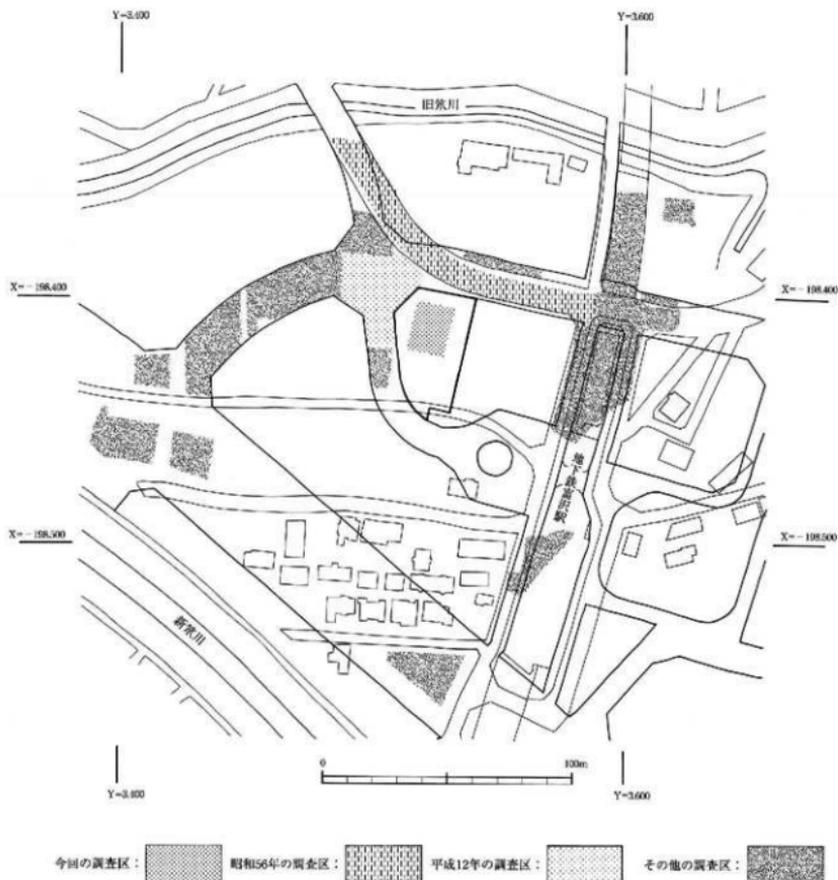


第50図 調査地点の位置と周辺の遺跡

下ノ内遺跡の発掘調査は昭和56年から富沢長町土地区画整理事業と高速鉄道建設に伴って開始され、これまでに縄文時代から近世までの遺構・遺物が数多く発見されている。今回の調査地点は、昭和56年と平成12年に実施された調査区の南側、東側に隣接している。

3 調査に至る経過と調査方法

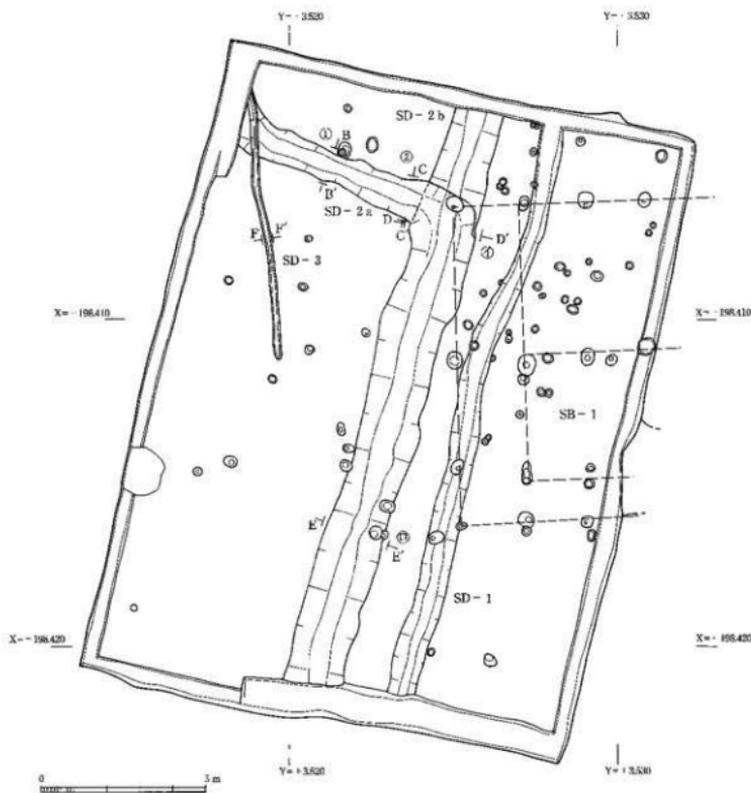
本件に関する下ノ内遺跡の発掘届が平成14年8月1日付で、仙台市太白区富沢四丁目7-1 庄主末吉氏より提出された。



第51図 調査区配置図

今回の調査対象面積は812㎡である。そのうち300㎡（東西15m・南北20m）を調査した。これまでの調査の成果から、3・5a・5b・6・12層で遺構の広がりが想定された。今回は重機により現地表下70cmまで掘り下げ、5a層より人力により遺構検出作業を行った。また、5a・5b・6層の調査後、調査区北部で縄文時代の遺構の広がりを確認するため、東西10m・南北8mの範囲（80㎡）を重機で掘り下げ、下層調査を行った。

遺構の測量は、平面座標系Xを基準とした。

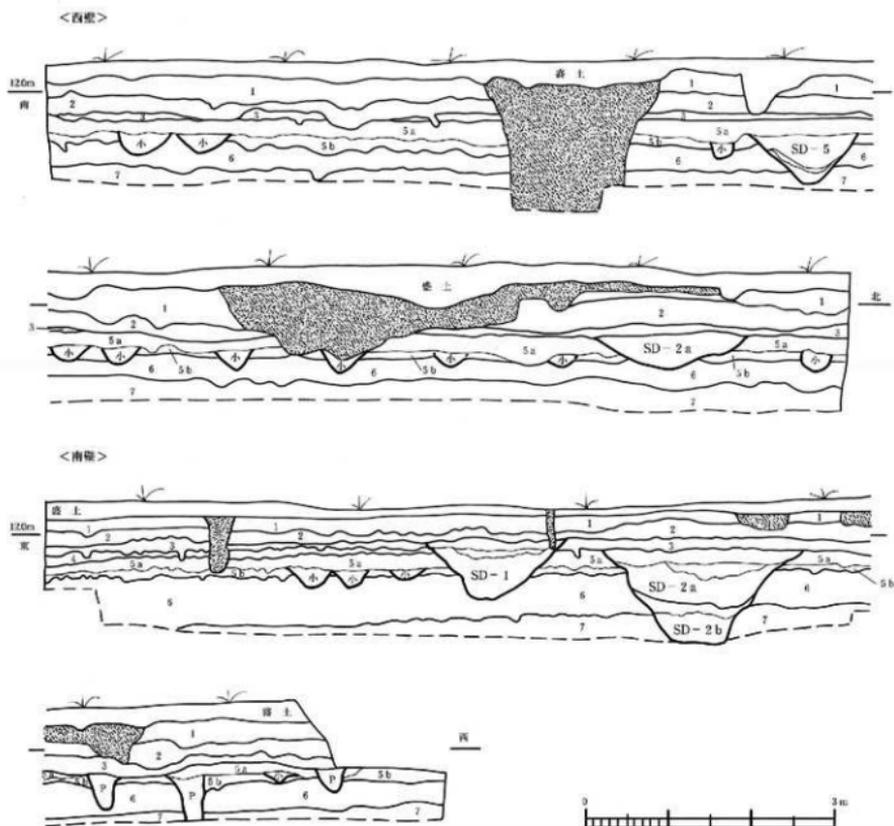


第52図 5a層検出遺構

4 基本層位

基本層位は大別12層、細別14層に分けられる。

- 1 層：灰黄褐色の砂質シルトで、旧耕作土である。層厚は10～50cmである。調査区北西部ではグライ化している。

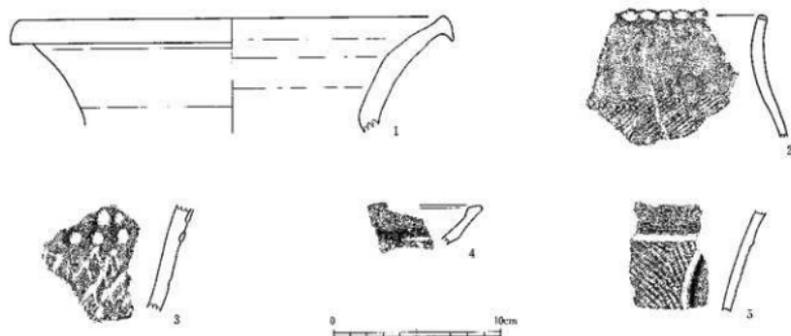


土層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	厚1mm程度のマンガン酸と白色鉄をごくわずかに含む。
2	10YR4/4 暗褐色	砂質シルト	厚1~3mm程度のマンガン酸を散在的に含む。
3	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	鉄分をまばらに含む。
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	厚1mm程度のマンガン酸をごくわずかに含む。(トレンチ東部に分布)
5a	10YR3/3 暗褐色	シルト	厚1mm程度のマンガン酸をごくわずかに含む。4層に比べて若干黒色化する。
5b	10YR2/3 黒褐色	シルト	5a層を厚めに6層の土がアックロフ層に入っている。
6	10YR4/4 棕色	砂質シルト	厚1~3mm程度のマンガン酸をごくわずかに含む。
7	10YR3/4 暗褐色	シルト	トレンチ全体に均一に堆積している層。

第53図 調査区土層断面図

- 2 層：暗褐色の砂質シルトである。層厚は12~25cmで、東部では薄くなっている。調査区北西部ではグライ化している。
- 3 層：黄褐色の砂質シルトで、鉄分をまばらに含む。層厚は5~20cmで、分布していないところもある。調査区北西部ではグライ化している。これまでの調査では、上面で中世と考えられる孤立柱建物跡、溝跡、土坑が確認されている。

- 4 層：暗褐色のシルトである。層厚10cm程度で調査区東部に部分的に堆積している。5 a層が下がついていた部分に堆積していたと考えられる。
- 5 a層：暗褐色のシルト、4層に比べて若干黒色化する。層厚は10~20cmである。調査区西部ではグライ化している。これまでの調査では平安時代の小溝状遺構や土坑が確認され、古墳時代から平安時代の遺物が出土している。
- 5 b層：黒褐色のシルト質粘土である。層厚10~20cm。これまでの調査では古墳~平安時代の竅穴住居跡、掘立柱建物跡等の遺構が確認されている。
- 6 層：褐色の砂質シルトである。層厚約30cmで、東部では約50cmと厚くなっている。これまでの調査では弥生時代（天王山式期）の土坑等が確認され、層中より縄文時代晩期の土器が出土している。
- 7 層：暗褐色のシルト質粘土である。層厚は約40cm程である。
- 8 層：にぶい黄褐色の砂質シルトで、直径1~5mmの灰土をブロック状に含む。層厚20~35cmである。
- 9 層：褐色のシルトである。層厚は35~45cmである。
- 10 層：暗褐色のシルトで、層厚約10cm程で、西側の一部にのみ堆積している。これまでの調査で、上面で縄文時代中期末葉~後期前葉の住居跡が確認され、縄文土器や石器が出土している。
- 11 層：2層に細分される。11 a層は黒褐色のシルト質粘土、層厚20~30cmである。11 b層はにぶい黄褐色のシルト、層厚15~25cmである。これまでの調査で、縄文時代中期末葉~後期前葉の多量の縄文土器や石器が出土している。
- 12 層：にぶい黄褐色のシルトである。根や茎の腐植土と考えられる土が混入している。検出した層厚は20~45cmである。これまでの調査で、上面で縄文時代中期末葉の大木10式期の竅穴住居跡3棟を確認し、そのうちの2棟は、敷石住居であった。



田中 番号	発露番号	出土地点				分類				法		物係・備考		写真掲載	
		西十区	基本層	遺構名	遺構形	収寸No.	類別	部	種	採得・長	11位・径	形状・厚	(原料・土質・漆料・研削・木取・産地・時期)		
1	B-6		5a							56.1	25.3		内外面の字口	30-13	
2	A-1		5b				縄文中期	灰鉢					縄文(Ⅱ)	7号地蔵	30-1
3	A-2		11b				縄文中期	灰鉢					製突・掘立柱跡		30-3
4	A-3		11b				縄文中期	灰鉢							30-4
5	A-4		12				縄文中期	灰鉢					縄文(Ⅱ) 灰鉢		30-2

第54図 基本層出土遺物

5 5 a 層発見遺構と出土遺物

5 a 層上面では、掘立柱建物跡1棟、溝跡4条、ピット76個が検出された。

1) 掘立柱建物跡

SB-1 掘立柱建物跡 【位置・重複】調査区北東端で検出した。調査区の東側へ伸びると考えられ、全体の規模が明らかではない。SD-1 溝跡、SD-2 a・2 b 溝跡を切っている。3層掘りこみのSD-1 を切っていることから、検出は5 a 層であったが3層上面より上層から掘りこまれた建物である。

【規模・配置・方向】検出部の建物の規模は、東西が北辺で3間5.7m、南辺で2間3.8m、南北が西辺で3間9.8mを測るが、東側に伸びている可能性がある。柱間寸法は、北辺東西列が西から2.0m・1.9m・1.8mで、南辺東西列が西から2.1m・1.7mである。南北は西辺が北から4.7m・3.3m・1.7mである。西側と南側に柱間寸法約2m・と約1.3mの庇・縁を持つ。南北列の方向は西辺でN-2°-Wである。

【柱穴・柱痕跡】検出された14個の柱穴のうち10個から柱痕跡が確認された。柱穴の掘り方の直径は32~70cmの円形ないし、楕円形である。柱痕跡は直径13~27cmの円形である。P6とP8の底面からは直径約20cm程の根石が出土した。

【出土遺物】遺物は、P39から土師器片が1点出土している。

2) 溝跡

SD-1 溝跡 【位置・重複】中央部で調査区を南北に縦断して検出された。検出は5 a 層であるが、3層より掘りこまれている。SB-1 掘立柱建物跡に切られる。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は19.5mで、方向はN-15°-Eである。幅は上面で90cm・底面で55cmである。

【深さ・断面形】深さは42cmで、断面形はU字形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は4層に分けられる。1層には白い黄褐色の砂質シルト、2層は灰黄褐色のシルト、3層は褐色の粘上質シルト、4層は褐色のシルト質粘土である。遺物は、土師器片、坏E-5（第57図8）を含む須恵器片、石鏃（K-1：図版30-15）が出土した。

SD-2 a 溝跡 【位置・重複】中央部を南端から北に15.5m程伸び、北部ではほぼ直角に西へ折れて西壁の外に伸びている。南北部分では、SD-2 b 溝跡の上部を切っており、SD-2 b 層が埋まった後にSD-2 b を踏襲して掘られている。SB-1 掘立柱建物跡・SD-3 溝跡に切られる。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は、南北15.5m、東西8.5mである。方向は南北がN-16°-Eである。

南北部分の幅は上面140~180cm・底面約90cmで、東西部分の幅は上面80~120cm・底面30~40cmである。

【深さ・断面形】深さは東西部分が約25~40cm、南北部分が約45cmである。断面形は舟底型から西部ではU字形に変化する。

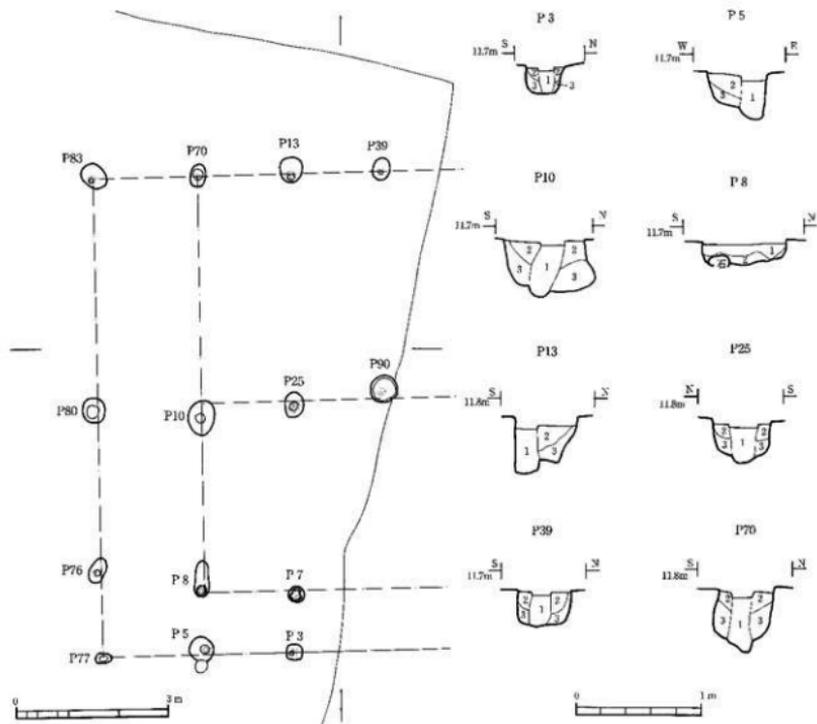
【堆積土・出土遺物】堆積土は3層に分けられ、西部では1層になる。遺物は弥生土器片（B-1・2・3・4：第57図1・2・3・4）、内黒の非クロロ土師器の坏（C-1：第57図5）を含む土師器片、須恵器片（E-1・2・3・4：第57図12・9・7・10）、石鏃（K-2：図版30-16）が出土した。

SD-2 b 溝跡 【位置・重複】調査区中央を南北に縦断する。SB-1 掘立柱建物跡に切られる。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は19mである。方向はN-16°-Eである。幅は上面150~170cm、底面35~70cmである。

【深さ・断面形】深さは75~80cmである。断面形は逆台形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は2層に分けられる。遺物は、土師器片、須恵器片のほか、鏃の一部と考えられる鉄製品（N-1：第57図13）、羽口片（P-1：第57図14）が出土した。



P3				P25			
上層No.	土色	土質	備考	上層No.	土色	土質	備考
1	10YR2/4 暗褐色	シルト	褐色の砂質シルト上をわずかに含む。	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質	上層に2~3cmの1~2mmの砂質シルトの層、層1~3mmのマンガンと層2~3mmの酸化鉄をわずかに含む。
2	10YR2/3 暗褐色	シルト	暗褐色シルトと層1~3mmの酸化鉄と層2~3mmのマンガンとをまばらに含む。	2	10YR4/6 褐色	砂質	層3mm~1cmの黄褐色の砂質シルトがブロック状にわずかに含む。層1~2mmの酸化鉄をわずかに含む。
3	10YR4/3 におい青褐色	粘土質	暗褐色土を少量含む。	3	10YR3/3 暗褐色	粘土質	

P39				P70			
上層No.	土色	土質	備考	上層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質	褐色のマンガンとをまばらに含む。上層に厚さ2cm程度の褐色の上層あり。下ににおい黄褐色の砂質シルトあり。下に褐色の砂質シルトあり。酸化鉄を少量含む。	1	10YR4/2 灰青褐色	シルト	鉄分をまばらに含む。
2	10YR4/3 におい青褐色	シルト	層1~2mmのマンガンとをまばらに含む。酸化鉄を少量含む。	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	灰色の上をブロック状に含む。
3	10YR4/4 褐色	シルト	層3~5mmの酸化鉄を少量含む。	3	10YR4/2 灰青褐色	シルト	層1~2mm程度の鉄分を含む。

P8				P10			
上層No.	土色	土質	備考	上層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/3 におい青褐色	粘土質	層1~2mm程度の鉄分を含む。	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質	層1~3mmの酸化鉄をわずかに含む。
2	10YR2/3 暗褐色	シルト	層1~5mmの鉄分をまばらに含む。	2	10YR4/4 褐色	砂質	暗褐色の上をブロック状で少量含む。層1~3mmのにおい青褐色の砂質シルトを少量含む。

P13			
上層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質	層1~3mmのにおい青褐色の上をブロック状で少量含む。層1~5mm程度の鉄分をまばらに含む。
2	10YR4/4 褐色	粘土質	層1~3mmの酸化鉄をマンガンとをわずかに含む。
3	10YR3/4 暗褐色	粘土質	暗褐色シルトが層3mm~1cmのブロック状で少量含む。層1~3mmの酸化鉄をまばらに含む。

P13			
上層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	層3~5mmの灰青褐色をわずかに含む。
2	10YR4/3 におい青褐色	粘土質	
3	10YR2/3 暗褐色	粘土質	下部に暗褐色の上をわずかに含む。

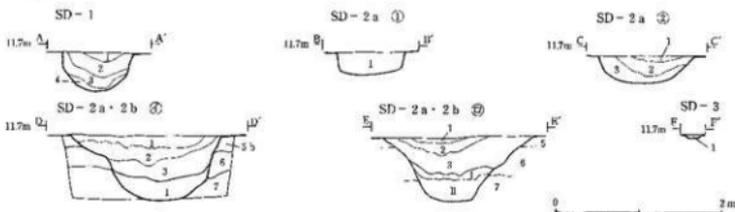
第55図 5a層検出SB-1掘立柱建物跡

SD-3 溝跡 【位置・重複】 北部で検出された。西壁から南東に8.3mほど検出されており、北側は調査区外に抜けている。SD-2 a 溝跡を切っている。

【方向・幅】 検出された溝跡の全長は8.3mで、方向はN-5°-Wである。幅は上面25cm・底面15cmである。

【深さ・断面形】 深さは4cmで、断面形は舟底形を呈する。

【堆積土・出土遺物】 堆積土はグライ化しており、オリーブ褐色のシルト1層である。遺物は土師器片が1点出土している。



SD-1					SD-2 a・2 b (1)				
土層No.	土色	土質	備考	備考	土層No.	土色	土質	備考	備考
1	10YR4/3 濃い黄褐色	粘質シルト	厚1~3mm酸化鉄とマンガンをまばらに含む。		1	10YR4/3 濃い黄褐色	粘質シルト	厚1~3cmの濃い黄褐色シルトをブロック状に多く含む。厚1~3mmの酸化鉄と厚1~3mmのマンガンを含む。	
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	厚1~2mmの酸化鉄と厚1~3mmのマンガンを含む。		2	10YR4/3 濃い黄褐色	粘質シルト	厚1~3mmの酸化鉄と厚1~3mmのマンガンを含む。	
3	10YR4/6 褐色	粘質シルト	空気の層に緑褐色シルトが多い。厚1~3mmのマンガンと酸化鉄を少量含む。		3	10YR3/4 暗褐色	シルト	厚1~3cmの黄褐色と厚1~2mmのマンガンを含む。	
4	10YR4/4 褐色	粘質シルト	厚1~3mmのマンガンと酸化鉄を少量含む。		4	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	厚1~3cmの層をブロック状に少量含む。厚1~3mmの酸化鉄を含む。	

SD-2 a (2)					SD-2 a・2 b (2)				
土層No.	土色	土質	備考	備考	土層No.	土色	土質	備考	備考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト			1	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む。	

SD-2 a (3)					SD-3				
土層No.	土色	土質	備考	備考	土層No.	土色	土質	備考	備考
1	10YR4/2 濃い黄褐色	粘質シルト	濃い黄褐色土をブロック状に含む。		1	2.5Y1/4 オリーブ褐色	シルト	グライ化層(黄褐色)を少量含む。暗褐色土をブロック状に多く含む。	
2	10YR4/3 濃い黄褐色	粘質シルト	厚1~2mmのマンガン・鉄分をまばらに含む。		2				
3	10YR4/4 褐色	シルト	厚1~2mmの酸化鉄と厚1~3mmのマンガンを含む。						
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	濃い黄褐色土をブロック状に含む。						

第56図 5 a層検出溝跡断面図

3) ビット

ビットを76個検出した。そのうち14個で柱痕跡を確認できた。P-6・8の底面からは根が出上している。P-55からは須臾器の蓋E-7(第57図6)が出上した。

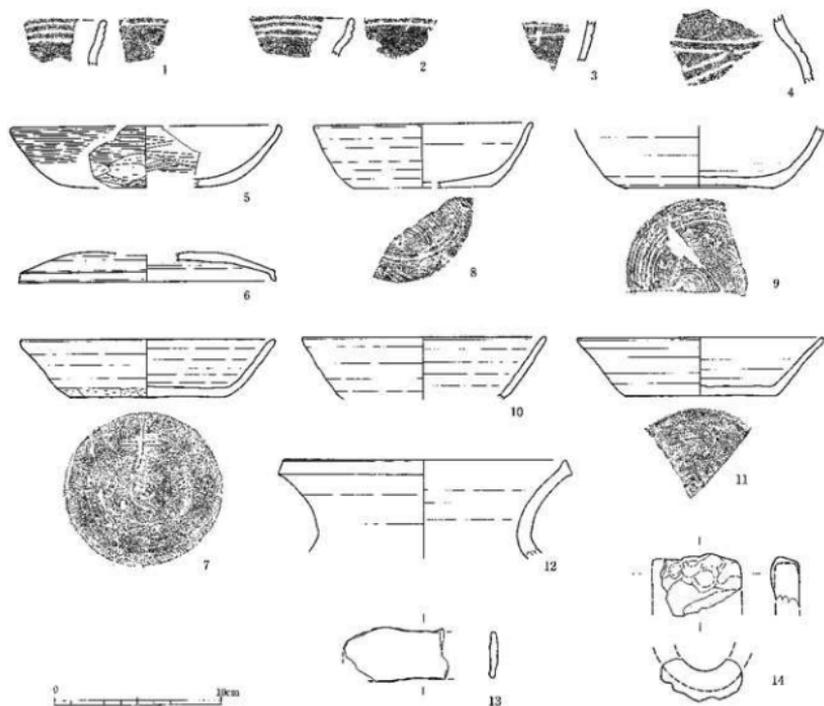
6 5 b層発見遺構と出土遺物

5 b層では、掘立柱建物跡2棟、溝跡1条、土坑6基、小溝状遺構70条、ビット123個を検出した。

1) 掘立柱建物跡

SB-2 掘立柱建物跡 【位置・重複】 北東部で検出された。他の遺構との重複関係は認められない。

【規模・配置・方向】 検出部の建物の規模は南北が2間で3.6mを測る。建物は調査区の東側へ伸びていると推定される。方向はN-16°-Eである。

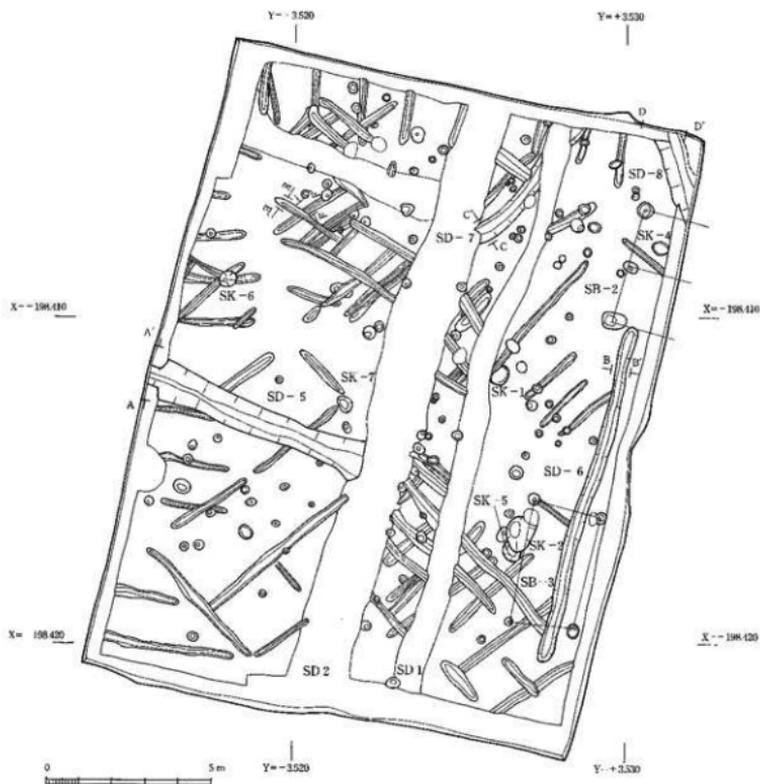


図中の 番号	発掘番号	出土地点			分類		測定			特徴・備考 (形状・装束・文様・割種・土質・灰地・厚割)	写真図版			
		地区区	番地番	発掘名	遺物種	残土高	種類	部	種			器高・長	口径・幅	底径・厚
1	B-1			SD-2a	2割	灰土器	甕						外周3条平行波線 内周1条波線	30-6
2	B-2			SD-2a	2割	灰土器	甕						外周3条平行波線 内周1条波線	30-5
3	B-3				2割	灰土器	甕						外周波線文	30-7
4	B-4			SD-2a	2割	灰土器	甕						外周平行波線点状文	30-8
5	C-1			SD-2a	3割	土器	杯		3.9	13.5			外周ヨコナテ・ヘタケズリ 内周ヘタミガキ	30-9
6	E-7			PS	厚土	須恵器	甕		12.0	15.1			内外周ロクロ	30-12
7	E-3			SD-2a	3割	須恵器	杯		3.8	15.1	9.6		外周7条平行波線・ヘタケズリ 底周3条ヘタケズリ	30-10
8	E-5			SD-1	厚土	須恵器	杯		4.0	13.5	8.2		穴外周ロクロ 底周波線点状文	30-11
9	E-2			SD-2a	3割	須恵器	杯		3.3		8.0		内外周ロクロ 底周波線点状文	
10	E-4			SD-2a	4割	須恵器	杯		3.0	14.8			内外周ロクロ	
11	E-8			小段A-8	厚土	須恵器	杯		3.8	14.8	9.1		内外周ロクロ	
12	E-1			SD-2a	3割	須恵器	甕		5.4	16.0			ロクロ	
13	N-1			SD-2b	2割	須恵器	鉢?		3.6	3.1	6.2			30-14
14	F-1			SD-2b	2割	土器	羽山							30-17

第57図 遺構出土遺物

【柱穴・柱痕跡】 検出された3個の柱穴すべてから柱痕跡が確認された。柱穴の掘り方の直径は40～60cmの円形ないし、楕円形である。柱痕跡は直径約15cmの円形である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。



第58図 5 b層検出遺構

SB-3 掘立柱建物跡 【位置・重複】南東部で検出された。小溝状遺構A群を切っている。

【規模・配置・方向】検出部の建物の規模は東西が1間で2.0m、南北が1間で西辺3.5m・東辺3.8mを測る。南北列の方向は西辺で $N-11^{\circ}-E$ である。

【柱穴・柱痕跡】検出された4個の柱穴のうち2個から柱痕跡が確認された。柱穴の掘り方の直径は25~40cmの円形ないし、楕円形である。柱痕跡は直径約15cmの円形である。

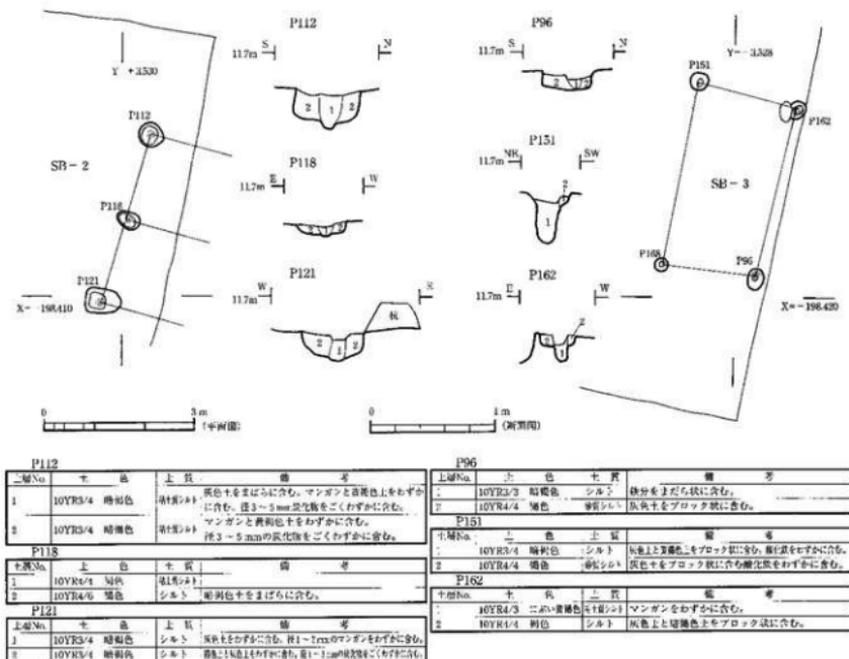
【出土遺物】遺物は、P-162から土師器片1点が出土している。

2) 溝跡

SD-5 溝跡 【位置・重複】西部中央でSD-2 a・2 b溝跡の西側だけで検出され、東側には延びない。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は6.9mで、方向は $N-67^{\circ}-W$ である。幅は上面130cm・底面70cmである。

【深さ・断面形】深さは57cmで、断面形は逆台形を呈する。



第59図 5b層検出SB-2・3掘立柱建物跡

【堆積土・出土遺物】堆積土は3層に分かれる。1層は暗褐色の砂質シルト、2層は黒褐色のシルト、3層は暗褐色のシルトである。遺物は出土しなかった。

SD-6 溝跡 【位置・重複】東部で東壁に沿って検出された小溝状遺構を切っている。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は10.5mで、方向はN-15°-Wである。幅は上面45cm・底面20cmである。

【深さ・断面形】深さは25cmで、断面形はJ字形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト1層である。遺物は土師器片が8点出土した。

SD-7 溝跡 【位置・重複】中央北部でSD-2 a・2 b溝跡の東側だけで検出され、北壁にかかる。SD-2 a・2 b溝跡より西側には延びない。SD-1・2溝跡に切られる。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は4.7mで、方向はN-41°-Eである。幅は上面60cm・底面24cmである。

【深さ・断面形】深さは22cmで、断面形は舟底形を呈する。

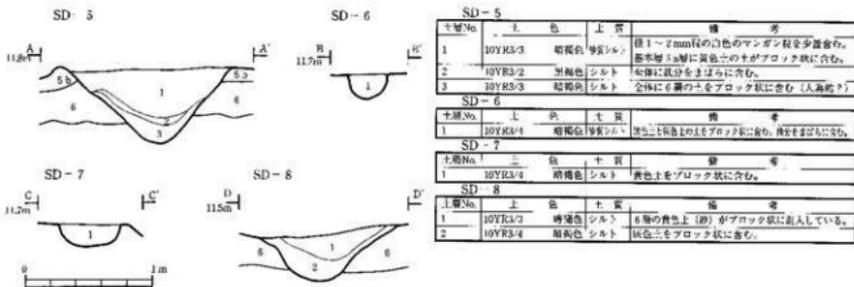
【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト1層である。遺物は土師器片が3点出土した。

SD-8 溝跡 【位置・重複】北東角で検出され、壁にかかる。他の遺構との重複関係は認められない。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は3.3mで、方向はN-15°-Eである。幅は上面60cm・底面32cmである。

【深さ・断面形】深さは54cmで、断面形は不整形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルトで2層に分けられる。遺物は縄文土器片が3点出土した。



第60図 5 b 層検出溝断面図

3) 土坑

SK-1 土坑 【位置・重複】中央部で検出された。SD-1 溝跡、小溝状遺構B群に切られる。

【平面形・大きさ】平面形は南北軸60cm、東西軸45cmの楕円形を呈する。

【深さ・断面形】深さは9cmで、断面形は舟底形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト1層である。遺物は出土しなかった。

SK-2 土坑 【位置・重複】東部中央で検出された。SK-5 土坑、P-166を切る。

【平面形・大きさ】平面形は南北軸108cm、東西軸82cmの不整形を呈する。

【深さ・断面形】深さは25cmで、舟底形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は2層に分けられる。1層は褐色の砂質シルト、2層は暗褐色のシルト質粘土である。遺物は、非クロロの土師器片4点、須恵器片1点が出土した。

SK-4 土坑 【位置・重複】北東部で検出された。傾斜により一部削平されている。

【平面形・大きさ】残存部の平面形は楕円形を呈し、東西検出長50cmで、南北短軸41cmを測る。

【深さ・断面形】深さは13cmで、断面形は舟底形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト1層である。遺物は出土しなかった。

SK-5 土坑 【位置・重複】東部中央で検出された。SK-2 土坑に切られる。

【平面形・大きさ】平面形は南北軸64cm、東西軸52cmの楕円形を呈する。

【深さ・断面形】深さは15cmで、断面形は舟底形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は褐色のシルト1層である。遺物は出土しなかった。

SK-6 土坑 【位置・重複】西部中央で検出された。小溝状遺構B群を切る。

【平面形・大きさ】平面形は南北軸50cm、東西軸55cmの円形を呈する。

【深さ・断面形】深さは4cmで、断面形は舟底形を呈する。

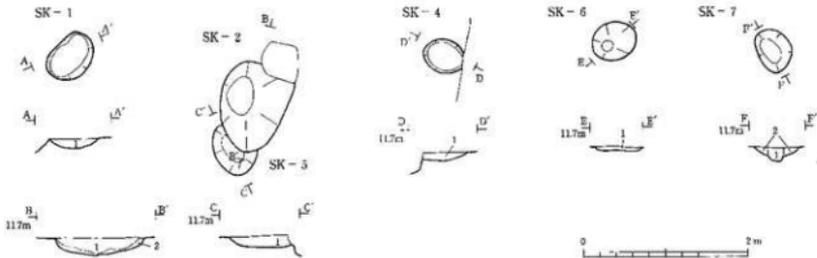
【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト1層である。遺物は出土しなかった。

SK-7 土坑 【位置・重複】中央部で検出された。他の遺構との重複関係は認められない。

【平面形・大きさ】平面形は南北軸52cm、東西軸40cmの楕円形を呈する。

【深さ・断面形】深さは23cmで、断面形は不整な逆台形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は2層に分けられる。1層は褐色のシルト、2層は暗褐色のシルトである。遺物は出土しなかった。



SK-1					SK-3				
土層No.	土色	土質	備考	土層No.	土色	土質	備考		
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒色から灰色を帯びたもの。厚1~2mmの層状で互層状に分布。	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	暗褐色土と灰色土をブロック状に含む。		
SK-2					SK-6				
土層No.	土色	土質	備考	土層No.	土色	土質	備考		
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	暗褐色土と灰色土をブロック状に含む。マンガンを含みまばらに含む。	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	暗褐色土と灰色土をブロック状に含む。		
2	10YR2/4 暗褐色	シルト	上部に炭化物を少量に含む。	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	暗褐色土と灰色土をブロック状に含む。		
SK-4					SK-7				
土層No.	土色	土質	備考	土層No.	土色	土質	備考		
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	25%と炭化物を含む。灰色土をブロック状に含む。	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	暗褐色土と灰色土をブロック状に含む。		
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	25%と炭化物を含む。灰色土をブロック状に含む。	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	暗褐色土と灰色土をブロック状に含む。		

第61図 5 b 層検出土坑実測図

4) 小溝状遺構群

小溝状遺構はこれまでの調査でも5 b層上面で検出されており、畑地の耕作痕跡と考えられているものである。今回の調査では70条検出された。小溝状遺構群は、方向と重複関係によってA~Dの4群に分けられる。古いほうからC群→D群→B群→A群の順に変化するが、C群とD群の新旧関係は不明である。この他にどの群にも属さないものが4条ある。

小溝状遺構A群 【方向・位置・重複】北西から南東方向に伸びる溝で、方向はN-43°-62°-Wである。調査区北西部から南東部に分布している。小溝状遺構B群を切っており、B群に対してほぼ直交している。SD-1・2 a・2 b・5・6・7溝跡に切られる。

【幅・深さ】19条検出された。最も長いものは6.2mである。幅は上面10~42cm・底面5~22cmである。深さは4~25cmで、断面形は舟底形である。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト1層である。遺物は、小溝状遺構A群-8から非ロクロ土師器片1点、須臾器の坏E-8(第57図11)が出土した。

小溝状遺構B群 【方向・位置・重複】北東から南西方向に伸びる溝で、方向はN-40°-60°-Eである。調査区全体に分布している。小溝状遺構A群に切られ、ほぼ直交している。SD-1・2 a・2 b・5・6溝跡に切られる。

【幅・深さ】30条検出された。最も長いものは7.5mである。幅は上面15~34cm、底面4~20cmである。深さは5~16cmで、断面形は舟底形である。



小溝 A群-6				
土層No.	土色	土質	備考	
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	厚1cmのブロックの実褐色シルトをわずかに含む。厚1~2mmの層状鉄をわずかに含む。	
小溝 B群-6				
土層No.	土色	土質	備考	
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色土と灰色土をわずかに含む。	

第62図 5 b 層検出小溝状遺構断面図

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト1層である。遺物は非ロクロ土師器片が3点出土した。

小溝状遺構C群 【方向・位置・重複】5b層を約15cm掘り下げ、6層直上で検出した。南北方向の溝で、方向はほぼ真南北であり、調査区北壁の外に伸びる。小溝状遺構A・B群、SD-2a・2b・7溝跡に切られる。

【幅・深さ】8条検出された。最も長いものは2.2mである。幅は上面15~30cm、底面5~12cm、深さは5~16cmである。溝の間隔は約120cmでほぼ等間隔で検出された。

【堆積土・出土遺物】堆積土は小溝状遺構A群より若干黒色化する。遺物は出土しなかった。

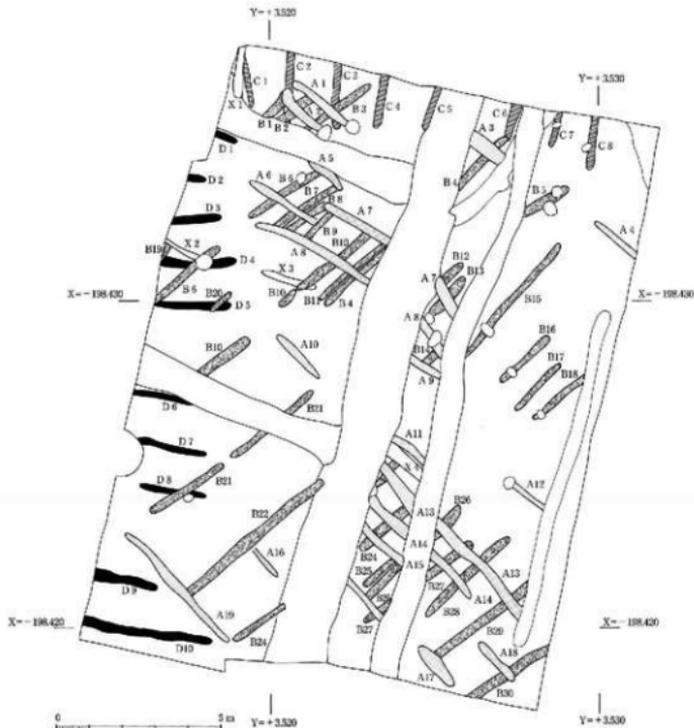
小溝状遺構D群 【方向・位置・重複】5b層を約15cm掘り下げ6層直上で検出した。東西方向の溝で、方向はN-65°-95°-Wであり、調査区西壁の外に伸びる。SD-5溝跡、SK-6土坑、小溝状遺構A群に切られる。

【幅・深さ】10条検出された。最も長いものは3.9mである。幅は上面15~34cm、底面5~17cm、深さは5~16cm。溝の間隔は約120cmでほぼ等間隔で検出された。

【堆積土・出土遺物】堆積土は小溝状遺構A群より若干黒色化する。遺物は出土しなかった。

不明小溝状遺構X1 【方向・位置・重複】調査区北西角で検出した。方向はN-4°-Eである。SD-2a溝跡、小溝状遺構C群を切っている。

【幅・深さ】検出した長さは1.6mである。幅は上面22~28cm・底面約10cmである。深さは約12cm。



第63図 小溝状遺構群方向別分布図

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色シルト。遺物は出土しなかった。

不明小溝状遺構X2 【方向・位置・重複】西壁中央で検出した。方向はN-68°-Wである。小溝状遺構B群を切り、SK-6土坑に切られる。調査区の西壁付近ではこの溝のみの検出であり、小溝状遺構A群の1つかどうかは不明である。

【幅・深さ】検出した長さは1.1mである。幅は上面10~20cm・底面約5cmである。深さは6cm。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色シルト。遺物は出土しなかった。

不明小溝状遺構X3 【方向・位置・重複】5b層を約15cm掘り下げたところ、調査区西部中央で検出した。方向はN-71°-Wで、小溝状遺構B群に切られる。

【幅・深さ】総長1.7mで、小溝状遺構A群と類似性はあるが小溝状遺構B群より古い。幅は上面約20cm・底面約10cmである。深さは約5cm。

【堆積土・出土遺物】堆積土は小溝状遺構A群より若干黒色化する。遺物は出土しなかった。

不明小溝状遺構X4 【方向・位置・重複】中央部で検出した。方向はN-50°-Wである。小溝状遺構B群を切っているため、小溝状遺構A群と類似性があるが、小溝状遺構A群に切られる。

【幅・深さ】検出した長さは1.3mである。幅は上面約35cm・底面約10cmで、深さは約10cmである。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色シルト。遺物は出土しなかった。

5) ビット

ビットは123個検出した。そのうち柱痕跡は11個で検出された。遺物は土師器片10点、須恵器片1点が出土しているが、遺構との関係は不明である。

7 深掘区

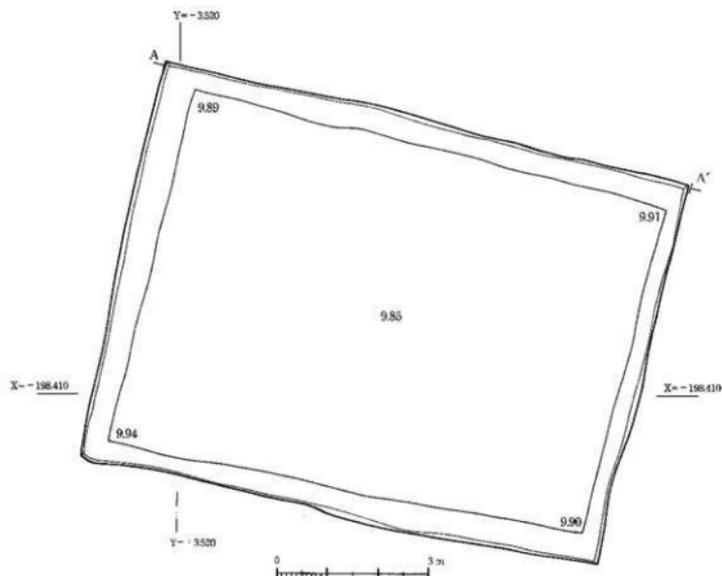
これまでの下ノ内遺跡の調査で、縄文時代の遺構が検出されていることから、本調査区においても縄文時代の遺構を確認するために下層調査を行った。調査区北部に東西10m・南北8mの調査区を設定し、6層以下約1.8m、標高約10.0mの12層直上まで重機により掘り下げ、遺構検出作業を行ったが、遺構は発見されなかった。

8 基本層中の出土遺物

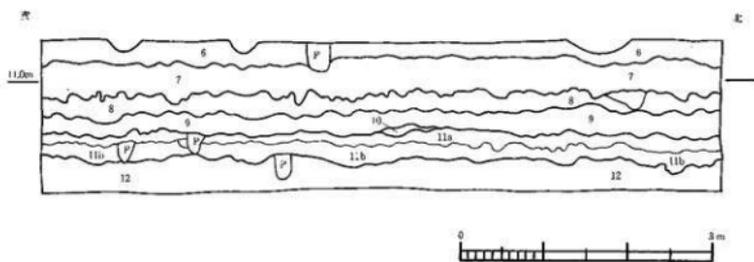
出土した遺物は、5a層では、土師器片、寛E-6（第54図1）を含む須恵器片、鉄滓が少量出土した。土師器のほとんどはロクロ使用以前のものであるが、ロクロを使用したものも混在している。5b層では、縄文時代晩期末頃の巻の1線部（A-1：第54図2）、弥生土器片、非ロクロ土師器片、須恵器片が出土した。6層では、土師器片1点、縄文土器片3点が出土した。7・9・11a層では縄文土器がそれぞれ5点・3点・1点出土した。11b層では縄文時代後期初頭頃の深鉢（A-2：第54図3）の土器片と縄文時代中期末頃の鉢（A-3：第54図4）の土器片、12層では縄文時代中期末頃の深鉢（A-4：第54図5）の土器片が出土した他、この2層からは縄文土器片が少量出土した。

9 まとめ

- ① 今回の調査によって、3層またはそれより新しい層から掘りこまれた掘立柱建物跡1棟、3層から掘りこまれた溝跡1条、5a層からは溝跡3条、ビット76個、5b層では掘立柱建物跡2棟、溝跡4条、土坑6基、小溝状遺構70条、ビット123個を検出した。
- ② 今回の調査では、5a・5b層で遺構を検出した。検出した遺構の年代については、出土資料から明らかにで



第64図 深掘区平面図



土層No.	土色	字號	備考
8	IOY26/3	に灰黄褐色	砂形シルト 径1~5mm程の灰色土をブロック状に含む。
9	IOY26/2	黄褐色	シルト 灰色の上をまがらに含む。
10	IOY23/4	淡褐色	シルト 局所的なをブロック状に含む。
11a	IOY22/2	黒褐色	(1) 質軟土 黄砂質内層、灰褐色をまがらに含む。
11b	IOY24/3	に灰黄褐色	シルト 11a層と12層の最厚部。
12	IOY26/3	に灰黄褐色	シルト 掘り残の層状とて穿入される土が混入している。

第65図 深掘区西壁土層断面図

きるものはないが、これまでの調査成果により、5 a 層は平安時代以降、5 b 層は古墳時代~平安時代の時間幅が考えられる。

- ③ SD-1溝跡は、検出層と方向から昭和56年調査のSD-6溝跡につながると考えられる。SD-6溝跡は中世に位置付けられていることから、本調査のSD-1溝跡は中世の溝と考えられる。
- ④ 3棟発見した掘立柱建物跡(SB-1・2・3)の所属時期は、SB-1が中世の溝を切ることから中世以降、SB-2・3は5b層上面で検出されていることから平安時代以降と考えられる。
- ⑤ 小溝状遺構群は、大別4時期に分けられた。A群・B群は、5b層上面で検出され、5a層の耕作痕跡と考えられることから平安時代以降に位置付けられるもので、C群・D群はそれより古いと考えられる。
- ⑥ 縄文時代の遺構は、昭和56年と平成12年の調査において住居跡や上坑が見つかっており、今回の調査で遺構が検出されると想定されが、12層では発見されなかった。縄文時代の集落は今回の調査区あたりまで広がらず、集落の中心は本調査区の北西方向であると考えられる。遺物の出土も11b層・12層からは少ない。

(注記)

平成12年度調査については、仙台市文化財報告書第254集「年報22」(2001)によるものである。

参考文献

- 小川淳一・高橋綾子(2000)：「仙台市下ノ内遺跡」仙台市文化財調査報告書第249集 仙台市教育委員会
- 金森安孝・長島榮一(1992)：「郡山道路第65次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第249集 仙台市教育委員会
- 藤原信彦・吉岡基平(1990)：「下ノ内遺跡 仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第135集 仙台市教育委員会
- 渡部 紀他(1995)：「伊古田遺跡 仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅲ」仙台市文化財調査報告書第193集 仙台市教育委員会
- 渡部 紀他(1990)：「六反田遺跡 仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅳ」仙台市文化財調査報告書第199集 仙台市教育委員会



1 5 a層上面遣構検出状況(南より)



2 5 a層上面完掘状況(南より)

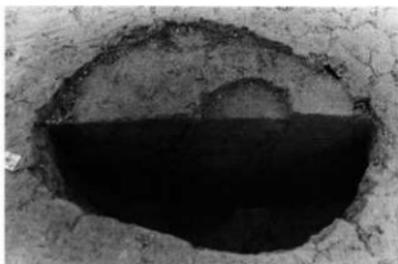
図版21 5 a層全景



1 SB-1 獨立柱建物跡 (北東より)



2 SB-1 の柱穴P5 (南より)



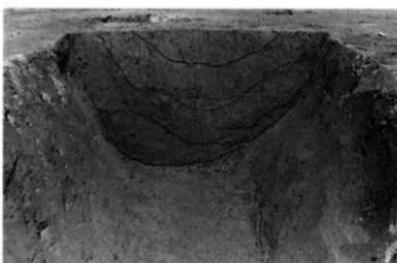
3 SB-1 の柱穴P10 (東より)



4 SB-1 の柱穴P6 (東より)



5 SD-1・2 溝跡 (南より)



6 SD-1 溝跡断面 (南より)



7 SD-2 a 溝跡北部 (西より)



8 SD-2 a・b 溝跡断面㊦ (南より)

図版22 5 a 層検出遺構



1 SD-3 溝跡 (北より)



2 SD-3 溝跡断面 (南より)



3 SB-2 掘立柱建物跡 (南東より)



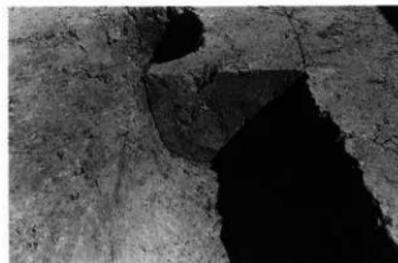
4 SD-5 溝跡 (東より)



5 SD-5 溝跡断面



6 SD-6 溝跡 (南より)



7 SD-6 溝跡断面

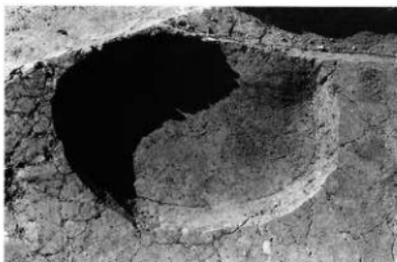
図版23 5 a層SD-3と5 b層検出遺構



1 SD-8 溝跡 (北より)



2 SD-8 溝跡断面 (南より)



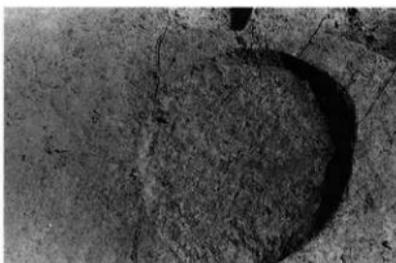
3 SK-1 土坑 (南より)



4 SK-2 土坑 (西より)



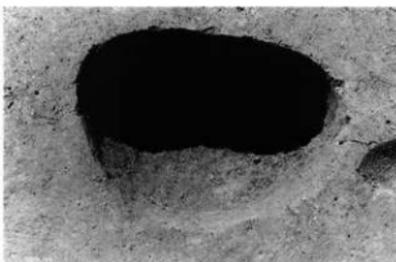
5 SK-4 土坑 (北より)



6 SK-6 土坑 (南より)



7 SK-7 土坑 (北より)

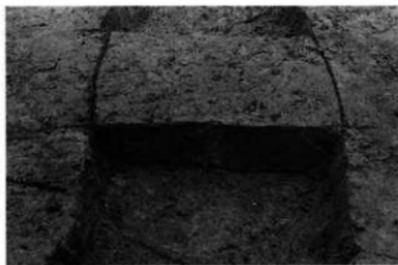


8 SK-7 土坑 (東より)

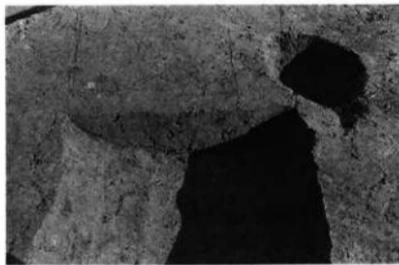
図版24 5 b 層検出遺構と土坑



1 小溝状遺構群検出状況（南より）



2 小溝（A6）断面（西より）



3 小溝（B6）断面（北西より）



4 小溝底面掘削具痕跡検出状況（北より）



5 小溝底面掘削具跡（北より）

図版25 小溝状遺構群の検出と調査状況



1 5b層上面完掘状況(南より)



2 小溝状遺構群北西部1(西より)



3 小溝状遺構群北西部2(西より)



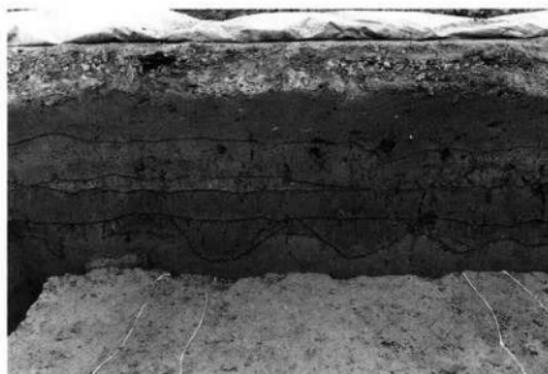
4 小溝状遺構群南西部(南より)



5 小溝状遺構群南東部(南東より)

図版26 小溝状遺構群の状況

1 西壁土層断面 (南部)



2 西壁土層断面 (中央部)



3 西壁土層断面 (北部)



図版27 調査区の土層断面 1

1 南壁土層断面（東部）



2 南壁土層断面（中央部）



3 南壁土層断面（西部）



図版28 調査区の土層断面 2

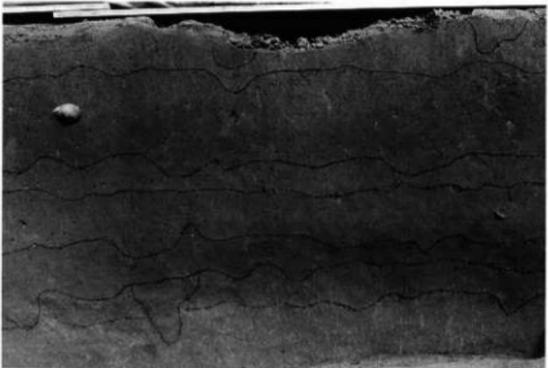
1 深掘り区全景 (南東より)



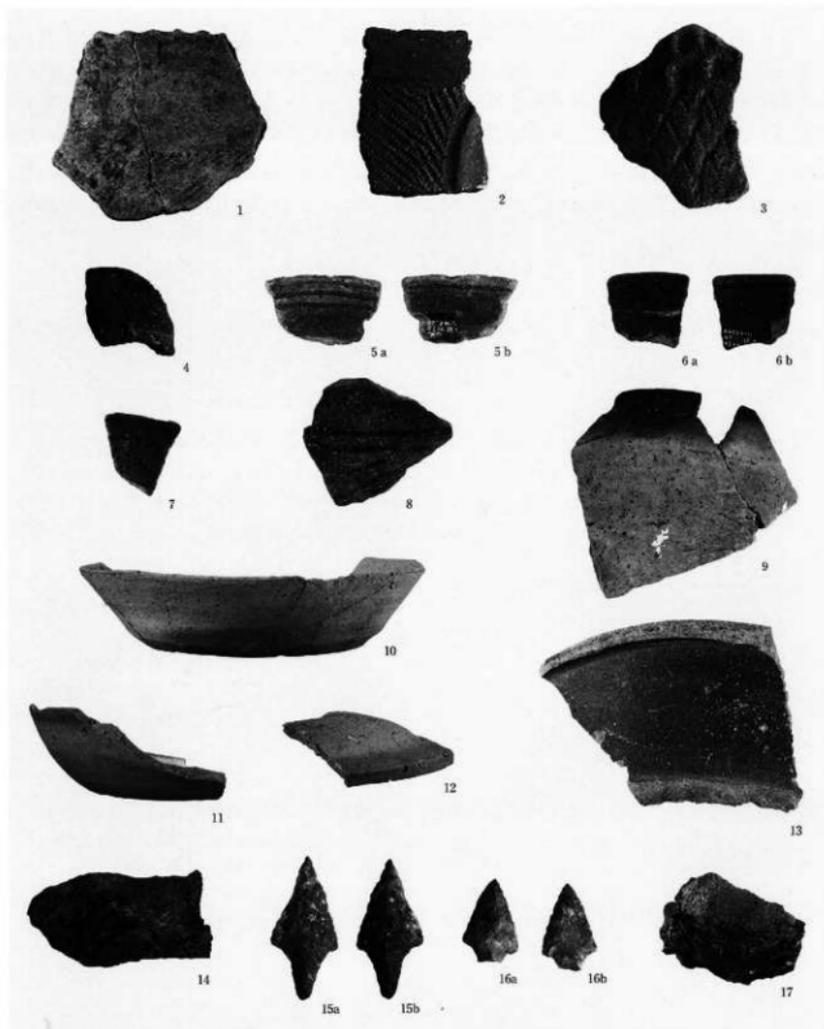
2 深掘り区土層断面 (西壁)



3 深掘り区土層断面 (北壁)



図版29 深掘り調査区の状況



- | | | | | |
|---|------|----|--------------|--------|
| 1 | 縄文土器 | 深鉢 | A-1 (5 b層) | 第54図2) |
| 2 | 縄文土器 | 深鉢 | A-4 (12層) | 第54図5) |
| 3 | 縄文土器 | 深鉢 | A-2 (11 b層) | 第54図3) |
| 4 | 縄文土器 | 浅鉢 | A-3 (11 b層) | 第54図4) |
| 5 | 弥生土器 | 甕 | B-2 (SD-2 a) | 第57図2) |
| 6 | 弥生土器 | 甕 | B-1 (SD-2 a) | 第57図1) |
| 7 | 弥生土器 | 鉢 | B-3 (SD-2 a) | 第57図3) |
| 8 | 弥生土器 | 鉢 | B-4 (SD-2 a) | 第57図4) |
| 9 | 土師器 | 坏 | C-1 (SD-2 a) | 第57図5) |

- | | | | | |
|----|-----|----|--------------|---------|
| 10 | 須恵器 | 坏 | E-3 (SD-2 a) | 第57図7) |
| 11 | 須恵器 | 坏 | E-5 (SD-1) | 第57図8) |
| 12 | 須恵器 | 蓋 | E-7 (E-7 55) | 第57図1) |
| 13 | 須恵器 | 甕 | E-6 (5 a層) | 第54図1) |
| 14 | 鉄製品 | 鎌? | N-1 (SD-2 a) | 第57図13) |
| 15 | 石器 | 鎌 | K-1 (SD-1) | |
| 16 | 石器 | 鎌 | K-2 (SD-2 a) | |
| 17 | 土製品 | 羽口 | P-1 (SD-2 b) | 第57図14) |

図版30 出土遺物

V 山田条里遺跡（第7次）発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	山田条里遺跡（宮城県遺跡番号01367）
調査地点	仙台市太白区山田字田中前181・187・190～196地内
調査原因	店舗建設工事
調査対象面積	7700㎡
調査面積	155㎡
調査期間	平成14年5月13日～6月4日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会（文化財課）
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 大倉秀之 臨時職員 稲森規人

2 遺跡の位置と環境

山田条里遺跡は仙台市の南西部、JR長町駅の西方約4kmの地点、太白区山田・鉤取地区に所在する。遺跡の北側には青葉山丘陵が東西に延び、南側には名取川を挟んで高館丘陵が位置している。本遺跡はこれらの丘陵間を流れる名取川により形成された河岸段丘の東端部に位置し、青葉山丘陵より名取川に流入する小河川の影響を受けた扇状地形となっている。遺跡の範囲は東西・南北共に約900mに及び、遺跡内の標高差は約8mである。現在、遺跡の現況はそのほとんどが平成元年から行われた農業基盤総合整備事業により新しく区画された水田となっているが、今回の計画のように大型店舗の進出など商業用地となっている。

周辺の遺跡には、北西側の丘陵上に縄文時代中期の大規模な集落跡である山田上ノ台遺跡や早期の堅穴住居跡が発見された北前遺跡などがある。また、東側の小高い段丘上には縄文時代中期の土器が多量に出土した上野遺跡、南側には弥生時代中期の土器が出土し、近世の建物跡や水路跡なども発見されている船渡前遺跡などがある。その他、古墳、奈良平安の各時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在しており、仙台市内でも遺跡の密度が高い地域である。

本遺跡の調査は平成元年より行われている。1次調査終了後の農業基盤総合整備事業により、「条里型」の土地割は尖われ景観的に見ることは出来なくなりましたが、これまでの調査により近世～近代と平安時代の二時期の水田跡が数地点で検出されている。これらは本遺跡の「条里型」の土地割がいつの時代まで遡り、形態などを検討する上での貴重な発見となっている。この他、近世から近代にかけての屋敷跡や縄文時代の落とし穴などが発見されている。

3 調査に至る経過と調査方法

平成14年4月26日付けで、株式会社ヨークベニマル代表取締役 大高善興氏より仙台市太白区山田字田中前に店舗建設工事に伴う発掘届が提出された。仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、2棟の店舗建設部分に調査区を設定し、東側の建設部分を1区、西側の建設部分を2区として調査を行った。

調査地には1区、2区とも盛土が厚さ2mもあることから、まず1区については13m×21m、2区については13m×26mの範囲で重機により盛土部分を除去した後に1区については4×15m、2区については4.5m×20mの調査区を設定し、これ以後は人力による掘り下げ、遺構検出作業を行った。なお、1区は調査区北端で2m×2mの



No.	遺跡名	種類	年代	No.	遺跡名	種類	年代
1	山田島田遺跡	弥生地、水田跡、基礎跡	縄文、古代、近世	26	三神塚古墳跡	古墳	古墳
2	山田上ノ台遺跡	瓦倉跡、基礎跡	旧石器、縄文、古代、近世	27	富沢宮跡	宮跡	古墳、古代
3	北原基跡	瓦倉跡、基礎跡	旧石器、縄文、古代、近世	28	赤山東遺跡	宮跡	古墳
4	根原堂前遺跡	竊取地	縄文、古墳、古代	29	基原東遺跡	竊取地	古墳、古代
5	山田上ノ台塚	塚		30	基原西遺跡	竊取地	弥生、古墳、古代
6	物草平遺跡	竊取地	縄文、古代、中世	31	西台宮跡	宮跡	古代
7	新山遺跡	竊取地	縄文	32	西ノ上ノ台遺跡	竊取地	縄文、古代
8	東遺跡	竊取地	縄文、古墳、古代	33	堀ノ内遺跡	竊取地	古墳、古代
9	山田邊水遺跡	竊取地	縄文、古代	34	瀬田原東遺跡	竊取地	縄文、古代
10	山田邊西遺跡	竊取地	古代	35	瀬田原東基跡	竊取地	縄文、古代
11	山田邊南遺跡	竊取地	古代	36	六和宮遺跡	古墳	古代
12	竹ノ内南遺跡	竊取地	縄文、古代	37	瀬田河原南遺跡	竊取地	縄文、古代
13	山田原南遺跡	竊取地	縄文、古代	38	沼沢遺跡	竊取地	中世
14	山田原西遺跡	竊取地	縄文、弥生、古代	39	土手内南遺跡	竊取地	古墳、古代
15	柳渡基遺跡	基礎跡	縄文、弥生、古代	40	土手内南遺跡	竊取地	縄文、弥生、古墳、古代
16	横田遺跡	竊取地	古代	41	柳沢宮遺跡	竊取地	古代
17	八幡遺跡	竊取地	古墳、古代	42	柳沢古墳	古墳	古墳
18	上野遺跡	竊取地	縄文、古代	43	沼沢遺跡	竊取地、水田跡	旧石器、縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世
19	谷地東遺跡	竊取地	古代	44	瀬田原西遺跡	竊取地、水田跡、和歌	縄文、弥生、古墳、古代、近世
20	宮田東西遺跡	竊取地	古代	45	沼沢水田遺跡	竊取地	古代
21	栗ノ東遺跡	竊取地	弥生、古代	46	山口遺跡	竊取地、水田跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
22	西ノ口遺跡	竊取地	縄文、弥生、古代	47	下ノ内遺跡	竊取地	縄文、弥生、古墳、古代、中世
23	土手内南遺跡A地区	中世		48	伊古田遺跡	竊取地	縄文、古墳、古代
24	三神中遺跡	竊取地	縄文、古代				

第66図 山田条里遺跡の位置と周辺の遺跡

範囲で下層調査を行った。2区は水田跡の一区画状確認のため調査区南側に1m×5mの範囲で拡張区を設定して追加の調査を行った。



第67図 調査区位置図

4 基本層位

調査区が2ヶ所に離れているため、土性、土色等に違いは見られるが、1区では大別12層、細別14層、2区では大別12層、細別16層を確認した。本文中の記述における層名は各区ごとのものであり、共通の層名ではない。

1) 1区の基本層序

- 1 層：7.5GY3/1暗緑灰色粘上質シルト。現代の水田耕作土で厚さは10～16cmである。
- 2 a 層：10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト。調査区の南端部にもみ分布し、厚さは2 a 層が4～6 cmである。
水田耕作土と考えられる

2 b 層: 7.5Y3/2オリーブ黒色粘土質シルト。調査区の南端部のみ分布し、厚さは4~12cmである。水田耕作土と考えられる。

3 層: 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト。調査区の北側、南側は1層、2層の攪拌を受けていると見られ遺存していない。遺存部の厚さは2cm~12cmで水田耕作土と考えられる。

4 a 層: 5GY4/1暗オリーブ色砂質シルト。耕作により、よく攪拌されている。調査区の北側においては1層の攪拌を受けており遺存していないが、遺存部で厚さは4~14cmである。層下部に灰白色火山灰を霜降状に含む。

4 b 層: 5GY4/1暗オリーブ色砂質シルト。起耕の際に掘り起こされた層で調査区のほぼ全域に遺存しており、ブロック状の灰白色火山灰を含む。厚さは4~18cmである。灰白色火山灰のブロックは上層の攪拌の影響が強い北側にいくほど細かくなっている。

5 層: 5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土。調査区のほぼ全域に遺存する。自然堆積層と考えられ、厚さは6~20cmである。

6 層: 7.5Y4/2灰オリーブ色シルト質粘土。調査区のほぼ全域に遺存する。自然堆積層と考えられ、厚さは2~14cmである。

7 層: 10YR4/2灰黄褐色シルト質砂。調査区のほぼ全域に遺存する。自然堆積層と考えられ、南半部は赤褐色土で礫を全体に含む。厚さは40cm程である。

8層以下の土層の特徴は断面図の土層注記表のとおりである。



第68図 調査区配置図

2) 2区の基本層序

1 層: 10YR4/4褐色砂質シルト。現代の水田耕作上で厚さは8~16cmである。

2 層: 5YR4/6赤褐色砂質シルト。調査区のほぼ全域に遺存するが、1層の攪拌を受けており、厚さは2~10cm程である。

3 層: 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト。調査区の全域に遺存する。厚さは4~14cmで水田耕作土と考えられる。

4 層: 10YR3/3暗褐色シルト。調査区の全域に遺存する。厚さは4~12cmで水田耕作土と考えられる。

- 5 層：10YR3/3暗褐色砂質シルト。自然堆積層と考えられ、4層の攪拌を受けており調査区西側では遺存していない。厚さは2～8cmである。
- 6 a 層：10YR4/2灰黄褐色砂質シルト。調査区のほぼ全域に遺存し、厚さは4～14cmである。6層水田耕作土の上部。
- 6 b 層：10YR3/1黒褐色シルト質粘土。調査区の西側だけに遺存し、直下の7 a - 2層を巻き込んでいる。厚さは4～12cmである。6層水田耕作土の下部。
- 7 a - 1層：2.5Y4/2暗灰黄色シルト。水田耕作土で耕作によって、よく攪拌されている。調査区の東側のみに遺存し、厚さは4～12cmである。
- 7 a - 2層：2.5Y5/2暗灰黄色シルト。よく攪拌されている。調査区のほぼ全域に遺存し厚さは6～18cmである。
- 7 b 層：2.5Y8/1灰白色シルト。水田耕作土で、7 a 層水田の起耕の際に耕作土の下部に形成されたブロック状の層である。調査区のほぼ全域に遺存する。厚さは2～12cmである。
- 8層以下の上層の特徴は断面図の土層注記表のとおりである。いずれも自然堆積層と考えられる。
- なお、第2表は4次調査2区と7次調査1区、2区を併せた基本層序対応表である。

第2表 4次調査2区・7次調査1区・2区 基本層序対応表

4次調査 2区		性 格	7次調査 1区 2区		性 格	
I		現代の水田耕作土	1	1	水田耕作土	
II a		鎌か水田の耕作土	2a	2		
II b		徳か水田の耕作土	2b	3	水田耕作土	
III		平安時代後半以降の 水田耕作土		4	水田耕作土	
灰白色水田灰		10世紀後半		5	自然堆積層	
IV a		平安時代前半の水田耕作土	3	6a	水田耕作土	
IV b		平安時代前半の水田耕作土		6b	水田耕作土	
V			4a	7a-1	平安朝の水田耕作土	
VI				7a-2		
VII			4b	7b	灰白色水田灰は1区4層、2区7層より期早される	
VIII			5a	8		
IX			5b			
X			6			
XI			7			
XII			8	9		自然堆積層
XIII				10a		
XIV				10b		
XV			10	11		
XVI			11	12		
XVII			12			

※7次1区5層、2区8層と4次IVa層以下の上層との対応関係は不明。

5 1区の発見遺構と出土遺物

1) 3層の調査

1、2層を重機により除去し、3層上面を検出したが遺構は検出されなかった。3層も水田耕作土と考えられる。3層を除去し4層上面を検出したが、3層水田に伴う畦畔の痕跡は検出されなかった。

2) 4層水田跡

4 a 層上面では畦畔を検出できなかったが、4 b 層中で4層水田跡に伴う擬似畦畔Bを確認した。

〔耕作土〕

耕作土は耕作により、よく攪拌された4 a 層と起耕の際に掘り起こされた4 b 層である。4 a 層は暗オリーブ色

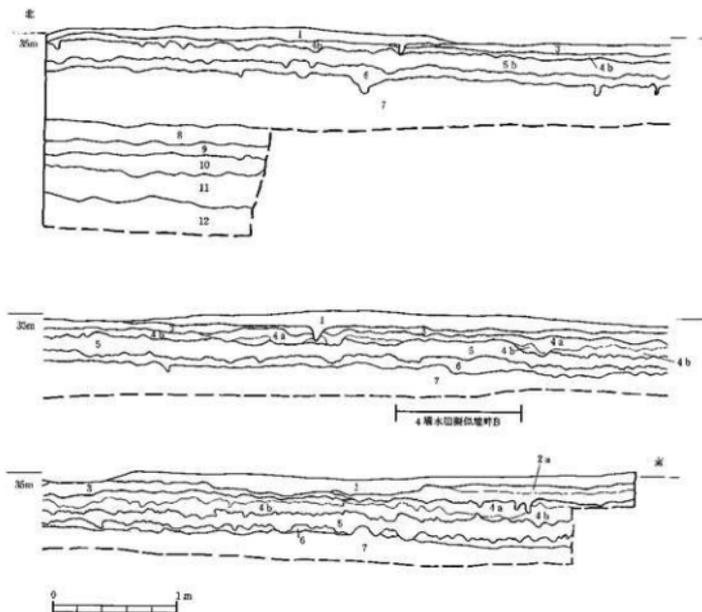
の砂質シルト土である。また、灰白色火山灰層・5層をも巻き上げて耕作している。4 a 層はほとんどが調査区のはば中央を東西に走る擬似畦畔Bの南側のみで遺存している。これは上層の1層、3層（ともに水田耕作土と推定）によって畦畔の北側については振拌・削平された結果と考えられる。遺存部の4 a 層の厚さは4 cm~14 cm程で、下面に凹凸が見られる。4 b 層は調査区全域に遺存し、厚さは4 cm~18 cm程である。

〔畦畔〕

4 b 層除去中に、下層の5層が南北方向とそれに直交する東西方向に帯状に延びる2条が確認された。方向はほぼ真北方向とそれに直交している。5層は自然堆積層であることからこれは4層の耕作に伴う擬似畦畔Bと判断した。それぞれの擬似畦畔跡は検出部で南北方向の畦2が長さ3.5 m、幅75 cm、高さ3.5 cm~7 cm、東西方向の畦1が長さ4 m、幅75 cm、高さは7 cmである。

〔水田区画〕

水田区画は3区画確認された。区画①は検出部で東西長3.7 mを計る。区画②は畦1、畦2が直交するので方形区画と推定される。検出部で東西長は3.5 m、南北長は3 mを計る。区画③は畦1と畦2が直交し調査区北側断面



土層No.	土色	土質	備考	土層No.	土色	土質	備考
1	7.5G3/1	暗緑灰色 粘土質シルト	現代の水田耕作土。	6	7.5Y4/2	灰青リゾープ色	シルト質土
2a	10Y2/1	オリーブ灰色	粘土質シルト 層上部に酸化鉄を含む。水田耕作土。	7	10YR4/2	灰青褐色	2.5~5.5% 塩分含有率。礫を含む。
2b	7.5G3/2	オリーブ灰色	粘土質シルト マンガン鉄をまばらに含む。酸化鉄を含む。水田耕作土。	8	10YR2/3	黒褐色	2.1~3.1% マンガン鉄。酸化鉄を少量含む。
3	5Y4/2	灰青リゾープ色	砂質シルト 水田耕作土。	9	10YR3/1	オリーブ色	3.4% 塩分 マンガン鉄を全体に含む。酸化鉄をわずかに含む。
3a	5G4/1	暗オリーブ色	粘土質シルト 層下部に灰白色火山灰を薄層状に含む。水田耕作土。	10	10Y2/1	黒色	粘土質シルト 酸化鉄をわずかに含む。
4a	5G4/1	暗オリーブ色	粘土質シルト 灰白色火山灰をブロック状に含む。水田耕作土。	11	10Y4/1	灰色	粘土質シルト 粒径3cmほどの黒色ブロックをまばらに含む。
5	2.5Y2	オリーブ灰色	シルト質 酸化鉄を全体に含む。	12	10G2/1	暗緑灰色	シルト 濃い褐色のブロックを数箇所に含む。

第60図 1区東壁土層断面図

に痕跡が確認されるので方形区画と考えられる。検出部で南北長3.7mを計る。いずれの区画も部分的な検出で全体の形状の判るものはない。

〔水田面の標高と傾斜〕

4 a層が調査区の南側にしか遺存しないため水田面の傾斜は部分的にしか判らないが、上層の様子から水田面は北西から南東方向に傾斜していると見られる。標高は区画②が34.76m、区画③は34.71mである。勾配は5cm/10mである。区画内の比高差は検出部ではあるが区画②、③ともほぼ平坦である。

〔出土遺物〕

耕作土中からはロクロ土師器片3点が出土したのみである。図化できたのは土師器片1点（第77図1）である。

3) 土坑

3号土坑—SK3

4 a層上面で土坑1基（SK3）を検出した。調査区南端部に位置する。大きさは直径150cmの円形で深さは約57cmである。堆積土は全体に灰白色火山灰をブロック状に含み、一度に埋め戻されていると考えられる。遺物は出せず、年代や性格も不明である。

6 2区の発見遺構と出土遺物

1) 3～5層の調査

1～2層を重機で除去し、3層上面から調査を行った。3層、4層とも水田耕作土と観察されたが、3層上面及び4層上面では遺構は検出されなかった。また、5層上面でも畦畔及び畦畔痕跡は検出されなかった。

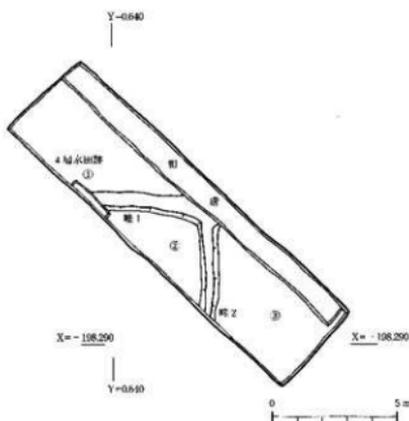
2) 6・7層水田跡

① 6層水田跡

自然堆積層である5層中において6層水田跡の畦畔を1条確認した。

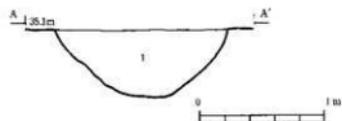
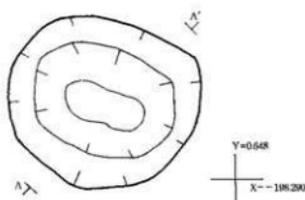
〔耕作上〕

耕作土は6 a層とブロック状の6 b層である。6 a層は灰黄褐色の砂質シルト土で、西側は水田耕作土と考えられる4層による攪拌を受けているが、調査区のほぼ全域に遺存する。厚さは6cm～14cmで下面に凹凸が見られる。



第70図 1区4層水田跡

SK-3



土層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/2 キリーブ灰色	粘り質(※)	全体にφ2cm程度の灰白色火山灰のブロックを含む。検出部のブロックを全体に含む。下にマンガンが点する。

第71図 1区SK-3土坑実測図

規模は長さ3.5m、幅150cm、高さ2cmである。畦畔の位置は下層の7a-2層水田跡の畦4と1mほどずれる程度で7a-2層水田跡を踏襲している可能性も考えられる。

〔水田区画〕

水田区画は2区画確認された。検出部で区画①は東西長3mを計り、区画②は東西長4mを計る。全体の形状が判らないので詳細は不明である。

〔水田面の標高と傾斜〕

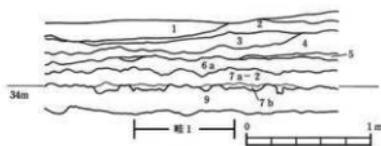
水田面の標高は区画①が34.30m、区画②が34.16mで北東から南西方向に傾斜している。勾配は5cm/10mである。区画内の比高差は検出部ではあるが区画①で5cm、区画②で7cmである。

〔出土遺物〕

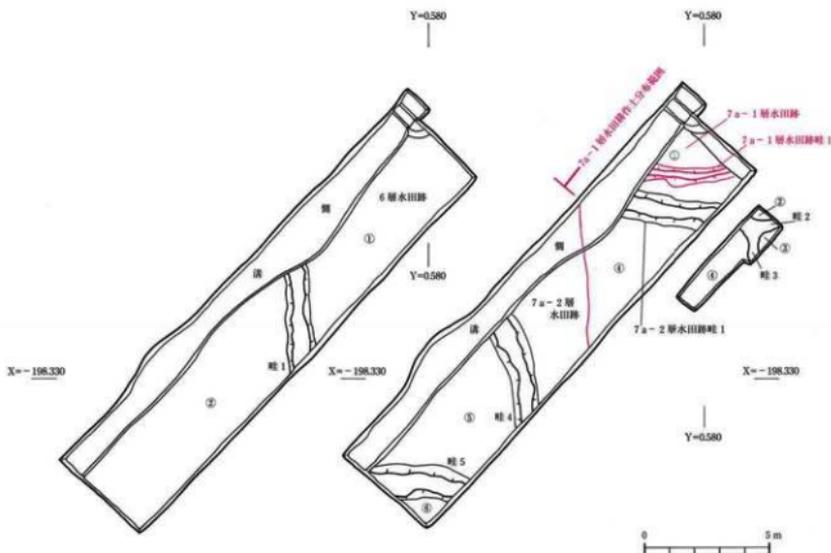
6層中からは土師器片が1点出土している。

②7層水田跡

7層は耕作によって、よく攪拌された耕作土上部の7a層と起耕の際に耕作土の下部に形成されたブロック状の土塊である7b層に分けられる。7a層はさらに上下2面の水田耕作土層に分けられた。7a-1層は調査区のほぼ中央より東側に分布する。この7a-1層上面で擬似畦畔Bを確認した。



第73図 6層水田跡畦畔断面図



第74図 2区6層・7層水田跡

7a-1層水田跡

〔耕作土〕

耕作土は7a-1層で暗灰黄色のシルト質土である。厚さは4cm~12cmである。

〔畦畔〕

畦畔は東西方向で検出部の規模は長さ3m、幅50cm、高さ2cmである。

〔水田区画〕

6層水田の擾乱を受けている部分が多く7a-1層の水田跡としての区画は不明である。

〔水田面の標高と傾斜〕

7a-1層の遺存部の標高は擬似畦畔の両側とも34.21mではほぼ平坦である。

〔出土遺物〕

7a-1層中から出土した遺物は、円化したロクロ土師器片1点(第77図2)のみである。

7a-2層水田跡

7a-2層上面では7a-1層水田及び6層水田による耕作の影響を受けているため、畦畔は確認できなかったが7b層中において擬似畦畔跡を3条確認した。また、この水田跡の畦畔の延びを確認するため、調査区の東側に拡張区を設定し追加の調査を行った。

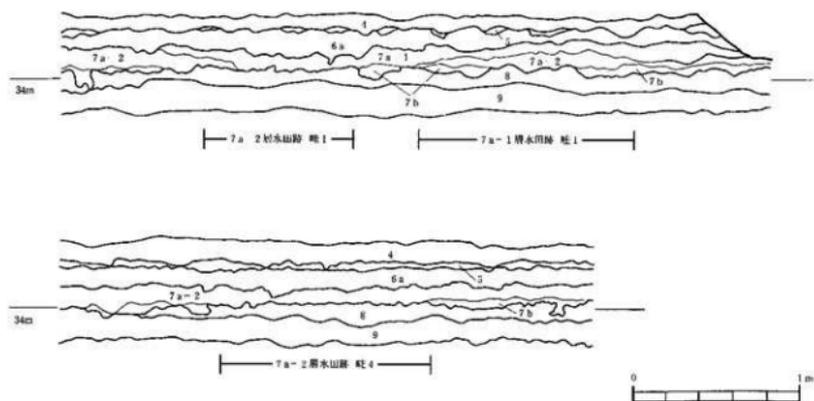
〔耕作土〕

耕作土は調査区全体に分布する。暗灰黄色のシルト質土で厚さは6cm~18cmである。灰白色火山灰を巻き上げ8層上面まで耕作が及んでいる。

〔畦畔〕

7b層中で調査区の東側、中央、西側に下層の8層が帯状に延びるのが確認された。8層は自然地積層であることからこれらは7a-2層の耕作に伴う擬似畦畔Bと判断した。畦1は東西方向で検出部の規模は長さ3m、幅1.0m、高さは4~7cmである。畦4は南北方向で検出部の規模は長さ4m、幅100cm、高さは3~5cmである。畦5は東西方向で検出部の規模は長さ3.5m、幅1.3m、高さは2~3cmである。

拡張区においては7b層上面で畦1に続くものと考えられる畦畔が確認された。東西方向とそれに直交する畦畔



第75図 7層水田跡畦畔断面図

跡を確認した。それぞれの規模は畦2が東西方向で長さ1.5m、幅50cm、畦3が南北方向で長さ1.0m、幅30~50cmである。

[水田区画]

区画①は調査区内の検出部では東西長3.5mを計るが、拡張区の区画②まで続くとすると東西長は6mを越えるものと推定される。また、調査区と拡張区の間で南北方向の畦が存在する可能性も考えられる。区画③は畦の直交部分の検出のみなので区画の詳細は不明である。区画④は拡張区において検出された畦畔路が直交することにより、方形区画と推定できる。また、規模は畦1と畦4が両側で直交し、畦4と畦5が東側で直交しさらに延びるとすれば南北長約12m、東西長約10mを計る区画と推定できる。区画⑤においても畦4と畦5が直交すると考えると方形区画と推定される。区画⑥については東西長1.8mを計るが、詳細は不明である。

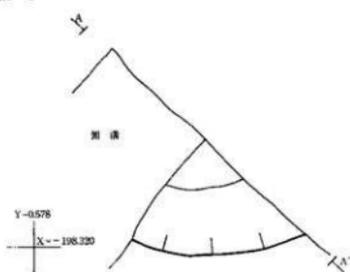
[水田面の標高と傾斜]

標高は34.08m~33.9mで、北東から南西方向、あるいは北から南方向に傾斜している。区画④と区画⑤の勾配は5cm/9mである。区画内の比高差は検出部ではあるが区画④で3cm前後、区画⑤で5~6cmである。

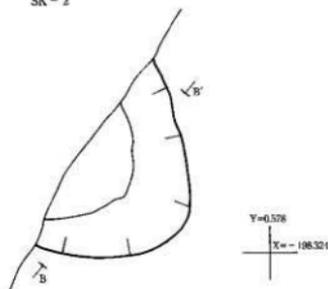
[出土遺物]

7a-2層、7b層中からは土師器片3点、須恵器片1点が出土したのみで、図化できたものは無い。

SK-1



SK-2



SK-1

上層No	上	色	土質	備	考
1	2.5V4/2	暗黒黄褐色	シルト質砂	腐化跡をブロック状に含む。	
2	2.5V4/2	暗灰青色	シルト質砂	1層に比べて腐化跡が多量に、黄色の土をブロック状に含む。	

SK-2

上層No	上	色	土質	備	考
1	2.5V4b/2	暗灰黄褐色	砂質	腐化跡をブロック状に含む。	

第76図 SK-1・2土坑実測図

3) 土坑

1号土坑—SK1

2層上面で検出した。調査区の東壁にかかり、全体の形状は判らないが楕円形もしくは円形と推定され、規模は検出部分で長径200cm、短径100cm、深さ55cmである。堆積土は暗灰黄色のシルト質砂で、一度に埋め戻されていると考えられる。出土遺物は無く、年代や性格は不明である。

2号土坑—SK2

2層上面で検出した。調査区の中央から東よりに位置する。側溝にかかる部分は、崩落のため無くなってしまった。全体の形状は判らないが、楕円形と推定される。規模は検出部分で長径170cm、短径100cm、深さ30cmである。堆積土はSK-1同様暗灰黄色のシルト質砂で、一度に埋め戻されていると考えられる。出土遺物は無く、年代や性格は不明である。



調査区	遺跡番号	ホト区	基準層	出土遺物	遺物集	取上番号	経緯	石種	高さ	口径	取付	(外 径)	形	集 (内 径)	写真位置
1	D-1	1	4b					準地土器 埴	(3.1)	130		77K17	口ナシ		第-3-2
2	U	2	7a-1					土製器 煮付付	(1.1)		6.5	口ナシ	口部縮小短形	ハタミザキ 灰白色処理	第-3-1

第77図 出土遺物実測図

7 まとめ

- ① 今回の調査区は遺跡中央からやや西よりで、1区は2次調査A区、4次調査2区の北側、2区は4次調査2区の西側の地点にあたる。標高は1区で36.8m前後、2区で36.5m前後である。
- ② 水田跡は1区では2層、3層、4層、2区では3層・4層・6層・7層が水田土壌と判断された。
- ③ 確認できた畦畔は1区では4層水田跡に伴う擬似畦畔Bが1条、2区では6層水田に伴う畦畔が1条、7a-1層水田跡に伴う擬似畦畔Bが1条、7a-2層水田跡に伴う擬似畦畔Bが5条である。各畦畔はほぼ真北方向を基準としている。
- ④ 水田区画は1区画が完全に検出できたものは無かったが、2区7a-2層水田跡では、調査区内から続くと思われる畦畔跡が拡張区でも検出され、1区画の規模を南北長12m、東西長10mの方形区画と推定できた。
- ⑤ 水田の時期は1区4層水田跡と2区7層水田跡については灰白色火山灰を巻き上げて耕作していることから、915年以降と考えられる。4a層、7a-1層からそれぞれ土師器、須恵器が出土し、それ以降の遺物が出土していないことから平安時代の中に位置付けられるものと考えられる。また、平安時代後半以降と位置付けられている4次調査2区の3層水田跡と対応すると考えられるが、今回の調査では出土遺物が少なく詳細な時期までは特定できなかった。それ以外の水田層については出土遺物が無く時期は不明である。
- ⑥ 1区4層水田と対応する2区7層水田についてみると、水田面の標高差は約50cm～70cmで今回の2つの調査地点において平安期における地形は北東から南東方向に傾斜していたと考えられる。
- ⑦ 4次調査区1区、2区で検出された灰白色火山灰直下層の水田跡は検出されなかった。
- ⑧ 2次調査A区、4次調査2区よりも北西地域でも平安期の水田域が広がる事が確認できた。

参考文献

- 波部弘美（1993）：「山田桑里遺構」『仙台平野の遺跡群Ⅱ 平成4年度発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第170集
- 主浜光朗（1999）：「山田桑里遺跡－第2次・第3次調査」『陸奥同分尼寺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第238集
- 平間亮輔（2000）：「山田桑里遺跡－第4次・第5次調査」『五本松窯跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第247集
- 佐藤 淳（2001）：「山田桑里遺跡－第6次調査」『八木山緑町遺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第253集

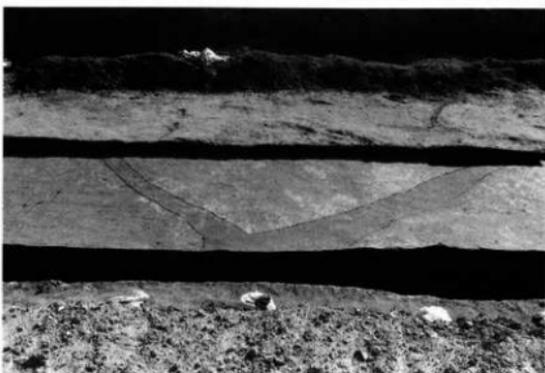
- 1 検出状況（南より）
畦畔は疑似畦畔Bとしての5層



- 2 北半部検出状況（東より）
白色の帯は灰白色火山灰



- 3 中央部検出状況（東より）



図版31 1区4層水田跡

1 4層下部の状況（南より）



2 5層上面検出状況（南より）
耕作の痕が点々と残る

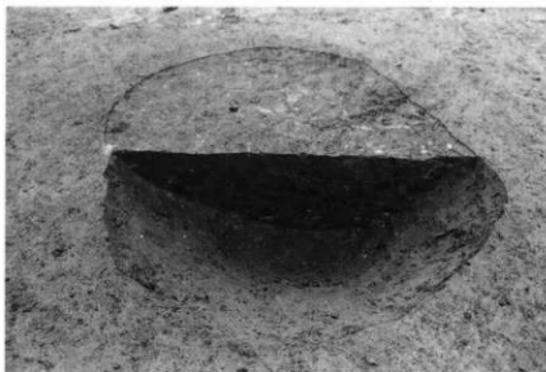


3 調査終了時 6層上面（南より）

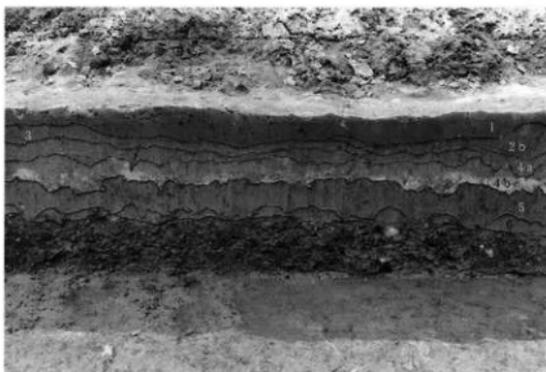


図版32 1区調査状況

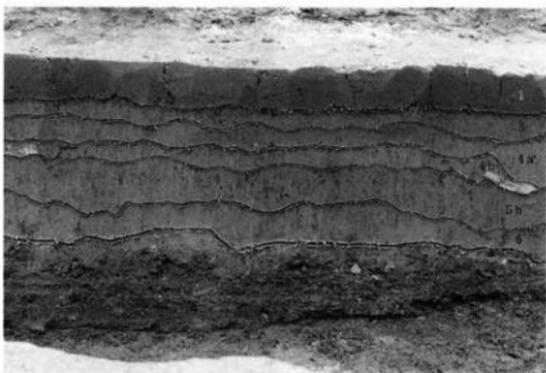
1 SK3断面(南より)



2 東壁土層断面



3 4層水田跡疑似畦畔B断面



図版33 1区土坑断面・土層断面

1 表土除去状況 (西より)



2 SK1断面 (西より)



3 SK2断面 (南より)

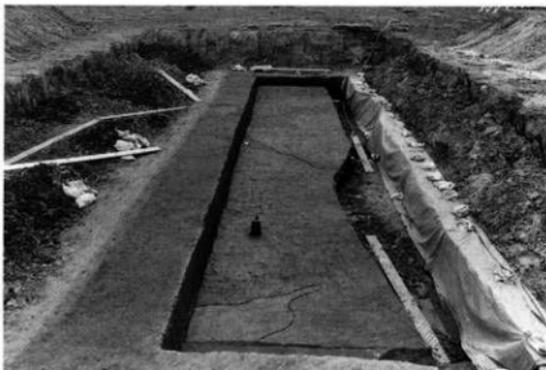


図版34 2区の状態と土坑断面

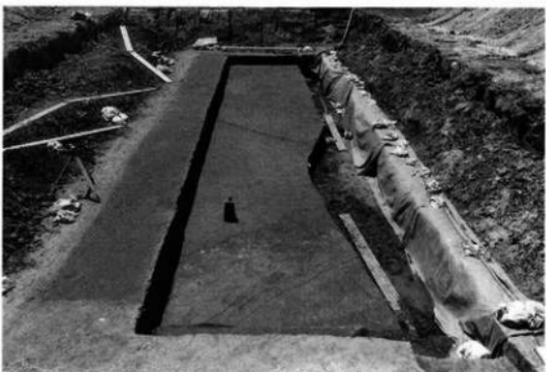
1 6層水田跡畦畔検出状況
(北より)



2 7a-1層・7a-2層
検出状況 (東より)



3 7a-2層検出状況 (東より)



図版35 2区6層・7a層調査状況

1 7b層上面検出状況（西より）



2 7b層下部検出状況（東より）
黒い帯状が7a-2層水田跡
疑似畦畔B



3 7b層下部検出状況 近景
（南西より）



図版36 2区7b層調査状況

1 拡張区7b層検出状況(東より)
畦畔は7a-2層水田跡疑似畦畔B



2 8層上面検出状況(東より)

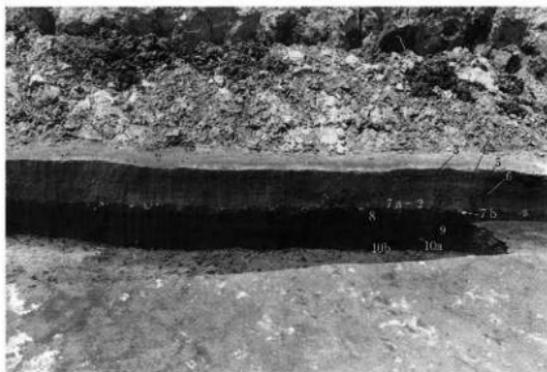


3 調査終了時 9層下部(東より)



図版37 2区7b層～9層調査状況

1 北壁土層断面

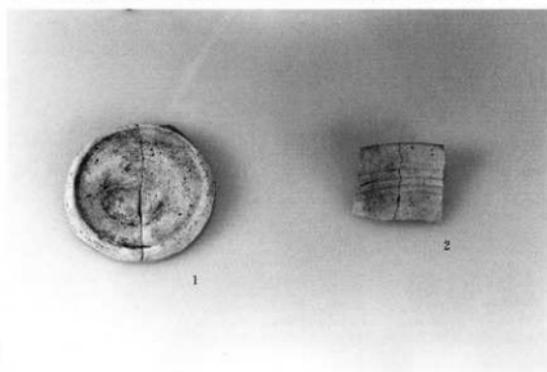


2 北壁土層断面



3 出土遺物

- 1 土胎器杯 (2区7a-1層第77図2)
- 2 赤焼土器杯 (1区4b層第77図1)



図版38 2区 土層断面、出土遺物

VI 富沢遺跡（第122次）発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	富沢遺跡（宮城県道跡番号01369）第122次調査		
調査地点	仙台市太白区長町南三丁目10-1		
調査期間	平成14年4月15日～4月25日		
調査対象面積	203㎡		
調査面積	45㎡		
調査原因	共同住宅建築		
調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）		
担当職員	主査	工藤哲司	文化財教諭 加藤徳明

2 遺跡の位置と環境

富沢遺跡は、仙台市の東南部の沖積地に位置している。このあたりは、北西部から西部にかけては奥羽山脈から派生した青葉山丘陵に、北東部から東部にかけては広瀬川の形成した自然堤防に、南側は名取川の形成した自然堤防に囲まれ、「郡山低地」と呼ばれている。富沢遺跡は郡山低地の西半部に広がっており、登録面積は約90haに及んでいる。遺跡の標高は16～9mで、北西から南東方向に緩やかに下がっている。これまでに100次を超す発掘調査が行われ、弥生時代から近世・近代に至る水田跡が重層して発見されており、当地方の水田の変遷を知ることができる。また、水田跡の下層からは縄文時代や旧石器時代の遺構・遺物も発見されている。周辺の丘陵部や自然堤防上には、縄文時代から中・近世に至るまでの集落跡や占墳などの多くの遺跡が存在しており、仙台市内でも特に遺跡が濃密に分布する地区にあたる。

3 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成13年12月27日付けで、嶋田忠悦氏より発掘届が提出されたことにより実施した。建築予定地は、アスファルト舗装され駐車場となっていたため、建築範囲についてアスファルトをカットしたのち、重機により盛土層と近年の水田耕作土層（1・2層）を排除した。盛土及び表土層は地権者の協力により場外に搬出した。地表面の掘削範囲は南北13m・東西8mであるが、盛土層が1.2～1.3mと厚いため、盛土層と1・2層除去範囲は南北9m・東西5mである。実際の調査は南北7m・東西3mの範囲で実施した。調査は1・2層の残りとし3層の除去から開始し、東側に隣接する第33次調査における調査成果をもとに水田跡の検出を層毎に実施した。第33次調査において水田跡が検出された層と対応する地層より下層についても一部を深掘りして土層の観察を行った。

測量は、任意の基準点で行った後、この基準点から調査区の近くに設置した国家水準X系の基準杭2点を計測して座標位置を求めた。

4 基本層序

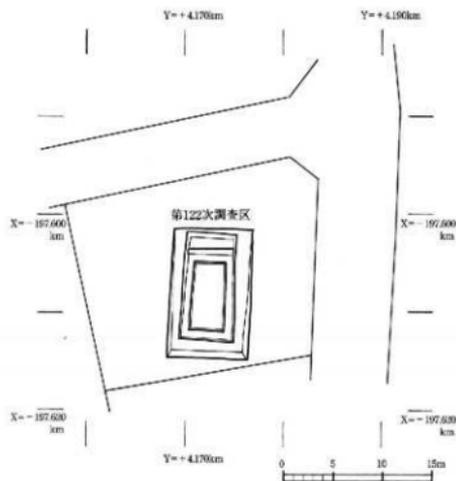
今回の調査地点は、掘削深度の範囲（現地表から4m・旧表上から2.8m）で21層に分層した。1層は土地区画整理が実施される前の水田耕作土層で、2層は1層水田耕作土層の下に形成された酸化鉄集積層である。3層も良くこなれた土層で、水田耕作土層と観察される。4層から13層にかけては、水田耕作土と考えられるブロック状の



第78図 富沢遺跡の調査地点と周辺の遺跡

富沢遺跡周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	経 緯	年 代
1	富沢遺跡	後香取遺	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代～近世
2	土手内第六遺跡	土手内遺跡群	古墳・奈良
3	柳御古墳	瓦葺遺	古墳 (円墳)
4	柳御塚遺跡	瓦葺遺	奈良・平安
5	金洗沢古墳	瓦葺遺	古墳 (円墳)
6	金洗沢古墳	自然発跡	古墳 (円墳)
7	築崎前遺跡	自然発跡	縄文・弥生・古墳・古代・近世
8	築崎古墳	自然発跡	古墳 (円墳)
9	山口遺跡	自然発跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世
10	下ノ内遺跡	自然発跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世
11	下ノ内遺跡	自然発跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世
12	富沢内丁古御郡	自然発跡	中世
13	六反田遺跡	自然発跡	縄文・弥生・古墳・古代・近世
14	築敷遺跡	自然発跡	古墳・平安
15	築敷遺跡	自然発跡	縄文・奈良・平安
16	土野市古墳群	自然発跡	古墳 (前方後円墳・円形)
17	瓦葺遺跡	自然発跡	奈良・奈良・平安・中世・近世
18	大野田遺跡	自然発跡	縄文・弥生・奈良・平安
19	王ノ塚遺跡	自然発跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世
20	富野六丁遺跡	自然発跡	奈良・平安
21	長町南遺跡	自然発跡	奈良・平安
22	新木遺跡	自然発跡	奈良・平安



第79図 第122次調査区配置図

土壌を含む地層と自然堆積層と観察される互層上の土層が交互に存在する。13層以下は、未分解の植物遺体が自然堆積した層を主体とする地層が連続する。（第81図）

5 発見遺構と出土遺物

今回の調査地点の基本層序と、第33次調査の基本層序は下表のように対応するものと判断した。

第3表 第122次と第33次調査の土層対応表 (アミかけの地層は第33次調査の水田跡または水田土壌検出層)

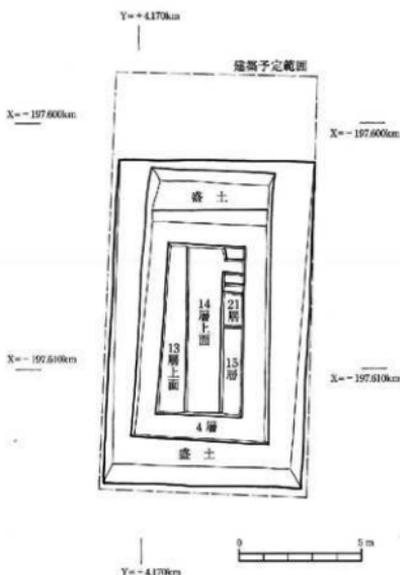
第122次	第33次	第122次	第33次	第122次	第33次
1層	2層?	6層	10層(平安)	11層	18層
2層	?	7層	12b・13・14層	12層	19層(弥生:橋形掘式)
3層	3	8層	15a・15b(弥生:十三塚式)	13層	20層下部
4層	5b層(平安)	9層	16層	14層	20層下部
5層	8層(平安)	10層	17層(弥生:十三塚式)	15層	21層

4層は「灰白色火山灰」（注1）や黒色粘土のブロックを含む事から水田耕作土層と判断され、後記のようにプラント・オパール分析の結果でも水田耕土の可能性が指摘されているが、畦畔等の遺構及びその疑似畦畔B等の痕跡についても検出されなかった。なお、4層は「灰白色火山灰」降下後に耕作土が形成されていることから10世紀前葉以降の年代が考えられる。

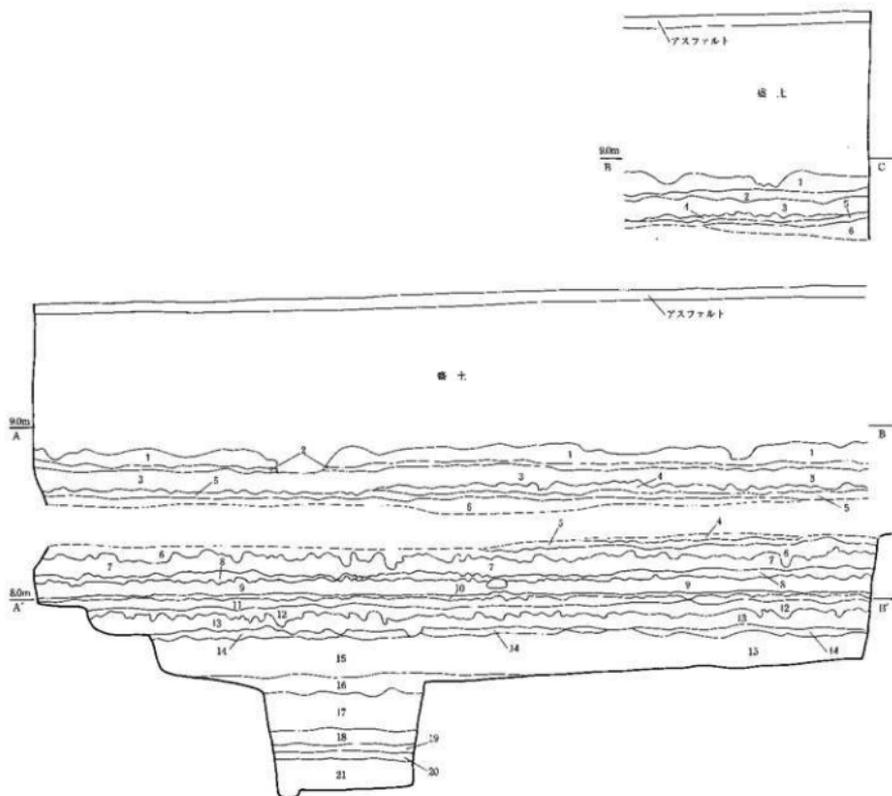
5層についても、層中に「灰白色火山灰」をわずかに含んでいるが、独立した耕作土層であるのか、4層水田耕作土の下部を構成する酸化鉄集積層であるのか、明確な判断はできなかったが、観察結果では後者の可能性が高い。

6層も黒色粘土・オリブ黒色粘土等を含み攪拌された状況を呈する土壌であり、プラント・オパール分析でも水田耕土の可能性があるが、水田遺構は検出されなかった。

8層・10層・12層についても第33次調査の成果から水田関係の遺構が検出される可能性があったので、その前後の地層を含めて慎重に調査を行ったが、第33次調査で検出されたような畦畔や溝跡など水田跡の存在を示す遺構は検出できなかった。このことは、プラント・オパール分析において、8層ではイネのプラント・オパールが検出されず、10層・12層ではプラント・オパールが検出されているもののその量が少なく稲作が行われた可能性が低いとされた結果と一致している。ただし、8層・10層・12層については、その前後の互層状の土層とは異なり、攪拌を受けてこねた状態の土壌で、層の底面に凹凸も観察され、水田土壌の可能性がことや、富沢遺跡ではなんらかの事情



第80図 第122次調査区実測図



第81図 第122次調査区東壁断面図

により、プラント・オパール分析の結果で水田土壌と認定する基準値（今回の分析を行った古環境研究所の基準では3,000個/g）以下や、プラント・オパールが未検出でも畦畔が検出される場合があったので、直ちにこれらの3層が水田跡であったか否かは判断できない。水田跡であった場合、畦畔等これに伴う遺構が検出できなかった理由は明らかでないが、近隣地区でのこれまでの調査と今後の調査の成果によって、当該上層の評価をする必要がある。

出土遺物は、3層中から摩滅したロクロ土師器の破片が1点あるだけである。

6 まとめ

- ① 本調査地点は旧水田から約2.8mの深さまでの地層を21層に分けることができた。
- ② 東側に隣接第33次調査地点と地層の関係が明らかになり、4層・6層が平安時代の水田層に、8層が弥生時代

第122次調査区土層注記

層 号	土 色	土 質	備 考
1	5Y3/1 オリーブ灰色	シルト質粘土	酸化鉄を顔目状にわずかに含む。
2	2.5Y3/1 黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含むが、ブライ化している。
3	5Y2/1 褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。
4	10YR4/1 黄褐色	粘土	酸化鉄を下部に薄層状に含む[灰白色火山灰]をまばらに含む。褐色粘土のブロックをまばらに含む。
5	5Y2/2 オリーブ褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む。[灰白色火山灰]をわずかに含む。
6	2.5Y3/1 黄褐色	粘土	褐色粘土・オリーブ褐色シルト質粘土及び酸化鉄をわずかに含む。
7	10Y5/2 オリーブ灰色	粘土	0.5~2cmの厚さで互層状に堆積(自然堆積)
10YR17/1 褐色	粘土		
10Y6/2 オリーブ灰色	粘土		
5Y3/1 オリーブ灰色	粘土		
8	5Y3/2 灰オリーブ色	粘土	灰色粘土とオリーブ灰色粘土をブロック状にわずかに含む。
9	10YR2/3 灰褐色	粘土	1~2cmの厚さで互層状に堆積。未分解の植物遺体を多く含む(自然堆積)
10YR4/3 にごい黄褐色	粘土		
10YR2/1 灰色	粘土		
10	5Y2/2 オリーブ褐色	粘土	未分解の植物遺体を含む。
11	5Y4/3 暗オリーブ色	粘土	0.5~1cmの厚さで互層状に堆積。未分解の植物遺体を含む(自然堆積)
10YR17/1 褐色	粘土		
10YR2/3 灰褐色	粘土		
2.5Y4/2 暗灰褐色	粘土		
12	2.5Y2/2 黄褐色	粘土	暗褐色土及び未分解の植物遺体を含む。
13	2.5Y3/1 黄褐色	粘土	0.5~2cmの厚さで互層状に堆積。未分解の植物遺体を多く含む(自然堆積)
2.5Y4/3 黄褐色	粘土		
10YR17/1 褐色	粘土		
5Y2/2 オリーブ褐色	粘土		
14	2.5Y3/3 暗オリーブ色	粘土	未分解の植物遺体を含む(自然堆積)
15	10YR17/1 褐色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む(自然堆積)
10YR3/1 黄褐色	粘土		
10YR17/1 褐色	粘土		
16	10YR2/3 灰褐色	粘土	2~3cmの厚さで互層状に堆積。未分解の植物遺体を含む(自然堆積)
10YR17/1 褐色	粘土		
10YR2/3 灰褐色	粘土		
17	10YR17/1 褐色	粘土	1~5cmの厚さで互層状に堆積。未分解の植物遺体を多く含む(自然堆積)
10YR4/2 にごい黄褐色	粘土		
10YR3/4 灰褐色	粘土		
18	10YR2/1 灰色	粘土	未分解の植物遺体を少量含む(自然堆積)
19	5Y2/1 褐色	粘土	未分解の植物遺体を少量含む(自然堆積)
20	5.5Y2/1 灰色	粘土	未分解の植物遺体を少量含む(自然堆積)
21	5Y4/2 灰オリーブ色	粘土	2~5cmの厚さで互層状に堆積(自然堆積)
2.5Y2/1 灰色	粘土		

中間後半の十三塚式期に、10層が弥生時代中期十三塚式から樹形冢式期に、12層が中間中葉樹形冢式期に対応させることができた。

- ③ 4層・6層については、水田に関係する遺構は検出されなかったが、土壌の観察とプラント・オパール分析の結果、当該地にも水田が存在したことが明らかになった。
- ④ 8層・10層・12層は、土壌の観察では水田耕作土層の可能性が考えられたが、畦畔等は検出されず、またプラント・オパール分析の結果でもイネのプラント・オパールが検出されないまたは検出数値が低かった。これらの土層については、水田が形成されていたが、なんらかの事情でのイネのプラント・オパールが検出されなかったのか、非耕作域のような地区であったのかは今後の検討課題である。

(注1) [灰白色火山灰] (庄子・山田：1980) は、現在、十和田a火山灰(To-a)と同定されており、降下年代は西暦915年初夏とされている(町田：1981・1996)。

参考文献

主浜光尚(1988)：「富沢遺跡第33次発掘調査報告書」。仙台市文化財調査報告書第117集

1 調査区全景 (南西より)



2 4層上面検出状況 (北より)



3 6層上面検出状況 (南より)



図版39 調査区全景と4～6層調査状況



1 6層下部から7層上面検出状況
(南より)



2 8層上面検出状況（南より）



3 8層下部から9層上面検出状況
(南より)

図版40 6～9層調査状況

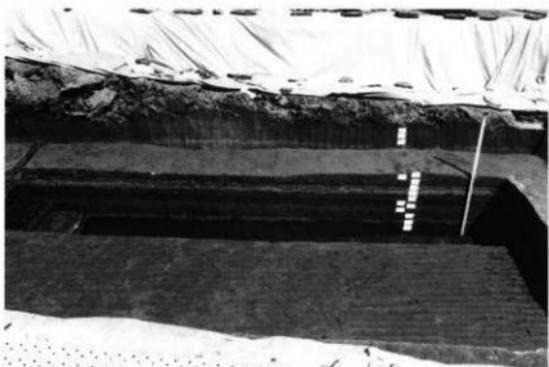
1 10層上面検出状況（南より）



2 11層上面検出状況（南より）



3 12層上面及び東壁断面（西より）



図版41 10～12層調査状況

7 富沢遺跡第122次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも酸化(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山、2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山、1984)。

富沢遺跡第122次調査は、第33次調査の南西側に位置する。第33次調査では、平安時代から弥生時代にかけての水田跡が検出されたことから、当該調査区においても同時期の水田跡の包蔵が推定された。そこで、プラント・オパール分析を行い稲作(水田)跡の可能性について検討することになった。

2) 試料

分析試料は、東壁の4層(褐灰色粘上)、6層(黒褐色粘土)、8層(灰オリブ色粘土)、10層(オリブ黒色粘土、12層(黒褐色泥炭質粘土)の5点である。分析結果の模式柱状図に試料採取箇所を示す。

3) 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)をもとに次の手順で行った。

- ① 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- ② 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- ③ 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- ④ 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散
- ⑤ 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- ⑥ 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- ⑦ 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞(葉身のみ形成される)に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精度に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数(試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻³g)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94(種実重は1.03)、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、ネザサ属(チシマザサ節・チマキザサ節)は0.75およびミヤコザサ属は0.30である。

4) 結果

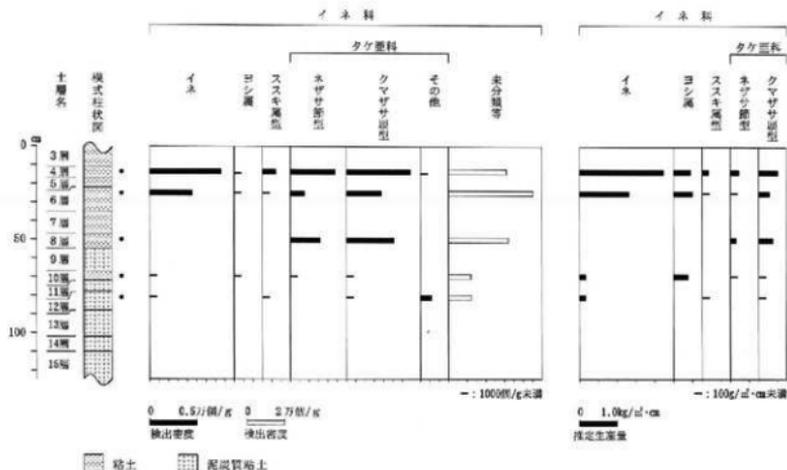
分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科(ネザサ節型、クマザサ属型、その他)および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。

表一 第122次調査のプラント・オパール分析結果

分類群 (和名・学名) \ 土層	地点名				
	東壁				
	4	6	8	10	12
イネ科 Gramineae (Grasses)					
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	76	45		6	6
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)	7	8		6	
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	14	8			6
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)					
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	48	15	32	6	
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	69	38	51	6	6
その他 Others	7				12
未分類等 Unknown	124	181	128	48	49
プラント・オパール総数	345	294	211	72	79

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	2.23	1.33		0.18	0.18
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)	0.44	0.48		0.38	
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	0.17	0.09			0.08
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	0.23	0.07	0.15	0.03	
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	0.52	0.28	0.38	0.05	0.05



図一 第122次調査のプラントオパール分析結果

主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に各分類群の検出状況を記す。

イネは4層、6層、10層および12層で検出されている。4層と6層では高い密度である。ヨシ属は4層、6層、10層で検出されているがいずれも低い密度である。ススキ属型は4層、6層、12層で検出されているが、これも低い密度である。ネザサ節型は4層、6層、8層および10層で、クマザサ属型はすべての試料から検出されているが、両分類群は各層とも低い密度である。

5) 富沢遺跡第122次調査における稲作跡

仙台平野において稲作跡の検証や探索を行うにあたっては、これまでの調査からイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ3,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。当該調査では、4層と6層でそれぞれイネのプラント・オパールが7,600個/g、4,500個/gと高い密度で検出されている。このことから、両層については稲作跡である可能性が高いと考えられる。なお、10層と12層でもイネのプラント・オパールが検出されているものの、いずれもプラント・オパール密度は600個/gと低い値である。したがって、これらについては稲作跡である可能性を否定することはできないものの、上層あるいは他所からイネのプラント・オパールが混入した危険性が高い。仮にこれらで稲作が行われていたならば、プラント・オパール密度が低いことの原因としては、1) 稲作の行われていた期間が短かった、2) 稲葉の多くが耕作地の外に持ち出されていた、3) イネの生産性が低かった、4) 土層の堆積速度が非常に速かった、などが考えられる。

イネ以外の分類群の検出状況では、目立った特徴は認められないが、4層、6層および10層でヨシ属がわずかながら検出されている。よって、これらの層の堆積時には調査地の周辺にヨシの生育するような湿地が存在したと推定される。

文献

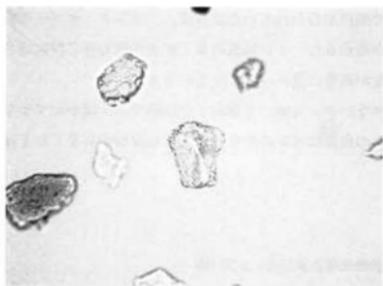
- 杉山真二(1987)：「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告第31号』p.70-83
- 杉山真二(2000)：「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社、p.189-213
- 藤原宏志(1976)：「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -」『考古学と自然科学9』p.15-29
- 藤原宏志・杉山真二(1984)：「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -」『考古学と自然科学17』p.73-85



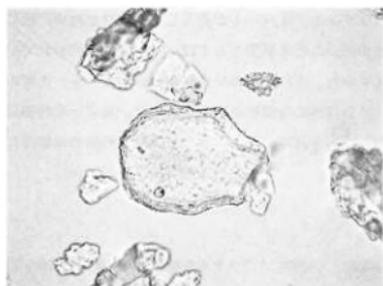
イネ



イネ



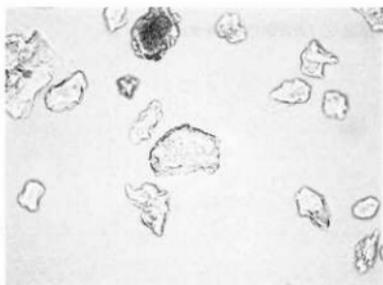
ススキ属



ヨシ属



ネギ科属



クマザサ属

プラントオバールの顕微鏡写真 ————— 50 μ m

Ⅶ 富沢遺跡（第123次）発掘調査報告書

1 調査要項

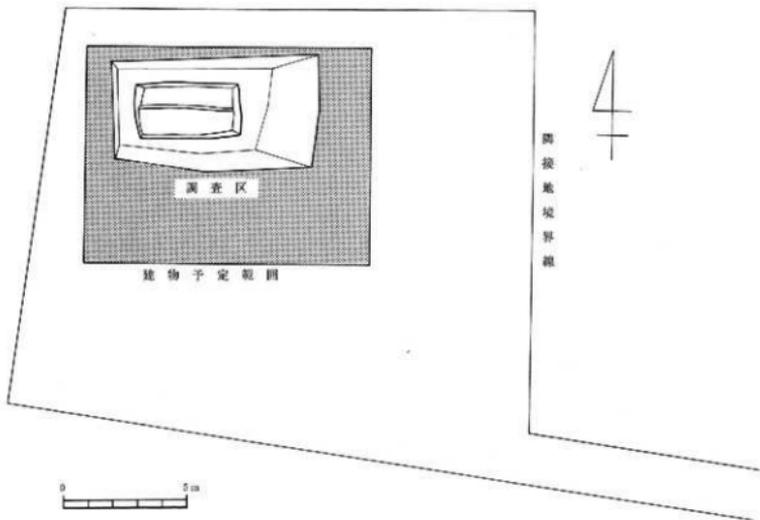
遺跡名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）	調査面積	28㎡
調査地点	太白区長町南一丁目 108-4、108-6の一部	調査原因	個人住宅建設
調査期間	平成14年9月24日～9月25日	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査対象面積	102㎡	担当職員	教諭 豊村幸宏

2 遺跡の位置と環境

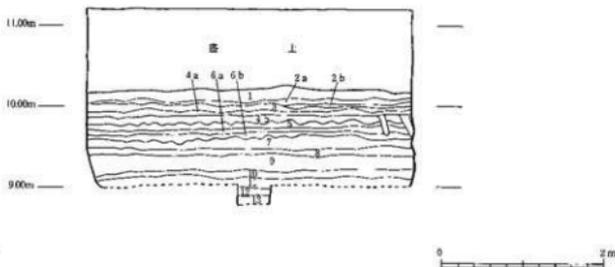
遺跡の環境については、第122次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、平成3年から平成4年に実施された77次調査区の南側に隣接し、遺跡東部の住宅地に当たり、標高は約11mである。

3 調査に至る経過と調査方法

平成14年8月30日付けで佐藤幸人氏より仙台市太白区長町南一丁目108-4、108-6の一部に於ける柱状地盤改良工事を伴う木造2階建個人住宅建築工事に係る発掘届が提出された（教生文第4-133号で回答）。これを受けて平成14年9月24日に、建物予定地内に東西7m、南北4mの調査区を設定して調査を実施した。調査地内は1.1mの盛土に覆われていたことから、盛土下で東西4m、南北2mに調査区を縮小した。北側では13層まで断面調査を実施し、南側では5層上面まで遺構検出作業を行った。安全面に配慮して現地表下から2.2m掘り下げたところで調査を終了した。



第82図 調査区配置図 (1/200)



上層No.	土色	土性	備考	土層No.	土色	土性	備考
1	5Y3/1 オリーブ黒色	シルト質粘土	酸化鉄集積層、マンガン酸、水酸化、砂粒を含む、日本標準作土。	6b	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄質、マンガン酸、7層ブロックを含む、本層上縁。
2a	7.5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	酸化鉄集積層、マンガン酸、水酸化、砂粒を含む、本層上縁。	7	10YR6/2 に近い黄褐色	粘土	酸化鉄質、マンガン酸、水酸化を含む。
2b	7.5Y4/1 灰色	粘土	酸化鉄集積層、マンガン酸、水酸化、砂粒を含む、本層上縁。	8	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄質、マンガン酸、水酸化を含む、本層上縁。
3	5Y3/1 オリーブ黒色	シルト質粘土	酸化鉄質、マンガン酸、水酸化、砂粒を含む、本層上縁。	9	2.5Y6/3 に近い黄褐色	粘土	酸化鉄質、マンガン酸、水酸化を含む。
4a	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	マンガン酸、水酸化、灰白色火山灰ブロックを含む、本層上縁。	10	2.5Y9/3 黄褐色	粘土	酸化鉄質、マンガン酸を含む。
4b	10YR5/2 黄褐色	粘土	3層ブロック、酸化鉄、水酸化、灰白色火山灰ブロックを含む、本層上縁。	11	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	2.5Y6/2黄褐色粘土、10YR4/2黄褐色灰黄粘土と砂粒を含む。
5	10YR5/3 に近い黄褐色	粘土	酸化鉄質、マンガン酸を含む。	12	7.5Y5/3 灰色	粘土	酸化鉄質、水酸化を含む。
6a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄質、マンガン酸を含む。	13	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	本図面を含む。

第83図 調査区北壁断面図

4 基本層序

区画整理の際の盛土が1.1mあり、その下に山表土の水田耕作土（1層）がある。調査区で確認した基本層は、盛土下から標高8.8mまで大別13層、細別16層である。

- 1 層：オリーブ黒色シルト質粘土。層厚は7～17cmである。
- 2 a 層：オリーブ黒色粘土。層厚は3～10cmである。下面是緩やかに起伏している。
- 2 b 層：灰色粘土。層厚は2～6cmである。調査地点の東側で3層に食い込むようにして検出された。
- 3 層：オリーブ黒シルト質粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は2～10cmである。下面是緩やかに起伏している。
- 4 a 層：灰黄褐色シルト質粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は2～8cmである。下面是平坦である。層上面に厚さ1～2cmの酸化鉄集積層がある。
- 4 b 層：黒褐色粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は6～12cmである。下面是凹凸が著しく、5層土を巻き上げている。
- 5 層：にがい黄褐色粘土。層厚は3～10cmである。上面は4 b 層の攪拌によって凹凸が著しい。下面是平坦である。
- 6 a 層：灰黄褐色粘土。層厚は4～10cmである。下面是平坦である。
- 6 b 層：灰黄褐色粘土。層厚は3～12cmである。下面是凹凸が著しく、7層土を巻き上げている。
- 7 層：にがい黄褐色粘土。層厚は7～20cmである。上面は6 b 層の攪拌によって凹凸が著しい。下面是一部に凹凸がある。
- 8 層：灰黄褐色粘土。層厚は4～12cmである。下面是緩やかに起伏している。
- 9 層：にがい黄色粘土。層厚は16～28cmである。下面是起伏がないが西側で落ち込んでいる。
- 10 層：黄褐色粘土。層厚は5～10cmである。下面是緩やかに起伏しており、西側で落ち込んでいる。
- 11 層：黄灰色粘土。暗灰黄色粘土と黒色泥炭質粘土を腐状に含む。層厚は12cmである。下面是平坦である。

12 層：灰色粘土。層厚は8～12cmである。下面は平坦である。

13 層：オリーブ黒色粘土。層厚は10cm以上である。

5 まとめ

1) 水田耕作土

調査の結果、畦畔状の高まりなどの水田にかかわる遺構は確認されなかった。なお、北側に隣接する第77次調査区では、中世の竪穴遺構、掘立柱建物跡、溝跡などの遺構が多数検出され木簡や烏帽子などの遺物が出土しているが、今回の調査では当該期の遺構は発見されなかった。断面観察から、下面の凹凸と直下層を起源とするブロックの混在により、現代の水田耕作土の1層を除いた2a層、2b層、3層、4a層、4b層、6b層、8層が水田層と考えられる。年代的には10世紀前半に降下したと言われている灰白色火山灰をブロック状に層中に含む4b層が、降灰直後の水田層と考えられることから、2a～4a層は10世紀前半以降近・現代以前の時間軸に収まるものと捉えられる。このうち、2a・2b層については、層中に灰白色火山灰を含まず、火山灰降下直後に復旧された水田耕作土ではないこと、第77次調査の2b層・3a層との対応が考えられることから近世～現代に、3層・4a層についてはいずれも火山灰小ブロックを含み、火山灰降下以降連続して耕作が続けられていたことが想定されることから平安時代中葉～中世頃の年代が考えられる。6b層と8層については、それぞれ第77次調査の8b層と10層に対応するものと考えられ、概ね、古墳時代から奈良時代までの年代に位置付けられる。

2) まとめ

- ① 今回の調査は、富沢遺跡の東部、第77次調査区の南側に隣接する地点で実施した。
- ② 調査を実施した深さ約2mの地層は大別13層、細別16層に分けられた。
- ③ 現代の水田耕作土層である1層を除き、2a、2b、3、4a、4b、6b、8層が水田耕作土層と考えられる。
- ④ 水田の年代は、2a・2b層が近世～現代、3・4a層が平安時代中葉～中世、4b層が10世紀前半頃、6b・8層が古墳時代～奈良時代に所属するものと考えられる。

引用・参考文献

- 阿子島功(1991)：「東北地方 10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』
- 五十嵐康洋(1991)：「富沢遺跡第77次調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)』仙台市文化財調査報告書第163集
- 太田昭夫(1991)：「富沢遺跡第30次調査報告書第1分冊(縄文～近世)」仙台市文化財調査報告書第149集
- 斎野裕彦(1987)：「富沢・富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集
- 庄子貞雄・山田一郎(1980)：「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』
- 東日本の水田跡を考える会(1990)：「水田跡の基本的理解－水田跡の検出と認定」『第3回東日本の水田跡を考える会－資料集』
- 平岡亮輔(1989)：「富沢遺跡35次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第150集



1 調査前風景 (南東より)



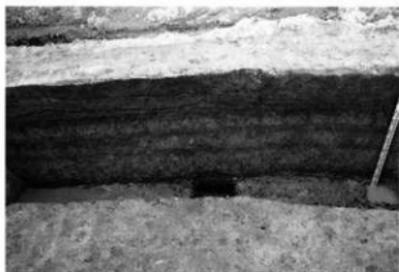
2 4 a層上面検出状況 (南より)



3 4 b層上面検出状況 (南西より)



4 5層上面検出状況 (西より)



5 北壁断面 (南より)



6 北壁断面 (南東より)



7 北壁断面西半部 (南より)



8 北壁断面東半部 (南より)

図版42 調査状況・土層断面

Ⅷ 富沢遺跡（第124次）発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）	調査原因	共同住宅建築
調査地	仙台市太白区鹿野三丁目223-13	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査期間	平成14年10月22日～10月24日	担当職員	主任 渡部 紀
調査対象面積	156㎡		文化財教諭 加藤徳明
調査面積	42㎡		

2 遺跡の位置と環境

遺跡の環境については、本報告書所収の富沢遺跡第122次調査報告及び既刊の富沢遺跡報告書を参照されたい。今回の調査地点は平成2年にそれぞれ調査を実施した第60次調査区の西側、第61次調査区の北側に隣接し、標高は約12mである。

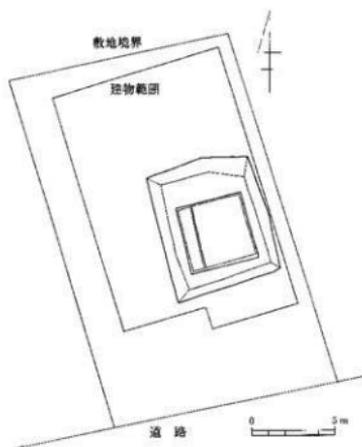
3 調査に至る経過と調査方法

平成14年9月3日付で菅井幸子氏より仙台市太白区鹿野三丁目223-13における共同住宅建築工事に係わる発掘届が提出された。これを受けて平成14年10月22日に、建物予定地内に東西6m、南北7mの調査区を設定した。7層まで平面的に調査し、それ以下は断面観察にとどめた。安全面に配慮して現地表下から約2m掘り下げたところで調査を終了した。

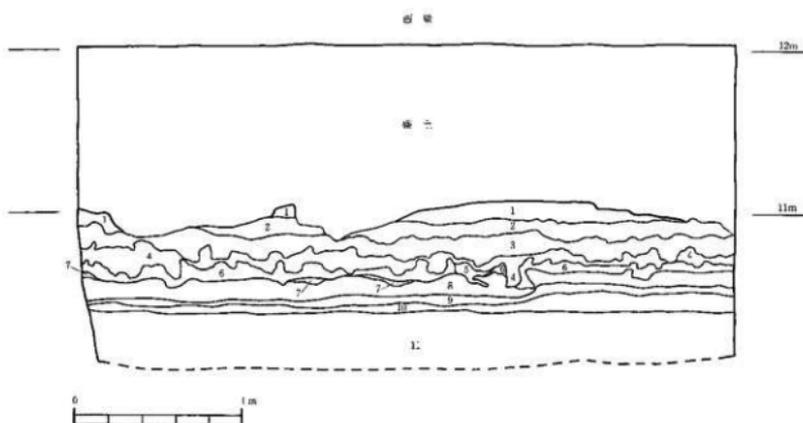
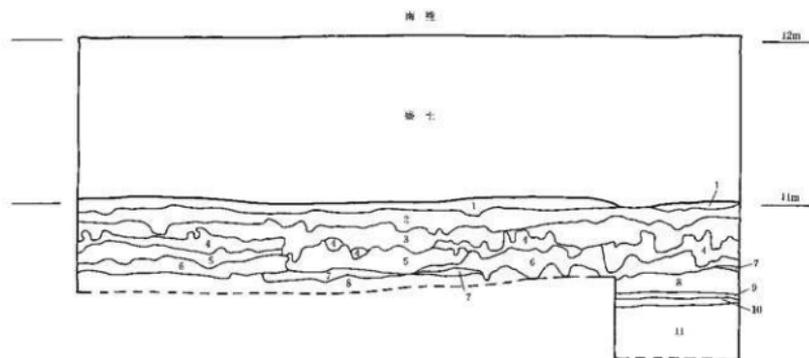
4 基本層序

区画整理の際の盛土が約1mあり、その下に旧表土の水田耕作土（1層）がある。調査区で確認した基本層は盛土下から標高約10mまで11層である。

- 1層：褐灰色の粘土質シルト。層厚は5～13cmである。
旧水田耕作土。
- 2層：褐灰色の粘土。層厚は4～16cm。下面はやや起伏がある。水田耕作土。
- 3層：褐灰色の粘土。灰白色火山灰ブロックを少量含む。層厚は4～25cm。下面は著しい起伏がある。水田耕作土。
- 4層：褐灰色の粘土。灰白色火山灰ブロックを少量含む。層厚は2～19cm。下面は著しい起伏がある。水田耕作土。
- 5層：暗灰黄色の泥炭質粘土。下面はやや起伏がある。層厚は6～17cm。水田耕作土の可能性はある。
- 6層：にぶい黄褐色の泥炭質粘土。層厚は2～16cmやや起伏がある。自然堆積層の可能性はある。



第84図 調査区配置図



十層No.	上 色	土 質	備 考
1	10YR7/1 灰褐色	粘土質シルト	砂粒少量 下部に礫化現象後 水田耕作土
2	10YR6/1 暗灰色	粘土	砂粒少量 下部にやや起伏 水田耕作土
3	10YR4/1 赤灰色	粘土	灰白色火山灰ブロック少量 下部に著しい起伏 水田耕作土
4	10YR7/1 暗灰色	粘土	灰白色火山灰ブロック少量 下部に著しい起伏 水田耕作土
5	2.5Y5/2 暗灰黄色	泥炭質粘土	下部にやや起伏 水田耕作土?
6	10YR4/3 二色(赤黄)	泥炭質粘土	やや起伏 何れも腐層?
7	10YR6/4 二色(赤灰)	泥炭	礫物混在 8層のブロックわずか 自然堆積層
8	10YR2/1 黒色	泥炭	礫物混在 何れも腐層
9	10YR4/1 暗灰色	泥炭質粘土	水田耕作土?
10	10YR4/1 赤灰色	泥炭質粘土	自然堆積層?
11	10YR6/2 灰黄褐色	泥炭	礫物混在 砂粒少量 自然堆積層

第85図 調査区南壁・西壁断面図

- 7層：ぶい黄橙色の泥炭。植物遺体、8層のブロックをわずかに含む。層厚は2～6cm。部分的に堆積している。自然堆積層。
- 8層：黒色の泥炭。植物遺体を含む。層厚は5～15cm。自然堆積層。
- 9層：褐灰色の泥炭質粘土。層厚は3～8cm。水田耕作土の可能性ある。
- 10層：黒褐色の泥炭質粘土。層厚は4～13cm。自然堆積層の可能性ある。
- 11層：灰黄褐色の泥炭。植物遺体を含み、粘土分は少量である。層厚は32cm以上である。自然堆積層。

5 まとめ

- 断面観察の結果、現代の水田耕作土である1層を除き、2、3、4、5、9層が水田耕作土と考えられる。これまでの富沢遺跡の調査で検出されている、平安時代の条用型水田の大畦畔が今回の調査区で検出されると推定し、2から6層まで平面的に精査したが、畦畔状の高まり等は確認されなかった。6層を掘り下げていく過程で南西隅部で5層が帯状に下がる状況がみられた。また、9層では断面観察のみであるが、高さ6cm程の段差がみられた。
- 今回の調査区での上層と第60次・第61次調査の成果と対応させたのが以下の表である。

第4表 富沢遺跡第124次・60次・61次調査区層位対応表

第124次		第60次		第61次		所属年代
層位	検出遺構	層位	検出遺構	層位	検出遺構	
2	水田耕作土	3	水田耕作土	3	水田耕作土	近世
3	水田耕作土	4	畦畔	4	水田耕作土	中世
4	水田耕作土	5	水田耕作土	5	畦畔	平安時代（灰白色火山灰降下以後）
5	水田耕作土	6	畦畔	6	畦畔	平安時代（灰白色火山灰降下以後）
9	水田耕作土	12	水田耕作土	12	水田耕作土	

参考文献

- 太田昭夫他（1991）：「富沢遺跡第30次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第149集
- 依藤甲二（1991）：「富沢遺跡第61次発掘調査報告書」富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）仙台市文化財調査報告書第152集
- 平間亮輔（1991）：「富沢遺跡第35次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第150集
- 平間亮輔（1991）：「富沢遺跡第60次発掘調査報告書」富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）仙台市文化財調査報告書第152集



1 調査区7層上面検出状況(西より)



2 調査区南壁断面東部
(北より)



3 調査区南壁断面西部
(北より)



4 調査区西壁断面
(東より)

図版43 調査区7層調査状況と南壁・西壁断面

Ⅸ 富沢遺跡（第125次）発掘調査報告書

1 調査要項

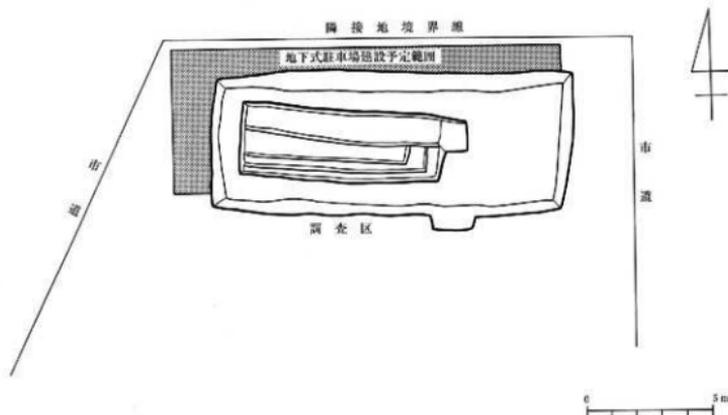
遺跡名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）	調査面積	22㎡
調査地点	太白区泉崎一丁目 2番2、2番9、2番11	調査原因	共同住宅・地下式駐車場建設
調査期間	平成14年12月10日～12月17日	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査対象面積	350㎡	担当職員	主任 渡部 紀

2 遺跡の位置と環境

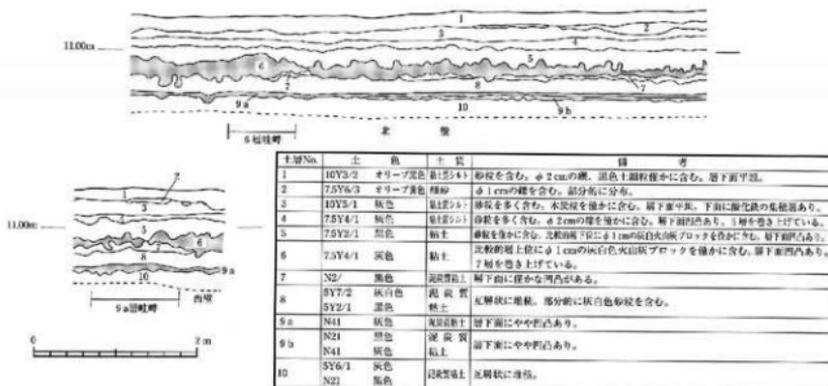
富沢遺跡の環境については、第122次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、昭和60年に実施した第19次調査区の北側に隣接している。富沢遺跡保存館からは西側150mの地点にあたり、遺跡のほぼ中央部に位置する。標高は約125mである。

3 調査に至る経過と調査方法

平成14年11月26日付けで住友不動産株式会社より仙台市太白区泉崎一丁目2番2他に於ける発掘届が提出された。申請地内では昭和60年に第19次調査を実施しており、人足跡、牛足跡を伴った水田跡や弥生土器、石鉄等の遺物が発見されている。このため申請者と協議し、既存の建物を除いた地下式駐車場の建設箇所ですり調査を実施することとした。建設予定地内に東西15m、南北5mの調査区を設定して調査を実施した。調査地点は、厚さ1.1～1.2mの盛土がされていたため、盛土を除去した後、調査区を東西8m、南北2.5mに縮小し、遺構検出作業と断面調査を行った。安全面に配慮して現地表下から2.2～2.3m掘り下げた10層中で調査を終了した。



第86図 調査区配置図（1/200）



第87図 調査区北壁・西壁断面図

4 基本層序

区画整理の際の盛土が1.1~1.2mあり、その下に旧表土の水田耕作土(1層)がある。調査区で確認した基本層は、盛土下から標高102.2mまで大別10層、細別11層である。

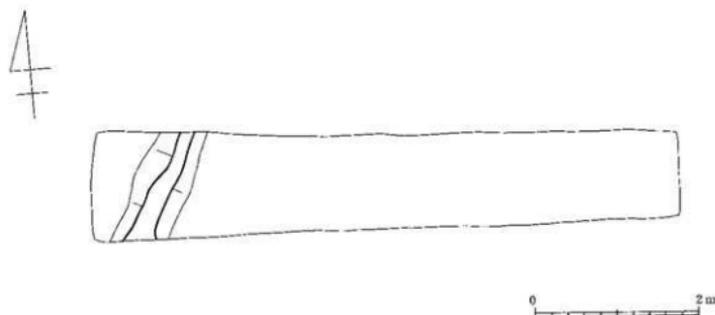
- 1層：オリーブ黒色粘土質シルト。層厚は13~21cmである。下面は平坦である。盛土以前の水田耕作土である。(19次1a~1b層)
- 2層：オリーブ黄色細砂。層厚は2~10cmである。部分的に分布している。(19次2a~2c層)
- 3層：灰色粘土質シルト。層厚は8~15cmである。層下面に厚さ3cm程の酸化鉄集積層を含む。(19次3a層)
- 4層：灰色粘土質シルト。層厚は4~15cmである。層下面に起伏があり5層を巻き上げている。(19次3b層)
- 5層：黒色粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は20~30cmである。下面に起伏がある。(19次4~5a層)
- 6層：灰色粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は6~26cmである。下面は凹凸が著しく、7層を巻き上げている。(19次5b層)
- 7層：黒色泥炭質粘土。層厚は3~12cmである。下面に僅かな起伏がある。(19次6層)
- 8層：灰色泥炭質粘土と黒色泥炭質粘土の互層。層厚は2~3cmである。(19次7a層)
- 9a層：灰色泥炭質粘土。層厚は3~8cmである。下面にやや凹凸がある。(19次7b層)
- 9b層：上部黒色泥炭質粘土、下部灰色泥炭質粘土。層厚は2~7cmである。9a層の母材層と思われる。(19次8a、9a層)
- 10層：灰色泥炭質粘土と黒色泥炭質粘土の互層。層厚は24cm以上である。(19次9d~9e層)

5 発見遺構と出土遺物

水田跡

6層水田跡

5層を掘り込んだ段階で6層の盛り上がり調査区の西端で帯状に検出し、6層に伴う畦畔と認定した。標高は、10.8~10.9m前後で調査区の東側にいくほど低い。畦畔の方向はN-29°-Eで、上端幅16~34cm、下端幅54~70

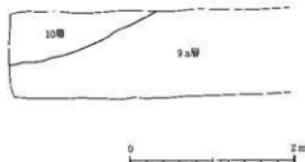


第88図 6層水田跡

cmを測る。畦畔は6層を盛り上げて作られており、断面形は台形状を呈する。作土との比高差は10～15cmである。畦畔の上には灰白色火山灰ブロックが見られる。作土は6層を母材とする灰色粘土からなり、層厚は6～26cmで上面に灰白色火山灰ブロックを含む。層下面は耕作により攪拌されており7層を巻き上げている。

9 a層水田跡

9 a層を掘り込む過程で、調査区の北西コーナー部に10層が確認された。このことから本来この部分に9 a層に伴う畦畔が存在し、その直下で疑似畦畔Bを検出したものと想定された。畦畔は、E-15' - Nのはは東西方向に延びるものと考えられる。作土は自然堆積層の9 b、10層を母材とする灰色泥炭質粘土で下面にはやや起伏がある。9 a層上面から同一石材からなる二次加工のある剥片1点(K-1)と剥片2点(K-2、K-3)が出土した。材質は隕石質凝灰岩である。

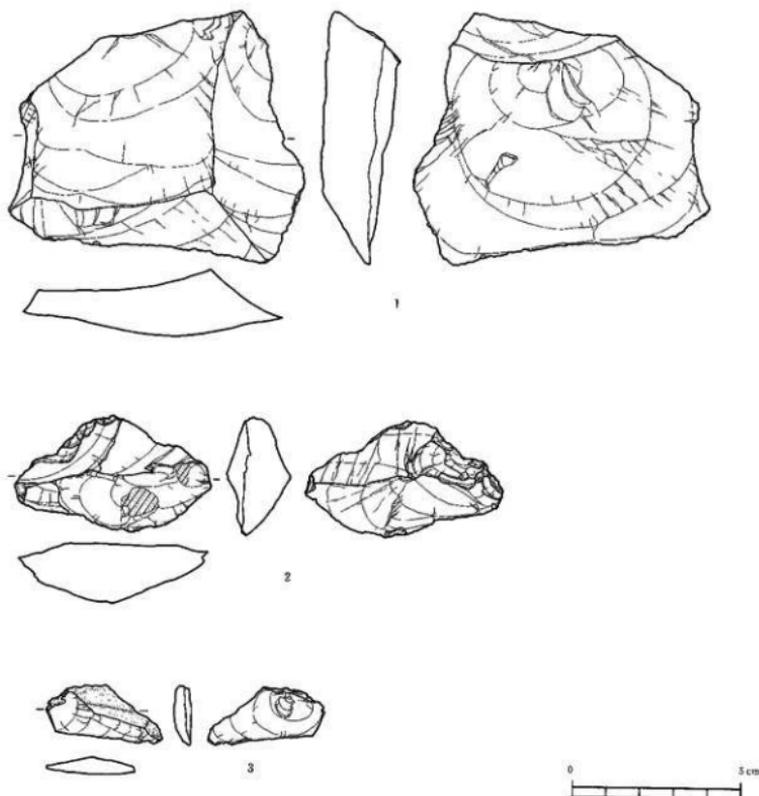


第89図 9 a層疑似畦畔

6 まとめ

1) 水田耕作土

調査の結果、6層において畦畔1条を、9 a層で疑似畦畔Bを検出した。これ以外の層で水田土壌の可能性のある層としては、断面観察、下面の凹凸並びに直下層を起源とするブロックの混在、酸化鉄の集積等から、現代の水田耕作土の1層を除いた3層、4層、5層が該当するものと考えられる。年代的には10世紀前半に降下したと言われている灰白色火山灰をブロック状に含む6層が、降灰直後の水田層と捉えられることから、3～5層は10世紀後半から近世の時間幅に収まるものと思われる。このうち3、4層については層中に灰白色火山灰を含まず、火山灰降灰直後に復旧された水田耕作土ではないこと、第19次調査の3 a、3 b層との対応が考えられることから中世～近世に、5、6層についてはいずれも層中に灰白色火山灰ブロックを含み、火山灰降灰以降連続して耕作が続いていた可能性が高いことから平安時代中葉～中世頃の年代が考えられる。9 a層については第19次調査の7 b層との対応関係を想定し得る。7 b層からは樹形洲式期の弥生土器が出土しており弥生時代中期の年代が与えられている。



層位	発掘番号	種類・器種	出土層	出土位置	出土層	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	写真図録
1	K-2	石器 割片	9a層		2	7.2	8.8	2.3	111.4		45-2-1
2	K-1	石器 割片	9a層		1	3.6	5.9	1.9	24.2	2次加工あり	45-5-2
3	K-3	石器 割片	9a層		1	1.8	3.5	0.6	2.2		45-5-3

第90図 9 a層出土遺物

よって9 a層も当該時期の水田層と推定される。

2) まとめ

- ① 今回の調査は、富沢遺跡の中央部、第19次調査区の北側に隣接する地点で実施した。
- ② 調査を実施した深さ約2mの地層は大別10層、細別11層に分けられた。
- ③ 現代の水田耕作上層である1層を除き、3、4、5、6、9 a層が水田耕作上層と考えられる。
- ④ 水田の年代は、3、4層が中世～近世、5、6層が平安時代中葉～中世、9 a層が弥生時代中期頃に所属するものと考えられる。

引用・参考文献

- 阿小島功（1991）：『東北地方 10C頃の降下火山灰について』『中川久大教授退官記念地質学論文集』
- 太田昭夫（1989）：『富沢遺跡第48次調査』『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集
- 太田昭夫（1991）：『富沢遺跡第30次調査報告書第1分冊（縄文～近世）』仙台市文化財調査報告書第149集
- 斎野裕彦（1987）：『富沢～富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集
- 鈴木恵治（1982）：『文献資料からみた古代奥羽での天災』『考古風土記』第7号
- 庄子貞雄・山田一郎（1980）：『宮城県に分布する灰白色火山灰について』『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』
- 東日本の水田跡を考える会（1990）：『水田跡の基本的理解－水田跡の検出と認定』『第3回東日本の水田跡を考える会－資料集』
- 平岡亮輔（1989）：『富沢遺跡35次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第150集
- 吉岡恭平（1989）：『富沢遺跡・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第126集



1 調査区全景



2 4層上面検出状況



3 6層畦畔検出状況



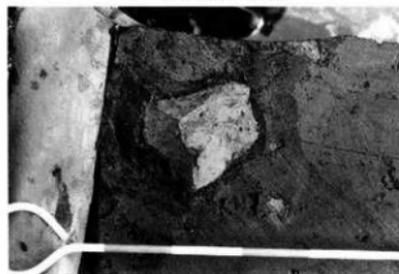
4 6層畦畔



5 9a層上面検出状況



6 9a層疑似畦畔



7 9a層上面剥片(K-2)出土状況



8 調査区西壁土層断面

図版44 調査状況・土層断面



1 調査区北壁土層断面（西半部）



2 調査区北壁土層断面（中央部）



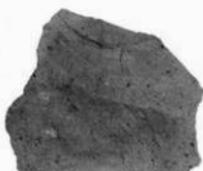
3 調査区北壁土層断面（東半部）



4 調査区北壁6層畦畔



1a



1b



2a



2b



3a



3b

- 1 剥片 K-2 (9a層第90回1)
3 剥片 K-3 (9a層第90回3)

- 2 2次加工剥片 K-1 (9a層第90回2)

5 9a層出土石器

図版45 土層断面・出土遺物

X 南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書

1 調査要項

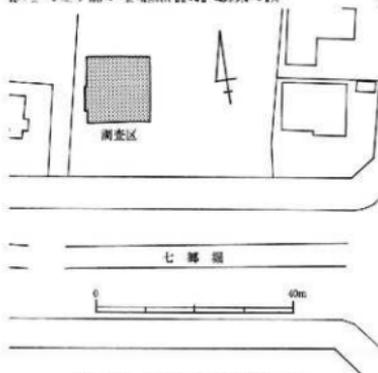
遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号012021）
調査地点	仙台市若林区一本杉町26-1、26-2
調査原因	貸店舗及び共同住宅建設
調査対象面積	約410㎡
調査面積	約180㎡
調査期間	確認調査：平成14年3月14・15日 本調査：平成14年4月15日～5月2日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会（文化財課）
担当職員	確認調査：主査 吉岡恭平 本調査：主査 波部弘美 文化財教諭 三塚博之
申請者	波邊龍彦



2 遺跡の位置と環境

南小泉遺跡は市域東部の若林区南小泉・遠見塚地区に位置し、東流する広瀬川北岸の自然堤防上に立地する。昭和10年代には遺跡の存在が周知されていたが、本格的な調査が開始されたのは昭和50年代に入ってからのもので今回で37回目を数える。各次調査で縄文時代から近世にわたる遺構・遺物が確認されているが、発見された主たる遺構をみると大きく各地域で時代的な違いがみられる。これは中心となる地域が時間的な経緯とともに変遷していることに起因しているものと考えられる。

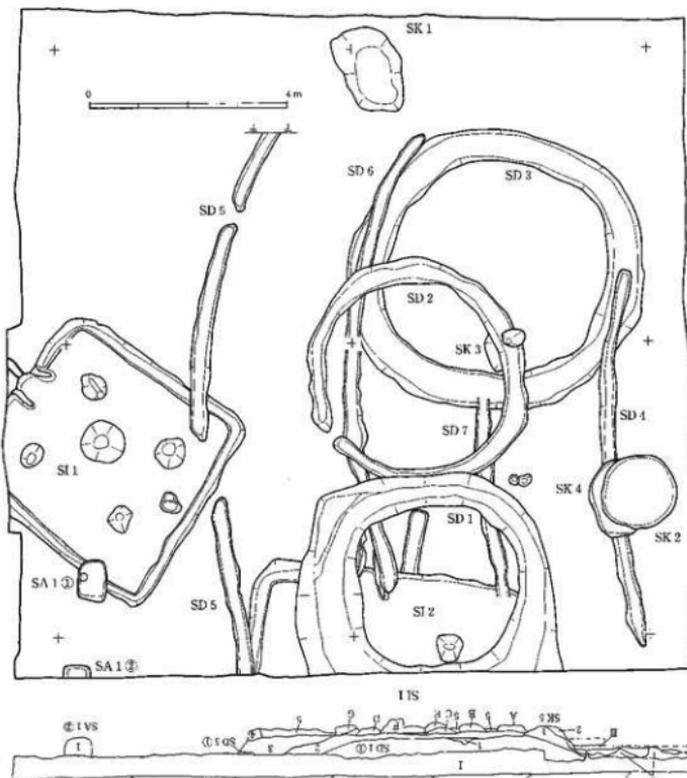
今回の調査区は遺跡北西側に位置し、第28次調査区東端の北側となる。第28次調査では奈良時代の住居跡群・土坑・溝跡・旧七郷堀が検出されている。



第91図 調査地点と調査区配置

3 調査方法

当調査地点の南側では都市計画街路建設に係わる南小泉遺跡第28次調査が行われており、古代を中心とする集落跡が発見されていた。隣接地でもあり遺構群の広がりも想定されたことから、確認調査を実施することとし、建物範囲内に2×20mのトレンチを東西方向に2本設定している。結果、住居跡や溝跡が確認されたため申請者と協議を行い記録保存としての本調査を実施することとなった。調査は遺構分布や排土を考慮し、建物範囲西側を中心とした14×14mの調査区を設定した。実質12日間の調査であった。



山形層	層位	土色	土質	備考	山形層	層位	土色	土質	備考
基本層	I	10YR3/2 黄褐色	粘土質	耕作土	SD 2	4	10YR4/4 褐色	粘土質	腐植層
	II	10YR3/4 暗褐色	シルト	耕作土?		5	10YR4/4 褐色	粘土質	粘り土質土。上部に炭化物・炭土を含む。
SD 1	III	10YR4/4 褐色	粘土質	中粒礫を多く含む。	A	10YR3/3 暗褐色	粘土質	炭土を少量含む。	
	①	10YR4/3 濃い黄褐色	粘土質	炭土・炭化物を多く含む。	B	10YR3/1 黄褐色	粘土質	炭化物・炭土を含む。	
SK 5	1	10YR4/4 褐色	粘土質	炭化物を多く含む。	C	10YR3/1 黄褐色	粘土質	炭化物・炭土を含む。炭粒に炭化物を含む。	
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質	炭化物を多く含む。	D	10YR3/4 暗褐色	粘土質	粘土の小ブロックを含む。	
SA 1 ①	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質		E	10YR3/1 黄褐色	粘土質	炭化物・炭土を含む。	
	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質		F	10YR3/1 黄褐色	粘土質	炭土・炭化物をブロック状に含む。	
SI 2	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質	炭化物・炭土を含む。	G	10YR3/1 黄褐色	粘土質	炭土・炭化物をブロック状に含む。	
	3	10YR4/3 濃い黄褐色	粘土質	炭土・炭化物を多く含む。	SD 5	①	10YR4/0 褐色	シルト	炭土・炭化物を多く含む。

第92図 検出遺構全体図

4 発見遺構と出土遺物

検出遺構として土坑5基、溝跡4条、円形周溝遺構3基、堅穴住居跡2軒、柱穴2基、ピット4基がある。出土遺物は整理箱5箱程で、多くの遺物は住居跡出土のものである。基本層は3層確認している。I層は畑の耕作上で40~50cmの厚さをもつ。II層は南壁東側のみでの確認で暗褐色土のシルトである。層下部が凹凸となっており耕作上の可能性もある。SD1・SK5の確認面となりうる。III層は暗褐色および褐色のシルト・粘土質シルトで今回調査の地山面となる。すべての遺構はIII層面での確認である。

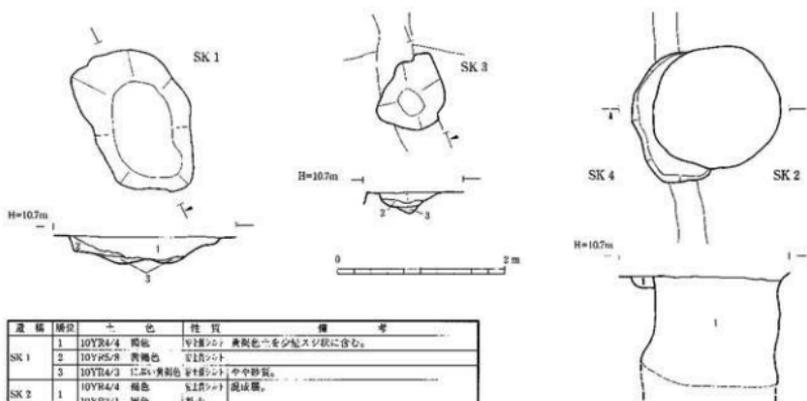
1) 土坑

SK1土坑 平面形はやや不整な長円形である。大きさは長軸190cm、短軸120cm、深さ最深で38cmを測る。断面形はきつく立ち上がる筒所もみられるが大きくみて皿形である。底面は全体的に凹凸面で平坦面はみられない。堆積土は3層確認している。褐色系の粘土質シルトである。レンズ状の堆積状況がみられ自然堆積と判断される。遺物として土師器片が十数点出土している。

SK2土坑 平面形は円形である。大きさは径150~157cmを測る。深さは153cmまで確認した。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、下部はオーバーハング状となっていた。堆積土は上部の1層のみの確認に止めており、褐色及び黒色の混成層で粘土質土壌である。形状等から井戸跡と判断される。SK4を切っている。遺物は1層上部で志野の皿及び土師器片が出土している。

SK3土坑 P1及びSD3に切られており平面形は不整な円形状である。大きさは長軸96cm、短軸78cm、深さ最深で25cmを測る。断面形はやや口の開いたV字形である。堆積土は3層確認している。褐色系のシルトである。自然堆積と考えられる。遺物は土師器片が数点出土したのみである。

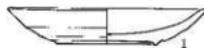
SK4土坑 SK2に切られ平面形は不明であるが、残存部からみて長円形を呈すると判断される。大きさは南北軸で156cm、深さ最深で17cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1層確認し暗褐色の粘土質シルトである。遺物はない。



遺構	検出	土色	性質	備考
SK1	1	10YR4/4 褐色	中層の2	黄褐色土を少し混じり含む。
	2	10YR5/2 黄褐色	1	安土層シルト
	3	10YR4/3 濃い黄褐色	中層シルト	中や砂質。
SK2	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	混成層。
	1	10YR2/1 紫色	粘土	
SK3	1	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	明黄褐色土を粒状に含む。
	2	10YR4/4 褐色	シルト	
	3	10YR4/4 褐色	シルト	中や粘土質、炭化植物、黄褐色土層を含む。
SK4	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	

第93図 土坑

SK 5 土坑 調査区南壁面での確認である。詳細は不明であるが上坑と判断した。SD 1 に切られ SI 2 を切っている。壁面観察ではあるが断面形はゆるい逆台形を呈する。深さは最深で55cmを測る。堆積土は3層確認している。褐色系の粘土質シルトである。自然堆積と考えられる。遺物はない。



0 10cm

No.	調査区	
1	1	調査区

第94図 SK 2 土坑出土遺物

2) 溝跡

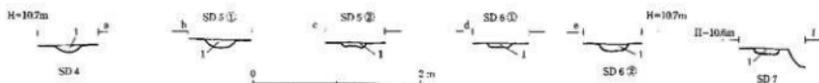
4条確認しているが、各溝跡とも南北方向にゆるい湾曲をもちほぼ並行して延びている。上端幅など規模が同じであることから一群のものとして判断される。

SD 4 溝跡 上端幅20~38cm、下端幅10~23cm、深さ4~8cmを測る。確認長は7.8mである。断面形は皿形ないし緩い逆台形である。堆積土は1層で黄褐色のシルトである。SK 2・SK 4 に切られ SD 3 を切っている。両側に位置する SD 7 とは芯々で2.53m程の間隔をもつ。遺物は土師器片が2点出土したのみである。

SD 5 溝跡 上端幅29~38cm、下端幅16~23cm、深さ4~10cmを測る。SI 1 付近で一端途切れるが一連のものとして判断した。確認長は11.4mである。断面形は緩い逆台形である。堆積土は1層で褐色系のシルトである。SI 1・SI 2 を切っている。東側に位置する SD 6 とは芯々で2.6~3.15m程の間隔をもつ。南側に向かい間隔が広がっている。遺物は土師器片が二十数点出土している。

SD 6 溝跡 上端幅25~35cm、下端幅17~23cm、深さ3~7cmを測る。確認長は9.8mである。断面形は逆台形である。堆積土は1層で褐色のシルトである。SD 3・SI 2 を切り、SD 1・SD 2 に切られている。東側に位置する SD 7 とは芯々で2.25~2.65m程の間隔をもつ。遺物は土師器片が十数点出土している。

SD 7 溝跡 両端部が途切れているが、周辺状況等から判断して本来 SD 3 及び SI 2 を切り南北方向に延びる溝跡と思われる。上端幅20~35cm、下端幅14~22cm、深さ4~7cmを測る。確認長は3.7mである。断面形は緩い逆台形である。堆積土はにぶい黄褐色の粘土質シルトである。SD 1・SD 2 に切られている。遺物は土師器片が4点出土したのみである。



遺物	層位	本 色	土 質	備 考	遺物	層位	本 色	土 質	備 考
SD 4	1	H07B0/0	黄褐色	シルト	SD 4 ①	1	H07B0/0	褐色	シルト
SD 5 ①	1	H07B4/0	褐色	シルト	SD 5 ②	1	H07B4/0	にぶい黄褐色	シルト
SD 5 ②	1	H07B6/0	にぶい黄褐色	シルト	SD 6	1	H07B4/0	にぶい黄褐色	シルト
				中や粘土質	SD 7	1	H07B4/0	にぶい黄褐色	シルト

第95図 溝跡断面

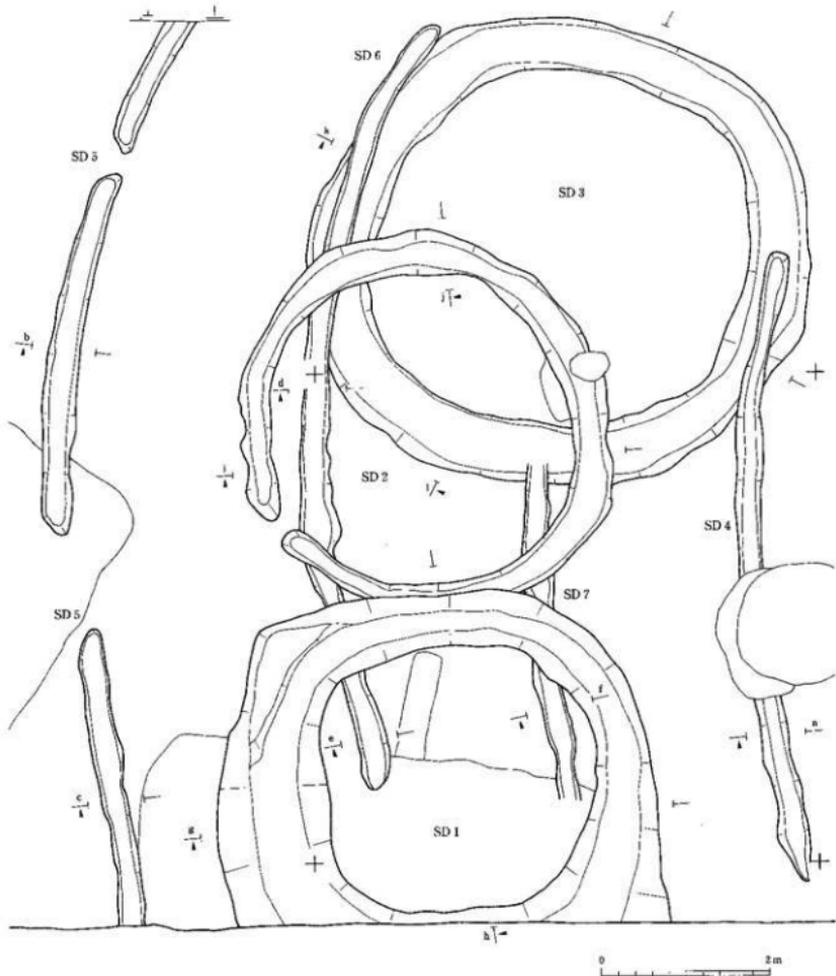
3) 円形周溝遺構

SD 1 円形周溝遺構 大きさは東西軸5.18mを測り、南北軸は4mまで確認した。周溝部は北から南へ向かい幅広く気味である。上端幅は63~128cm、下端幅25~55cm、深さ19~34cmを測る。断面形は基本的に逆台形である。堆積土は大別で2層確認している。黄褐色系の粘土質シルトである。自然堆積と判断される。SK 5・SD 2・SD 6・SD 7・SI 2・P 2 を切る。遺物は土師器片が数多く出土しているが、本来 SI 2 に帰属するものが大半を占めると思われ分離は不能であった。

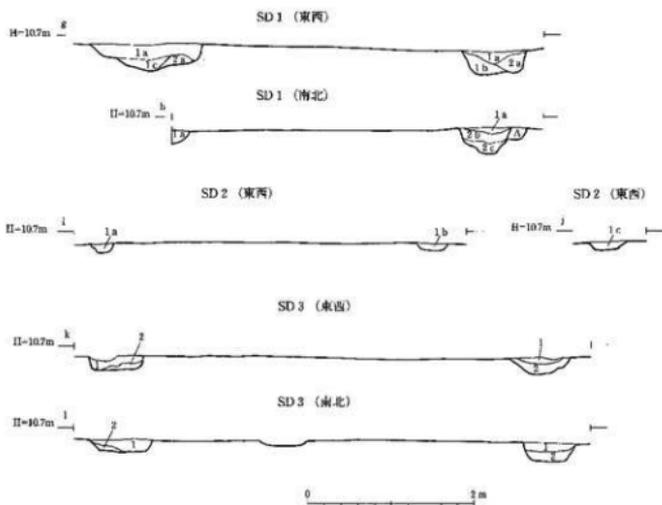
SD 2 円形周溝遺構 大きさは東西軸4.35m、南北軸4.6mを測る。周溝は西南部で25cm程途切れるが割平と深度の関係と判断される。ほぼ円形である。上端幅30~53cm、下端幅20~25cm、深さ5~11cmを測る。断面形は逆台形である。堆積土は大きく1層確認した。褐色系の砂質シルトである。周溝内側に関連遺構は確認されない。SK

3・SD6・SD7を切り、P1に切られる。遺物は土師器片が数十点、鉄製品が1点出土している。

SD3円形周溝遺構 大きさは東西軸5.95m、南北軸5.7mを測る。周溝は全周しておりほぼ円形である。上端幅60～87cm、下端幅45～63cm、深さ15～24cmを測る。断面形は基本的に逆台形であるが部分的に皿形もみられる。堆積土は2層確認した。褐色系のシルトである。周溝内側に関連遺構は確認されない。SD2・SD4・SD6・SD7に切られる。遺物は土師器片のみが二十数点出土している。



第96図 溝跡・円形周溝遺構平面図



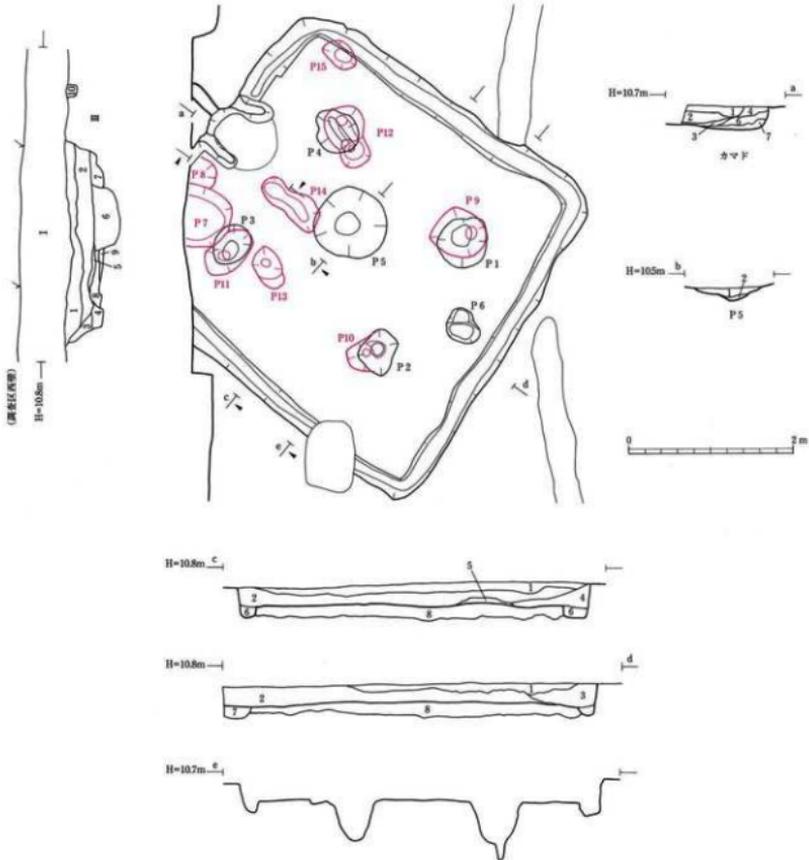
遺構	層位	土色	土性	備考
SD 1	1a	10YR4/3 にごい黄褐色	シルト	炭化物・明褐色土を混に含む。
	1b	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を少量含む。
	1c	10YR4/3 にごい黄褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物をやや多く含む。
	2a	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を含む。
	2b	10Y5/6 黄褐色	粘土質シルト	赤褐色土を含む。
SD 2	A	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	SD2の底面上、黄褐色土を混に含む。
	1a	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	
	1b	10Y5/6 黄褐色	粘土質シルト	1部に焼土粒がみられる。
SD 3	1c	10Y5/6 黄褐色	シルト	焼土粒を混に含む。
	1	10YR4/4 褐色	シルト	やや粘土質。
SD 3	2	10YR4/3 にごい黄褐色	シルト	焼土粒を少量含む。

第97図 円形周溝遺構断面図

4) 竪穴住居跡

SI1住居跡 SD5・柱穴1と重複し切られている。平面形は隅丸方形で、大きさは東西軸4.56m、南北軸4.26mを測る。東辺は真北に対し39度程東に偏る。堆積土は床面上で6層・カマド部で4層確認している。自然堆積と判断される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面からの高さ最大で28cmを測る。周溝は全周しており、上端幅は25～30cm程で深さ15cm程を測る。床面は大部分が掘り方埋土上面となるが部分的に粘床が確認される地点もある。床面で8基のピットを検出したが位置・規模からP1～4を柱穴と判断した。柱痕跡は4基とも確認し得なかったが、柱穴は径50～60cmの円形ないし不整形で、深さ45～55cmを測る。断面形は逆台形状である。P5は径90cm程の円形で、深さ15cm程の断面が皿状の浅いものである。床中央に位置し堆積土に焼土粒が含まれていたが、火熱による硬化面もみられないため廃棄穴と判断した。北壁部にも炭化物・焼土が詰まった状態で検出されたP7・8がある。P5同様廃棄穴と判断される。カマドは北壁ほぼ中央部に付設され、燃焼部と煙道部を確認している。燃焼部は残存高20cm程の両側のみ確認である。底面幅45cm・奥行き50cm程を測る。底面はほぼ平坦で奥壁で段となり煙道へ続く。焼土は確認されるが硬化面は認められなかった。煙道は幅15cm程で長さ45cmまで確認した。底面はほぼ平坦である。なお、掘り方埋土下部のⅢ層(地山)面で7基のピットを検出している。P9～12は柱穴としたP1～4とはほぼ同位置にあり配置等からⅡ段階の柱穴と判断した。遺物には土師器(高坏・坏・甕)、須恵器(蓋・甕)、

石製品（砥石・不明石製品・剥片）があり、土師器はすべてロクロ不使用である。

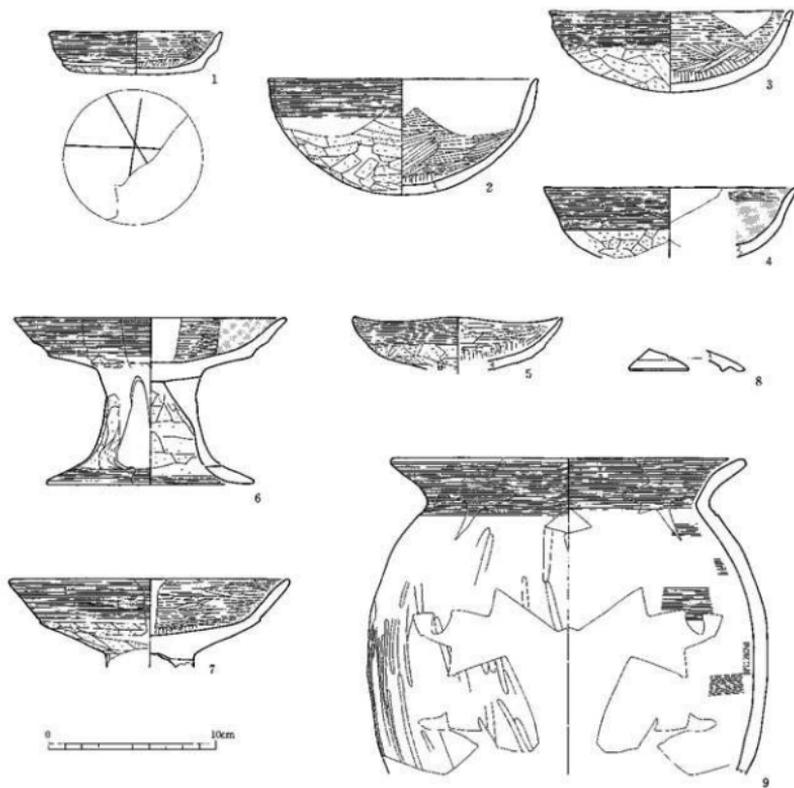


SI1	層位	土色	土性	備考
	1	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	粘土質・焼土粒をまばらに含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物粒をまばらに含む。褐色土をスジ状に含む。
	3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。
	4	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色土を層に含む。
	5	10YR6/4 明黄褐色	粘土質シルト	炭の層。
	6	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	珪藻。炭化物粒・焼土粒を少量含む。
	7	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	P8 焼土・炭化物を含む。
	8	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	細り方埋土。暗褐色土をスジ状に含む。
カマフ	1	10YR4/4 褐色	シルト	やや粘土質。炭化物少量含む。
	2	10YR4/3 濃い黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒をまばらに含む。
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土	
P5	4	10YR4/3 濃い黄褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む。
	5	5YR4/6 赤褐色	粘土質シルト	焼土層 焼土及び焼土ブロック。
	6	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒のブロック。
	1	10YR4/3 濃い黄褐色	粘土質シルト	焼土粒を含む。
P5	2	10YR6/4 濃い黄褐色	粘土質シルト	

第98図 SI1住居跡

調査区	部位	色	調	文	質	備	考
SI 1	1	10YR3/3	写模色	粘土質シルト		跡付上。	
	2	10YR4/4	褐色	粘土質シルト		粘土質に砂質となる。	
	3	10Y2/2	にがい赤褐色	シルト		粘土質、硬土硬少を含む。	
	4	10YR4/2	暗褐色	シルト		中硬粘土質。	
	5	10YR4/3	にがい黄褐色	粘土質シルト		硬粘土質。	
	6	10YR4/4	褐色	粘土質シルト		粘土質。	
	7	10YR4/6	褐色	粘土質シルト		IP7 層上・炭化植物を屑に含む。	
	8	10YR5/4	黄褐色	粘土質シルト		IP8 硬土質プロックを含む。	
	9	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト		細り方用土。明貴利土を小ブロックで含む。	
	10	10YR2/1	黒褐色	粘土質シルト		硬粘土・炭化物を含む。	

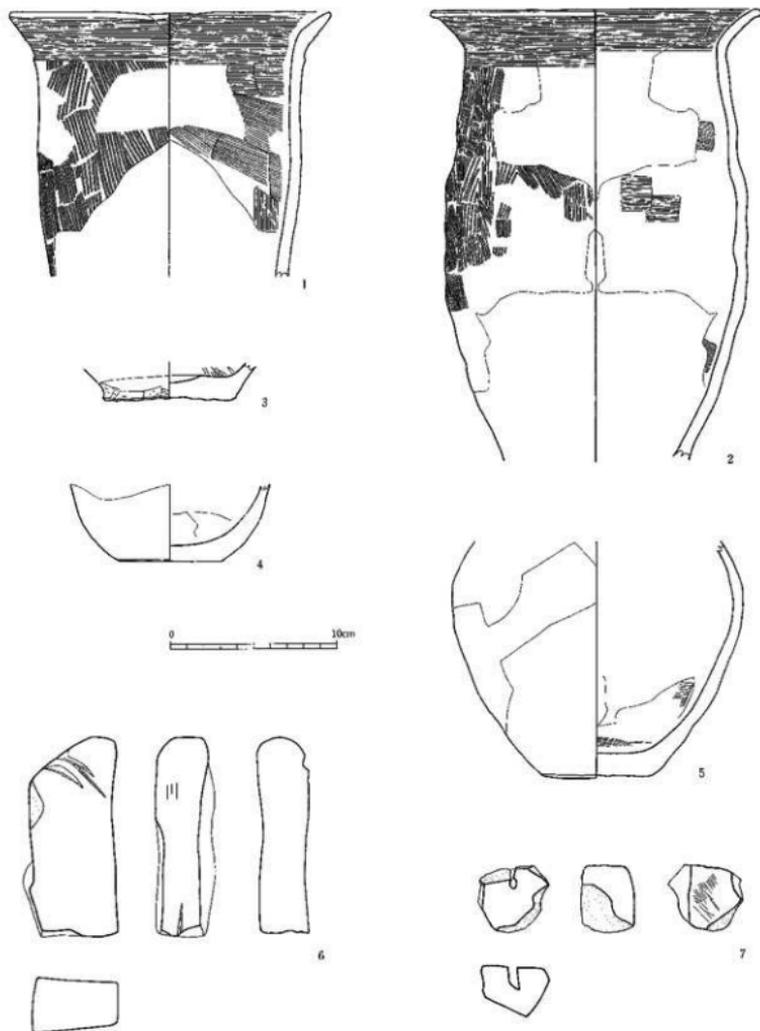
調査区西壁



№	地点・層位	種類	形状	外面 調査	内面 調査	特	縦	口徑	底径	器高	残存	破砕
1	1 底面	土器器	杯	口縁部: ココナテ, 表面-底面: ヘタヒダテ	口縁部-底面: ヘタヒダテ, 底面-底面: 黒色粘土	平底丸底, 口縁部下に凸, 底面に筋線あり	10.2	8.6	2.6	1/2	C-8	
2	2 層上	土器器	杯	口縁部: ココナテ, 表面-底面: ヘタヒダテ	口縁部-底面: ヘタヒダテ	丸底, 口縁部下で浅い沈下上の凹み	16.2	-	(7.1)	1/5	C-10	
3	2 層上	土器器	杯	口縁部: ココナテ, 表面: ヘタヒダテ	口縁部-底面: ヘタヒダテ	丸底, 口縁部でゆるく外反	14.5	-	5.0	2/3	C-6	
4	層上	土器器	杯	口縁部: ココナテ, 表面: ヘタヒダテ	口縁部-底面: ヘタヒダテ, 底面-底面: 黒色粘土	丸底?, 再磨化, 口縁部ゆるく外反	15.1	-	-	1/7	C-9	
5	層上	土器器	杯	口縁部: ココナテ, 表面: ヘタヒダテ	口縁部-底面: ヘタヒダテ	丸底, 口縁部ゆるく外反, 口縁部に筋線あり	12.6	-	(3.2)	1/3	C-1	
P16	土器器	両杯	口縁部: ココナテ, 表面-底面: ヘタヒダテ	口縁部-底面: ヘタヒダテ, 底面-底面: 黒色粘土	口縁部下に凸, 底面に筋線の跡に上りあり	16.3	12.5	(10.2)	1/8	C-26		
7	層上	土器器	両杯	口縁部: ココナテ, 表面: ヘタヒダテ	口縁部-底面: ヘタヒダテ, 底面: ココナテ	丸底, 口縁部下で浅い沈下上の凹み	16.8	-	-	-	C-25	
8	1 層上	土器器	両杯	口縁部: ココナテ, 表面: ヘタヒダテ	口縁部-底面: ヘタヒダテ, 底面-底面: 黒色粘土	丸底, 口縁部ゆるく外反	-	-	-	-	E-1	
9	2 層上	土器器	両杯	口縁部: ココナテ, 表面: ヘタヒダテ	口縁部-底面: ココナテ, 表面: ヘタヒダテ	丸底, 口縁部ゆるく外反	21.5	-	-	1/4	C-18	

第99図 SI 1 住居跡出土遺物 1

() 推定 単位cm

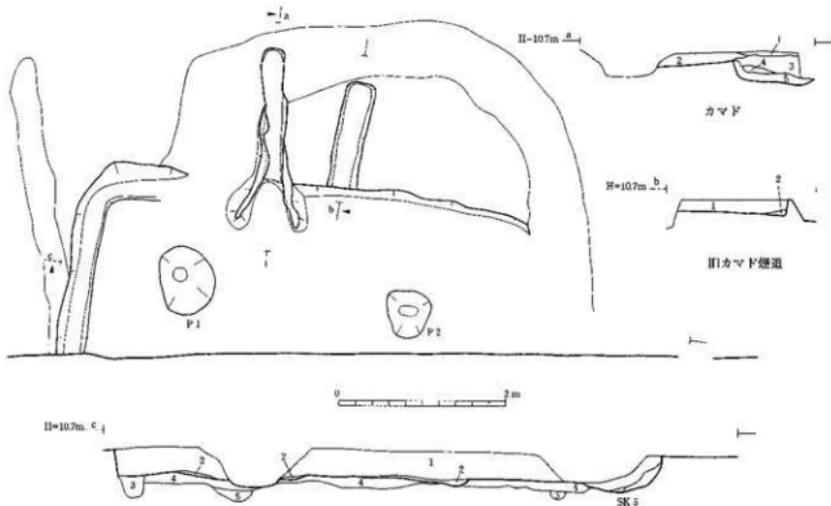


No.	地点・層位	類別	部材	外面調整	内面調整	特徴	寸法	口径	高さ	残存	数量
1	Ⅰ上	土師器	甕	口縁部:ヨコナガ、唇部:ハケメ	口縁部:ヨコナガ、唇部:ハケメ	長用形、最大口径口縁部、一部再輪化	110.3	-	-	1/5	C-17
2	Ⅰ中	土師器	甕	口縁部:ヨコナガ、唇部:ハケメ	口縁部:ヨコナガ、唇部:ハケメ	長胴形、最大口径口縁部	20.0	-	29.0	1/4	C-16
3	Ⅰ中	土師器	甕	唇部下縁:ハケメ文字	底面:ミガキ状のナガ	底部にミの透孔あり、再輪化	-	8.0	-	-	C-23
4	Ⅰ中	土師器	甕	不明	不明	底部に木蓋痕あり、再輪化	-	6.3	-	-	C-22
5	Ⅰ中	土師器	甕	不明	底面下縁:ハケメ文字及びナガ	最大口径縁部中央、再輪化	-	6.6	-	-	C-20
6	Ⅰ中	石製品	砥石	行状:上下部欠損、断面は四角形、横断面が張石、残存長124mm、最大幅56mm、最大厚30mm、厚割							K-2
7	Ⅰ中	石製品	砥石	行状:下部欠損、断面がほぼ長方形、上部に約5mm厚の透し穴1ヶあり、面すべて砥削、最大幅44mm、最大厚32mm、残存長32mm、厚割							K-1

第100図 SI1住居跡出土遺物2

() 推定 単位cm

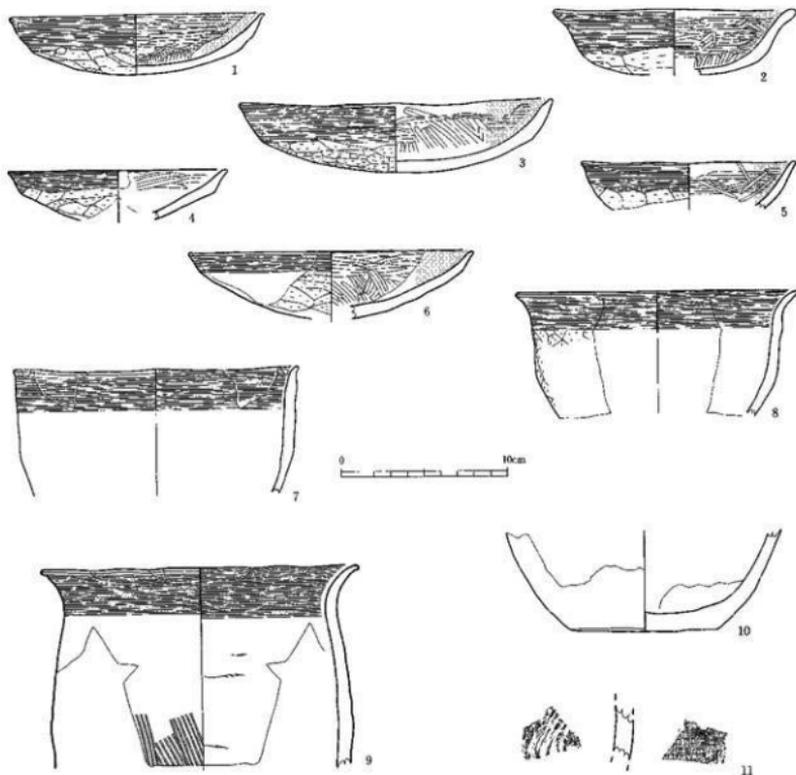
SI2住居跡 南壁部に位置し大半が調査区外である。SK 5、SD1・5・6・7、P2に切られ、全体的に遺存状況が不良である。壁面は北辺と西辺のみの確認で、北辺5.4m・西辺2.4mまで確認した。西辺は真北に対し16度程東に偏る。堆積土は床面上で3層・カマド部で5層確認している。1層部は厚さ30cm程を測り分層が考えられたが不明であった。自然堆積と判断される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面からの高さ最大で32cmを測る。周溝は西側のみで確認している。上端幅30~35cm程で深さ25cm程を測る。床面は後世の遺構等で明確に検出できなかったが、4層の掘り方堀上上面が床面となる。床面精査時に2基(P1・P2)のピットを検出し、位置・規模から柱穴と判断した。柱痕跡は確認できなかったが、柱穴は大きき60~85cm程の不整形形で、深さ50~55cmを測る。断面形は逆台形状である。これらの柱穴と壁との位置関係から判断して本来5.5m四方の規模をもつ住居跡と考えられる。カマドは北壁中央部に付設されている。カマド本体東側(60cm程東)にも煙道のみが一本確認されており、新旧2時期の存在が伺われた。新のカマドは燃焼部と煙道部を確認している。燃焼部は残存高20cm程の両袖のみの確認である。底面幅50cm・奥行き50cm程を測り、やや三角形形状を呈している。底面は床面から一段低くなり、そこからゆるやかに立ち上がり奥壁で段となり煙道へ続く。焼面・焼上は確認されるがしっかりとした硬化面はみられない。煙道は幅30cm程で長さは160cmを測る。底面は北側へ向かい低くなっている。旧カマド煙道は幅35cm程で長さ130cmを測る。底面はほぼ平坦であるがやや北側へ向かい低くなっている。なお、床面(1層)及びII層上面で焼



SI2	層位	土色	土性	備考
カマド	1	10YR4/4 暗褐色	シルト	中や粗土質。炭化物粒・焼土粒をまばらに含む。
	2	10YR4/4 暗褐色	粘土質シルト	焼上・炭化物をうすく含む。
	3	10YR4/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物部
	4	10YR4/3 濃い黄褐色	粘土質シルト	掘り方跡。焼土粒を少量まばらに含む。
	5	10YR4/4 暗褐色	粘土質シルト	床下の小ピット。炭化物を少量隙に含む。
旧カマド	1	10YR4/6 褐色	シルト	焼土粒少量含む。
	2	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	焼土質。中や粗土質。焼土ブロックを少量に含む。
	3	10YR2/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土質。焼上・炭化物を細かく多く含む。
	4	10YR4/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土質。焼土を含む。
	5	5YR3/1 暗赤褐色	粘土質シルト	焼土質。焼上・炭化物の層。
周溝	1	10YR6/6 黄褐色	粘土質シルト	黄褐色。焼土ブロック含む。
	2	10YR2/1 赤褐色	シルト	
埋込	1	10YR2/1 赤褐色	粘土質シルト	
	2	10YR4/3 濃い黄褐色	粘土質シルト	暗褐色をうすく層状に含む。

第101図 SI2住居跡

七、炭化物を含む不整形な落ち込みを多数検出しているが、これらは廃棄穴と考えられる。Ⅲ層で検出したものは旧の時期のものと判断される。遺物には土師器(坏・甕)、須恵器(甕)、石製品がある。土師器はすべてロクロ不使用である。

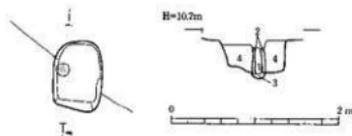


No.	品名・用途	器種	外 観 特 徴	内 容 測 量	特 徴	口縁	底径	高さ	取付	発見
1	赤首	土師器 坏	口縁部:ヨコナガ, 唇部:丸形, ヘラミダリ	口縁部~底面:ヘラミダリ, 彩色地層	丸底, 口唇部ゆるく外反	(15.1)	-	3.5	1/4	C-2
2	赤首	土師器 坏	口縁部:ヨコナガ, 唇部:丸形, ヘラミダリ	口縁部~底面:ヘラミダリ, 彩色地層	半丸底の丸底, 口縁部外反, 中央部隆起有り	(14.6)	-	4.0	2/5	C-11
3	赤首	土師器 坏	口縁部:ヨコナガ, 唇部:丸形, ヘラミダリ	口縁部~底面:ヘラミダリ, 彩色地層	丸底	18.8	-	5.3	4/5	C-12
4	赤首	土師器 坏	口縁部:ヨコナガ, 唇部:ヘラミダリ	口縁部~底面:ヘラミダリ	丸底化?	(13.2)	-	-	1/5	C-3
5	黒土	土師器 坏	口縁部:ヨコナガ, 唇部:ヘラミダリ	口縁部~底面:ヘラミダリ, 彩色地層	丸底, 口唇部外反	(12.8)	-	-	-	C-4
6	黒土	土師器 坏	口縁部:ヨコナガ, 唇部:丸形, ヘラミダリ	口縁部~底面:ヘラミダリ, 彩色地層	丸底, 口唇部外反	17.5	-	(4.2)	2/3	C-7
7	黒土	土師器 坏	口縁部:ヨコナガ, 唇部:丸形, ヘラミダリ	口縁部~底面:ヘラミダリ, 彩色地層	丸底, 口唇部外反	(17.2)	-	-	-	C-15
8	黒土	土師器 坏	口縁部:ヨコナガ, 唇部:丸形, ヘラミダリ	口縁部~底面:ヘラミダリ, 彩色地層	丸底, 口唇部外反	(16.9)	-	-	-	C-13
9	黒土	土師器 甕	口縁部:ヨコナガ, 唇部:丸形, ヘラミダリ	口縁部~底面:ヘラミダリ, 彩色地層	丸底, 口唇部外反	(19.2)	-	-	-	C-19
10	黒土	土師器 甕	口縁部:ヨコナガ, 唇部:丸形, ヘラミダリ	口縁部~底面:ヘラミダリ, 彩色地層	丸底, 口唇部外反	-	18.0	-	-	C-21
11	黒土	須恵器 甕	唇部:格子状	不明	西酸化	-	-	-	-	E-2

第102図 SI 2住居跡出土遺物

5) 柱穴・ピット

柱穴を2基、ピットを4基検出している。柱穴1は平面形が隅丸の長方形で南北軸85cm・東西軸60cm・深さ40cmを測る。痕跡が確認される径15cm程の円形である。SF1を切っている。なお、2m程離れた南壁に東西軸55cm・深さ30cmを測る柱穴2がある。2基のみの確認ではあるが柱列ないし掘立柱建物跡の一部と思われる。遺物は柱穴1から土師器片が十数点出土している。



層位	土色	土質	備考
1	10YR6/3 灰褐色	粘土	柱穴跡 グライ化
2	10YR4/4 褐色	粘土	柱穴跡 地上物を少遺す。
3	10YR6/4 濃い黄褐色	粘土	柱穴跡 柱下部に礫化現象
4	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	掘り方掘土 黄褐色土粒を混に含む。

第103図 SA1 ①掘立柱

6) 出土遺物について

図が可能な資料は殆どが住居跡出土のものであり、ここでは住居跡出土の土器類について特徴を記す。

土師器 器種として坏・高坏・甕・鉢がある。坏は口径15cm前後のもの10cm程の2種があり、底の形態も丸底と平底丸底の2種がある。口縁部と体部の境は明確な段と判断されるものは少なく、屈曲ないし稜となっている。I縁部は直立気味のもの、内弯気味に外傾するもの、外反するものがある。調整は外面がヨコナデとヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理である。その内、ヘラミガキは施されるが黒色処理は行われていないと観察されるものがあり、胎土にも違いがみられる。このように坏は全体的にみて内弯気味に立ち上がるものが多く、口径に比べて器高の割合が小さく、外面の段も不明瞭となり、段・稜の位置も低くなる特徴がみられる。高坏は口径16cm程で高さ10cm程のものである。I縁部と体部の境に明確な段が巡る。脚部は太く円筒状で三角形状の透かしがみられる。調整は坏部が上述の坏と同様で、脚部は縦横のヘラケズリ、裾部はヨコナデである。甕は長胴のもの体部がやや丸みをもつ2種がある。口縁部と体部の境には突起状の稜が巡るものがみられるが木來の段とは異なる。最大幅は前者が口縁部にあり後者は体部に位置している。前者の調整は外面がヨコナデとハケメ、後者はヨコナデとヘラミガキである。内面は両者ともヨコナデとヘラナデである。鉢はI縁部が直立するものと外反する2種がある。調整は両者ともI縁部内外面がヨコナデ、体部は後者がヘラケズリとナデ?である。

須恵器 器種には蓋・甕がある。破片資料で全体が知られるものはない。蓋は内面にカエリをもつもので、断面三角形でやや短めである。甕は体部外面に格子叩き目、内面に同心円文のオサエがみられる。

このような特徴をもつ土器類は土器編年の四分寺下層式に位置づけられるものである。上記の特徴や組み合わせ等から判断して8世紀前半を中心とする年代が考えられる。

5 まとめ

- ①住居跡は2軒とも奈良時代、8世紀前半頃を中心とする年代が考えられた。大きさは一辺4.5m・5.5mの方形で周辺調査でも同時期・同規模の住居跡群が多数検出されており、一帯のものと判断される。集落構成等今後の報告に期するところが大きい。
- ②溝跡群は4条の溝が弧状に並行して延び、幅等規模もほぼ同じのものである。これらから畑跡に関係する遺構群と判断した。SK2との重複からみて溝跡群は近世初頭以前の年代がおさえられる。
- ③円形周溝遺構は径4.5～6mの規模をもつ真円に近い形状をもつ。溝跡及び遺構とおしの重複がみられ時間幅が認められる。農耕に関わる遺構ではと思われるが時期も含め明らかではない。
- ④土坑の多くは年代・性格が不明であるが、SK2は井戸跡と判断される。埋め戻し土ではあるが美濃の志野皿が出土しており17世紀前半頃の年代が想定される。当時期この地域は若林城下町の範囲であり、城下町期の遺構と判断したい。



1 遺構確認状況 (南より)



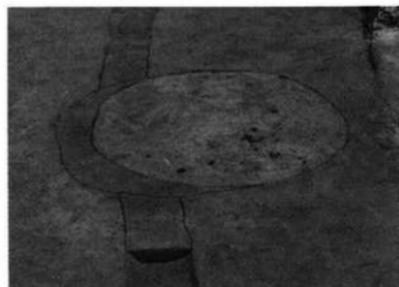
2 検出遺構全景 (南東より)



3 SK1土坑全景 (東より)



4 SK1土坑土層断面 (東より)



5 SK2・SK4・SD4重複状況 (南より)



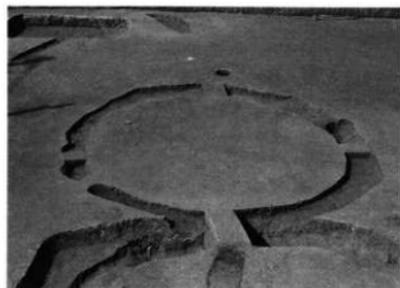
6 SK2土坑土層断面 (南より)



7 溝跡・円形周溝遺構全景 (南より)



8 SD1円形周溝遺構全景 (北東より)



1 SD 2 円形周溝遺構全景 (南より)



2 SD 1・SD 2 重複状況 (東より)



3 SD 3 円形周溝遺構全景 (南より)



4 SD 3 土層断面<東側> (南より)



5 SI 1 住居跡全景 (南東より)



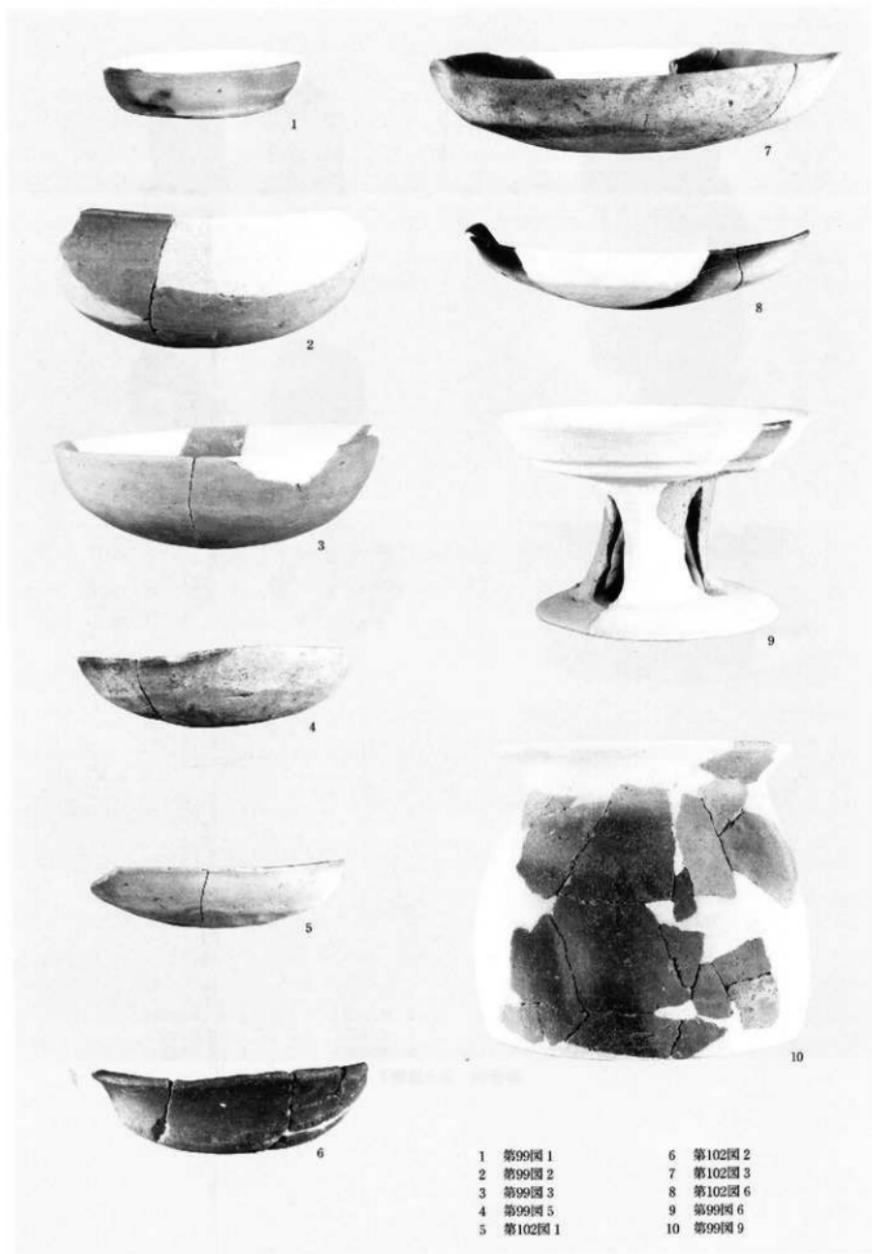
6 SI 1 住居跡カマド全景 (南東より)



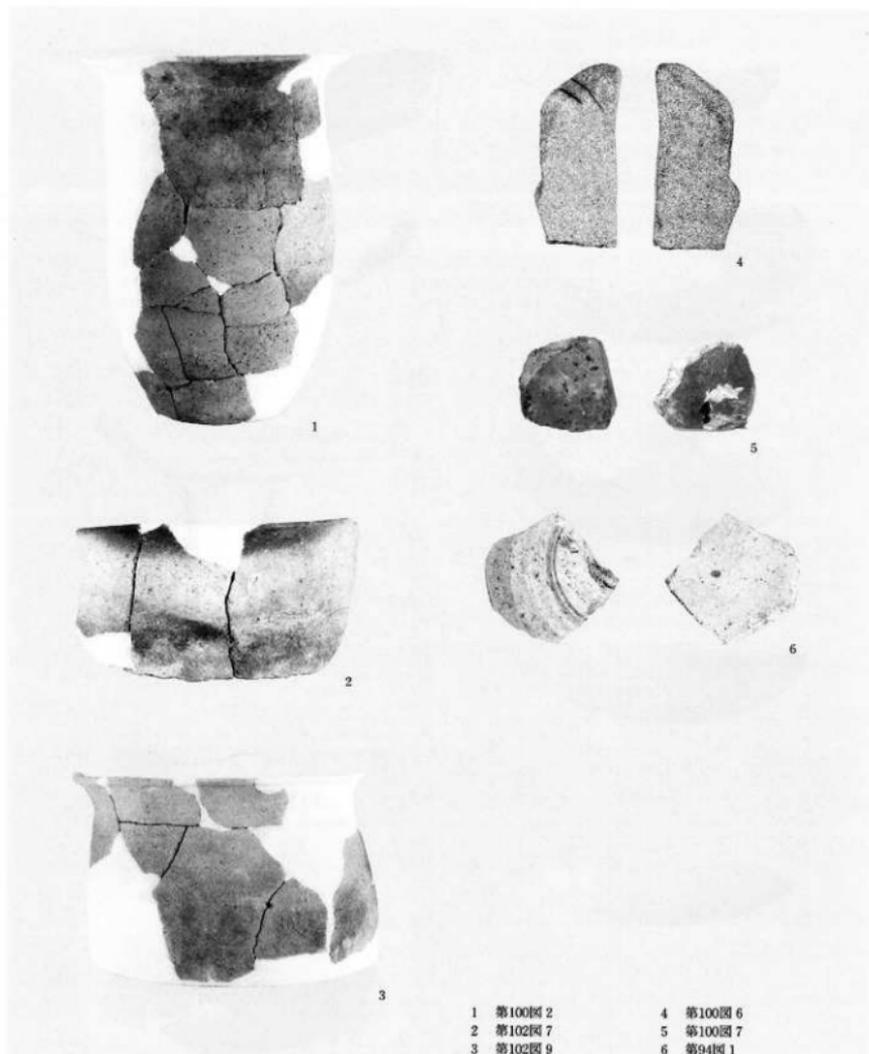
7 SI 2 住居跡全景 (南東より)



8 SI 2 住居跡カマド全景 (南より)



圖版48 出土遺物 1



1 第100图 2

2 第102图 7

3 第102图 9

4 第100图 6

5 第100图 7

6 第94图 1

图版49 出土遺物 2

XI 南小泉遺跡（第38次）発掘調査報告書

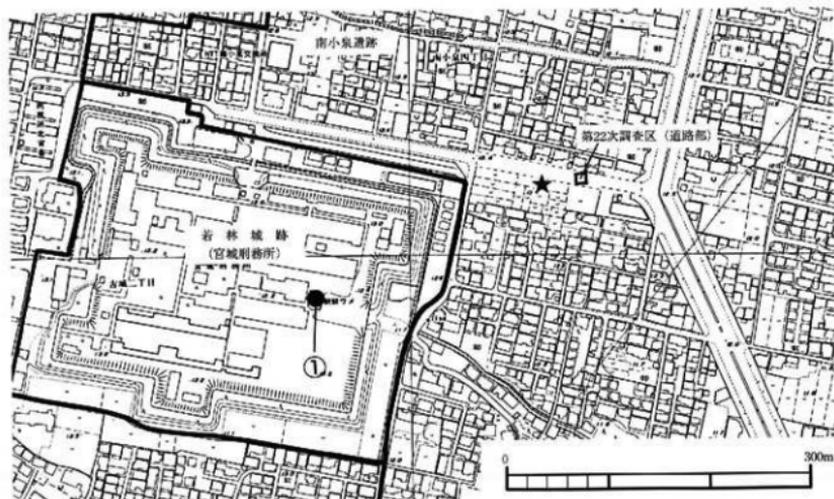
1 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調査地点	仙台市若林区南小泉四丁目71-1、73-4
調査期間	平成14年9月30日～10月11日
調査対象面積	390㎡
調査面積	127㎡
調査原因	共同住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
担当職員	主任 渡部 紀（文化財教諭 大倉 秀之：確認調査）

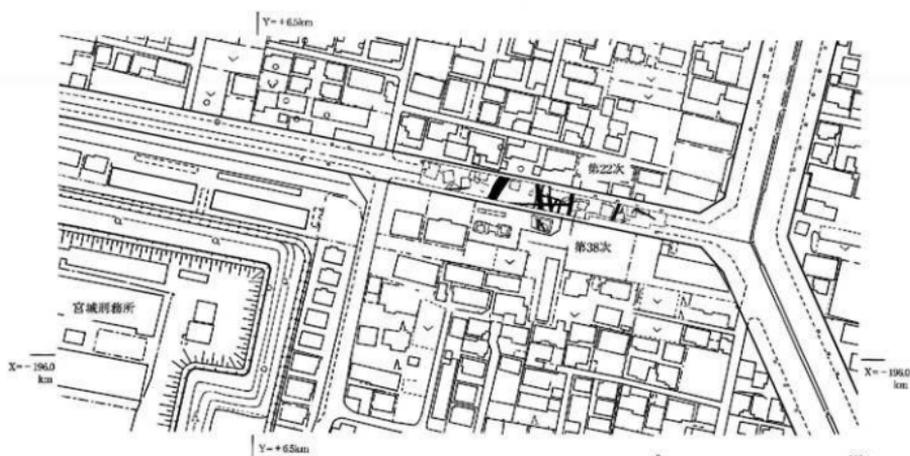
2 遺跡の位置と環境

仙台市の地形は、市の西部と東部で大きく分かれている。西部は奥羽山脈から派生する七北田丘陵・青葉山丘陵・高館丘陵と、名取川及びその支流の広瀬川が中流域に形成した段丘地形からなる。これに対して東半部は、幅10kmにわたり「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が広がっている。この平野は、七北田川・名取・広瀬川・阿武隈川からの堆積物等によって形成され、流域には扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道など沖積地特有の微地形を作り出している。また、仙台湾と呼ばれる海岸部には、3列の浜堤や潟湖性低地が認められる。

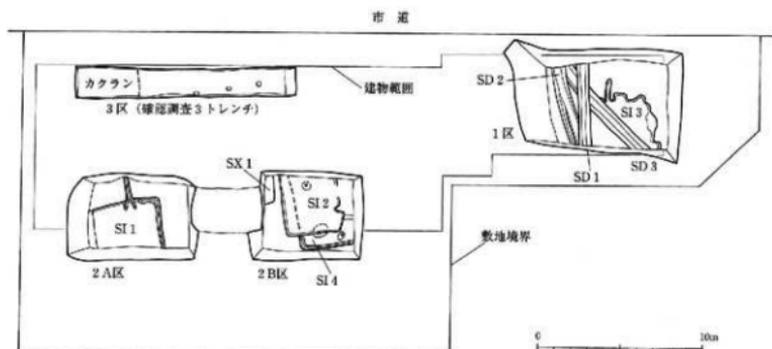
南小泉遺跡は、宮城野海岸平野の中央付近に位置し、広瀬川の北東側に形成された発達した自然堤防を中心に広



第104図 第38次調査区の位置



第105図 第38次調査区の配置と周辺の調査区



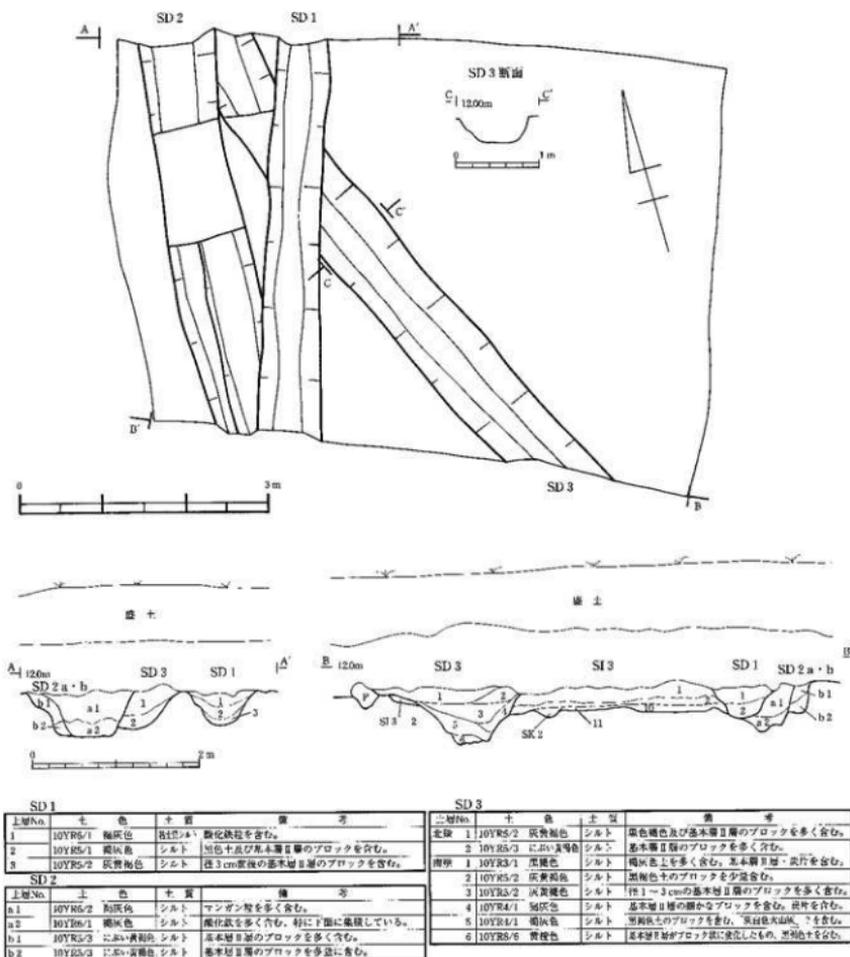
第106図 遺構配置図

がっている。これまでの調査では、弥生時代前期には遺跡が形成されていたことが確認され、その後弥生時代中・後期、古墳時代全期、奈良・平安時代、中世、近世にわたる多数の遺構が検出されている。遺跡内には全長110mの前方後円墳である遠見塚古墳があり、北東1kmには陸奥国分二寺が造営され、西隣には伊達政宗の隠居城である若林城が築かれていることから、この地域は、弥生・古墳時代以来、古代から近世にかけて、陸奥国の中心として栄えていたことが伺われるところである。

3 調査に至る経過と調査方法

本件は、平成14年8月20日付けで有限会社ヤマニ代表取締役菅原修一より発掘届けが提出されたので、9月12日

に3ヵ所にトレンチを設定して確認調査を実施し、住居跡・溝跡等が発見されたので、上記期間に本調査を実施した。本調査では、確認調査の際に、遺構が検出された部分を中心として発掘区を設定して調査を実施した。測量は、任意の基準点で行った後、この基準点から敷地境界杭を測量して調査区の位置を求めた。



第107図 溝跡実測図

4 基本層序

調査地点は、全体に15~80cmの盛土がなされている。その下は、I層(表土)が暗褐色シルトの田畑耕作土層

(天地返しを含む)、Ⅱ層が黄橙色のシルト層で、上面で遺構が検出されている。Ⅰ層は60cm前後で、現地表からⅡ層上面までの深さは1.3～1.6mである。

5 発見遺構と出土遺物

1) 各区の概要

- 1区 溝跡3条とこの溝に切られる竪穴住居跡1棟が検出されている。
- 2区 竪穴住居跡3棟と竪穴住居跡の可能性のある遺構が1基検出されている。
- 3区 ビット3個検出され、直線的に並んでいるが、相互の関係は不明である。西側1/3は攪乱を受けている。本調査は実施していない。

2) 溝跡

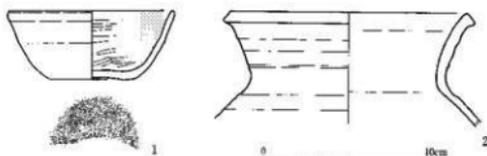
溝跡が3条検出されている。

SD-1 溝跡 1区の西寄りを直線的に南北に縦断する。SD-2・3溝跡を切る。上面幅は60～74cmで、深さは40cm前後である。断面形は舟底状で、堆積土は2層に分けられ、下層には基本層Ⅱ層のブロックを含んでいる。

遺物は、第108図1の土師器坏破片の他、土師器片42点・須恵器片8点が出土している。

SD-2 溝跡 1区の西側で検出された。SD-1溝跡に切れ、SD-3溝跡を切る。新旧2時期あり、新しいほうで上面幅は110cm前後で、深さは55cm前後である。新期の方がやや深い。断面形は逆台形で、堆積土は新山それぞれ2層に分けられ、古期（b期）の堆積土層中には基本層2層のブロックを多く含んでいる。遺物は、新期から土師器片43点・須恵器片8点、古期から土師器片3点が出土している。新期の土師器の坏片には、体部と口縁部の境の外面に段がついて口縁部が直立し、内面がヨコナデ調整され、器面には樹脂状のものが塗られた形跡があるものがあり、いわゆる関東系の土師器と呼ばれるものと同じ樹特徴を有するものも出土している。

SD-3 溝跡 1区の北西から南東方向にのびて検出された。SD-1・2溝跡に切られる。上面幅は90cm前後で、深さは65cm前後である。断面形は逆台形で、堆積土は6層に分けられ、5層中には「灰白色火火山灰」と観察される土壌を含んでいる。SI-3竪穴住居跡と重複部分が多いためか、多数の土師器・須恵器の破片及び古瓦の破片が出土している。多くの土器・瓦に混じて常滑産の陶器の体部破片が1点出土している（図版56-9）。外表面は薄く透明な緑色の釉がかかった状態で、内表面は暗褐色を呈している。



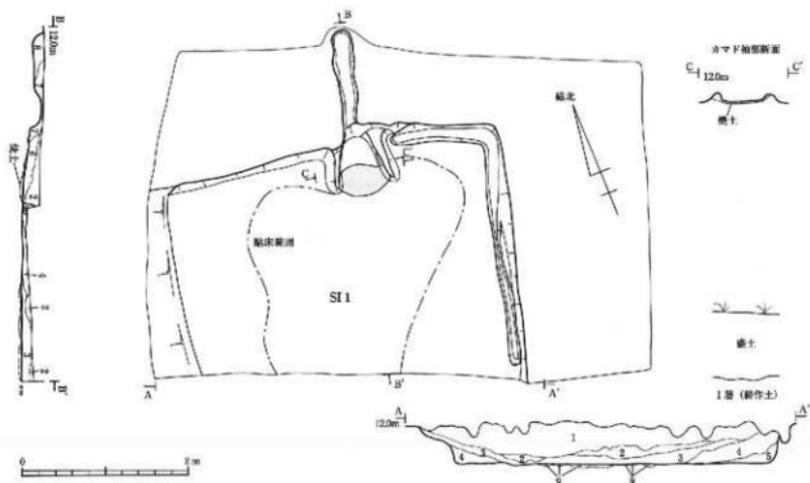
図中 番号	発見番号	所 出 地 点		分 期		法 定		特 徴・備 考		写真照度		
		西1区	基本層	遺構名	取上No.	層別	種 類	器高・長	口徑・根 底径・厚 (測定・遺長・深材・樹林・木取・産地・時期)		内面→ラミヤ、赤色地質 色部9層のちヘラケツ7	
1	D-1	1区		SD-1		土師器	坏	4.2	(9.8)	(5.0)	内面→ラミヤ、赤色地質 色部9層のちヘラケツ7	55-1
2	東-1	1区		SD-3	2層	須恵器	瓦	(7.0)	(14.0)	-	内外面コロロ 口縁薄地厚減	56-8

第108図 溝跡出土遺物

3) 竪穴住居跡

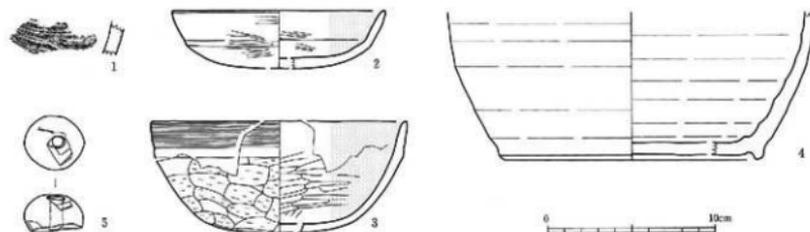
竪穴住居跡が4軒検出されている。

SI-1 竪穴住居跡 【平面形・規模】 2A区で検出された。南辺は調査区の外のにびている。西辺は削平されて



土層No.	土色	土質	備考	土層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/3 濃い黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層の小ブロックを少量含む。	6			焼土と灰の混合物
2	10YR7/4 濃い黄褐色	シルト	に濃い黄褐色土のブロックを少量含む。	7			基本層Ⅱ層に焼土のブロックを少量含む。
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	両側面では灰を含む。	8			基本層Ⅱ層に焼土のブロックを多数を含む。
4	10YR6/3 浅黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを少量含む。	9	10YR7/2 濃い黄褐色	シルト	粘土層 強くしまっている。
5	10YR6/3 浅黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。				

第109図 SI-1 竪穴住居跡実測図



図中 番号	発掘番号	出土区	遺物名	遺物No.	数量	分類	法	量	備考	写真区画
1	B-1	2A区	SI-1	1層	1	灰土	器	32.0	-	54-1
2	C-1	2A区	SI-1	灰面	7	土層器	器	33.5 (12.7)	-	54-2
3	C-2	2A区	SI-1	灰面	1・2	土層器	器	36.8 (15.2)	-	54-3
4	B-2	2A区	SI-1	壁土		土層器	器	39.0	(15.0)	
5	P-1	2A区	SI-1	1層		土層器	器	33.0	3.5	

第110図 SI-1 竪穴住居跡出土遺物

いるが調査区南壁面の観察記録では削平部の近くで竪穴住居跡の壁面の立ち上がりが確認されている。平面形は方形を呈するものと推察され、調査区南壁面での住居の東西軸長は約3.9mである。南北軸長は検出部分で3.2mある。【堆積土と床面】検出面から床面までの深さは20cm前後であるが、調査区南壁面では50cm前後の堆積土が確認でき

る。住居廃絶後の堆積土は8層に分けられるが、いずれも自然堆積層と観察される。カマド前部から反対の壁面にかけての住居中央部分には広い範囲に、いぶい黄橙色の砂質粘土による貼床があり、堅く締まっている。

【柱穴と周溝】住居の床面では柱穴は検出されていない。周溝は北壁のカマドの東側から東壁の南壁付近までL字状に検出されている。周溝の幅は10～20cmで、床面からの深さは3～4cmである。

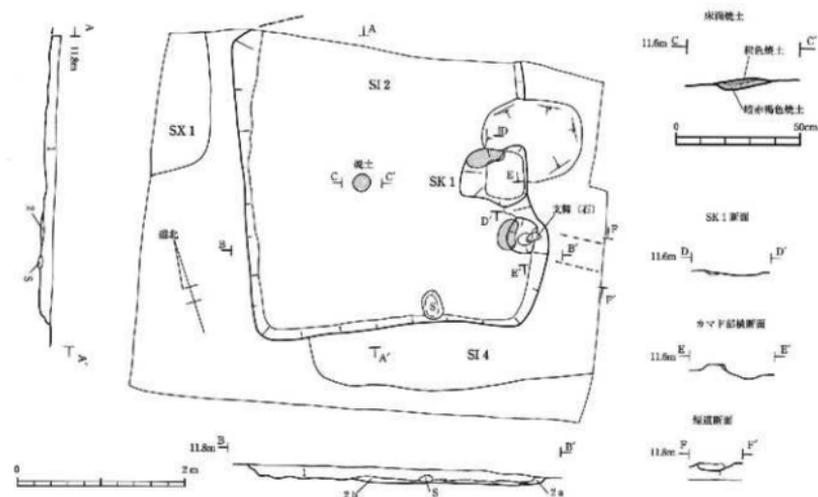
【カマド】カマドは北壁に作られている。中央よりやや東によって位置し、約120cm・幅16～26cmの煙道が住居の外にのびている。カマド本体は、両袖の下端部分が約10cm残っており、北壁面からカマド袖の先端まで約65cm、両袖の外側で90cm・内側で50cmを測る。袖部の幅は、基底部で左右とも20cm前後である。カマド内部は、中央から袖部の先端にかけて強く焼けている。

【住居掘り方】SI-1 竪穴住居跡では、掘り方の埋め土と認定できる土層は確認されなかった。

【出土遺物】出土遺物は多くない。図化できる床面出土の遺物としては、土師器の坏が2点ある(第110図)。C-1は、丸底の坏で、体部と口縁部の中間に内外面とも段がつき、口縁部は比較的短く内湾気味に直立する。器面は荒れているが、内外面とも最終調整としてヘラミガキが施されている。C-2は、比較的深い坏である。丸底で、半球形の器形となる。器高の2/3くらいのところの外面に段がつき、直立気味の口縁となる。堆積土中からは、弥生土器の壺の肩部破片(B-1)や、須恵器の壺体部下半の破片(E-2)、土玉(P-1)などが出土している。

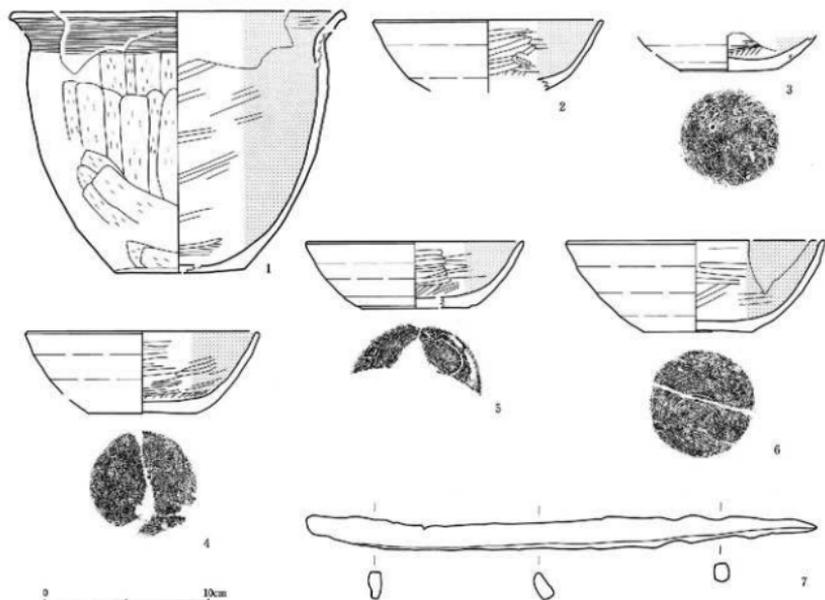
【住居の年代】SI-1 竪穴住居跡の所属時期については、床面から出土した2点の土師器坏が、いずれも国分寺下層式に相当すると判断されるので、奈良時代に位置付けられるものと考えられる。

SI-2 竪穴住居跡 【平面形・規模】2A区で検出された。SI-4 竪穴住居跡を切っている。北辺は調査区の外にのびているが、北西角付近が確認されているので住居跡の大きさは推定可能である。平面形は南北方向にやや長



土層No.	土色	土質	備考	土層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/3	いぶい黄橙色	シルト	2b	10YR4/1	黄灰色	シルト
2a			硬土と灰の混合層。				床中部に灰片を含む。 硬土・灰・炭を混合する土層。

第111図 SI-2 竪穴住居跡実測図



図中番号	図録番号	出土地点	分類	数量	寸法・重量・材質・形状	特徴・備考	写真図版		
1	C-2	2 Ⅱ区 高木畑	SI-2 壁面	3	土器砂 壺	15.0 (20.1) (8.0)	外底ヘラミズリ 内底ヘラミズギキ、黒色施地	54-4	
2	D-5	2 Ⅱ区	SI-2 ホマド		土器砂 杯	(4.3) (13.8)	-	内底ヘラミズギキ、黒色施地	
3	D-6	2 Ⅱ区	SI-2 床面	5	土器砂 杯	(2.4) -	0.0	内底ヘラミズギキ、黒色施地 底部ヘラミズギキ	
4	D-3	2 Ⅱ区	SI-2 SK-1		土器砂 杯	5.0 (13.0)	0.5	内底ヘラミズギキ、黒色施地 底部斜位糸切り	55-3
5	D-4	2 Ⅱ区	SI-2		土器砂 杯	(4.1) (13.2)	(6.6)	内底ヘラミズギキ、黒色施地 底部斜位糸切り	55-4
6	D-2	2 Ⅱ区	SI-2		土器砂 杯	5.6	15.6 0.6	内底ヘラミズギキ、黒色施地 底部斜位糸切り	55-2
7	N-1	2 Ⅱ区	SI-2	1脚	鉄製品	30.8	1.8 0.5	棒状	57-6

第112図 SI-2 竪穴住居跡出土遺物

い長方形を呈する。東西軸長は約3.6mである。南北軸長は3.8mである。

【堆積土と床面】 検出面から床面までの深さは20cm前後である。カマドの前方部分を除くと堆積土は炭や焼土を含むにぶい黄褐色のシルト層1層である。SI-4 竪穴住居跡の堆積土を床面としている。床面は僅かな起伏がある。貼床はない。

【柱穴と周溝】 住居の床面では柱穴は検出されていない。周溝も検出されていない。

【カマド】 カマドは東壁に作られている。中央よりやや南によって位置している。カマド本体は残っていないが、東壁に接して長軸42cm・短軸32cmの略楕円形の窪みがあり、壁際には石製の支脚が立ったまま出土し、支脚の反対側の床面は東西20cm・南北35cmの範囲で焼けていることからこの部分にカマドが存在したことがわかる。また、この焼土面と支脚を結んだ延長上の調査区東壁面に煙道の痕跡と考えられる焼け面と堆積土が観察される。

【その他の施設】 東壁の中央付近には、SK-1 土坑とした東西80cm・南北70cmの不整形な浅い窪みがある。この窪みは、東壁のほぼ中央に位置し、北側の壁面が焼けていることから、古いカマドのあった場所の可能性があり、住

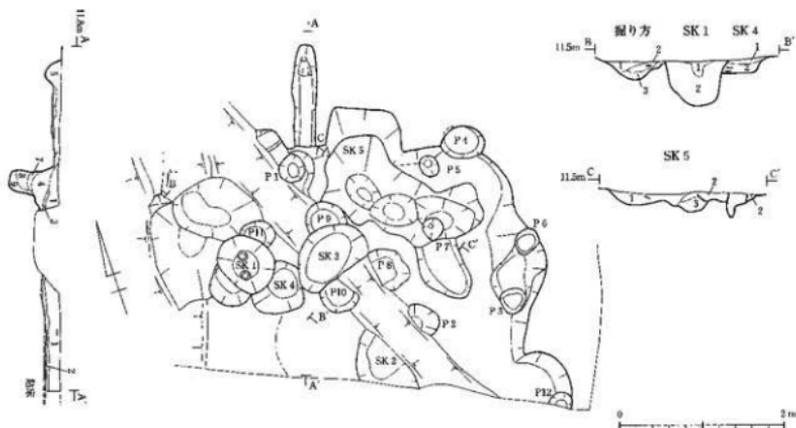
居の中央には直径約20cmの円形の焼上面がある。強く焼け締まっており、炉跡と考えられる。

【住居掘り方】SI-2 竪穴住居跡も、掘り方の埋め土と認定できる土層は確認されなかった。

【出土遺物】図化した出土の遺物としては、土師器の坏が5点と甕が1点、及び鉄製品が1点ある(第112図)。土師器坏D-2は、やや大ぶりの坏で、口径の割に底径は小さく底部は回転系切り無調整である。D-3は、SK-1土坑から出土した坏で、再酸化を受けて一部黒色処理がぬけている。底部は回転系切り無調整である。D-4は、前2個体と比べるとやや浅い坏である。底部は回転系切り無調整である。D-5は、坏体部の破片で、口縁端部が強く外反している。D-6は、坏の底部の破片で、底部外面は切り離し後手持ちヘラケズリ調整されている。C-3は、ロクロを使用していない甕で、外面は体部がヘラケズリ、口縁部がヨコナデ調整されている。内面はヘラミガキ調整された後に黒色処理されている。その他土師器の破片も多数出土しているが、床面付近から出土した須恵器の破片は3点に過ぎない。

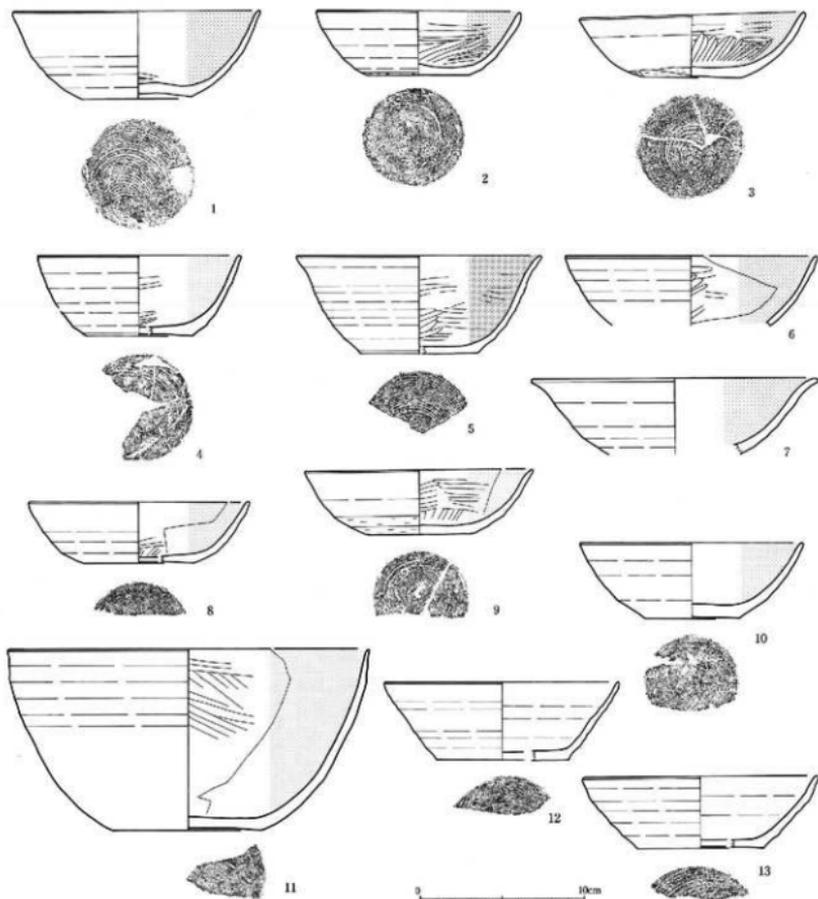
鉄製品のN-1は現存長31.0cm・最大幅1.7cm・厚さ0.9cmの棒状の製品で、片方の端部は針状に尖っており反対側はやや扁平となっている。残存する端部は徐々に薄くなっている。

【住居の年代】SI-2 竪穴住居跡の所属時期については、出土した5点の土師器坏ロクロが使用されたもので、底部は回転系切り無調整のものが主体となっている。また、底部が切り離し後手持ちヘラケズリ調整されているものについても、底径が小さいものである。いずれも表杉ノ入式期のものであり、平安時代に位置付けられる。



SI-3				SK1・4・5 P7			
土層No.	土色	土質	備考	土層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	焼土・炭を少量含む。	掘り方1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録のブロック及び炭を含む。
2	10YR5/1 暗灰色	B.質シルト	基本層目録の小ブロックを少量含む。	2			灰を主体とし焼土粒や細かい黄褐色土を含む。
3		灰層		3			基本層目録に焼土のブロックを少量含む。
4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録の径1cm前後のブロック及び焼土片を含む。	SK1 1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	焼片を少量含む。
5			炭・焼土を含む。基本層目録のブロックを含む。	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録のブロックを多く含む。
6			基本層目録に焼土のブロックが混入。	SK4 1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録のブロックを多く含む。
7			基本層目録のブロック状の焼土層。	2	10YR4/1 黄褐色	シルト	焼土ブロック・炭片を多く含む。
8	10YR5/3 濃い黄褐色	シルト	基本層目録のブロック及び炭を含む。	SK5 1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録のブロックを多く含む。焼土・炭を含む。
9			基本層目録に灰黄褐色土のブロックを含む。	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録のブロック及び炭片を少量含む。
10	10YR6/3 濃い黄褐色	シルト	径1cm前後の基本層目録のブロックを多く含む。炭を含む。	3	10YR6/1 暗灰色	シルト	炭片を含む。
11	10Y2/7 濃い黄褐色	シルト	灰黄褐色土層の厚さ約3-10cmの薄層を認め含む。	P7	10YR4/1 暗灰色	シルト	焼片を多く含む。焼土層を含む。
SK-2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	径1cm前後の基本層目録のブロックを多く含む。				

第113図 SI-3 竪穴住居跡実測図



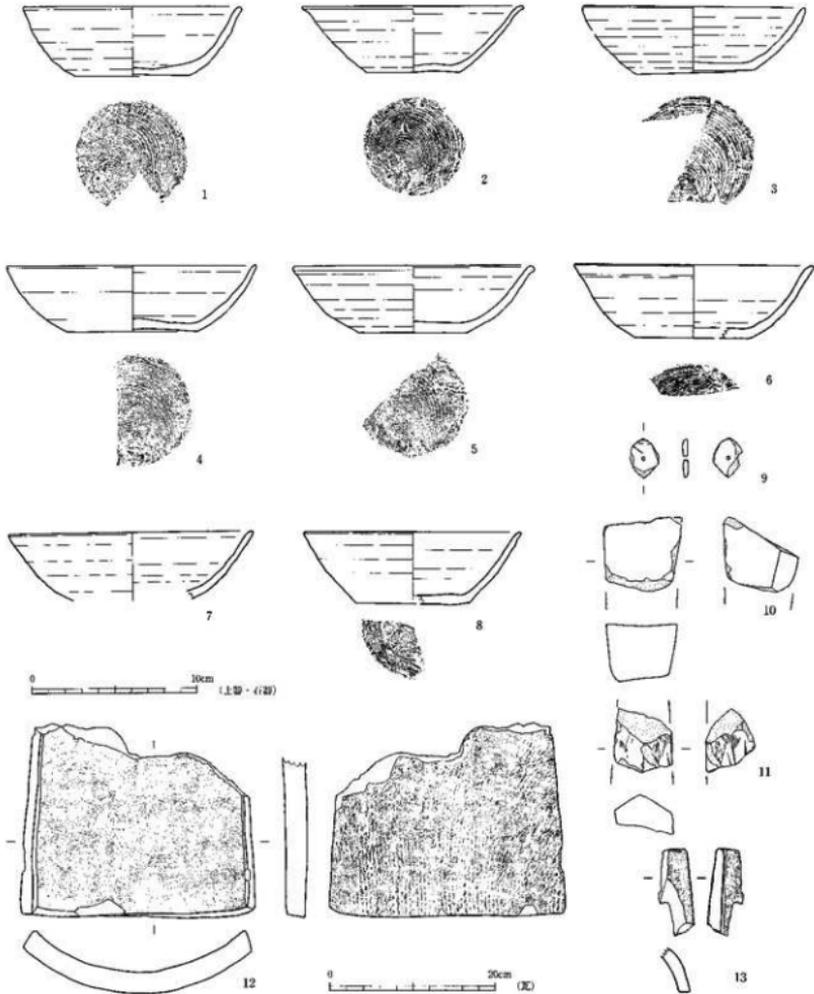
図中番号	図中番号	出土地点	分類	測定	材質・形状・用途	特徴・備考	写真掲載
1	D-7	1区	SI-3 北東1層	土師器 杯	3.4 15.0 6.6	内面ヘラミガキ。黒色処理 底部回転痕あり	55-5
2	D-8	1区	SI-3 北東2層	土師器 杯	4.1 12.5 6.1	外面ヘラミガキ。黒色処理 底部回転痕ヘラミガキ	55-6
3	D-9	1区	SI-3 庭園入口	土師器 杯	3.8 15.8 6.0	内面ヘラミガキ。黒色処理 底部回転痕あり	55-7
4	D-10	1区	SI-3 Ⅷ-1水口	土師器 杯	4.9 12.2 6.0	内面ヘラミガキ。黒色処理 底部回転痕あり	55-8
5	D-11	1区	SI-3 Pit 11	土師器 杯	6.0 14.6 7.2	内面ヘラミガキ。黒色処理 底部回転痕あり	55-9
6	D-12	1区	SI-3 (40)	土師器 杯	6.3 15.3 6.1	内面ヘラミガキ。黒色処理	
7	D-14	1区	SI-3 SK-1	土師器 杯	6.7 17.0 6.1	内面ヘラミガキ。黒色処理 (再酸化)	
8	D-13	1区	SI-3	土師器 杯	6.6 13.4 3.8	内面ヘラミガキ。黒色処理 底部回転痕あり	
9	D-15	1区	SI-3	土師器 杯	3.9 13.8 6.0	内面ヘラミガキ。黒色処理 底部回転痕あり	
10	D-16	1区	SI-3 (54)	土師器 杯	4.7 13.5 6.7	内面ヘラミガキ。黒色処理 底部回転痕あり	
11	D-17	1区	SI-3 (46)	土師器 杯	11.1 39.0 10.1	内面ヘラミガキ。黒色処理 底部回転痕あり	
12	D-18	1区	SI-3 SK-3	赤地上彩 片	4.8 14.2 9.0	内外面コクラ 底部回転痕あり	55-10
13	D-19	1区	SI-3 Pit 10	赤地上彩 片	4.4 14.4 7.7	内外面コクラ 底部回転痕あり	

第114図 SI-3 Ⅷ穴住居跡出土遺物 1



図中 番号	発跡番号	出土地点			取上No.	類別	加工法				特徴・備考	写真図版
		西上区	基本層	遺構名			遺構別	形	砂荒・異	口徑・底径・厚		
1	C-4	1区	SI-3		(46)	土師器	素	(11.0)	(21.0)	-	外縁ハケメ 内縁ヘラナゲ	54-7
2	D-27	1区	SI-3			土師器	変	13.3	(21.7)	(9.3)	外縁ヘラケズリ 内縁ヘラミダキ 黒色処理	56-1
3	D-22	1区	SI-3	SK-3		土師器	変	(11.5)	(21.1)	-	内縁ナゲ	
4	D-20	1区	SI-3		(45)	土師器	変	(7.0)	(19.6)	-	外縁ケズリ 内縁ナゲ (単位不明)	
5	D-26	1区	SI-3	SK-5		土師器	変	6.4	(14.4)	-	内外両口ケロ	
6	D-24	1区	SI-3			土師器	変	6.2	(19.3)	-	内外両口ケロ	
7	D-21	1区	SI-3			土師器	変	(2.0)	(20.6)	-	内外両口ケロ	56-2
8	D-23	1区	SI-3	SK-1		土師器	変	(12.5)	(19.2)	-	内外両口ケロ	
9	D-25	1区	SI-3	SK-5		土師器	変	(4.8)		8.7	外縁ヘラケズリ 内縁ナゲ	

第115図 SI-3 竪穴住居跡出土遺物 2



図中 番号	登録番号	出 土 地 点				分 類	規 模	法 量			特 徴 ・ 備 考	写真図版
		出上区	基不知	遺構名	取上No.			器高・径	口径・幅	底径・厚		
1	H-3	1区		SI-3	SK-5	腹巻器	杯	4.3	3.0	7.0	内外面クマロ 底面同軸糸切り	56-3
2	E-4	1区		SI-3	PI-5	炊器器	杯	4.1	(13.4)	3.6	内外面クマロ 底面同軸糸切り 外部に厚書あり	56-4
3	出-5	1区		SI-3		炊器器	杯	4.2	(13.3)	7.1	内外面クマロ 底面同軸糸切り	56-5
4	E-6	1区		SI-3	(40-41)	炊器器	杯	4.1	(15.1)	7.9	内外面クマロ 底面同軸糸切り	56-6
5	E-7	1区		SI-3	編り方	炊器器	杯	4.1	(14.2)	6.6	内外面クマロ 底面同軸糸切り	56-7
6	H-8	1区		SI-3	(54)	腹巻器	杯	6.5	(14.3)	(7.1)	内外面クマロ 底面同軸糸切り	56-8

第116図 SI-3 竪穴住居跡出土遺物 3

図中 番号	登録番号	出 土 地 点			分 類		法 定			特 徴・備 考	写真図版	
		山上区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種類	部 材	高さ・厚			口径・幅
7	E-9	1区		SI-3	(60)	須磨器	坏	(4.2)	(14.7)	-	内外面ロクロ	
8	K-10	1区		SI-3	(54)	須磨器	坏	4.4	(13.8)	(6.8)	内外面ロクロ 底面回転糸切り	
9	K-2	1区		SI-3		石製品	石製網芸品	2.4	(1.7)	0.3	円盤、華孔(孔径0.2)	37-3
10	K-1	1区		SI-3	(53)	石製品	磁石	(1.6)	4.7	3.5		57-4
11	K-3	1区		SI-3	SK-3	石製品	磁石					57-5
12	G-1	1区		SI-3	1層	瓦	平瓦	(20.3)	(26.6)	2.6	凹面布目の子ナデ 凸面焼タケキ	57-1
13	F-1	1区		SI-3	SK-3	瓦	丸瓦	(10.7)	(3.6)	(1.3)	凹面布目 凸面焼タケキの子ナデ	57-2

SI-3 竪穴住居跡 【平面形・規模】2B区で検出された。遺構の西部をSD-1・2・3溝跡に切られているため西辺は不明である。南辺は調査区の外にのびている。検出された北辺・東辺の壁面とも凹凸が著しく、一定していない。検出範囲は、東西軸長約4.8m・南北軸長は3.3mである。

【堆積土と床面】検出面から床面までの深さは20cm前後である。炭や焼土を含むにぶい灰黄褐色のシルト層が堆積土の上部を占め、下部は褐色ないしにぶい黄褐色土及びにぶい黄褐色のシルト層が床面を覆っている。床面では土坑5基とピット12個が検出されている。上坑とピットは特に北壁よりに集中的に存在している。通道前方の調査区南壁近くの床面は、貼床されて堅く締まっている。

【柱穴と周溝】柱穴は明らかでない。周溝も検出されてない。

【カマド】カマド本体は残存していないが、北壁中央付近と考えられる位置に煙道が残っている。現存する煙道の規模は、長さ125cm・幅25cm・深さ8~20cmで、先端部分がピット状に下がっている。

【その他の施設】SK-1土坑は、SK-4土坑・ピット11を切る。東西67cm・南北71cmの円形を呈し、断面形がU字形で深さは54cmある。底面では直径12~13cmのピットが2個検出されている。SK-2土坑は、北東部をSD-3溝跡に切れ、南部が調査区外にのびる。検出部分で東西77cm・南北64cmを測る。深さは11cmある。SK-3土坑は、ピット9・10を切る。東西97cm・南北60cmの楕円形を呈し、深さは32cmを測る。SK-4土坑は、SK-1・3土坑に切られる。東西68cm・南北46cmで、深さは約20cmある。SK-5土坑は、南北242cm・東西107cmを測る不整形の上坑である。底面には長軸に沿って緩やかな凹凸があり、深さは8~24cmである。

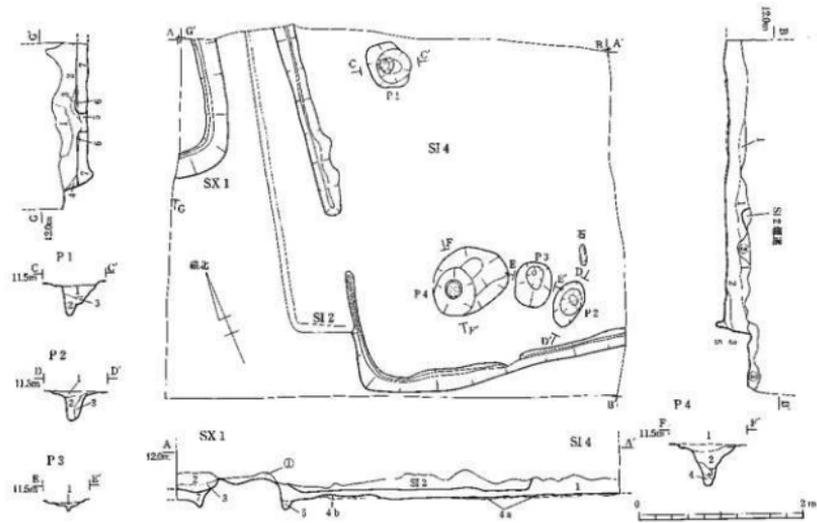
【住居掘り方】SK-1土坑の北側で検出された落ち込みについては、住居の掘り方と考えたが、炭・灰・焼土等を含んでいることや、他の部分で掘り方埋土に相当する土層が確認できなかったため、土坑の可能性も考えられる。

【出土遺物】堆積土・床面及び床面検出遺構から多量遺物が出土している。図化した出土の遺物としては、非ロクロ土器器甕が2点、ロクロを使用した土器器坏10点・鉢1点・甕8及び赤焼土器坏2点、須恵器坏8点、古代瓦2点、石製品2点ある(第114~116図)。非ロクロ土器器甕C-4は、体部上半から口縁部にかけての破片で、口縁部は強く外側に折れ、口唇部は平坦になっている。口縁部はヨコナデ調整され、体部は外面がハケメ調整・内面がヨコナデ調整されている。C-5(図版54-5)は甕ノ胴部の破片で、外面がハケメ調整・内面がヨコナデ調整されている。2点ともロクロ土器器に伴ってみられる器形の非ロクロ土器器の甕である。ロクロ土器器の坏は、底部が回転糸切り無調整のもの、切り難し後手持ちヘラケズリ調整・切り難し後回転ヘラケズリ調整のものがある。底部の調整技法と出土層位との相関関係は明らかでない。ロクロ土器器の鉢は、比較的広い底部から内湾する体部に強く外傾する口縁が付く、ロクロ調整の後体部下半が縦方向にヘラケズリ調整されている。ロクロ土器器の甕は、やや内湾する筒状の体部に受け口状の口縁部が付くもので、体部下半はヘラケズリ調整されている。赤焼土器器の坏は、ロクロ土器器坏と器形・法量的に大差のないものである。

須恵器坏は、器高に比して底径の小さいもので、底部はいずれも回転糸切り無調整である。平瓦G-1は、凸面焼叩き無調整、凹面布目後ナデ調整されるもので、宮城県多賀城跡調査研究所の平瓦の分類ではII B類のaタイプのものである。石製品は砥石2点(K-1・3)と、古墳時代中期の石製模造品の破片と考えられるものが1点

(K-2) がある。

【住居の年代】SI-3 竪穴住居跡の所属時期については、出土した土師器坏がロクロを使用したものであることから、表杉ノ入式期に位置付けられ、平安時代と考えられる。



SI 4				SI 4 ビット			
土層No.	土色	土質	備考	土層No.	土色	土質	備考
①	10YR5/1 茶褐色	シルト	基本層目録のプロックを含む。	P1 1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	灰片を少量含む。
②	10YR4/1 暗灰色	シルト	しまりなし。	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	しまり強く灰片を含む。
③	10YR2/1 黒褐色	シルト	基本層目録の小プロックを少量含む。しまりなし。	3	10YR2/6 黄褐色	シルト	基本層目録に黒灰色土の細かなプロックを少量含む。
1	10YR6/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録のプロック及び焼土を含む。	P2 1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	灰片を少量含む。しまり強い。
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	住居の裏倉庫にのみ分布。	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰片を少量含む。しまり強い。
3	10YR4/1 暗灰色	粘土質シルト	住居の裏倉庫にのみ分布。	3	10YR4/6 黄褐色	シルト	基本層目録に黒灰色土の小プロックを含む。
4a	10YR4/1 暗灰色	シルト	陥床。	P3 1	10YR4/1 暗灰色	シルト	基本層目録のプロック及び灰・焼土を含む。
4b	10YR5/1 暗灰色	シルト	陥床。	② 1	25YR/2 灰白色	粘土質シルト	基本層目録のプロックを含む。
5	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録のプロックを多く含む。高濃縮土。	2	25YR/1 黄灰色	粘土質シルト	基本層目録のプロックを含む。
				3	25Y7/2 灰灰色	粘土質シルト	
				4	25Y5/1 黄灰色	粘土質シルト	粘性はあるが、しまり強い。

SX 1			
土層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/1 暗灰色	シルト	基本層目録のプロックを多量に含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録の細かなプロックをわずかに含む。
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	焼土層を多量に含む。
4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録の細かなプロックを多く含む。
5	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	焼土層がまじりあって陥床。黒灰色シルトを含む。
6	10YR4/1 暗灰色	シルト	下層にしまりあり。炭屑?
7	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	基本層目録の小さなプロックを多く含む。焼土も焼土?

第117図 SI-4 竪穴住居跡・SX-1 遺構実測図

SI-4 竪穴住居跡 【平面形・規模】2 B区で検出された。北辺と東辺は調査区の外にのびている。検出部分の北西部の堆積土上部もSI-2 竪穴住居跡によって削平されている。検出部で東西軸長は約3.8m・南北軸長4.7mを測るが、平面形が方形の住居であれば、柱痕跡の位置から1辺の長さは5.2~5.4mと推察される。

【堆積土と床面】検出面から床面までの深さはSI-2 竪穴住居跡による削平を受けていない部分で25cm前後である。住居廃絶後の堆積土は3層に分けられるが、いずれも自然堆積層と観察される。床面はほぼ平坦で、部分的に灰白

色ない褐灰色のシルトによる貼床がある。ピット3の周辺は良く締まっている。

【柱穴と周溝】住居の対角線上に位置するピット4及びこれと対応関係にあるピット1は主柱穴と考えられる。ピット1は長軸55cm・短軸50cmの不整形の掘り方で、床面からの深さは42cmを測る。柱痕跡は直径約15cmの円形である。ピット4は長軸97cm・短軸75cmの楕円形の掘り方で、床面からの深さは50cmである。柱痕跡は直径約16cmの円形である。ピット2も柱痕跡が確認されているがどのような役割の柱穴であるか明らかでない。

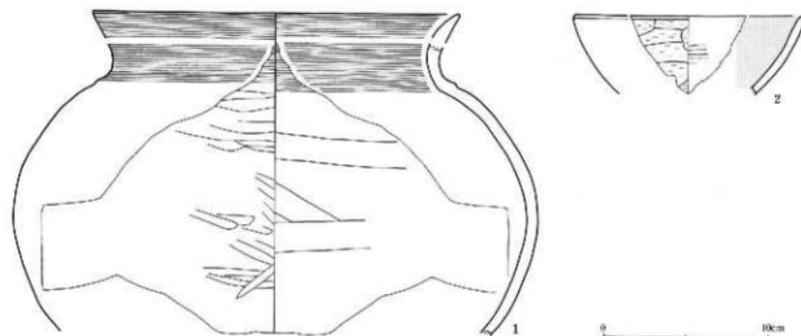
周溝は調査部の壁面に沿って検出されている。幅は20cm前後で、床面からの深さは4～8cmである。

【カマド】カマドの位置は不明である。検出部の南壁及び西壁に存在していないことから判断すると、北壁ないし東壁に位置していると推定される。

【住居掘り方】SI-4 堅穴住居跡では、掘り方の埋め土と認定できる土層は確認されなかった。

【出土遺物】出土遺物は多くない。図化できる遺物としては非ロクロ土師器の甕が1点あるだけである（第118図）。C-6は、体部が扁平な球形の甕で、体部と口縁部の境に軽く段がつく。口縁部は比較的強く外反する。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部が外面ヘラケズリ調整、内面がヨコナデ調整されている。

【住居の年代】SI-4 堅穴住居跡の所属時期については、出土遺物が少ないために明瞭ではないが、図示した土器の頸部に段が形成されていることや、出土土器片の中に内面黒色処理された非ロクロ土師器坏片が3点ほど見られることから、栗園式期または国分寺下層式の土師器と想定され、古墳時代後期～奈良時代頃の年代が考えられる。



項目番号	位置番号	出土区	品名	調査名	遺構名	取上No.	分類	形状	高さ・長	口徑・幅	底径・厚	特徴・備考	写真図版
1	C-6	256区	品不明	SI-4	埋土		土師器	甕	(18.5)	(22.2)	-	調整・産地・素材・形状・本取・産地・時期	54-d
2	C-7	256区		SX-1			土師器	坏	14.8	(13.6)	-	外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ、黒色処理	

第118図 SI-4 堅穴住居跡・SX-1 遺構出土遺物

4) その他の遺構

SX-1 遺構 2B区の北西角で方形の遺構の東南部が検出された。検出部分で東西58cm・南北170cmである。底面が2面あり、上面のまでの深さ約20cm、下面までの深さ約30cmを測る。各面とも平坦になっている。下面の縁際は、5cm前後の深さで周溝状に下がっている。遺物は土師器片7点と須恵器片1点があるだけである。土師器片はいずれも非ロクロのもので、内1点は体部から口縁部まで内湾しながら立ちあがる坏である（第118図）。外面はヘラケズリ調整、内面はヘラミガキの後黒色処理されている。この土師器については国分寺下層式に位置付けられるものと考えられるが、遺構の時期については、資料が少ないので確定できない。

6 まとめ

- ① 4軒の竪穴住居跡と3条の溝跡及びその他の遺構が1基検出された。
- ② 竪穴住居跡には、古墳時代後期～奈良時代の可能性のあるもの1軒・奈良時代のもの1軒・平安時代のもの2軒がある。
- ③ 竪穴住居跡は、各時期ともほぼ南北方向に軸を持ち、カマドは北壁または東壁に配されている。
- ④ 奈良・平安時代の竪穴住居跡は1辺が4m前後と比較的規模が小さく、床面では柱穴が確認できなかった。
- ⑤ 古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡は、1辺が5mを超え、床面で柱穴が検出された。
- ⑥ 3条の溝跡は古い方からSD-3→SD-2→SD-1と変遷し、SD-2はさらに新旧2時期ある。
- ⑦ SD-3溝跡の堆積土下部に灰白色火山灰が認められ、また、堆積層中から常滑所の中世陶器が出土していることから、SD-3溝跡は10世紀初頭には存在し中世にかけて埋没したと考えられる。
- ⑧ SD-3溝跡より新しいSD-1・2溝跡については、中世遺構に掘削された遺構と考えられる。

参考文献

- 氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』
- 氏家和典（1967）：「陸奥四分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『山形県の考古と歴史』柏倉亮古教授還暦記念会刊
- 瀧藤秋軒・高野芳宏・白鳥良一他（1982）：「多賀城跡 政庁跡 本文編」宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会



1 2区調査風景



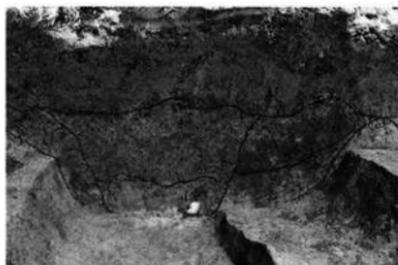
2 SD-1・2・3 溝跡検出状況 (西より)



3 SD-1・2・3 溝跡全景



4 SD-1 溝跡断面 (南より)



5 SD-2・3 溝跡断面 (南より)



6 SI1 竪穴住居跡検出状況 (西より)



7 SI1 竪穴住居跡全景 (南より)

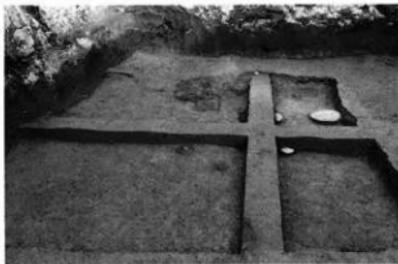


8 SI1 カマド周辺 (南より)

図版50 2区遠景・SI1 竪穴住居跡



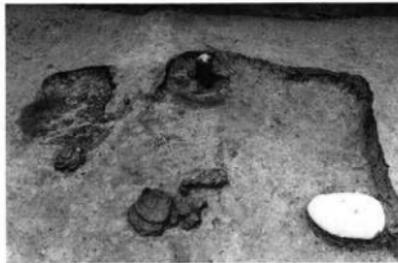
1 SI2 竪穴住居跡検出状況（南より）



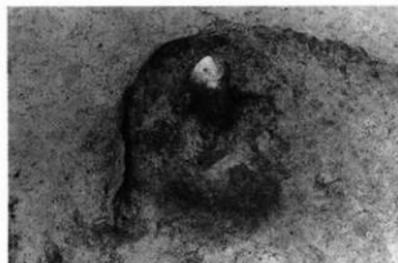
2 SI2 断面（西より）



3 SI2 竪穴住居跡全景（北西より）



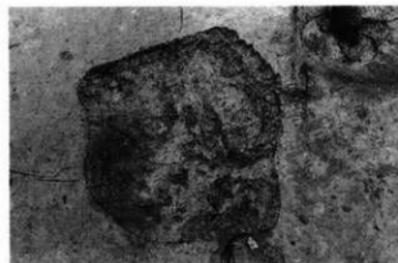
4 SI2 カマド部周辺（南より）



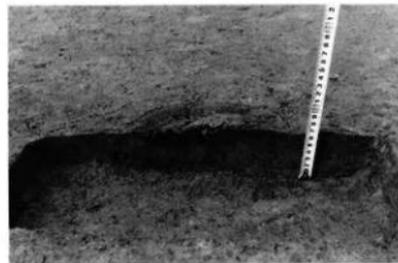
5 SI2 カマド支脚（南より）



6 SI2 内SK-1 断面（西より）



7 SI2 内SK-1 全景（西より）



8 SI2 床面検出跡（南より）

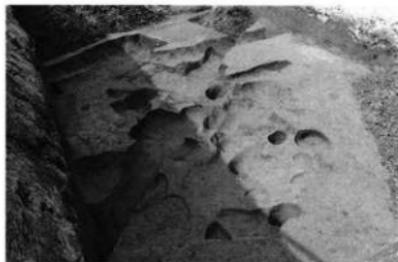
図版51 SI2 竪穴住居跡



1 SI 3 竪穴住居跡床面検出状況 (南より)



2 SI 3 煙道・ピット1 断面 (西より)



3 SI 3 竪穴住居跡全景 (南東より)



4 SI 3 竪穴住居跡全景 (北より)



5 SI 3 内SK-1 (西より)



6 SI 3 内SK-2・4 (南西より)

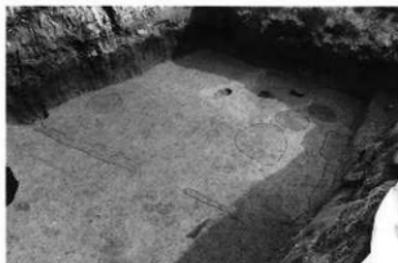


7 SI 3 内SK-3 (北より)



8 SI 3 内SK-5 (南西より)

図版52 SI 3 竪穴住居跡



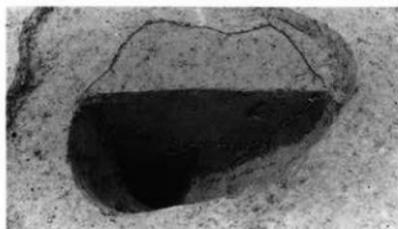
1 SI4 竪穴住居跡床面検出状況（南西より）



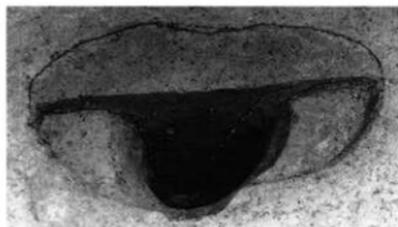
2 SI4 竪穴住居跡全景（南西より）



3 SI4 竪穴住居跡断面（南より）



4 SI4 内ビット1（南より）

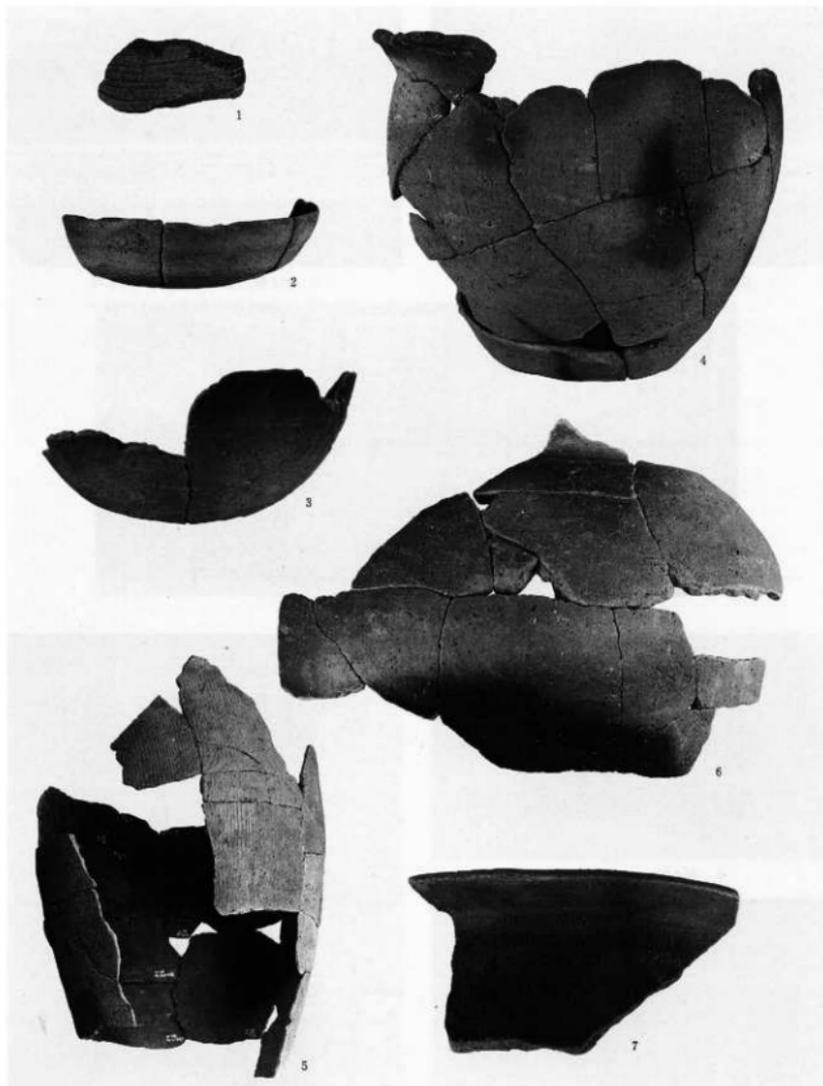


5 SI4 内ビット2（北より）



6 SX-1 遺構全景（南より）

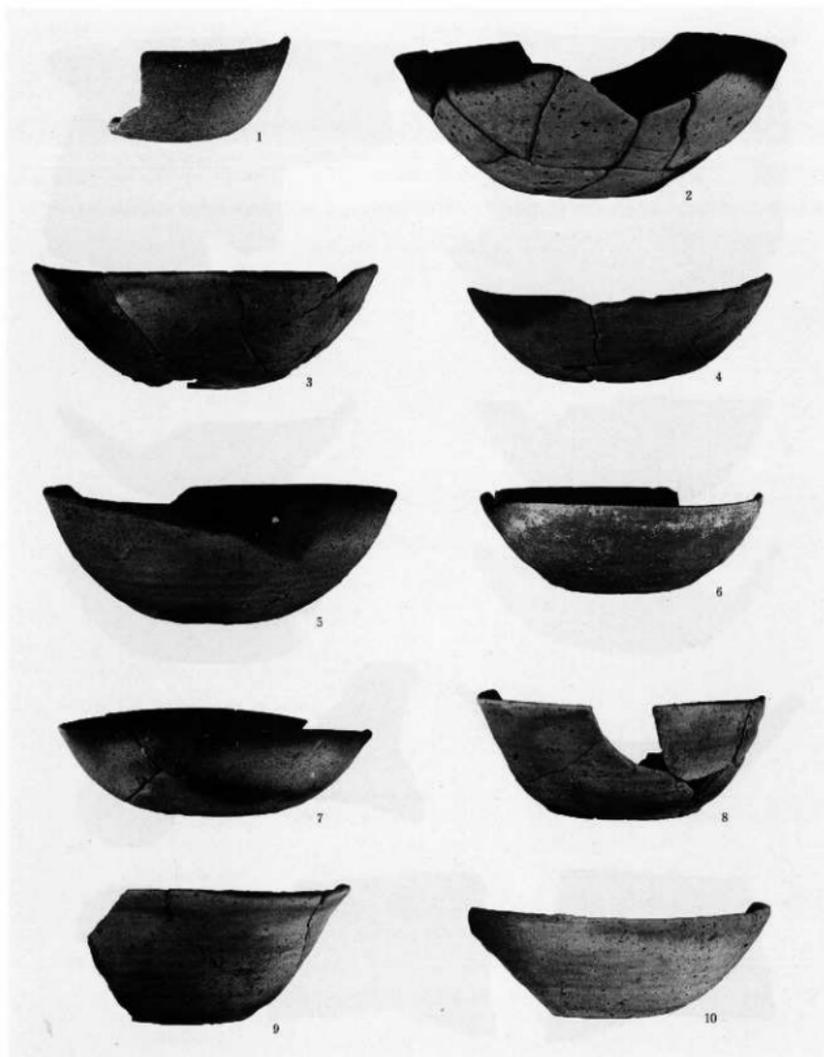
図版53 SI4 竪穴住居跡・SX1 遺構



- 1 弥生土器 壺 B-1 (SI-1 第110図1)
 2 土師器 坏 C-1 (SI-1 第110図2)
 3 土師器 坏 C-2 (SI-1 第110図3)
 4 土師器 类 C-3 (SI-2 第112図1)

- 5 土師器 类 C-5 (SI-3)
 6 土師器 类 C-6 (SI-4 第118図1)
 7 土師器 类 C-4 (SI-3 第115図1)

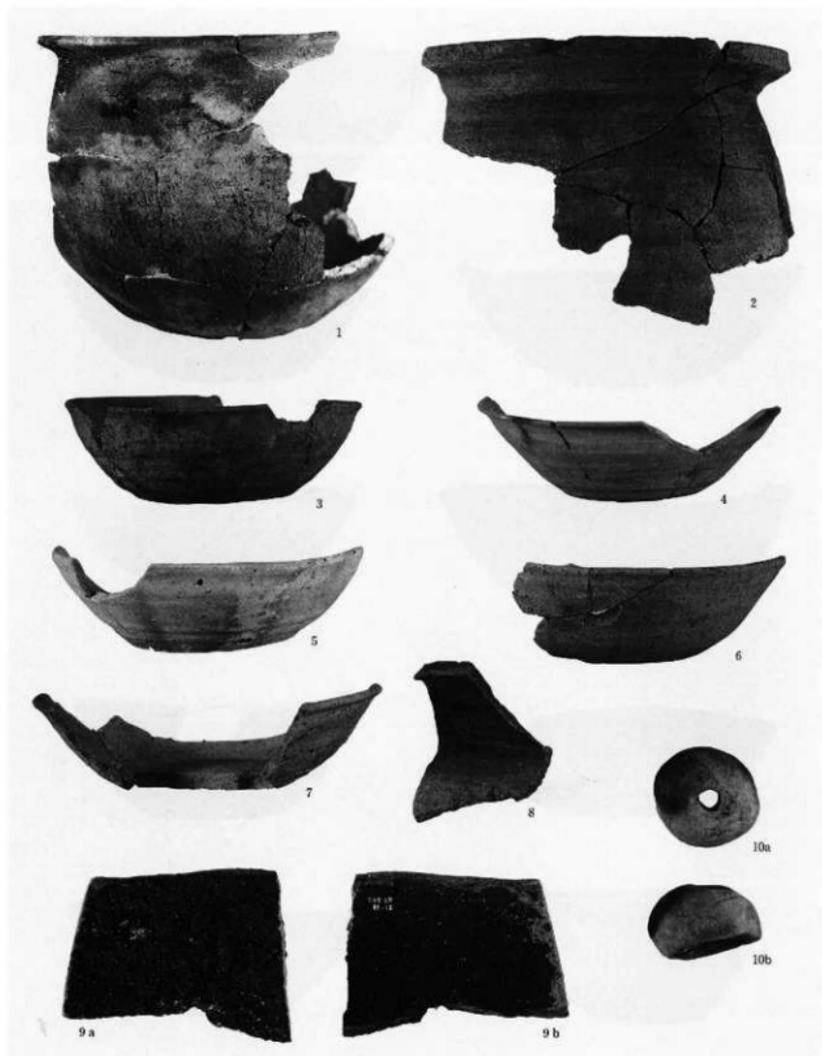
图版54 出土遺物 1



1 土師器 坏 D-1 (SD-1 第108図1)
 2 土師器 坏 D-2 (SI-2 第112図6)
 3 土師器 坏 D-3 (SI-2 第112図4)
 4 土師器 坏 D-4 (SI-2 第112図5)
 5 土師器 坏 D-7 (SI-3 第114図1)

6 土師器 坏 D-8 (SI-3 第114図2)
 7 土師器 坏 D-9 (SI-3 第114図3)
 8 土師器 坏 D-10 (SI-3 第114図4)
 9 土師器 坏 D-11 (SI-3 第114図5)
 10 赤焼土器 坏 D-18 (SI-3 第114図12)

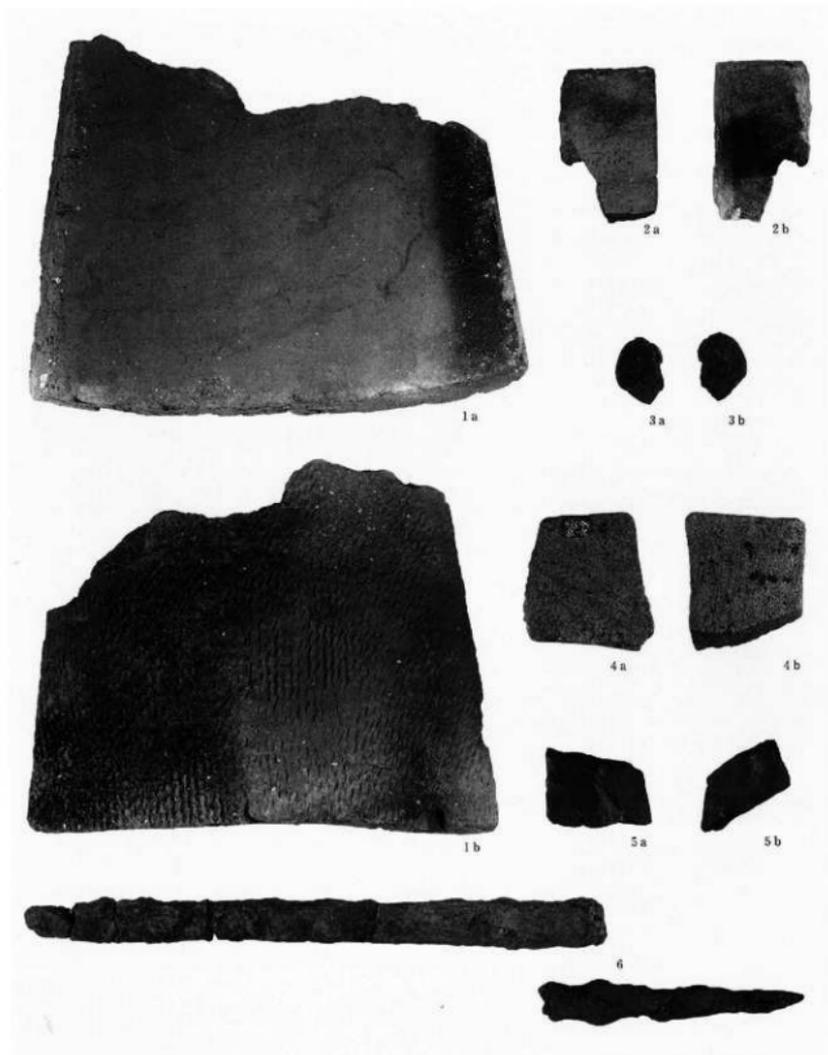
図版55 出土遺物 2



- 1 土師器 甕 D-27 (SI-3 第115圖2)
 2 土師器 甕 D-21 (SI-3 第115圖7)
 3 須惠器 坏 E-3 (SI-3 第116圖1)
 4 須惠器 坏 E-4 (SI-3 第116圖2)
 5 須惠器 坏 E-5 (SI-3 第116圖3)

- 6 須惠器 坏 E-8 (SI-3 第116圖6)
 7 須惠器 坏 E-7 (SI-3 第116圖5)
 8 須惠器 甕 E-1 (SD-3 第108圖2)
 9 陶器 甕 I-1 (SD-3)
 10 土製品 土環 P-1 (SI-1 第110圖5)

圖版56 出土遺物 3



- 1 瓦 平瓦 G-1 (SI-3 第116図12)
 2 瓦 丸瓦 F-1 (SI-3 第116図13)
 3 石製模造品 K-2 (SI-3 第116図9)

- 4 砥石 K-1 (SI-3 第116図10)
 5 砥石 K-3 (SI-3 第116図11)
 6 棒状鉄製品 N-1 (SI-2 第112図7)

図版57 出土遺物 4

Ⅱ 南小泉遺跡（第39次）発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）	調査面積	28㎡
調査地点	若林区遠見塚一丁目26番18	調査原因	個人住宅建設
調査期間	平成14年10月15日～10月17日	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査対象面積	68㎡	担当職員	教諭 豊村幸宏

2 遺跡の位置と環境

遺跡の環境については第37・38次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、遺跡の南部に当り標高は11.5mである。

3 調査に至る経過と調査方法

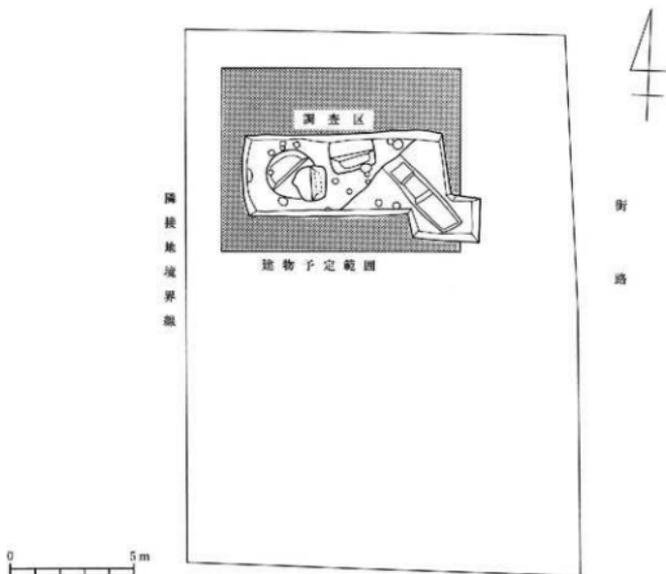
平成14年9月18日付けで千葉孝雄、千葉二三子氏より仙台市若林区遠見塚一丁目26番18に於ける柱状地盤改良工事を伴う鉄骨造2階建個人住宅建築工事に係る発掘届が提出された（教生文第4-149号で回答）。これを受けて平成14年10月15日に、建物予定地内に東西8m、南北3mの調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、溝跡1条、井戸跡1基、土坑2基、ピット多数が検出されたため引き続き本調査へと移行した。調査は、重機によりⅠ、Ⅱ層を排除し、Ⅲ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。

4 基本層序

調査区で確認した基本層は、Ⅰ層からⅢ層まで大別3層である。Ⅰ層は木炭粒、焼土粒、径1～3cmの礫を含む黒褐色シルト層で旧畑耕作土である。Ⅱ層は木炭粒、焼土粒を含む暗褐色シルト層である。Ⅲ層は酸化鉄斑を含む



第119図 調査地点と周辺の地形



第120図 調査区配置図 (1/200)

黄褐色粘土質シルト層でこの地域一帯の基盤となる自然堆積層である。今回検出した遺構は、全てこの層の上面が掘り込み面となっている。

5 発見遺構と出土遺物

検出された遺構は、溝跡1条、井戸跡1基、土坑2基、ピット18基である。

1) 溝跡

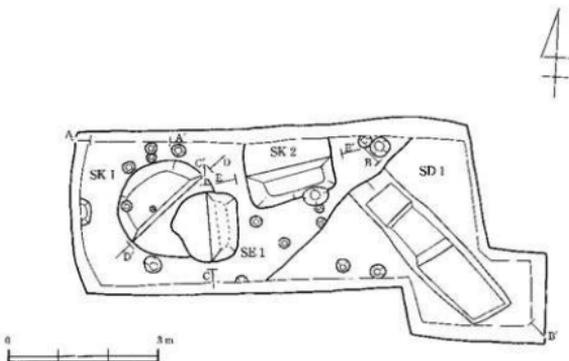
SD1 溝跡

調査区の東半部で検出した。上幅4.4m以上、深さ1.2m以上で底面は未検出である。ピットと重複しこれよりも古い。壁は急に立ち上がる。北東方向から南西方向に延びるものと思われる。遺構の南側が調査区外へ延びているため、断面形状は不明である。堆積土は6層に分かれ、1～4層は人為堆積で5～6層は水性堆積である。出土遺物は、堆積土中から非ロクロ土師器甕(C-1)、坏、ロクロ土師器甕、剥片が出土している。このうち土師器甕(C-1)は外面をハケメ、内面をヘラナデによって調整されている。

2) 井戸跡

SE1 井戸跡

調査区の西半部で検出した。SK1と重複しこれよりも新しい。平面形は長径1.45m、短径1.3mの不整な長円形



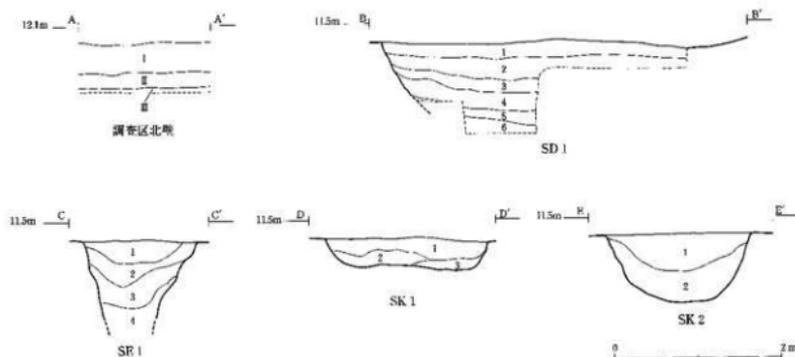
第121図 遺構配置図

を呈する。深さは1.1m以上で底面は木炭検出である。壁は上半部がやや開き気味に、下半部では直立して立ち上がり、壁の途中に段差を持つ。堆積土は4層以上に分かれ、何れも人も堆積である。堆積土中から、非クロロ土師器片が出土した。

3) 土坑

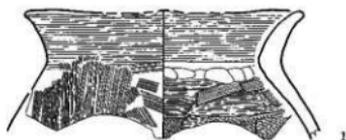
SK 1 土坑

調査区の西半部で検出した。SE 1 よりも古い。直径1.95mの円形を呈する。深さは40cmで、底面径は1.4mであ



遺構層位	土色	土坑	壁	備考	遺構層位	土色	土坑	壁	備考
基本層 I	10YR3/2 灰褐色	シルト	流す状、小段状、 ϕ 1~3cmの塊を含む。		SE 1 1	10YR3/3 暗褐色	硬シルト	硬土壁、木炭屑を含む。	
II	10YR3/2 暗褐色	シルト	塊七粒、木炭屑を含む。		2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	木炭屑、10YR5/6シルトブロックを含む。	
III	10YR5/6 黄褐色	粘土層状	酸化鉄法を含む。		3	10YR3/2 灰褐色	シロ1層状	木炭屑、10YR5/6シルトブロックを含む。	
SD 1 1	10YR3/4 暗褐色	シルト	木炭屑を含む。		4	10YR2/2 灰褐色	粘土	10YR5/6粘土ブロックを含む。	
2	10YR5/6 黄褐色	シルト	マンガン粒、木炭屑を含む。		SK 1 1	10YR3/2 暗褐色	硬シルト	200g程度以上の土塊、200g程度の土塊を含む。	
3	10YR5/4 に灰黄褐色	砂質シルト	植物遺屑を含む。		2	10YR5/6 黄褐色	粘土層状	10YR2/2粘土シルトブロックを含む。	
4	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	植物遺屑を含む。		3	10YR5/6 黄褐色	粘土	粘土層を含む。	
5	10YR3/4 に灰黄褐色	硬砂	植物遺屑を含む。		SK 2 1	10YR3/2 暗褐色	シルト	10YR5/6粘土シルトブロックを多数を含む。	
6	10YR6/4 に灰黄褐色	硬砂	植物遺屑を含む。		2	10YR5/6 黄褐色	粘土層状	10YR3/2粘土シルトブロックを含む。	

第122図 調査区北壁・遺構断面図



図例	発掘番号	種類・形状	地上高さ	基本形状	出土遺物・層	口径(長さ)	底径・寸	内径・底	発掘・日	手 掘	特 徴	写真掲載
1	C-1	非ロクロ土器器 壺		SD1	3層	(40)	170				内面ヨコナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ	写真26頁 図-3

第123図 出土遺物

る。断面形は扁平な逆台形を呈し、壁は底面から丸みを帯びてやや垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分れ、何れも人為堆積である。堆積土中から、非ロクロ土師器片が出土した。

SK2 土坑

調査区の中央部北壁沿いで検出した。ピットと重複しこれよりも古い。遺構の北半部が調査区外へ延びているため正確な規模は不明であるが、東西1.7m、南北1.2m以上、深さ85cmの方形もしくは長方形を呈するものと思われる。断面形は椀形を呈し、壁は底面から丸みを帯びてやや急に立ち上がる。底面は播鉢状である。堆積土は2層に分かれ、何れも人為堆積である。堆積土中から、非ロクロ土師器片が出土した。

6 まとめ

- ① 今回の調査では、溝跡1条、井戸跡1基、土坑2基、ピット18基が検出された。
- ② SD1溝跡については、大規模な溝跡と捉えられる。周辺の16次調査で確認された溝跡群と関連付けて中近世段階の屋敷の区画溝等の可能性が想定される。
- ③ 井戸跡、土坑については、出土遺物から古墳時代以降のものと考えられる。ピットの中には柱痕跡を持つものも含まれており周辺に建物跡の存在した可能性がある。

引用・参考文献

- 五十嵐康洋 (1998) : 「南小泉遺跡第26次調査報告書! 仙台市文化財報告書第225集
 工藤信一郎他 (1998) : 「南小泉遺跡第30・31次発掘調査報告書! 仙台市文化財報告書第226集
 倉野裕彦 (1994) : 「南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書! 仙台市文化財報告書第192集
 佐藤洋 (1990) : 「南小泉遺跡第16～18次発掘調査報告書! 仙台市文化財報告書第140集

1 調査区全景（西より）



2 SD1溝跡土層断面（南西より）



3 SE1井戸跡全景（南より）



図版58 調査状況・溝跡・井戸跡

1 SK1 土坑全景 (南西より)

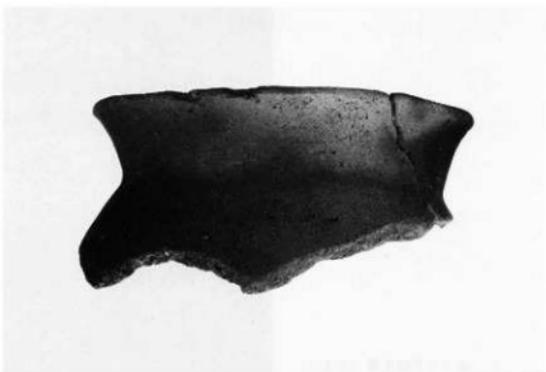


2 SK2 土坑全景 (北より)



非ロクロ土師器集C-1 (SD1 第123図1)

3 SD1 溝跡出土土器



図版59 土坑・出土遺物

XIII 大野田古墳群発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	大野田古墳群（宮城県遺跡番号01361）
調査地点	太白区大野田字王ノ塚47-1の一部、44の一部
調査期間	平成14年9月2日～9月4日
調査対象面積	108㎡
調査面積	54㎡
調査原因	個人住宅建築（鋼管杭打ち基礎工事）
調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
担当職員	主任 波部 紀

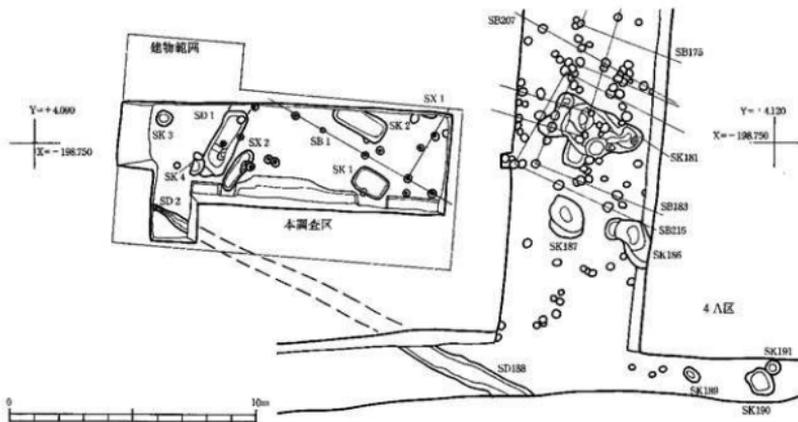
2 遺跡の位置と環境

大野田古墳群は、仙台市の南部、地下鉄富沢駅の東側一帯に広がる遺跡である。遺跡は、北西側を奥羽山脈から派生する青葉山丘陵に、北東側を広瀬川に、南側を名取川に囲まれた「郡山低地」と呼ばれる沖積地に立地している。付近一帯は名取川の支流の一つである太白山に源を発する荒川等が形成した自然堤防や旧河道・後背湿地などの沖積地特有の微地形が複雑に発達している。大野田古墳群は標高10m前後の後背湿地ないし自然堤防に渡って広がっている。

郡山低地は、遺跡の形成が早く、富沢遺跡では約二万年前の後期旧石器時代の遺構が発見されている。その後縄



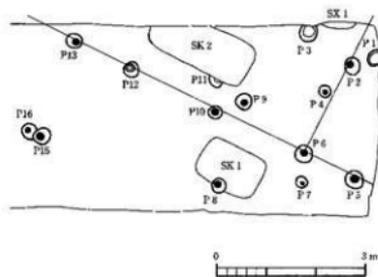
第124図 大野田古墳群と周辺の遺跡



第125図 遺構配置図

文時代から中世・近世に至るまでの多くの遺跡が形成されており、特に筑川が丘陵端部から出て名取川と合流地点にかけての約2.5kmの河川北岸には、宮沢遺跡・山口遺跡・六反田遺跡・下ノ内遺跡・下ノ内浦遺跡・伊占遺跡・王ノ塚遺跡・更屋敷遺跡などの遺跡が連続して分布している。

大野田古墳群は、過去多くの調査が行われており、平成6年以来仙台市宮沢駅周辺土地区画整理事業に伴う調査が継続的に行われている。遺跡内及び近隣には春日社古墳・鳥居塚古墳・王ノ塚古墳などの顕在的な古墳があるほか、調査によって周溝だけが残る古墳が新たに28基発見されている。古墳以外の遺構としては、古墳時代前期の竪穴住居跡、古墳時代の木棺墓、古墳時代中期以降から奈良時代以前の畑耕作に係る小溝状遺構群、平安時代の小溝状遺構群、中世の道路跡・掘立柱建物跡・堀跡・溝跡など、古墳時代以降の各時期の遺構が発見されている。



第126図 掘立柱建物跡実測図

3 基本層序

大野田古墳群の基本層序は、仙台市宮沢駅周辺土地区画整理事業に伴う調査において、I層（現水田耕作土層）からXI層（基盤礫層）まで下記のように分層されている（渡邊・竹田：2000）。本調査ではこれに対応させて土層を区分し、断面観察を含めて5層までの調査を行った。本地点の調査土層（I～V層）及び、前記の調査成果による基本層序は下記の通りである。

(盛土) 土地区画整理事業による整地層

I 層：灰黄褐色シルト層

水田耕作土層

Ⅱ 層：黒褐色シルト層等	前回の調査で中世の道路跡検出。(今回の調査地点には分布しない。)
Ⅲ 層：にぶい黄褐色シルト層	前回の調査で中世の各種遺構検出。今回も溝跡・土坑・柱穴検出。
Ⅳ 層：灰黄褐色砂質シルト	前回の調査で河川跡等を検出。古墳を覆う。
Ⅴ 層：にぶい黄褐色砂質シルト層	前回の調査で古墳時代前・中期の遺構、小溝状遺構等を検出。
Ⅵ 層：にぶい黄褐色粘上質シルト層	縄文時代後期中葉の遺物出土
Ⅶ 層：にぶい黄褐色粘土質シルト層等	縄文時代後期中葉の遺物出土
Ⅷ 層：にぶい黄褐色粘土質シルト層	縄文時代後期中葉の遺物包含層
Ⅸ 層：オリーブ褐色砂層等	縄文時代後期中葉の遺物出土
Ⅹ 層：オリーブ褐色砂礫層等	無遺物層
ⅩⅠ層：径10～30cmの礫層	基盤層

4 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成14年8月12日付けで、横山泰治氏から発掘届が提出されたことにより実施した。調査地点は、仙台市宮沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査の4A区での成果から、Ⅲ層における中世の遺構とⅤ層における小溝状遺構群が検出される可能性が推定された。調査区は、建物の中央付近に東西約13m・南北4mの長方形に設定し、4A区検出のSD-188溝跡の延長を確認するために調査区西端を建物範囲内で南側に拡張した。住宅建築範囲の限られた調査であることから、遺構の平面的な検出作業はⅢ層のみで行ない、Ⅴ層については断面観察によって小溝状遺構群の有無の確認を行なった。

測量は任意の基準点を設置して行なった。全体位置は、基準点から周辺区画を測量し、仙台市宮沢駅周辺土地区画整理事業の発掘調査遺構配置図の中に位置付けた。

5 発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面で掘立柱建物跡(SB-1)として組み可能性のあるものを含むピット23個・溝跡2条・土坑4基・その他の遺構2基が発見された。

1) 掘立柱建物跡

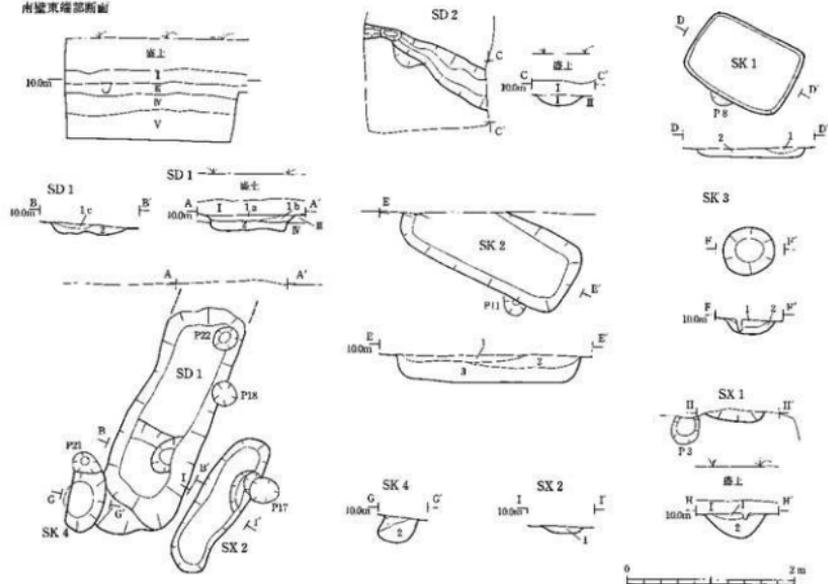
SB-1掘立柱建物跡 P-5:P-6:P-10:P-12:P-13は、それぞれ115cm:198cm:198cm:120cmの間隔で直線上に並び、P-6:P-2は202cmの間隔でこれに直角に交わることから、掘立柱建物跡・部と考えられる。柱穴は直径28～36cmほどの円形である。柱痕跡は直径13～15cmの円形である。柱穴の残存部の深さは15～28cmである。

2) 溝跡

SD-1溝跡 調査区の西寄り検出された。検出部分は長さ約3m・幅1m前後の長方形を呈するが、調査区北壁断面でも遺構ののびが観察されたことから溝跡と判断した。方向はSB-1掘立柱建物跡とした柱穴列やSD-2溝跡と直交するように北東から南西方向にのびる。検出部の深さは断面位置で12cmと浅く、断面形は不整形である。堆積土は4層に分けられる。堆積土上部は、Ⅲ層のブロックを含み人為的に埋められた可能性がある。

SD-2溝跡 調査区西部の拡張部分で検出された。仙台市宮沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査4A区検出のSD-188溝跡の方向に一致し、SB-1掘立柱建物跡と11mの間隔をおいてほぼ並行し、北西から南西方向にのびる。幅は東側で45cm・西側で20cmと狭くなる。断面形は舟底形で深さは14cmである。堆積土は褐色シルト

南壁東端部断面



基本層（南壁東端）

土層No.	土色	土質	備考
I	10YR6/2 灰褐色	シルト	細灰土層体土。酸化鉄を塊状に含む。
II	10YR3/1 黒褐色	シルト	今般の調査区内には分布していない。
III	10YR6/4 濃い灰褐色	シルト	マンガン鉄を多く含む。
V	10YR5/2 灰黄褐色 (赤影シロ)		
V	10YR5/3 濃い黄褐色 (赤影シロ)		

SD 1

土層No.	土色	土質	備考
1a	10YR5/1 褐色	シルト	基本層I層の「上」質を穿ち、マンガン鉄を含む。
1b	10YR4/1 褐色	シルト	基本層II層が厚3cm程度のブロックとして含まれる。
1c	10YR2/1 黒褐色	シルト	基本層IV層の小ブロックを少量含む。
2	10YR5/2 灰黄褐色 (赤影シロ)	シルト	褐色土上の小ブロックを含む。

SD 2

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/1 褐色	シルト	灰白色部をブロック状に含む。裏面に酸化鉄塊を含む。

SK 1

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/1 褐色	シルト	灰黄色土・黄褐色土・基本層I層のブロックを多く含む。
2	10YR5/1 褐色	シルト	基本層I層の小ブロックを少量含む。酸化鉄を含む。

SK 2

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/1 褐色	シルト	基本層I層の小ブロックを少量含む。
2	10YR5/1 褐色	シルト	基本層II・III層及び酸化鉄土の小ブロックを含む。
3	10YR4/1 褐色	シルト	基本層II・III層及び酸化鉄土の小ブロックを多く含む。

SK 3

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/1 褐色	シルト	基本層I層の塊状を含む。
2	10YR4/1 褐色	シルト	基本層II・III層の小ブロックを多く含む。灰片を含む。

SK 4

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/1 褐色	シルト	基本層I層の小ブロックを含む。マンガン鉄を含む。
2	10YR4/1 褐色	シルト	マンガン・酸化鉄を塊状に含む。灰片を含む。

SX 1

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄を塊状に含む。
2	10YR4/1 褐色	シルト	濃い灰褐色及び基本層II・III層の小ブロックを含む。

SX 2

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/1 褐色	シルト	基本層II層の小ブロックを含む。

第127図 基本層断面及び遺構実測図

1層である。

3) 土坑

SK-1土坑 調査区南東部で検出された。平面形は長方形を呈し、長軸131cm・短軸93cmを測る。断面形は浅い進台形で、深さは13cmである。堆積土は2層に分けられる。2層中から常産層と見られる中世陶器の裏の体部破片

が1点出土している。(図版62-7-1)

SK-2 土坑 調査区北東部で検出された。平面形は長方形を呈し、一部は調査区外にのびる。検出部分の長軸220cm・短軸95cmを測る。断面形は浅いU字形で、深さは34cmである。堆積土は3層に分けられる。ブロック状の堆積土で、人為的に埋められた可能性がある。北西端近くの3層中から人頭大の河原石が1個出土している。

SK-3 土坑 調査区北西部で検出された。平面径は円形を呈し、東西軸長62cm・南北軸長58cmを測る。断面形は舟底形で、深さは18cmである。堆積土は2層に分けられる。

SK-4 土坑 調査区西部で検出された。SD-1溝跡を切り、P-21に切られる。不整な楕円形を呈し、残存長軸73cm・短軸43cmを測る。断面形は不整なU字形で、西壁はオーバーハングしている。深さは31cmである。堆積土は2層に分けられる。2層中から土師器の破片が1点出土している。

4) その他の遺構

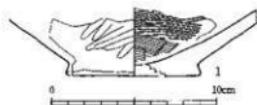
SX-1 遺構 調査区北東部の調査区北壁際で検出され、本体は調査区外にのびる。検出部分の平面形は半月状を呈し、検出部の東西軸長71cm・南北軸長14cmを測る。底面は検出されていないが、調査区北壁での断面形は舟底状で、深さは30cmである。堆積土は2層に分けられる。

SX-2 遺構 調査区中央で検出された。P-17に切られる。平面形は、北東から南西方向にのびる楕円形を呈し、長軸182cm・短軸58cmを測る。深さは8cmで、堆積土は1層である。底面中央北寄り、東壁付近がわずかに低くなっている。土師器の破片が1点出土している。

5) 下層遺構の状況

仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査4A区において、V層上面で小溝状遺構群が検出されていることから、断面観察のため、調査区南側の壁面に沿って幅60cm前後のサブトレンチを設定した。Ⅲ層上面から70cm前後掘り下げ、V層の断面の観察を行なったが小溝の跡は確認できなかった。

下層調査の際に、Ⅲ層中から古墳時代のもとの推定される土師器の底部付近の破片が出土している。



番号	発掘番号	田中区	基平層	田中遺構	遺構層	出土番号	物名	層別	層高	1層	2層	(内 面)	材	種	(内 側)	写真図版
1	C-1		Ⅲ				土師器 片?		(41)		80		ナゲのちへつミガキ	ハケメ		図-7-1

第128図 Ⅲ層出土遺物

6 まとめ

- Ⅲ層上面で掘立柱建物跡1棟・溝跡2条・土坑4基・その他の遺構2基・ピット等が発見された。
- SB-1掘立柱建物跡は、仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査4A区で検出された掘立柱建物跡群の方向と概ね一致している。
- SD-2溝跡は、その方向から、仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査4A区のSD-188溝跡の延長にあたるものと推定される。
- SD-2溝跡は、SB-1掘立柱建物跡は並行して同じ方向性を示し、関係の存在を示唆している。
- SD-2～SD-188溝跡のラインから南東側は、遺構の密度が希薄になるので、この溝がなんらかの区画に関係する可能性が考えられる。
- SD-1溝跡、SK-1・2、SX-2遺構についても、SD-2溝跡やSB-1掘立柱建物跡と共通する方向性が

看取できるので、相互に関係のある可能性が考えられる。

- ⑦ Ⅲ層上面検出の遺構については、中世に位置付けられている仙台市宮沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査ⅠA区で検出された遺構群と共通する方向性を有することから、中世の遺構の可能性が高いものと推定される。
- ⑧ V層では、小溝状遺構群の広がりを確認することができなかった。

参考文献

波邊・竹田（2000）：「大野田古墳群・下ノ塚遺跡・六反田遺跡－仙台市宮沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－」仙台市文化財調査報告書第243集

1 調査前景（西より）



2 調査区全景（西より）



3 南壁土層断面



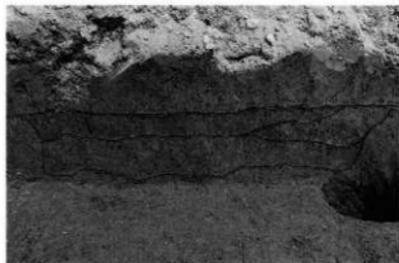
図版60 大野田古墳群の状況と土層断面



1 遺構検出状況（南西より）



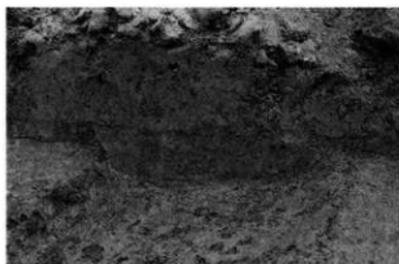
2 SB2 掘立柱建物跡（南東より）



3 SD1 断面（南より）



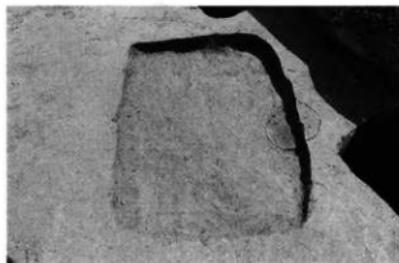
4 SD1 全景（南より）



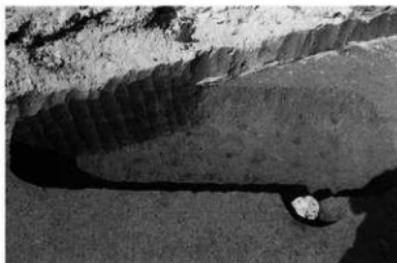
5 SD2 断面（西より）



6 SD2 全景（南より）



7 SK1 全景（北西より）

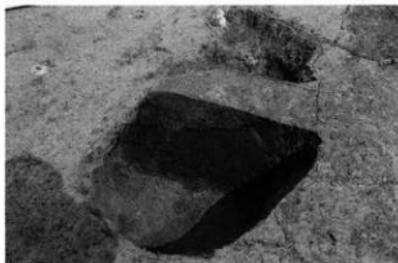


8 SK2 全景（南より）

図版61 掘立柱建物跡・溝跡・土坑



1 SK3全景 (南より)



2 SK4断面 (南より)



3 SK4全景 (南より)



4 SX1 (南より)



5 SX2断面 (南より)



6 SX2全景 (南より)



1a



1b

1 陶器 片 I-1 (SK-1)



2

2 土師器 壺 C-1 (Ⅲ層)

7 出土遺物

図版62 土坑・その他の遺構と出土遺物

XIV 高田A遺跡（第4次）発掘調査報告書

1 調査要項

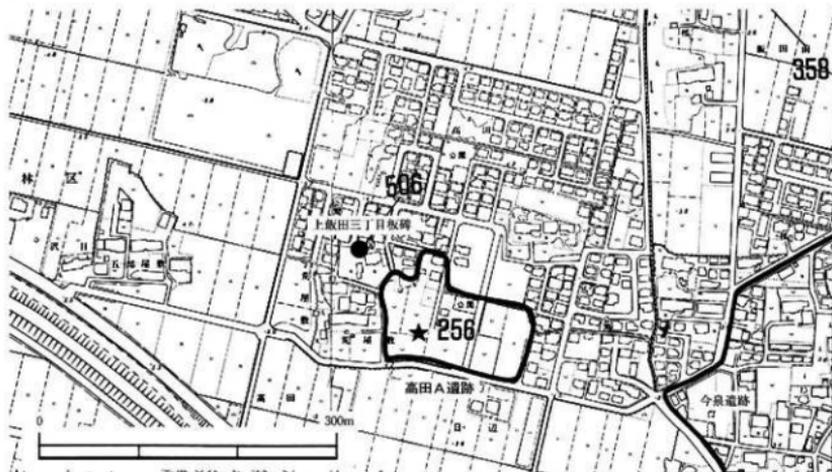
遺跡名	高田A遺跡（宮城県遺跡番号01256）	調査原因	個人住宅建設
調査地点	仙台市若林区上飯田三丁目448-2	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査期間	平成14年4月15日～4月16日	担当職員	主任 渡部 紀
調査対象面積	66㎡		文化財教諭 大倉秀之
調査面積	32㎡		

2 遺跡の位置と環境

高田A遺跡は、JR仙台駅の南東6km付近の若林区上飯田三丁目に所在する。調査地点は、仙台南部道路今泉インターチェンジより北西に900mのところの位置しており標高は5mである。仙台市街地南部の地形を見ると、東側にはいわゆる「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野がみられる。名取川と広瀬川は遺跡の西方約1.4km地点で合流し、遺跡の周囲には両河川によって形成された自然堤防と後背湿地が広がっていて、旧河道も観察される。遺跡は、その中の自然堤防上に立地している。本遺跡では、平成5年に1次調査を、平成13年に2次・3次調査を行っている。その結果、弥生時代から平安時代頃の河川跡、溝跡、土坑、ピットなどが検出され、弥生土器、土師器、赤焼土器、須恵器、瓦、石製品などが出土している。

3 調査に至る経過と調査方法

平成14年4月11日付けで菅原義正氏より発掘届が提出された。これを受けて平成14年4月15日、建物予定地内に東西8m、南北4mの調査区を設定して確認調査を実施した。確認調査の結果、溝跡、土坑、ピット等の遺構が検出されたため引き続き本調査を実施した。調査は、重機により宅地造成時の盛土及びI、IIa、IIb層を排除し、

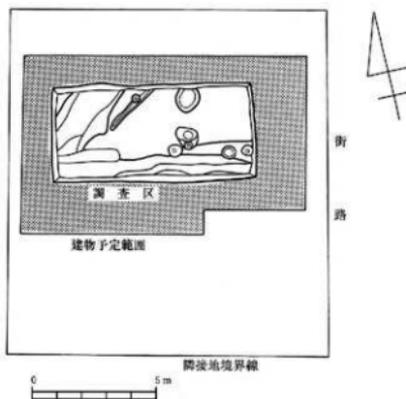


第129図 調査地点と周辺の地形

Ⅲ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。

4 基本層序

基本層序は、Ⅰ層から遺構検出面であるⅢ層の大別3層、細別4層である。Ⅰ層はふい黄褐色シルト層で盛土以前の畑耕作土である。Ⅱa層は白色砂粒を多量に含む黒褐色シルト層である。Ⅱb層はⅢ層土ブロックを含む黒褐色シルト層である。下面には凹凸が見られる。一部の遺構は、この層の上面が掘り込み面となっている。Ⅲ層は酸化鉄粒を含むふい黄褐色粘土質シルト層である。河川の氾濫によって形成された自然堆積層と考えられ、周辺一帯の基盤となる層である。



第130図 調査区配置図 (1/200)

5 発見遺構と出土遺物

発見遺構には、溝跡3条、土坑1基、ピット6基がある。これらの遺構は、Ⅲ層上面で検出されているが、SD1溝跡については、Ⅱb層上面が掘り込み面となっている。

1) 溝跡

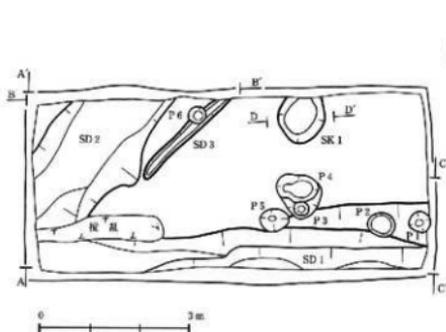
SD1 溝跡

調査区南半部に位置する東西方向の溝跡である。平成13年に実施した2次調査の際検出されたSD1溝跡の延長部分と考えられる。SD2より新しく、P1～5よりも古い。検出総長8m、検出部分での上幅は170cm、深さ67cmである。壁は急に立上がる。底面から70cmのところで幅90cm、深さ10～20cmのテラス状の段差が見られる。検出中央部より西側では浅く平坦な面になり、南向きに方向が変わる。堆積土は3層で、人為堆積である。堆積土より非ロクロ土師器、ロクロ土師器、須恵器が出土している。

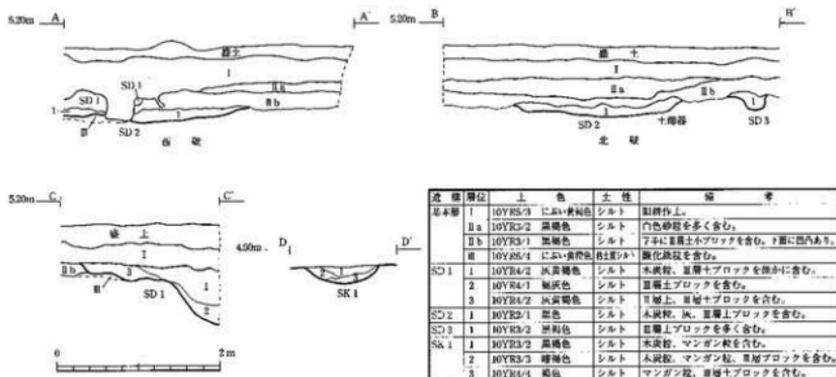
SD2 溝跡

調査区西半部に位置する北東方向の溝跡である。SD1より古い。検出総長4.1m、上幅155～205cm、下幅100～120cm、深さ15cmである。断面形は舟底形を呈し、底面は平坦である。堆積土は1層である。堆積土及び底面直上より非ロクロ土師器壺(C-1)、壺、高坏、弥生土器が出土している。このうちC-1は、中形で球形形を呈し、口縁部の内外面をヨコナダ、体部外面をハケメ、ヘラミガキ、下半をヘラケズリ、内面をヘラナダにより調整されている。塩釜式期のものと考えられる。

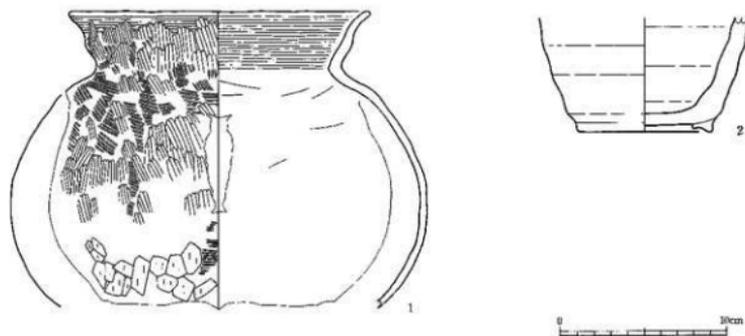
SD3 溝跡



第131図 遺構配置図



第132図 調査区西壁・北壁・遺構断面図



図ナリ	発掘番号	種類・器種	出土地層	基本層位	出土遺構・層	層上等寸	径	高さ	口径	軸径	軸径	重量	備考	写真別紙
1	C-1	赤ロクロ土製器	壁		SD 2	底面			17.0	18.0			内径3.0cm×外径4.0cm×高さ1.0cm、ヘラタズリ	64-3
2	R-1	灰土製器	壁		壁				7.0	8.0			内外径3.0cm×高さ1.0cm、底面黒鉛ヘラタズリ	64-3

第133図 出土遺物

調査区の中央部から西半部に位置するSD 2とはほぼ平行に北東方向に延びる小規模な溝跡である。P 6より古い。検出総長2.4m、上幅50cm、下幅20cm、深さ20cmである。断面形は方形を呈し、底面は平坦である。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

2) 土坑

SK 1 土坑

調査区中央部北壁際に位置する。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、長軸96cm、短軸88cm、深さ20cmである。底面は丸みをおびている。堆積土は3層である。遺物は出土しなかった。

3) ビット

6基のビットが検出されている。平面形は円形を基調とし、規模は30～80cm、深さ10～63cmである。堆積土は黒褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、褐灰色シルトである。柱痕跡が確認されたのはP3のみである。これ以外に柱穴の可能性のあるものはP4である。P3より赤彩された非クロロ土師器坏片が、P4、P5より非クロロ土師器片が出土している。

4) その他の出土遺物

遺構以外から出土した遺物の中で図示したものに、Ⅱ層出土の須恵器壺(E-1)がある。長頸壺の体部下半から底部にかけての破片である。底面は回転ヘラケズリによって調整されており、断面が三角形の低い高台が付く。形態的特徴から平安時代のもと思われる。

6 まとめ

- ① 高田A遺跡は、名取川、広瀬川によって形成された標高5mの自然堤防上に立地する弥生時代から平安時代の複合遺跡である。
- ② 今回の調査では、溝跡3条、土坑1基、ビット6基が検出された。出土遺物には弥生土器、非クロロ土師器、クロロ土師器、須恵器、礫石器がある。
- ③ SD1は、平成13年に実施した2次調査の際に検出された溝跡の延長部分である。出土遺物から平安時代の溝跡と思われる。
- ④ SD2は、底面直上から、塩釜式の上師器が出土していることより古墳時代前期の溝跡と考えられる。SD3とSK1からは遺物が出土していないため所属年代は不明である。P1～3、P5は、SD1を切っていることから平安時代以降のもと思われる。

引用・参考文献

- 吾妻俊典他(1992)：「野田山遺跡」宮城県文化財調査報告書第145集
小村田達也他(1993)：「北原遺跡」宮城県文化財調査報告書第159集
丹羽茂(1983)：「朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集
渡部弘美他(1994)：「高田A遺跡」『年報15』仙台市文化財調査報告書第189集

1 調査区全景（西より）



2 SD1溝跡全景（東より）



3 SD1溝跡断面（西より）

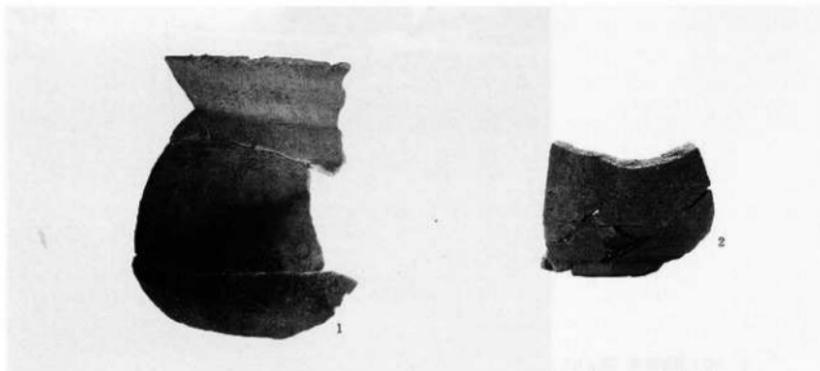


図版63 調査状況・溝跡

1 SD2 溝跡 (南より)



2 SD2 溝跡断面 (南より)



1 赤クロ土師器 甕 C-1 (SD2 第133図1)

2 須恵器 壺 E-1 (II層 第133図2)

3 出土遺物

図版64 溝跡・出土遺物

XV 養種園遺跡 (第3次) 発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	養種園遺跡 (宮城県遺跡番号01349)	調査面積	24㎡
調査地点	若林区南小泉一丁目 23番9、14番46	調査原因	個人住宅建設
調査期間	平成14年4月9日～4月11日	調査主体	仙台市教育委員会 (文化財課)
調査対象面積	98㎡	担当職員	教諭 豊村幸宏 文化財教諭 大倉秀之 加藤徳明

2 遺跡の位置と環境

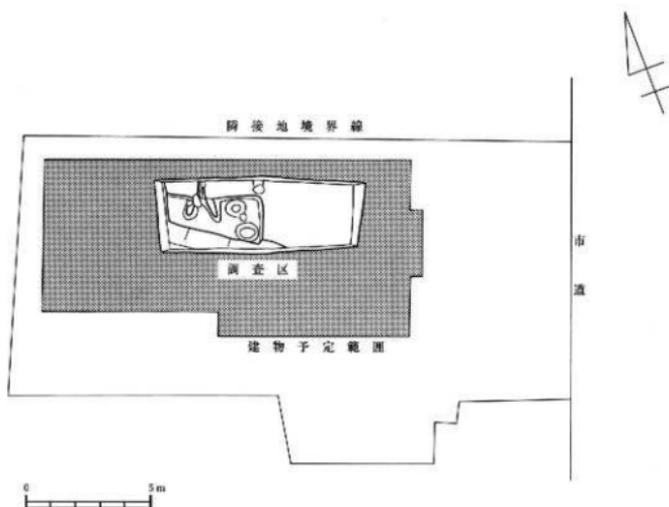
養種園遺跡は、JR仙台駅の南東約2.5km付近の仙台市若林区南小泉一丁目に所在する面積約9haの遺跡である。仙台市街地の東側、広瀬川の北側に位置し、宮城野海岸平野と呼ばれる沖積地の標高12～14mの自然堤防、後背湿地上に立地している。周辺には東側に隣接して南小泉遺跡が広がっておりその中心には遠見塚古墳が存在する。遺跡内には、獺塚古墳、蛇塚古墳が点在している。今回の調査地点は、遺跡南東部の住宅地に当たり標高は約12mである。本遺跡ではこれまでに2回の調査が行われており、今回の調査は3回目となる。

3 調査に至る経過と調査方法

平成14年3月4日付で菊地勝良、菊池幸泰氏より個人住宅建築工事に係わる発掘届が提出された (教生文第13-275号で回答)。これを受けて平成14年4月9日に、建物予定地内に東西8m、南北3mの調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、竪穴住居跡1軒、溝跡1条、ピットが検出されたため引き続き本調査へと移行した。調査は、重機により盛土とⅠ、Ⅱ層を排除し、Ⅲ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。



第134図 調査地点と周辺の地形



第135図 調査区配置図 (1/200)

4 基本層序

調査区内は、全体に厚さ10～20cmの盛土で覆われている。調査区で確認した基本層は、盛土層下のⅠ層からⅢ層まで大別3層である。Ⅰ層は木炭粒、マンガン粒を含む黒褐色シルト層で、近現代の陶磁器類、燻瓦を包含している。Ⅱ層は木炭粒、微砂粒を含む黒褐色シルト層である。Ⅲ層はにぶい黄褐色シルト層で基盤となる自然堆積層である。この層の上面で遺構検出作業を行った。

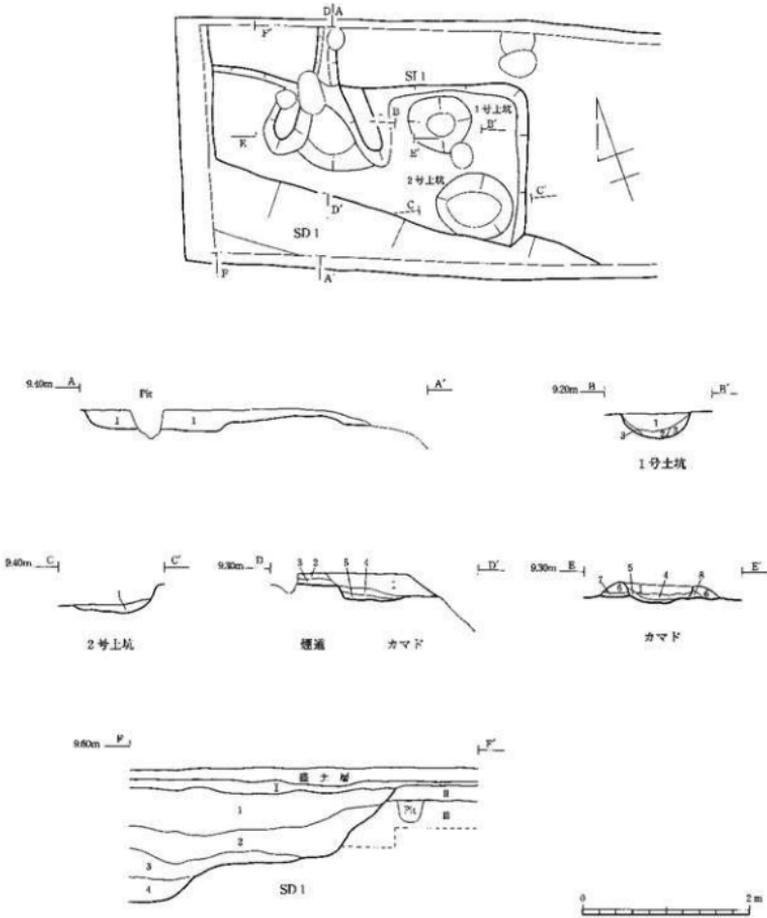
5 発見遺構と出土遺物

調査区は、東半部が擾乱を受けており遺構は検出されなかった。擾乱の及ばない西半部で竪穴住居跡1軒、溝跡1条、ピット6基が検出された。

1) 竪穴住居跡

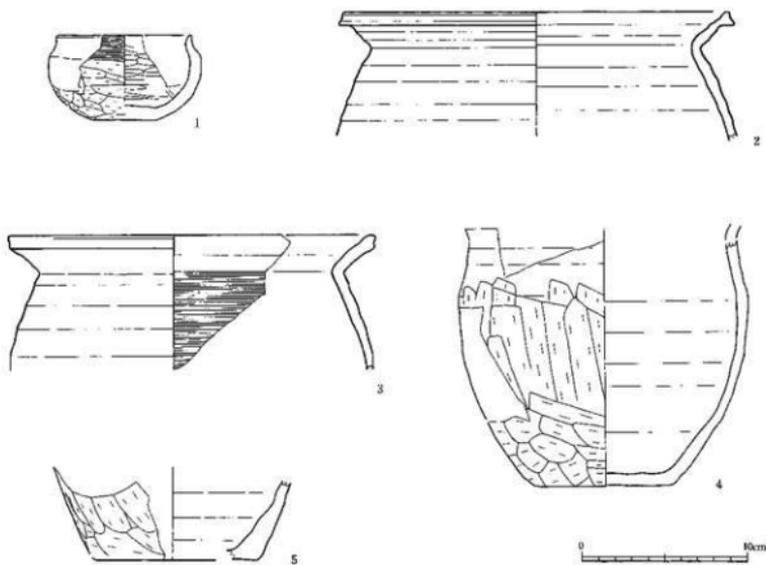
SI1 竪穴住居跡

調査区の西半部で住居跡の北東部分及びカマドと煙道の一部を検出した。SD1、ピットと重複しこれらよりも古い。規模は、検出した長さが北辺3.8m、東辺1.8mである。平面形は方形もしくは長方形と思われる。方向は東辺を基準としてN-14°-Eである。堆積土は1層で人為堆積層と考えられる。検出面から床面までの高さは14～22cmである。床は、貼床を用いず住居跡の掘り方底面を床面としており、ほぼ平坦である。床面施設としてカマド右袖際と住居の東辺際で土坑を2基検出しているが、柱穴、厨溝は発見されなかった。1号土坑は、径80cm、深さ30cmの円形を呈し、2号土坑は、径90cm、深さ20cmの長円形を呈している。カマドは北辺部にⅢ層土を積み上げて構築されている。カマドおよび煙道部の堆積土は4層で、いずれも木炭粒、焼土を多量に含んでいる。規模は右袖



遺構	層位	土色	土性	備考	遺構	層位	土色	土性	備考
基層	I	10YR3/2 黒褐色	シルト	マンガン粒, 木炭粒を含む。	SI1	8	10YR4/3 濃い黄褐色	粘土	マンガン粒を含む(カマド構築上)
	II	10YR2/2 黒褐色	シルト	木炭粒, 陶砂粒を含む。		1	10YR3/4 暗褐色	粘土	木炭粒, 10YR2/6シルトブロックを含む。
	III	10YR1/2 濃い黄褐色	シルト	酸化鉄粒, 灰土粒, 木炭粒を含む。	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	木炭粒, 10YR2/6シルトブロックを含む。	
SI1	1	10YR2/2 暗褐色	シルト	10YR2/6シルトブロック, 灰土粒, 木炭粒を含む。	3	10YR2/6 褐色	粘土		
	2	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	焼土粒, 木炭粒を含む。(煤石充填上)	SI1 7層	1	10YR2/2 暗褐色	粘土	灰土粒, 木炭粒, 10YR4/3シルトブロックを含む。
	3	10YR2/2 暗褐色	粘土	黒土ブロックを多数含む。(木炭を含む。煤石充填上)		2	10YR2/2 暗褐色	シルト	木炭粒, 陶, 10YR4/3シルトブロックを含む。
	4	10YR4/2 濃い黄褐色	シルト	灰土ブロック, 木炭粒, 灰土多量を含む。(カマド構築上)	SD1	1	10YR3/2 暗褐色	粘土	灰土
	5	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	焼土粒, 木炭粒, 陶砂粒を含む。(カマド構築上)		2	10YR3/2 暗褐色	粘土	木炭粒, 陶を含む。
	6	10YR5/4 濃い黄褐色	シルト	10YR5/3粘土ブロックを含む。(カマド構築上)	3	10YR4/4 褐色	粘土	木炭粒, 10YR3/2粘土シルトブロックを含む。	
	7	10YR4/3 濃い黄褐色	粘土	(カマド構築上)	4	10YR4/1 褐色	粘土	酸化鉄粒, 木炭粒を含む。	
				PI	1	10YR3/2 暗褐色	シルト	焼土粒, 木炭粒を含む。	

第136図 SI1 竪穴住居跡・SD1 溝跡実測図



図中番号	発祥番号	器別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高	口径	底径	重量	特徴	写真図版
1	C-1	赤ロクロ土器器・片		検出面		2	5.2	8.2	3.9		外縁に縄ヨコナデ 底面・左縁ヘラケズリ 内面ヘラミダリ、藍色斑	66-2-7
2	D-3	ロクロ土器器・壺		SI1	カマド		(7.6)	(23.0)			外周ロクロナデ 内面ロクロナデ	66-2-1
3	D-4	ロクロ土器器・壺		SI1	床面直上		(5.2)	(24.1)			外周ロクロナデ 内面ロクロナデ, 縁部ヘラナデ	66-2-2
4	D-2	ロクロ土器器・壺		SI1	カマド		(16.0)		8.4		外周ロクロナデ後ヘラケズリ 内面ロクロナデ	66-2-3
5	D-1	ロクロ土器器・壺		SI1	床面直上		(5.7)		(9.6)		外周ロクロナデ後ヘラケズリ 内面ロクロナデ	66-2-4

第137図 出土遺物

の長さ1m、幅60cm、高さ15cm、左袖の長さ80cm、幅50cm、高さ17cmである。煙道は一部調査区外へ延びており、検出長70cm、幅25cm、深さ14cmである。遺物は、住居の検出面から非ロクロ土器器環(C-1)、堆積土からロクロ土器器、赤焼土器、須恵器、弥生土器、石製品が、カマドからロクロ土器器壺(D-1、D-2、D-3、D-4)須恵器壺が、床面からロクロ土器器環、壺、須恵器壺、鉄製品が出土している。住居跡の年代は、カマド、床面から出土した土器器が表杉ノ入式の範疇に含まれることから平安時代に属するものと考えられる。

2) 溝跡

SD1 溝跡

調査区の西半部で検出した。SI1より新しい。検出長4.8m、上幅2.1m、深さ1.4mで、壁は底面から急に立ち上がる。東西方向に延びるが、調査区の南西コーナーでL字に屈曲するものと思われる。堆積土は4層に分かれ、1～3層は人為堆積で4層は水性堆積である。出土遺物は、近世末頃から明治初年にかけての陶磁器類、燻瓦、土器器、須恵器、石製品である。

6 まとめ

- ① 養種園遺跡は、若林区南小泉一丁目に所在する縄文時代から江戸時代の複合遺跡である。
- ② 今回の調査によって検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、溝跡1条、ピット6基である。出土遺物には、弥生土器、非ロクロ土器、ロクロ土器、赤焼土器、須恵器、陶磁器、石製品、鉄製品がある。
- ③ 竪穴住居跡の年代については、床面やカマドの遺物から平安時代に所属するものと考えられる。
- ④ 溝跡については、遺構の一部を検出したに留まっているため開削年代や機能については不明である。出土遺物の年代から19世紀の末頃には埋め戻されたものと思われる。

引用・参考文献

- 伊東真文（2002）：「若林城跡－第3次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第256集
- 佐藤 洋（1997）：「養種園遺跡発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－」仙台市文化財調査報告書第214集
- 仙台市教育委員会（2001）：「若林城跡と養種園遺跡」仙台市文化財パンフレット第48集

1 SI1 竪穴住居跡検出状況



2 SI1 竪穴住居跡全景



3 SI1 竪穴住居跡カマド



図版65 調査状況・竪穴住居跡



1 SD1 溝跡断面



1 ロクロ土師器 甕 D-3 (SI1 第137図2)
 3 ロクロ土師器 甕 D-2 (SI1 第137図4)
 5 非ロクロ土師器 坏 C-1 (検出面 第137図1)

2 ロクロ土師器 甕 D-4 (SI1 第137図3)
 4 ロクロ土師器 甕 D-1 (SI1 第137図5)

2 出土遺物

図版66 溝跡・出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こくぶんじひがしいせきほか							
著者名	国分寺東遺跡他							
書名	発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第266集							
編者名	渡部弘美・上藤哲司・佐藤 淳・豊村幸宏・大倉秀之・加藤徳明							
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7-1 電話022-214-8894							
発行年月日	平成15年3月31日							
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	道路番号					
国分寺東遺跡	仙台市若林区木ノ下3丁目2-15他	04100	01557	38°14'53"	140°54'29"	2001.12.03 2002.01.18	359㎡	学校校舎建築
八木山緑町遺跡	仙台市太白区八木山緑町21-3	04100	01317	38°14'13"	140°52'10"	2002.04.10 2002.05.13	350㎡	老人福祉施設建築
庚申前窟跡	仙台市宮城野区森131他	04100	01131	38°16'32"	140°54'06"	2002.05.08 2002.05.09	87㎡	宅地造成
下ノ内遺跡	仙台市太白区富沢4丁目12-2他	04100	01425	38°12'45"	140°52'36"	2002.08.19 2002.10.04	300㎡	店舗付共同住宅
山田桑里遺跡	仙台市太白区山田4丁目181-187他	04100	01367	38°12'49"	140°50'25"	2002.05.13 2002.06.04	155㎡	店舗建築
富沢遺跡(第122次)	仙台市太白区長町南3丁目10-1	04100	01369	38°10'10"	140°51'51"	2002.04.15 2002.04.25	45㎡	共同住宅建築
富沢遺跡(第123次)	仙台市太白区長町南1丁目108-4・108-6	04100	01369	38°13'16"	140°53'03"	2002.09.24 2002.09.25	28㎡	個人住宅建築
富沢遺跡(第124次)	仙台市太白区鹿野223-13	04100	01369	38°13'18"	140°52'30"	2002.10.22 2002.10.24	42㎡	共同住宅建築
富沢遺跡(第125次)	仙台市太白区泉跡1丁目2-2・2-9他	04100	01369	38°13'12"	140°52'28"	2002.12.10 2002.12.17	22㎡	地下式駐車場建築
南小泉遺跡(第37次)	仙台市若林区本杉町26-1・26-2	04100	01021	38°14'23"	140°54'40"	2002.04.15 2002.05.02	180㎡	店舗付共同住宅
南小泉遺跡(第38次)	仙台市若林区南小泉4丁目71-1・73-4	04100	01021	38°13'04"	140°54'38"	2002.09.30 2002.10.11	127㎡	共同住宅建築
南小泉遺跡(第39次)	仙台市若林区遠見塚1丁目26-18	04100	01021	38°13'47"	140°54'59"	2002.10.15 2002.10.17	28㎡	個人住宅建築
大野田古墳群	仙台市太白区大野田4丁目1字ノ壇47-1他	04100	01361	38°12'34"	140°52'48"	2002.09.02 2002.09.04	54㎡	個人住宅建築
高田A遺跡	仙台市若林区上飯出3丁目448-2	04100	01256	38°12'34"	140°55'32"	2002.04.15 2002.04.16	32㎡	個人住宅建築
養種園遺跡	仙台市若林区南小泉1丁目23-9・14-46	04100	01349	38°14'19"	140°54'24"	2002.04.09 2002.04.11	24㎡	個人住宅建築
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
国分寺東遺跡	集落跡	平安～中・近世	竪穴住居跡・土坑	土師器・須恵器・瓦	麻呂土器			
八木山緑町遺跡	集落跡	縄文・弥生	竪穴住居跡・土坑	縄文土器・弥生土器・石器				
庚申前窟跡	窟跡	奈良時代	溝跡・土坑	土師器・須恵器				
下ノ内遺跡	集落跡	縄文～中世	掘立住居跡・燗跡	縄文土器・土師器・須恵器				
山田桑里遺跡第7次	水田跡	平安～中・近世	畦畔	土師器・須恵器				
富沢遺跡第122次	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	なし	土師器				
富沢遺跡第123次	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	なし	なし				
富沢遺跡第124次	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	なし	なし				
富沢遺跡第125次	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	畦畔	石器				
南小泉遺跡第37次	集落跡	弥生～中・近世	竪穴住居跡・溝跡	土師器				
南小泉遺跡第38次	集落跡	弥生～中・近世	竪穴住居跡・溝跡	土師器・須恵器・砥石				
南小泉遺跡第39次	集落跡	弥生～中・近世	溝跡・井戸跡・土坑	土師器				
大野田古墳群	古墳・集落	古墳～中世		土師器・須恵器・中世陶器				
高田A遺跡	集落跡	古墳～平安	溝跡・土坑	土師器・須恵器				
養種園遺跡	集落跡	平安～近世	竪穴住居跡・溝跡	土師器				

仙台市文化財調査報告書第266集

国分寺東遺跡他

発掘調査報告書

2003年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区岡分町三丁目7-1
文化財課 022(214)8894

印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24
TEL 022(263)1166
